京都大学構内遺跡調査研究年報

1993年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

序

京都大学構内には、吉田キャンパスのほぼ全域や和歌山県白浜町の理学部附属瀬戸臨海実験所構内をはじめとする各地の附属施設内にも、先史時代から近世に至る長い歴史を刻んだ埋蔵文化財が多数存在している。京都市が作成した遺跡地図によると、現在吉田キャンパスに限っても、附属病院構内の西端の一部を除くほぼ全域が、調査を必要とする周知の遺跡として登録されている。

埋蔵文化財研究センターは、建物や施設の建設にあたってこうした埋蔵文化財の調査を実施し、その面積は昭和52年に設置されて以後45,000 m^2 を越えている。また遺跡の内容は、それらの調査報告書によって、広く認識されるようになったと考えている。

この報告は1993年度におこなった発掘調査の成果をまとめたものである。この数年は、補正予算の執行にともなう校舎建設計画によって発掘調査が急増し、資料整理はそれと並行しておこなう状態が続いた。各章の報告はこうした中で、吉田キャンパスを含む北白川一帯に残る先史時代から近世にわたる従来の調査による成果に、新たな資料を加えてその歴史的環境の復原を試みたものである。また各調査には各研究分野から多くのご協力をいただいた。とくに第3章の噴砂については理学部地質学鉱物学教室鎮西清高教授と地球物理学教室岡田篤正教授から、第4章の土壌中のリン分析については農学部地域環境科学教室小崎隆教授と矢内純太助手から、また石器の石材の分析については原子炉実験所藁科哲男助手からそれぞれ分析と詳細な知見をいただいた。ご高評をお願いしたい。

おわりに、これらの調査では、学内学外の多くの関係者および関係機関からご協力をいただいた。とりわけ、工学部、理学部、文学部、施設部の関係者各位に対して、お礼を申し上げる次第である。

1997年3月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

山　中　一　郎

例　　言

1　本年報は，京都大学構内で1993年４月１日から1994年３月31日までに発掘，整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告をまとめたものである。

2　国土座標にしたがって一辺 50 m の方形の地区割りをして，遺跡の位置を表示した。

3　層位と遺構の位置については，国土座標第Ⅵ座標系（x＝－108,000，y＝－20,000）が（X＝2,000，Y＝2,000）となる京都大学構内座標によって表示した。

4　遺構の略号は，奈良国立文化財研究所の方式にしたがって，井戸：SE，土坑：SK のように表示し，各調査ごとに通し番号を１から付した。

5　遺物には，遺跡の調査名を示すローマ数字と，調査ごとの通し番号を１から付した。この遺物番号は，本文，実測図，写真を通して表示を統一した。

Ⅰ：京都大学本部構内 AU30・AV30 区の発掘調査

Ⅱ：京都大学北部構内 BB28 区の発掘調査

Ⅲ：京都大学本部構内 AW25 区の発掘調査

（例　Ⅰ1：京都大学本部構内 AU30・AV30 区出土遺物１番）

6　原則として，遺物の実測図は縮尺 1/4，遺物の写真は約 1/2 に統一した。他の縮尺のものは，それぞれに縮尺を明記した。

7　参考文献は，本文中に，〔著者名　発表年〕の形式で表わし，第４章末に一括した。

8　古代・中世土師器の型式分類は，とくにことわりがない場合に限り『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』（1981年）に従った。

9　本文の執筆者名は各章の初めに列記した。また，遺物の撮影はそれぞれ報告者が担当した。

10　編集は，古賀秀策が担当し，清水芳裕，五十川伸矢，千葉　豊，伊藤淳史，冨井　眞，磯谷敦子，中田敬子，柴垣理恵子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度

目　　次

第1章　1993年度京都大学構内遺跡調査の概要…… 1

1　調査の経過…… 1

2　調査の成果…… 1

第2章　京都大学本部構内 AU30区・AV30 区の発掘調査…… 3

1　調査の概要…… 3

2　層　　位…… 6

3　縄文・弥生時代の遺跡…… 7

4　古代の遺跡……16

5　中世の遺跡……18

6　近世の遺跡……30

7　小　　結……34

第3章　京都大学北部構内 BB28 区の発掘調査 ……41

1　調査の概要……41

2　層　　位……41

3　遺　　構……43

4　遺　　物……47

5　小　　結……51

第4章　京都大学本部構内 AW25 区の発掘調査……53

1　調査の経過……53

2　層　　位……54

3　縄文時代の遺跡……56

4　古代・中世の遺跡……64

5　近世・近代の遺跡……83

6　土坑 SK1・SK2 の土壌分析……85

7　石器石材の産地分析……86

8　小　　結……88

参　考　文　献…… 93

京都大学構内遺跡調査要項…… 97

報 告 書 抄 録……104

図　版　目　次

図版 1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点

図版 2　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　北調査区完掘後全景（南から）　2　北調査区 SX4（北から）

3　北調査区溝 SD5（西から）

図版 3　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　北調査区不定形土坑完掘状況（西から）

2　北調査区不定形土坑 SX2 南北断面（東から）

図版 4　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　南調査区古代・中世遺構検出全景（南から）

2　南調査区流路 SR1・SR2 内黄色砂除去後全景（南から）

図版 5　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　南調査区流路 SR1（北から）

2　流路 SR1 黒褐色土層遺物出土状況（西から）

3　南調査区集石 SX11（東から）

4　南調査区土器溜 SX14（南から）

5　南調査区土坑 SK28（西から）

6　南調査区集石 SX12（南から）

図版 6　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　SR1 黒褐色土層出土遺物(1)　2　SR1 黒褐色土層出土遺物(2)

図版 7　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区

1　SR1 黒褐色土層出土遺物(3)　2　SR1 黒褐色土層出土遺物(4)

図版 8　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
SR1 黒褐色土層出土遺物(5)
図版 9　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
SR1 黒褐色土層出土遺物(6)
図版10　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
1　SR1 黒褐色土層出土土器の調整痕細部
2　石　　器
図版11　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
1　古代の遺物　　2　SX6 出土遺物
図版12　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
SX2 出土遺物，SX13 出土遺物，SX14 出土遺物，
SX16 出土遺物，SX19 出土遺物
図版13　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
SK39 出土遺物，SK48 出土遺物，SD5 出土遺物，SD3 出土遺物，
SD14 出土遺物，SD19 出土遺物，茶褐色土出土遺物
図版14　京都大学本部構内 AU30 区・AV30 区
SD2 出土遺物，SE2 出土遺物，SX5 出土遺物，
SD1 出土遺物，灰褐色土出土遺物
図版15　京都大学北部構内 BB28 区
1　調査区西半　古代遺構完掘状況（北から）
2　土坑 SK22（南西から）
図版16　京都大学北部構内 BB28 区
1　粘土敷き土坑　　2　集石土坑 SK10（東から）
3　地震による堆積層の乱れ
図版17　京都大学北部構内 BB28 区
黒褐色土出土遺物，茶褐色土下層出土遺物，
茶褐色土上層出土遺物，灰褐色土出土遺物
図版18　京都大学北部構内 BB28 区
1　黄色砂下面出土遺物，茶褐色土下層出土遺物，黒褐色土出土遺物
2　SK10 出土遺物，茶褐色土上層出土遺物，灰褐色土出土遺物

図版19　京都大学本部構内 AW25 区
1　調査区全景（南から）　2　中世の遺構（東から）
図版20　京都大学本部構内 AW25 区
1　土坑 SK1（西から）　2　土坑 SK2（西から）
図版21　京都大学本部構内 AW25 区
1　土坑 SK5（南から）　4　集石 SK7（東から）
2　溝 SD3（西から）　5　井戸 SE1（北から）
3　濠状遺構 SX1（北西から）　6　暗褐色土Ⅱ遺物出土状況（南から）
図版22　京都大学本部構内 AW25 区
暗褐色土Ⅱ出土縄文土器
図版23　京都大学本部構内 AW25 区
1　暗褐色土Ⅱ出土縄文土器　2　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器
図版24　京都大学本部構内 AW25 区
1　黄色砂出土縄文土器，茶褐色土出土縄文土器，SK4 出土縄文土器，SX1 出土縄文土器，SE1 縄文土器
2　石　　器
図版25　京都大学本部構内 AW25 区
SX1 出土遺物，SK8 出土遺物
図版26　京都大学本部構内 AW25 区
SE1 出土遺物
図版27　京都大学本部構内 AW25 区
SE1 出土遺物
図版28　京都大学本部構内 AW25 区
軒 丸 瓦
図版29　京都大学本部構内 AW25 区
軒 丸 瓦
図版30　京都大学本部構内 AW25 区
軒 平 瓦
図版31　京都大学本部構内 AW25 区
軒平瓦，道具瓦

挿　図　目　次

本部構内 AU30 区・AV30 区の発掘調査

図１　各調査区の遺構と南北方向の層位…… 4
図２　東西方向の層位…… 5
図３　流路内黒褐色土層上面の地形と主要遺物の分布…… 7
図４　SR1 黒褐色土層出土遺物(1)……10
図５　SR1 黒褐色土層出土遺物(2)……11
図６　SR1 黒褐色土層出土遺物(3)……12
図７　SR1 黒褐色土層出土遺物(4)……13
図８　SR1 黒褐色土層出土遺物(5)……14
図９　石　　器……15
図10　古代の遺物……17
図11　集石 SX11 ……21
図12　SX1・SX9・SX2・SX6・SX7・SX8 出土遺物 ……24
図13　SX13・SX14・SX15・SX16・SX17・SX19 出土遺物 ……25
図14　SX11・SK29・SK39・SK48・SK19・SK32 出土遺物 ……26
図15　SD3・SD5・SD14・SD19・茶褐色土出土遺物……27
図16　軒丸瓦・軒平瓦……28
図17　鉄 製 品……29
図18　SD2・SE2 出土遺物……31
図19　SE8・SX5・SE7・SD1・灰褐色土出土遺物 ……32
図20　SX12・SD1 出土遺物 ……33
図21　本部構内東半の主要な古代～中世遺構……37
図22　近世吉田村の復原図と調査区の位置……39

北部構内 BB28 区の発掘調査

図23　調査区の層位……42
図24　黄色砂下面出土縄文土器……43
図25　古代の遺構……44
図26　中世の遺構……44
図27　近世の遺構……45
図28　粘土敷き土坑……45
図29　SD36・SD38・SD37・SK22・黒褐色土出土遺物 ……47
図30　茶褐色土下層・SK10・茶褐色土上層出土遺物……49
図31　灰褐色土Ⅰ・Ⅱ出土遺物……50
図32　調査区周辺の弥生時代前期の地形……51

本部構内 AW25 区の発掘調査

図33　調査区東壁・北壁の層位……55
図34　縄文土器地区別出土状況……56
図35　暗褐色土Ⅱ出土縄文土器(1)……57
図36　暗褐色土Ⅱ出土縄文土器(2)……59
図37　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器(1)……60
図38　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器(2)……61
図39　黄色砂・茶褐色土・SK4・SX1・SE1 出土縄文土器……61
図40　石　　器……63
図41　古代・中世の遺構……64

図42　土坑 SK1・SK2 ……65
図43　土坑 SK3・SK5 ……66
図44　SX1・SK8 出土遺物 ……67
図45　SE1・SX1 出土鉄器……68
図46　SE1 出土遺物(1)……70
図47　SE1 出土遺物(2)……71
図48　SE1 出土遺物(3)……73
図49　SE1 出土遺物(4)……74
図50　軒 丸 瓦……75
図51　軒 平 瓦……77
図52　丸　　瓦……79
図53　平瓦，道具瓦……80
図54　平　　瓦……81
図55　篦 記 号……82
図56　近世・近代の遺構……83
図57　灰褐色土出土遺物……84
図58　地図にみえる寄宿舎……84
図59　試料の採取位置……85

表 目 次

表 1　SE1 出土土器計測結果……69
表 2　瓦類の出土地点……82
表 3　全炭素・全窒素・全リン
分析結果……85
表 4　サヌカイト製遺物の
元素比分析結果……87
表 5　縄文土器の種類別点数……88
表 6　京都大学構内遺跡のおもな調査
……97

第１章　1993年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎　清水芳裕　古賀秀策

1　調査の経過

京都大学構内のほぼ全域には，縄文から近世にいたる各時代の遺跡が埋積している。このため，京都大学埋蔵文化財研究センターは，吉田キャンパス及び付属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して，予定地の埋蔵文化財の調査を，既知の遺跡との関係や過去の調査結果より，発掘，試掘，立合にわけて実施している。1993年度には，以下の発掘調査５件，試掘調査１件，立合調査６件，資料整理１件を実施した。

発掘調査	理学部動･植物学科等校舎新営予定地(第二期)(北部構内 BB28 区)	(第３章，図版 1-217)
	文学部等校舎新営予定地（本部構内 AW25 区）	(第４章，図版 1-218)
	工学部 RI 施設棟新営予定地（本部構内 AU30 区）	(第２章，図版 1-219)
	総合人間学部人間・環境学科校舎新営予定地（総合人間学部構内 AO22 区）	(発掘中，図版 1-220)
	理学部基礎物理学研究所研究棟新営予定地（北部構内 BF34 区）	(発掘中，図版 1-221)
試掘調査	ウィルス研究所生物研究棟新営予定地（病院構内 AF12 区）	(第１章，図版 1-222)
立合調査	吉田地区基幹整備工事（本部構内 AW30 区）	(図版 1-223)
	医学部放射線生物研究棟予定地（医学部構内 AN20 区）	(図版 1-224)
	医学部４号館校舎新営予定地（医学部構内 AM18 区）	(図版 1-225)
	病院地区基幹整備工事(病院構内 AH14 区)	(図版 1-226)
	生体医療工学センター実験研究棟新営予定地（病院構内 AG13 区）	(図版 1-227)
	ウィルス研究所実験研究棟新営予定地（病院構内 AG10 区）	(図版 1-228)
資料整理	工学部機械工学科等研究実験棟新営予定地（本部構内 AV30 区）	(第２章，図版 1-214)

2　調査の成果

前節であげた調査のうち，1993年度に整理を終えたものについて，その成果を略述する。なお，AU30 区・AV30 区，BB28 区，AW25 区の発掘調査については第２章，第３章，第４章で，それぞれ詳述している。

本部構内 AU30 区・AV30 区と AW25 区の調査では，吉田山西麓と本部構内一帯の先史時代から近世にかけての新たな知見が多く得られた。まず縄文時代では，AW25 区から時期を後期中葉に限定できる良好な一括資料が得られた。分布の中心は調査区の北半にあり，北方あるいは東北方への遺跡の広がりが想定できる。弥生時代では，AU30 区で山裾に沿って北東から南西にはしる流路から，突帯文土器と遠賀川式土器がまとまって出土し

た。これらの成果は，これまで先史時代の遺物や遺構に関する情報の希薄であった本部構内における，先史時代の地形環境や人々の活動の様子を知るうえで重要な資料となろう。また，AW25区で検出した弧状の平面を呈する濠状遺構は，7世紀代の遺物を含み，111地点での方墳やAV30区と168地点での埋納土坑の存在などを考慮すると，古墳終末期の円墳の周濠である可能性も考えられる。

中世では，土地利用に関する興味深い事実が判明した。まず，AW25区では，13世紀中葉に廃絶された井戸は廃棄物の捨て場となり，その後これに近接して集石墓や土壙墓が設けられており，この地一帯の土地利用が生活空間から埋葬空間へと変容していることが明らかとなった。またAU30区では，弥生時代の流路埋積後の凹地の西側に井戸，柱穴群や建物跡がまとまりをみせるのに対して，凹地内には土器溜群などの遺構が集中する状況を呈しており，生活空間と廃棄または祭祀に関わる空間の使い分けが指摘できる。また後者では，凹地が古代～中世の溝の方向をも規定しており，先史時代からの自然地形が周辺一帯の土地利用に関しても大きな影響を与えていたことが明らかになった。AV30区の北辺では，14世紀の砂取り穴を発見した。中世の志賀越え道南方のこの辺り一帯が，大規模な砂取りの場所であったことが明らかとなった。

北部構内BB28区の調査では，弥生前期末～中期初頭に白川の洪水により一時期に堆積した黄色砂層の下に，土石流の跡を確認した。東北方約100 mの109地点では，西流する土石流の南限を検出しており，弥生前期に北部構内南部を横切っていたとされる河道は109地点付近で分流し，このうちの南流する一枝流を検出したものと思われる。また，縄文晩期～弥生前期の遺物包含層を貫通して噴出する噴砂と，黄色砂層中で検出した堆積層の乱れは，地震にともなう堆積物の圧密液状化現象の跡と思われる。古代～中世の溝や土坑などの遺構は，ほぼ方向を同じくし位置も近接しており，これらの遺構の示すラインは，この地一帯の土地利用の境界であった可能性がつよいことを明らかにした。

病院構内AF12区の試掘調査では，工事予定地にL字状のトレンチ150 m^2を設けて遺構の確認をおこなった。南側の192地点では，近世後半における南北方向の路面沿いに耕作関連の井戸や野壷が集中して見つかっており，今回も同様な状況が予想された。調査の結果，同時期の遺物包含層の広がりは確認できたものの，少量の柱穴と路面の北へのつづき以外に遺構は存在せず，その下は無遺物の砂礫層であった。井戸や野壷はある程度限られた範囲にまとまって設置されていたと想定される。包含層中より整理箱3箱の陶磁器類が出土したほか，表土中より弥生後期の甕形土器片1点を採集している。

第２章　京都大学本部構内 AU30区・AV30 区の発掘調査

千葉　豊　伊藤淳史　古賀秀策

1　調査の概要

本調査区は，本部構内の東南隅に位置する。周辺では，1979年度の試掘調査で縄文晩期～弥生前期と中世の遺物包含層が，1981年度の立合調査で中世の土器溜や土坑が，それぞれ報告されている〔京大埋文研80・83〕。さらに，西に隣接する AT29 区（図版 1-124地点）の発掘調査では，中世の溝や掘立柱建物跡などがみつかっている〔泉・飛野86〕。こうした状況のなかで，ここに工学部機械工学科等研究実験棟ならびに工学部 RI 施設棟の建設が計画されたため，事前にそれぞれ発掘調査を実施した。２つの調査区は南北に隣接しているため，前者の AV30 区（214地点）を北調査区，後者の AU30 区（219地点）を南調査区と呼び，本章であわせて報告する。北調査区の 1480 m^2 は，千葉豊・伊藤淳史が担当して1993年1月11日～2月26日に，また南調査区 1074 m^2 は，伊藤・古賀秀策が担当して1993年10月18日～1994年１月14日に調査を実施した。調査区の位置関係と主要な遺構は，AT29 区の成果と合わせて図１にまとめて表示している。

調査の結果，北調査区の南半は撹乱が著しかったが，それ以外では縄文時代以降近世に至るまでの各期の多様な遺構がみつかり，総計整理箱65箱分の遺物が出土した。なかでも，南調査区を北東から南西へはしる流路から，突帯文土器と遠賀川式土器がまとまって出土したことは注目され，1979年度の試掘調査で確認されていた遺物包含層が，流路に伴う局地的なものであることが判明した。それ以外には，平安時代以降の各時期の溝，中世の土器溜や柱穴群，砂取り穴などがみつかっているが，溝の多くは方位を東に振り，土器溜は流路埋積後の上面に，柱穴群はその西側の安定した地盤に集中する傾向がみられるなど，古代以降の土地利用が先史時代の地形環境に由来する制約のもとに変遷していく状況を知ることができた。なお，遺構からではないが，縄文時代草創期～早期に比定される有茎尖頭器の出土も特筆される。

出土遺物の整理は発掘調査に引き続きそれぞれ担当者がおこない，本章はその結果にもとづき，第６節を千葉，第５節(1)を古賀，それ以外を伊藤が分担して執筆しまとめたものである。発掘と整理に際しては，矢野由記子・下坂澄子・冨井眞・国師祥史・大岡由記子・宮本康二の助力を得た。

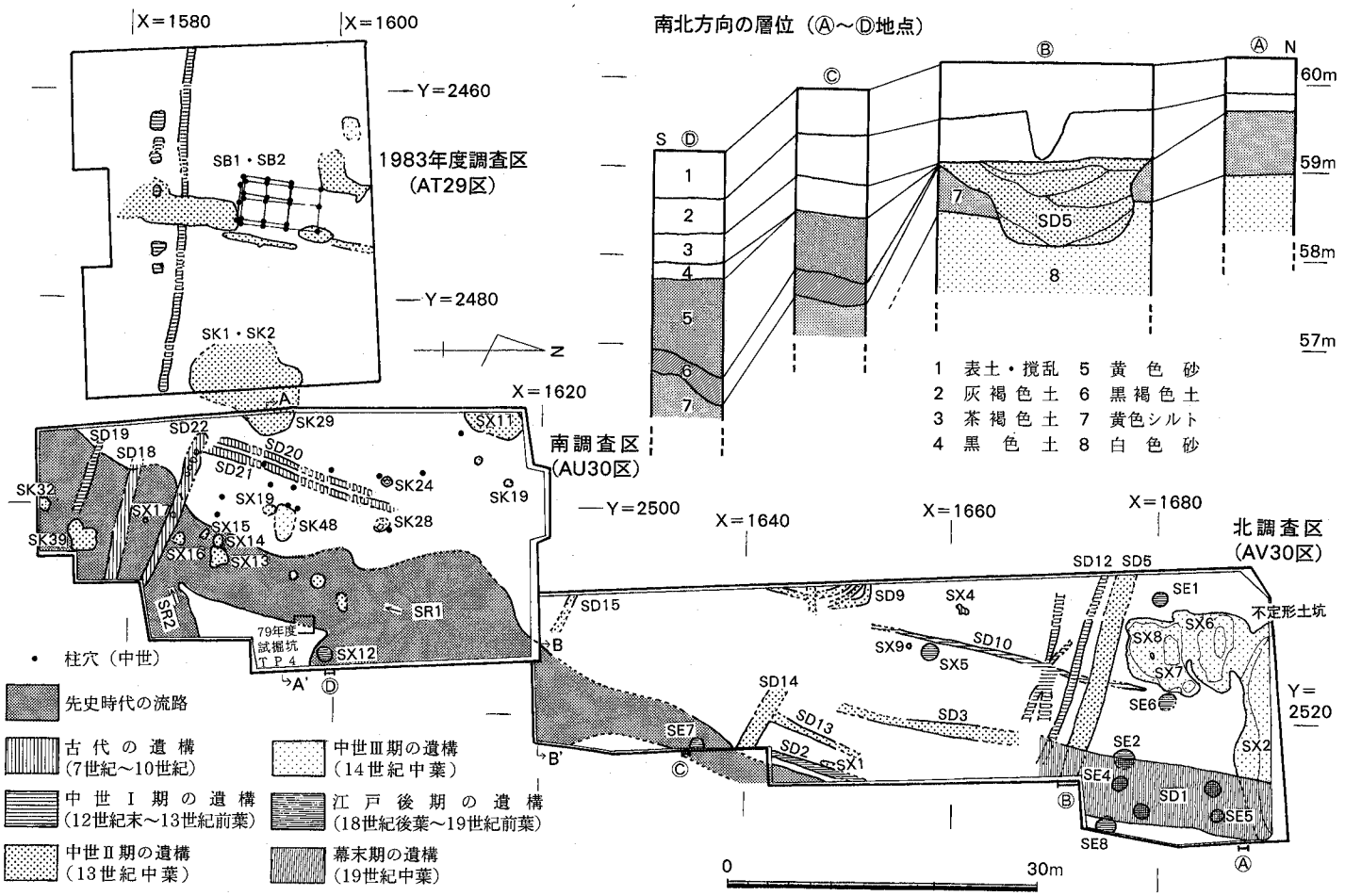


図1　各調査区の遺構と南北方向の層位　遺構：縮尺 1/700　層位：縮尺 1/80

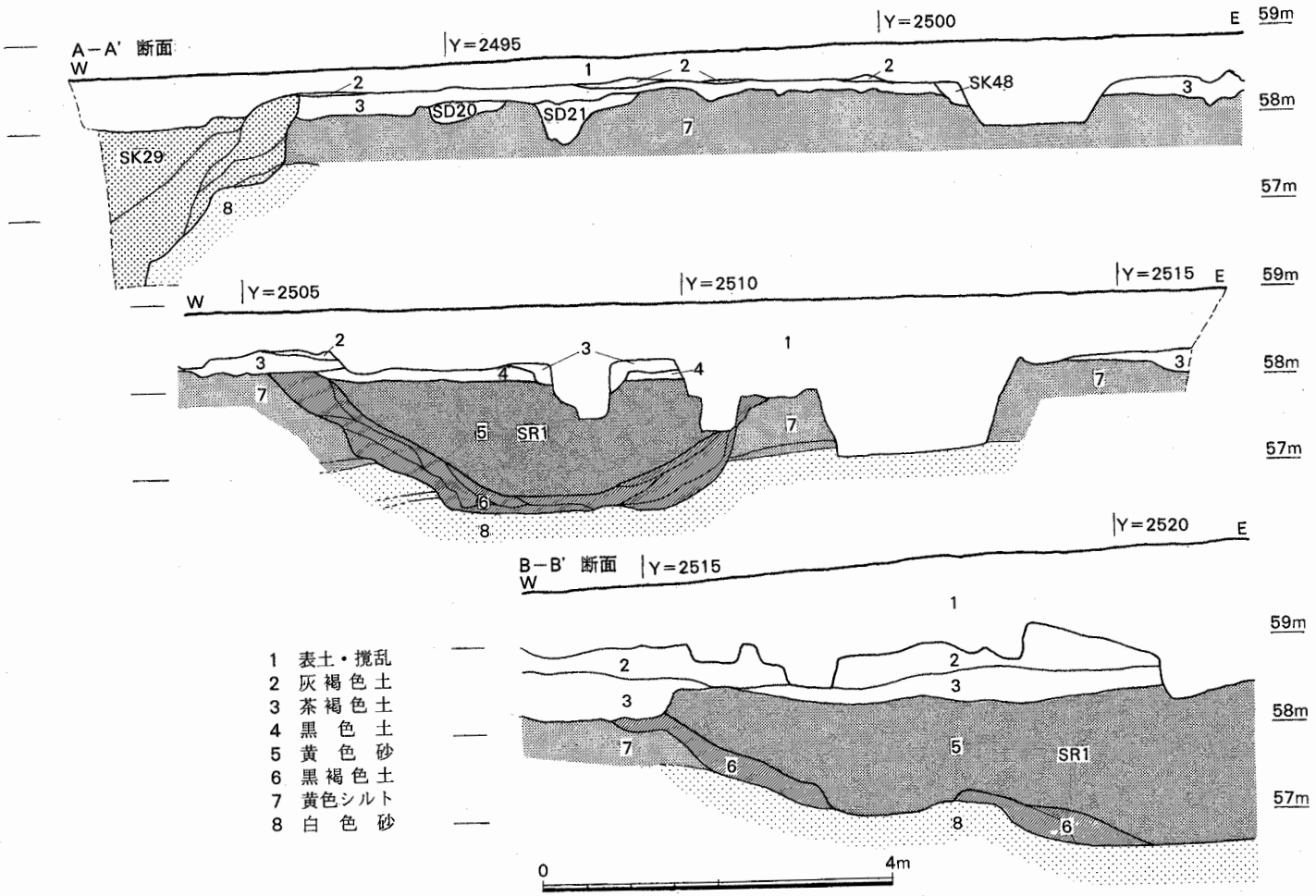


図2　東西方向の層位（図1A－A′・B－B′地点）　縮尺 1/80

2 層　　位

調査区の現地形は，全体としては北から南へゆるやかに傾斜しており，北調査区の北端と南調査区の南端での比高差は１ｍたらずである。南北方向の層位については調査区東壁の要所の４ケ所（Ⓐ～Ⓓ地点）を表示し，東西方向については，南調査区の東西畦南壁（A－A′断面）と，北調査区の南壁（B－B′断面）を裏表反転して図化したものの記録を示す（図１・2)。

第１層の表土・攪乱は，大学設置以降の近～現代にかかわるものであり，それより下層を調査対象とした。

第２層の灰褐色土は，近世の遺物包含層で，18～19世紀代の陶磁器類が多く出土する。南調査区では上面を削平されており，部分的にしか残っていなかった。

第３層の茶褐色土は，中世の遺物包含層で，13世紀代を中心に，12世紀代にさかのぼるものや14世紀以降に下るものも少量認められる。北調査区の北半ではほとんど残っておらず，遺構の埋土としてのみ確認できる。

第４層の黒色土は，南調査区の東半において，下層の流路（図１梨地部分）とほぼ一致する範囲に認められたもので，やや粘質の堅く締まった層である。10世紀代の遺物がごく微量出土している。また，SD18・SD20・SD21 の埋土も，これと同質なものである。本来はもっと面的に広がっていたものが，下層の流路の影響で生じていた凹地や遺構の掘り込み部分への堆積を除いて，削平されてしまっている可能性が高い。

第５層の黄色砂は，流路を埋没させている均質で粒子の細かい砂層で，無遺物。吉田キャンパス一帯で鍵層として確認されている，弥生前期末～中期初頭ごろの土石流堆積層に相当するものと判断している。

第６層の黒褐色土は，流路の底面に沿ってＵ字状に堆積しているやや粘質の土壌で，地点によっては縄文晩期～弥生前期の遺物を多く含む。これら流路内の堆積状況については次節で詳述する。

第７層の黄色シルトは，調査区の遺構のベースとなっているもので，色調は黄色砂に類似するが，堅く締まっている。約0.6～1.0ｍあまりの厚さがあり，その下には第８層の礫混りの白色砂層が堆積していることを確認している。第７層・第８層ともに無遺物であり，場所によっては両層の間に淡褐色砂質土の薄い間層が認められる。いずれも，縄文後期以前に堆積した層であろう。

3　縄文・弥生時代の遺跡

(1) 流　　路（図版4・5，図1～3）

この時代にかかわる遺構は，北調査区の南東隅をかすめ，南調査区を北東から南西方向へはしる流路SR1を中心とする。位置と断面の様子は図1・図2を参照されたい。また，南調査区については，流路内に堆積していた黒褐色土層上面の地形と，層内の主要遺物の分布状況を図3に示した。流路を埋没させている黄色砂層が弥生前期末～中期初頭に限定できる堆積であることから，ここに示した地形は，流路埋没直前の自然地形を表わすものである。以下，流路の内容について詳しく説明する。

規模と形状　　SR1は，平均すると幅6m深さ2mあまりで，断面はU字形を呈する。ただし，両側の立ち上がりが確認できるのは一部のみで，東肩は不明な部分が多い。また，このように東肩が欠落している地点では，それに対応して西側へと流路の幅が大きくふくらむ状態を示している。調査区外となるため断定はできないが，東方の吉田山からこの流路へと合流してくる流路が複数存在しており，その影響によるものと推測される。南調査区の南端では，こうして東から合流してきた流路SR2が，SR1と並行して南流し，調査区外へのびていく。以上の状況から，いずれの流路も自然流路と判断している。

堆積状況　　流路は，第7層の黄色シルト層を切って流れており，その底は第8層の白

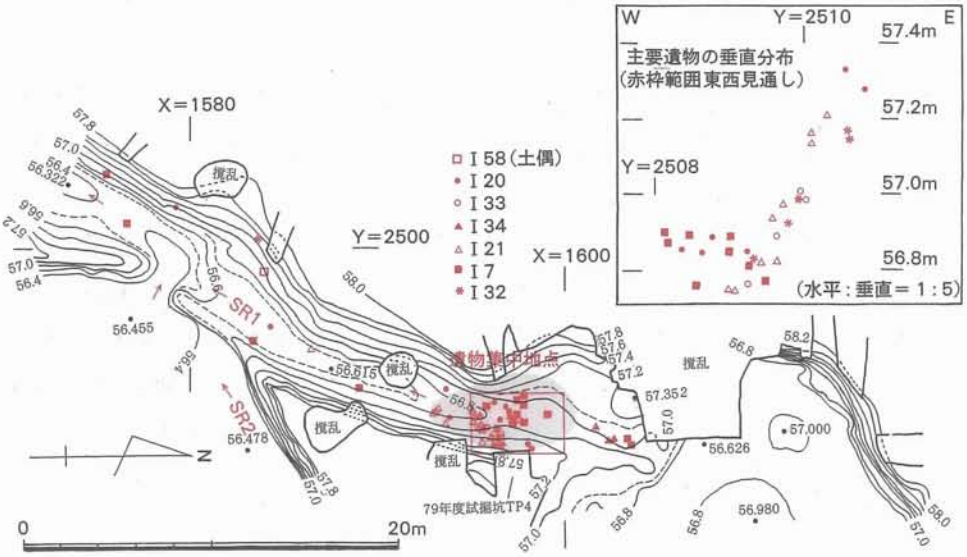


図3　流路内黒褐色土層上面の地形と主要遺物の分布（等高線の間隔20cm）　縮尺1/400

色砂の中位に及んでいる。内部には，第６層の黒褐色土層が，基本的に底面に沿ってＵ字状に堆積しているが，地点によっては流路の西肩のみにブロック状に存在する。それより上面は第５層の黄色砂が厚く埋積し，流路を埋没させているけれども，古代以降も凹地として残ったようで，最上面に第４層の黒色土の堆積をみる。黒褐色土層は，1979年度の試掘調査の際には，黄色砂より下層の暗茶褐色土・暗褐色土・黒色土の３層として報告されている〔京大埋文研80 p. 40〕。今回の調査においても同様な色調の違いは認められたが，その境界は漸移的で安定したものではないこと，色調以外には質的な差異がほとんど認められないこと，また遺物はいずれの層からも出土し接合関係も認められることから，黒褐色土層として一括した。また，この層内には，水流や滞水の状態が存在したことを示すような間層は全く確認されなかった。

遺物出土状況　黒褐色土層中からは，弥生前期の土器を中心に総計446点の遺物をとりあげた。すべて南調査区の出土で，流路幅が最も狭くなっている付近の，それも東側斜面を中心にまとまって出土している（図３梨地部分）。この遺物集中地点の下流にあたる南方や，斜面や層の上下間においても接合関係にある破片は多く，ここでは，代表例として主要な７個体の破片の水平分布と垂直分布を表示しておく。土器片はいずれも磨滅していないことから，これらは，原位置を保ってはいないものの，流路の東～東北側を中心とする調査地点にきわめて近い場所から，長期的ではなく比較的短期間にまとめて廃棄されたものである可能性が高いと判断される。

(2)　遺　　物（図版６～10，図４～９）

土器・土製品については，すべてSR1内黒褐色土層の出土である。説明の便宜上，遠賀川式土器・突帯文土器・その他，の３群に大別して報告する。内容の検討は第６節で再述しているので参照されたい。なお，石器については，黒褐色土層中からは５点の剝片が出土したのみである。よって，古代以降の遺構に混入して出土したものを提示する。

遠賀川式土器（Ⅰ1～Ⅰ31・Ⅰ42～Ⅰ49）　Ⅰ1～Ⅰ9は壷。Ⅰ1～Ⅰ4は口縁部の破片で，Ⅰ1は口縁端部を丸く収め，焼成後穿孔の紐孔をもつ。頸部には断面半円形の突帯を貼り付けている。胎土中に角閃石を多く含んで暗褐色の色調を呈し，一般に「生駒西麓産」と呼ばれている胎土の特徴を示している。Ⅰ2～Ⅰ4の端部は弱く面取りしている。Ⅰ3は頸部の沈線が1条まで確認できる。Ⅰ5～Ⅰ9は頸～胴部の破片で，Ⅰ5は頸部に削り出し突帯を設けその上に沈線が1条まで確認でき，焼成後穿孔の紐孔をもつ。また，外面には刷毛目調整が消されず残っている。Ⅰ6はやや特異なもので，内外面を丁寧に研磨

して黒色を呈し，頸部に装飾をもたない。Ⅰ7は頸部に2条の突帯を貼り付け，胴部には沈線3条と突帯1条をめぐらす。胴部沈線の最上端のものは，頸部側を横位方向に強く研磨して低め，削り出し突帯状の段差を成形する。貼付(はりつけ)突帯は断面半円形で，正面から篦先によるV字形の刻みを施している。胴部の突帯はかなりの部分が剝落しているけれども，その部分から，突帯貼り付け前に下書きの篦描沈線が施されていたことが確認できる。Ⅰ8は，かなり大形になる壷の頸部で2条の篦描沈線をもつ。接合はしないが同一と思われる破片は多数ある。Ⅰ9は小形の壷の頸部で，沈線が3条まで確認できる。

Ⅰ10・Ⅰ11は壷用の蓋。Ⅰ10には中央部に焼成後穿孔の紐孔がある。

Ⅰ12～Ⅰ14は鉢。Ⅰ14は，器表面を横位方向に研磨したのち，上下方向より指で押さえつけて成形したおおぶりの把手を貼り付けている。その後に胴部を再び研磨するようである。1/8程度しか残存していないので把手の単位は不明であるが，図上では4方向に把手がつくものとして復原した。なお，Ⅰ13・Ⅰ14は外面に煤が付着している。

Ⅰ15～Ⅰ31は甕。口径が復原可能なものでみると，直径18 cm程度のもの（Ⅰ16），22～24 cm程度のもの（Ⅰ17～Ⅰ19・Ⅰ21），30 cmを越えるもの（Ⅰ15・Ⅰ20）の少なくとも3種類の法量が認められる。器形としては，口縁が短く外反し，胴部はあまり張らないものが主体となるが，Ⅰ19はやや強く張るものとみられる。調整は，外面を縦位の刷毛目調整，内面を指や板状工具で撫でて平滑にすることを基本としているが，Ⅰ19は口縁部の内面にも横位方向の刷毛目が残される。Ⅰ15では，1.5 cm程度の幅をもつ板状工具の木口や擦過の痕跡が良く観察できる。装飾は，口縁の端部に刻み目を，頸部に篦描沈線を施すことを基本とする。Ⅰ15・Ⅰ16は頸部の文様を欠いているが，それ以外の個体では，残存している範囲内で，1～3条までの条数が確認できる。Ⅰ18・Ⅰ19の刻み目には木目の圧痕が明瞭に残っているほか，Ⅰ20には，口縁端部の下端を鋭くV字に刻む特異な技法を用いている。類似の刻み技法は，病院構内AH19区出土土器Ⅰ83として報告されているものにみられる〔千葉91 p. 37〕。Ⅰ21は，外面の下半部が強い火熱を受けて黒変し，器表面が剝落している。しかし内面にはとりたてて使用にかかわる痕跡は残っていない。これ以外の甕も，外面に煤が付着しているものは多いが，内面に付着物が残っているものはない。

Ⅰ42～Ⅰ49は底部。外面を丁寧に磨いているⅠ42～Ⅰ45は壷の，刷毛目調整であるⅠ46・Ⅰ49は甕の底部であろう。Ⅰ47・Ⅰ48は小片であっていずれとも決めがたい。

突帯文土器（Ⅰ32・Ⅰ33・Ⅰ39～Ⅰ41）　口縁部を含む個体はⅠ32・Ⅰ33の2点のみしか出土していない。Ⅰ32は，やや胴部の張る深鉢で，底部を除いてほぼ器形が復原でき

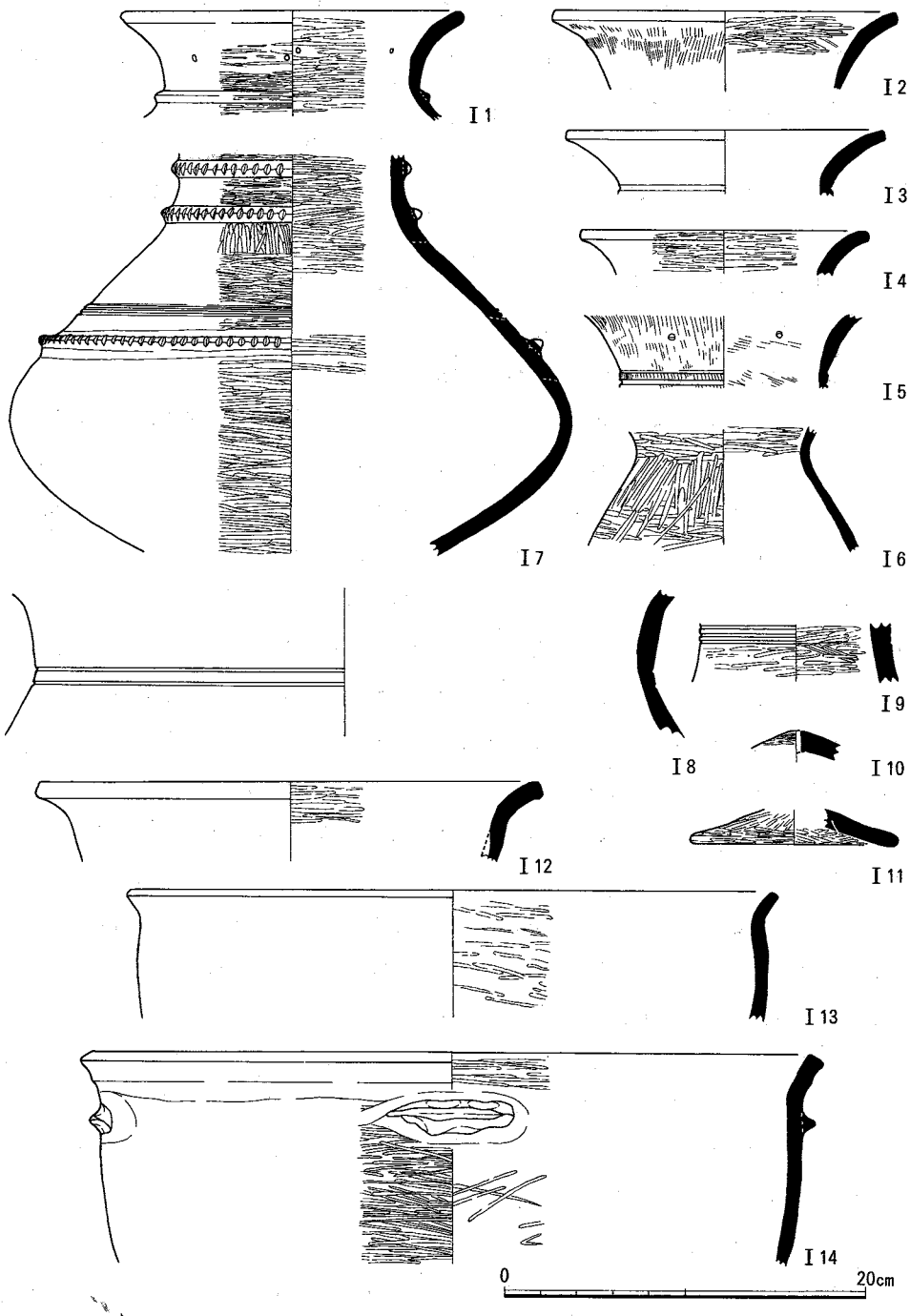


図4　SR1 黒褐色土層出土遺物(1)（I 1～I 14）　縮尺 1/4

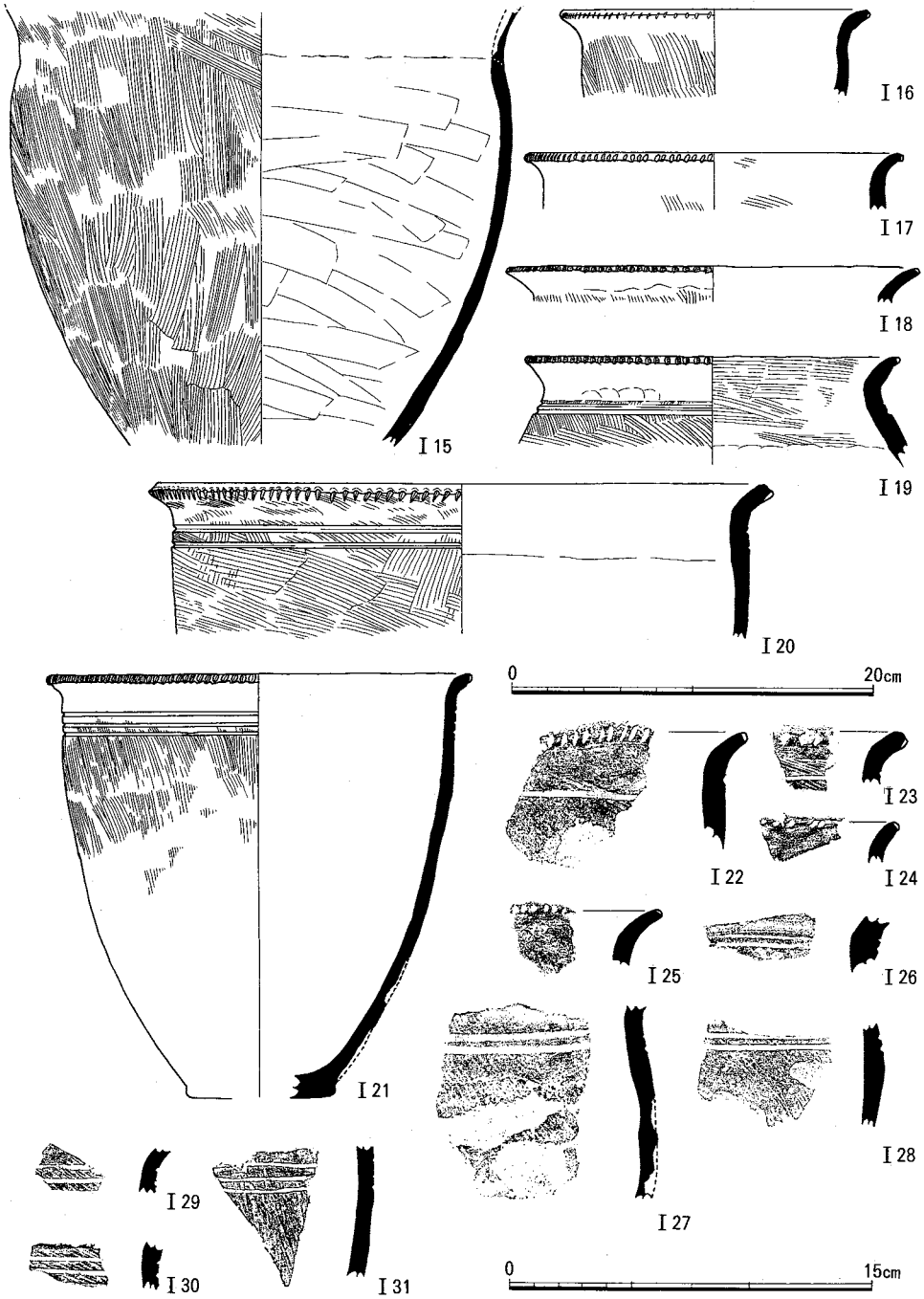


図5　SR1 黒褐色土層出土遺物(2)（Ⅰ15～Ⅰ31）　Ⅰ15～Ⅰ21 縮尺 1/4，Ⅰ22～Ⅰ31 縮尺 1/3

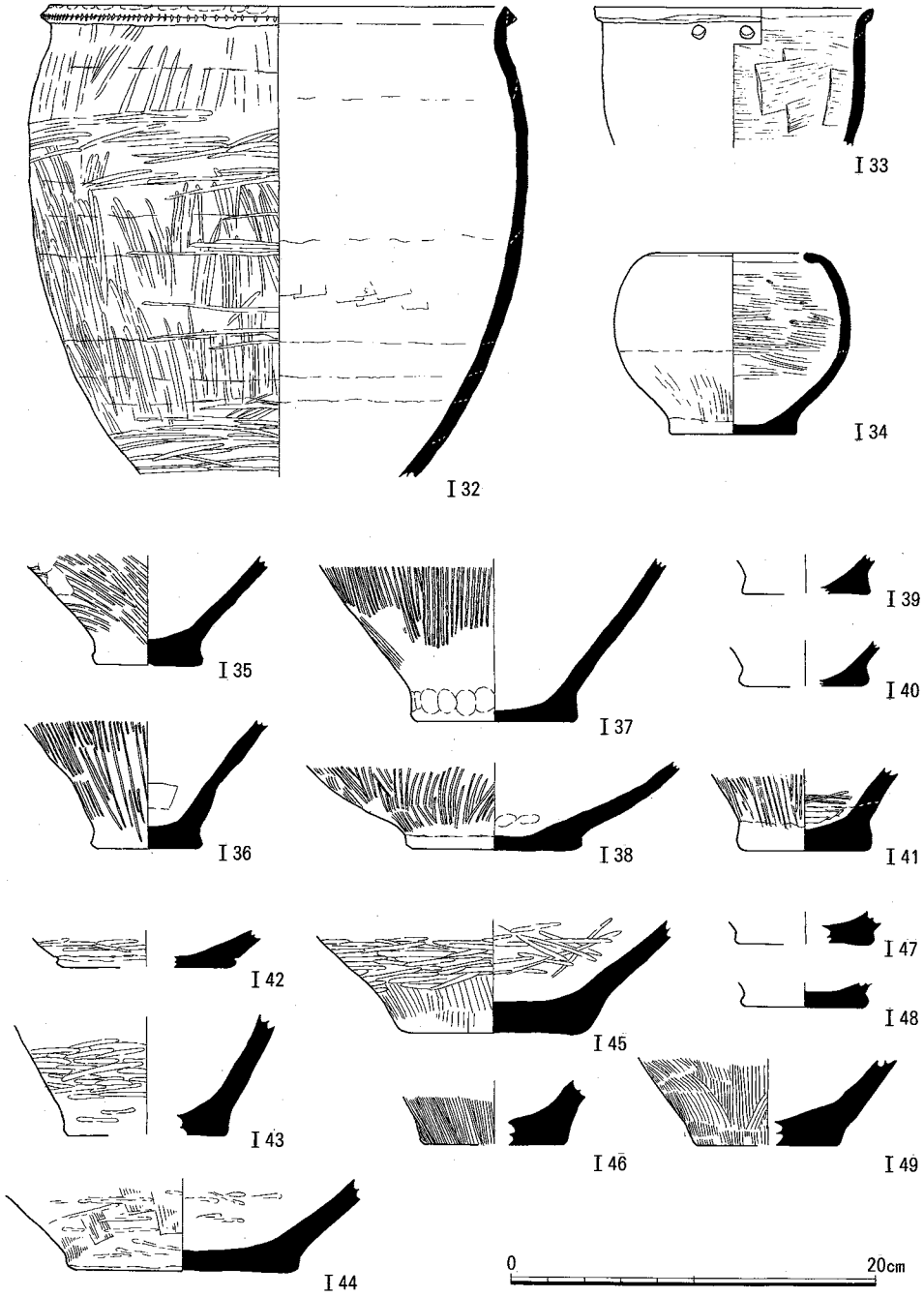


図６　SR1 黒褐色土層出土遺物(3)（Ⅰ32～Ⅰ49）　縮尺 1/4

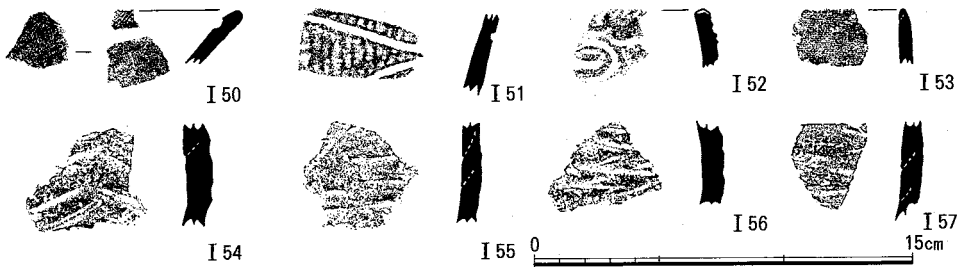


図7　SR1 黒褐色土層出土遺物(4)（Ⅰ50～Ⅰ57）　縮尺 1/3

る。1979年度の試掘坑 TP4 第 4 層出土の口縁部破片Ⅲ26と接合した〔京大埋文研80 p. 40〕。口縁端部は，断面三角形の突帯貼り付けを兼ねた撫で調整で処理されており，突帯上には非常に細かなＤ字形の刻みが施される。外面には，縦位方向を基本としながら，肩部を中心に一部に横位方向のものを加えた，幅 3 mm 程度の箆磨き状の調整が施されている。ただし，部位によっては２～３条単位の細密な条痕状を呈していることから，使用された工具の本来の形状をうかがうことができる（図版10-1)。色調は，明黄灰色を呈し，外面の一部には煤が付着している。Ⅰ33は小形の深鉢で，口縁端部に沿って偏平につぶれた紐状の突帯を貼り付けているが，形状が安定せず，突帯がめぐっていないかのように見える部位もある。口縁下に径 7 mm の補修孔が穿たれている。外面は横位の撫で調整を基本とし，器面は平滑だが板状工具の木口の圧痕がのこる。内面には，横位方向に板状工具をひきずった痕跡が粗く残されている。色調は暗黄灰色を呈し，外面には煤が付着する。Ⅰ39～Ⅰ41はこうした突帯文土器の底部とみなせるものである。このうちⅠ41は，色調や胎土の特徴にⅠ32と近いものがあり，同一個体となる可能性もある。

その他（Ⅰ34・Ⅰ35～Ⅰ38・Ⅰ50～Ⅰ57）　Ⅰ34は，小形の無頸壷。口縁は内側へ水平に屈曲し，端部は撫でて丸く収められている。外面の調整は，下半部に刷毛目状の条線がわずかに残っているが，それ以外は風化してはっきりしない。器表面は平滑である。内面には，横位方向の砂粒の動きが多数認められるとともに，刷毛目状の条線も粗く残されている。色調は淡黄白色を呈する。無頸壷は，遠賀川式土器には稀にみられるが，このように口縁が内折する器形はみられない。また，本例の胎土や色調は，遠賀川式土器に一般的なものとも異なっており，系譜については検討を要する。

Ⅰ35～Ⅰ38の底部と，Ⅰ54～Ⅰ57の破片は，外面を条痕状に調整している。Ⅰ35は，底部側から見て反時計回りの螺旋状に，櫛状工具を用いた条痕を施す（図版８)。色調は黄褐色。Ⅰ36・Ⅰ37の縦位の条痕は，3 mm 幅程度の凹部と細い凸部が並行しているもので，

割板状の工具によるものと思われるが，図版10で示すように，遠賀川式土器の刷毛目とは明らかに異なっている。ともに内面には板状工具の擦過痕が明瞭に残る。色調は淡黄白色。Ⅰ38は，先太の櫛状工具による条痕を縦位に施している。色調は淡黄白色。Ⅰ54～Ⅰ57は，櫛状工具による羽状の条痕がみられる破片で，器壁が厚く，外面は火熱を受けて赤褐色に変色している。特徴が類似しているので同一個体の可能性もある。これらは，いずれも近畿地方の突帯文土器にはみられない特徴であり，Ⅰ35は伊勢湾地方からの搬入品，Ⅰ54～Ⅰ57もその可能性がある。Ⅰ36～Ⅰ38は，伊勢湾地方に見られる条痕調整とも趣が異なり，類例をみないものである。

Ⅰ50～Ⅰ53は，縄文後期を中心とする時期の土器とみられるが，いずれも磨滅気味の小片であるため，細かな型式は特定しがたい。Ⅰ50は口縁部で，内面に幅広の沈線に区画された節の非常に細かな縄文帯をもつ。Ⅰ51はかなり磨滅しているが，縄文を地文とした上に箆描の弧状文様を施すようである。Ⅰ52は口縁部で，口唇部を箆で刻み，その下は同心円文風の沈線文様を描いているようである。胎土中に角閃石を多く含む。Ⅰ53は，先端を丸く納めた口縁部の小破片であり，晩期の土器である可能性もある。

土　偶（Ⅰ58）　中実の棒状の土製品で，ほぼ直角に屈曲した部分の破片。土偶の肩ないしは腰の部分かと推測される。砂粒をあまり含まない比較的精良な胎土で，黄褐色を呈する。図面上で上にした割れ口は面積が大きく，より大きな部分との接着が想定できるのに対し，下にした割れ口は小さく，細くすぼまっていく傾向がうかがわれる。外面は丁寧に撫でて，わずかに面を成すような仕上げ方をされている。割れ口はどちらも単純な破損面で，製作時に離脱を意識したような特別な痕跡は認められない。流路内の黒褐色土層中からの出土であるので，縄文晩期末～弥生前期のものである可能性が高い。周辺における同様な時期の土偶の出土例は，中京区高倉宮下層遺跡で脚部片〔南88 p.100〕，長岡京市雲宮遺跡L235地点で頭部片〔長岡京市編91 p.77〕がある。

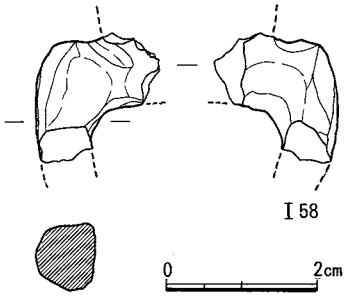


図8　SR1 黒褐色土層出土遺物(5)（Ⅰ58）　縮尺 1/4

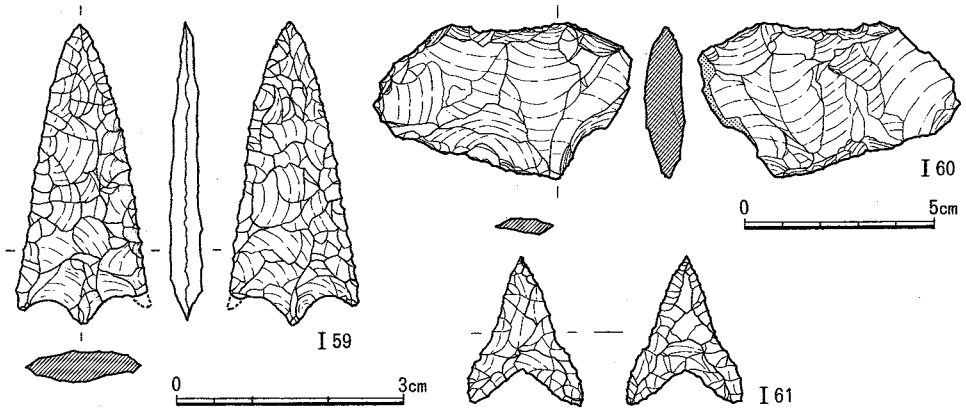


図9　石　器　I 59・I 61 縮尺 1/1，I 60 縮尺 1/2

石　器（I 59～I 61）　SR1 内の黒褐色土からは，サヌカイトの剝片5点が出土したのみで，製品はない。以下はいずれも，上層の歴史時代以降の遺構からの出土品で，縄文時代に属するものである。

I 59は，短い茎をもつ凹基有茎式の尖頭器。古代の溝 SD21 の埋土中から出土した。淡緑色のチャート製で，全長 4.05 cm，最大幅 1.75 cm，重さ 2.70 g を測る。有茎尖頭器としては最も小さな部類に位置づけられるものである。片側の逆刺（かえり）の先端がわずかに欠失しているほかは完存しており，磨滅もほとんどない。体部の成形技法には，この種の石器に特徴的な，連続する押圧の斜行剝離があまり認められないものの，側縁を両面からの微細な連続調整で非常に丁寧に仕上げている。この有茎尖頭器は，比叡山西南麓では初例となるが，西口陽一の集成と研究によれば，京都市域では 7 点の出土が挙げられており，近畿地方においては縄文時代早期前半神宮寺式期までの土器とともに出土した例があるとされる〔西口陽91〕。最も近い位置にある早期の遺跡としては，調査地の北東約 1 km にある北白川上終町遺跡があり，黄島式期の住居跡などがみつかっている〔網94〕。しかしながら，それより古い段階の資料は周辺一帯も含めて確認されていない。出土の状況から本例の帰属時期は定かにできないけれども，北白川の縄文遺跡群においては現状で最古段階に位置づけられる資料と推測され，近接した場所での遺跡の存在を示唆する貴重な事例といえよう。

I 60は，スクレイパー，ないしは横形の石匙の未製品かともみられるもので，近世の溝 SD2 の埋土から出土している。漆黒色の頁岩製で，やや磨滅している。重さ 33.8 g を測る。I 61は凹基式の石鏃。近世の集石 SX5 から出土している。暗赤色のチャート製で，重さ 0.5 g を測る。非常に薄手で小さな製品である。

4　古代の遺跡

(1)　遺　　構（図版２・４，図１）

北調査区で土坑が，南調査区で溝が見つかっている。しかし，密度は非常に薄い。

SX4 は，北調査区で唯一確認できた古代の遺構で，細長い土坑の中央部を円形に掘りくぼめてあり，6 世紀後葉ごろの完形の甕（Ⅰ62）が逆位で出土している。ほかに同時期の遺構はみつかっていない。

SD18 は，幅1.2 m，深さ 30 cm 程度の浅い溝。9 ～10世紀ごろの遺物が微量出土している。

SD20～22 は，幅 80 cm，深さ 40～50 cm 程度の，断面Ｕ字形の溝。南北方向に並行してはしる溝 SD21・SD22 は，東西方向の SD20 と直交しているが，相互の切り合い関係は撹乱のため不明である。また SD20 は，溝底に円形の掘り込みが連続して確認されたほか，調査区西壁付近で途切れており，西へは続かない。すべて方位は真北から 10° 前後東へ振っていることが注意される。いずれも遺物の出土は非常に乏しいが，埋土となっている黒色土層が10世紀前葉ごろの遺物を含むことから，それ以前の時期の溝と判断される。

(2)　遺　　物（図版11，図10）

上述した各遺構からのほか，中世～近世の遺構や包含層に混入して，6 ～12世紀にかけての各時期の遺物がわずかに出土しており，あわせてここで報告する。

Ⅰ62は SX4 出土の土師器甕。球形の胴部から斜め上方に直線的に立ち上がる口縁部をもち，端部には横撫でによる凹線が生じている。外面の上半と内面の下半には煤や黒色物の付着が認められる。胴部外面の下半は箆削り調整して仕上げており，小笠原好彦のいう「近江型」の特徴を示す〔小笠原80〕。このような地域的特徴は，6 世紀後葉には生じて 8 世紀前葉まで継続することが知られ〔西口寿83〕，単独で出土した本例からは時期を限定しがたいが，調査区内ではほかに 8 世紀代の遺物は全く出土しておらず，一方，6 世紀末葉～ 7 世紀の須恵器蓋（Ⅰ63）・杯（Ⅰ64）が近接した SD1・SD5 にそれぞれ混入して出土していることから，本例もそれと同時期ごろの可能性が高いと判断する。

Ⅰ65は茶褐色土より出土した須恵器短頸壷。胴部に櫛描波状文がめぐる。古墳時代にさかのぼる可能性もあるが，類例に乏しく，時期は特定しがたい。

Ⅰ66～Ⅰ69は SD18 からの出土遺物で，Ⅰ66は須恵器杯Ａ，Ⅰ67は灰釉陶器，Ⅰ68は緑釉陶器，Ⅰ69は糸切痕をもつ白色土器の底部。Ⅰ70・Ⅰ74は黒褐色土からの出土遺物で，Ⅰ70は「て」の字状口縁をもつ土師器皿。器壁は非常に薄い。Ⅰ74は削り出し高台の白色

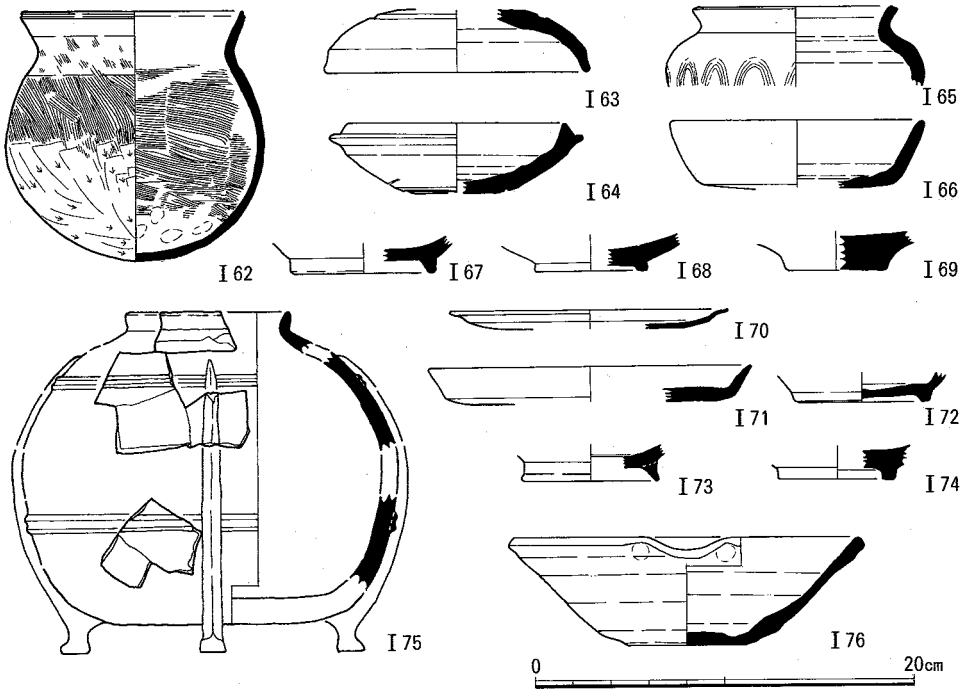


図10　古代の遺物（Ⅰ62・Ⅰ70土師器，Ⅰ63～Ⅰ66・Ⅰ71・Ⅰ72・Ⅰ76須恵器，Ⅰ67灰釉陶器，Ⅰ68・Ⅰ73・Ⅰ75緑釉陶器，Ⅰ69・Ⅰ74白色土器）

土器底部。Ⅰ71～Ⅰ73は中世の遺構や茶褐色土への混入品で，Ⅰ71は須恵器皿，Ⅰ72は須恵器杯B底部，Ⅰ73は貼付高台をもつ緑釉陶器底部。以上は9～10世紀代に比定され，量的には少ないものの，この時期における調査区周辺での活動の痕跡を示すものである。

Ⅰ75は，黒色土と茶褐色土の双方から出土した同一個体と推定される緑釉陶器の破片から，四足壷の器形を復原した。灰色の精良な胎土で，焼成は堅緻。釉調は淡緑色で外面は丁寧に磨かれている。特徴からみて猿投窯の製品と判断される。緑釉陶器の類品は，京都市上京区慈照院に，織田有楽斎の所持として伝世される重要文化財の四足壷がある〔東京国立博物館85 p.88〕。本例も，断片ではあるが9～10世紀代の優品といえよう。

Ⅰ76は須恵器片口鉢。底部から直線的に立ち上がる器形で，口縁端部はしっかりと面取りする。底部の糸切り痕は撫で消されている。青灰色を呈する東播系の須恵器であるが，定型化した大形のすり鉢ではなく，椀の大ぶりなものに片口を付けた器形ともいえる。森田稔によれば，上下に拡張しない口縁端部の形状は東播系すり鉢でも古い段階の特徴であり，12世紀中葉に比定できる〔森田86〕。出土したのは13世紀中葉の土坑SK22である。

5　中世の遺跡

(1) 遺　　構（図版２～５，図１・11）

おおむね茶褐色土を埋土としており，今回の調査で確認された遺構の中心となる。出土遺物の時期からみて，遺構には以下の３つの年代的まとまりがある。

Ⅰ：１段撫で面取り手法を中心とするが，２段撫で素縁手法の土師器皿も若干ともなう段階。中世京都Ⅰ期古段階に相当し，12世紀末～13世紀前葉の年代が与えられる。

Ⅱ：土師器皿の手法が１段撫で面取り手法を中心とし，灰白色の椀が出現している段階。中世京都Ⅰ期中段階に相当し，13世紀中葉の年代が与えられる。本調査区の中世の遺構のうちでも主体を占める。

Ⅲ：灰白色の凹み底小椀が盛行する段階。中世京都Ⅱ期中段階におおむね相当し，14世紀中葉の年代が与えられる。

ここでは，それぞれ本調査地における「中世Ⅰ期」「中世Ⅱ期」「中世Ⅲ期」と呼ぶことにし，以下の遺構・遺物の説明にはこの時期名称を用いる。こうした年代的まとまりは，西側の AT29 区の調査においてもおおむね認められているものである。なお，遺構は北調査区の北半と南調査区の南半に偏る傾向があり，相互に性格も異なっていることから，調査区ごとに説明する。

北調査区の遺構　　真北から東へ 10° 前後方位を振る溝群と，不定形土坑を中心とする。

東西方向の溝 SD5 は規模・形状とも最もしっかりしたもので，検出面で幅 2.4 m，深さ 1 m を測り，断面は逆台形を呈する。上層には拳大～人頭大の礫がまとまって集石状を成している部分が見られた（図版 2-3）。中世Ⅱ期の遺物が出土している。この SD5 に並行して，幅 60 cm 程度の浅い溝 SD12 のほか，幅 30 cm 程度の複数の小溝がはしっている状況も確認された。しかし，多くを撹乱に破壊されており，直交する南北方向の小溝 SD10 も含めて，時期を特定できる遺物は出土しなかった。小溝群の埋土は SD5 と異なる暗茶褐色の色調を呈しており，また切り合い関係から SD10 は SD5 に先行することがわかる。こうした状況から，これら小溝群は，SD5 に先行する中世Ⅰ期以前のものとみられる。SD5 を中心としたラインは，北側の砂取り穴と南側の遺構の空白地帯とを隔てており，中世における土地利用の境界線として重要な意味をもつものだろう。

調査区中央付近は遺構の密度が低く，その南側は撹乱のため遺構の残りが悪かった。南北方向の溝 SD3・SD13，東西方向の溝 SD14 は，いずれも幅 1 m，深さ 30 cm 前後のもの

で，中世Ⅱ期の遺物がわずかに出土している。また，X＝1650付近の西壁際では，直角に曲がる溝SD9をはじめ，幅20cm程度の小溝が集中していた。茶褐色土を埋土としており，中世の溝とみられる。撹乱のため全体の形状は不明だが，この西側では遺構の密度が高くなっている可能性を示しており，注意される。このほかに，中世Ⅱ期の土師器数個体分がまとまって出土した小規模な土器溜SX1・SX9がみつかっている。

調査区北辺の不定形土坑SX2・SX6～SX8は，深さ2mを越える連続したひと続きの遺構で，下層の白色砂を採取した砂取り穴である。最も新しい時期の出土遺物に灰白色の凹み底小椀があり，中世Ⅲ期の遺構とみられる。SX2は掘り上げると南北方向の濠状になるが，SX6～SX8は壁面のオーバーハングが著しく，人間1人が掘削作業をするのに適当な，直径1.5～2m程度のふくらみが連続した凹凸の著しい輪郭をもつ。相互の切り合い関係は確認できなかったが，SX2の南北断面でみると，南から北へ傾斜して白色砂と茶褐色土が互層に堆積しており（図版3-2），SX2を掘り上げたのち，南側のSX6～SX8を掘りながらこれを埋め戻していった可能性が考えられる。また，SX6の上面の一部は集石状を呈していた。埋め戻しの過程で礫を集中して投棄したのであろう。

南調査区の遺構　溝，土坑，土器溜，集石，多数の柱穴がある。

溝SD19は，調査区の南端に位置する，東西方向の浅い溝である。幅はおよそ1mを測る。東西両端は攪乱で切られており，長さは不明であるが，西側に隣接するAT29区の調査では，延長部となる溝は検出されておらず，西へは続かないと思われる。方位は真北から約10°東へ振る。これは，前述した古代の溝群や北調査区の溝群が示す方位と合致しており，また，古代の溝群とは，位置も近接していることは注目される。土師器を中心に出土した遺物から，中世Ⅰ期に属する遺構とみなされる。

SK24とSK28は，小規模な土坑であり，掘形底部に根石をともなうことから，柱穴と考えられる。根石の最大径はともに約60cmを測る。前者の根石の上面は平らであり，後者は丸みのある花崗岩である（図版5-5）。茶褐色土を埋土とし，土師器小片のほか，後者からは軒瓦（Ⅰ232）が出土した。中世Ⅱ期の遺構と思われる。これらの柱穴の周辺からも，偏平で小さな根石をもち，同様に茶褐色土を埋土とする柱穴を十数個検出している（図1黒丸地点）。さらに，AT29区では，平瓦や石の礎盤をともなう柱穴をもった同時期の建物跡SB1とSB2を検出している。以上を考慮すると，現状では建物に復原できる柱穴のならびはないものの，本調査区西半部にも小規模な建物があった可能性が強い。

調査区の西辺中央には，土坑SK29がある。検出面からの深さは約2.2mを測るが，底

部の中心はさらに深く発掘区外にある。AT29 区では，発掘区の東壁際に濠状遺構 SK1 と SK2 を検出している。13世紀代前後の遺物を包含する層を掘り込んでいる点，埋土から出土する遺物が中世Ⅱ期に相当する点，相互の位置関係などから，今回の SK29 とこの濠状遺構は同一の遺構で，それぞれ東西の肩を検出したものと思われる。この遺構はその形状や断面からみて，本調査区と AT29 区の間の未調査部分に中心をもつ，井戸である可能性が高いだろう。

SK19 は，調査区の北端に位置する小規模な土坑である。遺物は，D_5 類土師器皿のほか，大形の土師器の羽釜（Ⅰ194）が一括して出土している。埋納などの特殊な性格の遺構であった可能性もある。

SK32 と SK39 は，調査区の南端に位置する土坑である。ともに黄色砂を掘り込む遺構で，SK32 からは，礫をともなって瓦器の盤（Ⅰ195）が出土した。SK39 は，検出面での大きさが東西 3.5 m，南北 2.5 m を測る。遺物は，北端と西端に集中しており，それぞれ土器溜状を呈する。土師器のほかには，石硯（Ⅰ181）や石鍋（Ⅰ182），鉄製の刀子（Ⅰ244）など多様な遺物が出土している。また，瓦器は中央部にまとまっていた。南を除く三方からは，鉄釘も出土している。ただし，墓坑と想定できるほど整った遺物の配置はみられない。

調査区の南半には，SX13～SX17，SX19 がある。すべて小規模の土器溜状の遺構で，堀り込みははっきりせず，茶褐色土中で確認した。それぞれ明確に範囲を限定できなかったが，ひとつづきの遺構である可能性もある。出土した遺物は，中世Ⅱ期に位置づけられる土師器を中心とするもので，いずれの遺構も少量の礫をともなっている（図版 5-4）。また，SX13 の下層では，小さな円形の土坑を検出したが，出土した土師器からみて，上層の遺構群と同時期と考えられる。SX19 を除くこれらの土器溜状遺構群と SK32 および SK39 は，先史時代の自然流路 SR1 埋積後の凹地内に位置している。凹地西方の高くて安定した地盤上には，建物跡や井戸と思われる遺構がまとまっており，この地での活動者たちが，廃棄または祭祀の場所として凹地を利用していたと推測できる。先史時代の地形環境が，中世における土地利用にも影響を及ぼしていたとみられ，興味深い。

集石遺構 SX11 は，調査区の西北隅に位置する。掘形検出面での南北長はおよそ 5.5 m を測るが，集石の南半は撹乱に破壊されていた。西端も発掘区外となり，東西幅も確定できないが，堀形底部の中心は発掘区内に収まり，西へはそれほど広がらないと思われる。石は拳大の礫を中心とするもので，上層部に集中するほか，特に南半部に密度が濃い（図 11，図版 5-3）。土師器，瓦，陶磁器などの小片が出土しており，中世Ⅱ期に比定できる。

SK48は，調査区のほぼ中央に位置する不定形土坑である。平面は楕円形を呈し，東西3.5m，南北2.2m，検出面からの深さは約2mを測る。下層の白色砂層を深く掘り込み，側壁はオーバーハングする。底部の壁際を中心とした部分から，完形の凹み底小椀がまとまって出土しており，やや祭祀遺構的な性格もうかがわれる。中世Ⅲ期に比定される。この時期の遺構は，ほかに北調査区での一連の砂取穴遺構がある。SK48は，これらと比べて規模は小さいものの，オーバーハングした側壁，砂層と茶褐色土が互層に縞状となる埋土などの特徴の類似を指摘できる。しかしながら，位置的に孤立して存在していることから，砂取りの目的で穴を掘ったものの，何らかの理由で中断放置された可能性もあろう。

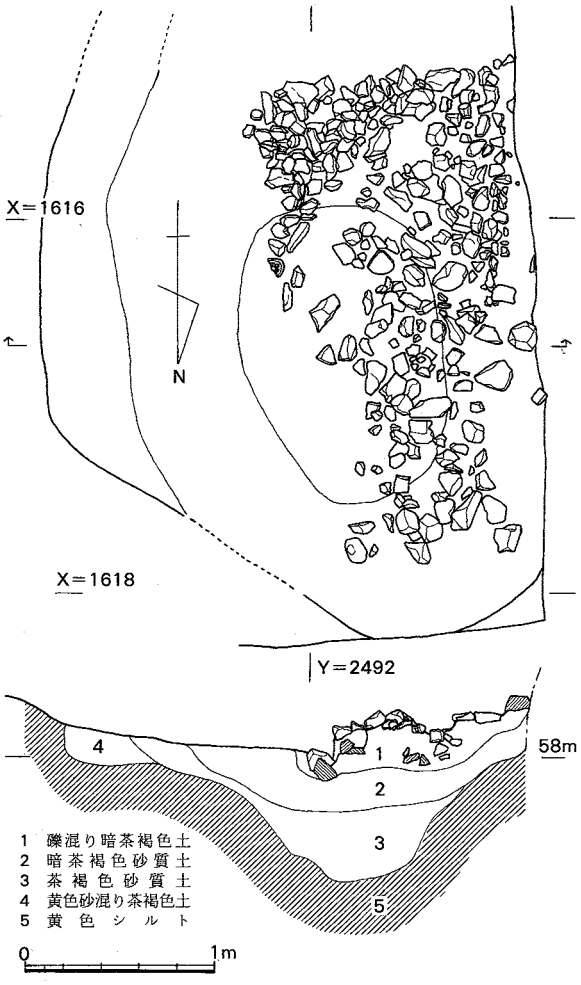


図11　集石SX11　縮尺1/40

(2) 遺　　物（図版12・13，図12～17）

遺物の種類では土師器皿類が圧倒的多数を占め，その多くは南調査区を中心に群在していた土器溜の出土品である。おおむね遺構の種類別に，遺物の内容を説明する。

SX1出土遺物（Ⅰ77～Ⅰ88）　土師器のみが出土した。赤褐色の皿で1段撫で面取り手法D_5類のもの（Ⅰ77～Ⅰ79・Ⅰ81～Ⅰ84）が主体で，E_1類（Ⅰ80）や，灰白色の椀・皿類（Ⅰ85～Ⅰ88）がともなう。中世Ⅱ期にまとまる資料である。

SX9出土遺物（Ⅰ89～Ⅰ92・Ⅰ239）　図示した土師器皿4個体と，鉄釘（Ⅰ239）が出土している。Ⅰ89・Ⅰ91・Ⅰ92はD_5類，Ⅰ90はD_3類。

SX2・SX6～SX8 出土遺物（Ⅰ93～Ⅰ121・Ⅰ237・Ⅰ238・Ⅰ242）　不定形土坑の出土遺物。土坑の単位ごとに図示しているが，ひと続きの遺構であるためまとめて説明する。中世Ⅱ期の遺物を中心に，Ⅰ期とⅢ期の遺物が混じり，時期的にはまとまりがない。赤褐色の皿では，Ⅰ93・Ⅰ94・Ⅰ106～Ⅰ112の D_5 類，Ⅰ96・Ⅰ98の E_3 類があり，灰白色の椀ではⅠ97・Ⅰ113と凹み底小椀のⅠ99～Ⅰ101がある。Ⅰ102・Ⅰ103は瓦器鍋。Ⅰ102は口縁部が短く外折するもので，中世Ⅲ期に属する製品だろう。Ⅰ104は，見込みに櫛目文様を施す同安窯系青磁の皿。Ⅰ105は黄釉陶器盤。玉縁状に肥厚する口縁部で，内面のみ施釉される。Ⅰ116は土師器のミニチュア羽釜。Ⅰ117は須恵器すり鉢。口縁端部はわずかに上方へ肥厚する。東播系で，13世紀前葉ごろの製品である。Ⅰ118～Ⅰ121は白磁。Ⅰ118は大きな，Ⅰ119は小さな玉縁状をなす椀の口縁部。Ⅰ120・Ⅰ121は皿で，ともに見込みに圏線をもち，口縁を輪花で飾る。Ⅰ237・Ⅰ238は鉄釘，Ⅰ242は火打ち金。

SX13～SX17・SX19 出土遺物（Ⅰ122～Ⅰ163・Ⅰ235・Ⅰ243）　南調査区中央の狭い範囲で群在していた土器溜の遺物で，土師器皿類を中心にそれぞれ整理箱1箱分程度の出土量がある。同一時期の類似した性格の遺構群であることから，まとめて説明する。赤褐色の土師器皿は，口径が13 cm 前後と8～9 cm にまとまり，D_5 類が主体となるが，小型の皿にはⅠ130・Ⅰ139のように素縁手法の粗雑な作りのものが若干混じる。灰白色を呈するものは量的に非常に少なく，固有の器形は椀（Ⅰ126・Ⅰ148）のみである。Ⅰ161・Ⅰ162も灰白色を呈するが，それぞれ赤褐色の皿や受皿と同一の器形・調整をもつものである。Ⅰ135は，瓦器の盤にみられるものと似た形状の三足をもつ小型鉢。黄褐色の明るい色調であるが，胎土や焼成具合は，土師器というより瓦器に近い。Ⅰ143は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器皿。黄白色を呈する。Ⅰ136・Ⅰ153は須恵器片口鉢とすり鉢で，口縁端部をやや上方へ肥厚させるものである。Ⅰ145は須恵器甕。外面は横位・斜位の叩き調整するが，頸部のみ横撫でしてすり消している。これらの須恵器はいずれも東播系の製品であろう。Ⅰ137・Ⅰ144は瓦器鍋。Ⅰ163は瓦器羽釜。いずれも外面には煤の付着が著しい。Ⅰ156は白磁椀口縁で大きな玉縁状のもの。Ⅰ235は軒丸瓦。外区に珠文帯をもち，内区は左回りの巴文であろう。瓦当の内面は粗く撫で調整し，筒部の外面には縄目叩き痕，内面には細かな布目痕がみられる。Ⅰ243は鉄製の小刀。両端が欠けていて全形は不明であるが，20 cm を越えるものだろう。これらは，土師器の型式のまとまり具合から，本調査区での中世Ⅱ期の遺物の様相を最も良く示すものである。

SX11 出土遺物（Ⅰ164～Ⅰ167・Ⅰ234）　出土した遺物はいずれも小片である。Ⅰ

164は白磁皿。厚手の器壁に全面施釉され，見込みには浅い圏線がめぐる。Ⅰ165は白磁椀の底部。見込みに圏線がめぐる。高台部分は露胎である。Ⅰ166は青白磁椀の底部。径の小さな凹み底で，底面は露胎している。Ⅰ167は青白磁の小型合子。Ⅰ234は，六葉複弁蓮華文の軒丸瓦。瓦当部分の下半のみが，集石に混じって出土した。やや磨滅している。

SK29 出土遺物（Ⅰ168）　図化できたのはⅠ168の瓦器鍋のみである。同一の遺構と考えられるAT29区のSK1・SK2からは，中世Ⅱ期の多様な遺物が出土している。

SK39 出土遺物（Ⅰ169～Ⅰ182・Ⅰ244）　整理箱1箱分の遺物があるが，他の遺構に較べて土師器以外のものが目立つ。赤褐色の土師器皿Ⅰ169～Ⅰ174はいずれもD_5類。Ⅰ175は灰白色を呈するD_3類。Ⅰ176は赤褐色の土師器受皿。Ⅰ177～Ⅰ180は瓦器。いずれも炭素の吸着が不十分で，灰色に近い色調を呈する。Ⅰ177・Ⅰ178の椀は口縁の端部内側にごく浅い沈線がめぐり，Ⅰ177は内面のみに，Ⅰ178は内外両面に密度の粗い暗文が認められる。Ⅰ179・Ⅰ180の皿は，内面のみに粗い暗文があり，Ⅰ180は見込みに崩れた鋸歯状の暗文がある。Ⅰ181は，滑石製の小形硯。径1cmの穿孔がみられ，携帯の利便を考えたか，あるいは温石（おんじゃく）や砥石への転用を試みたものかもしれない。Ⅰ182は滑石製の石鍋。外面には煤が厚く付着する。Ⅰ244は刀子。完存しており，全長14.7cm，刃渡り9.1cmを測る。

SK48 出土遺物（Ⅰ183～Ⅰ193・Ⅰ233）　整理箱1箱分の土師器が出土している。赤褐色の皿はⅠ183・Ⅰ184の2点のみで，E_3類。残りはすべて灰白色の椀で，口径10～11cmのⅠ185・Ⅰ186，8～9cmのⅠ187・Ⅰ188，口径7～8cmの凹み底小椀Ⅰ189～Ⅰ193の3種がある。特に凹み底小椀は完形品で36個体を数えて全体の9割以上を占める。これらは，本調査区での中世Ⅲ期の一括資料として唯一まとまったものである。なお，Ⅰ233の巴文軒丸瓦は，SX19出土のⅠ235と同型式のもので，技法の特徴がほぼ一致している。中世Ⅱ期のものの混入であろう。

SK19・SK28・SK32 出土遺物（Ⅰ194・Ⅰ195・Ⅰ232）　南調査区の小規模な土坑からは，D_5類を中心とする土師器皿のみが少量出土する場合がほとんどであり，共伴したそれ以外の資料を，ここで呈示しておく。

Ⅰ194は，SK19出土の土師器羽釜で，1/3程度残存している。内湾する口縁部をもつが，先端は強く横撫でされて短く上方へ立ち上がり気味になる。口径28.8cmを測り，色調は黄白色を呈する。胴部上半は撫でにより平滑にされているが，下半は内外面とも粗く刷毛調整されている。外面の鍔より下側のみに煤が付着している。13世紀代における土師器製釜の主産地である大和・和泉地域の製品とは明らかに器形・調整技法とも異なっており，

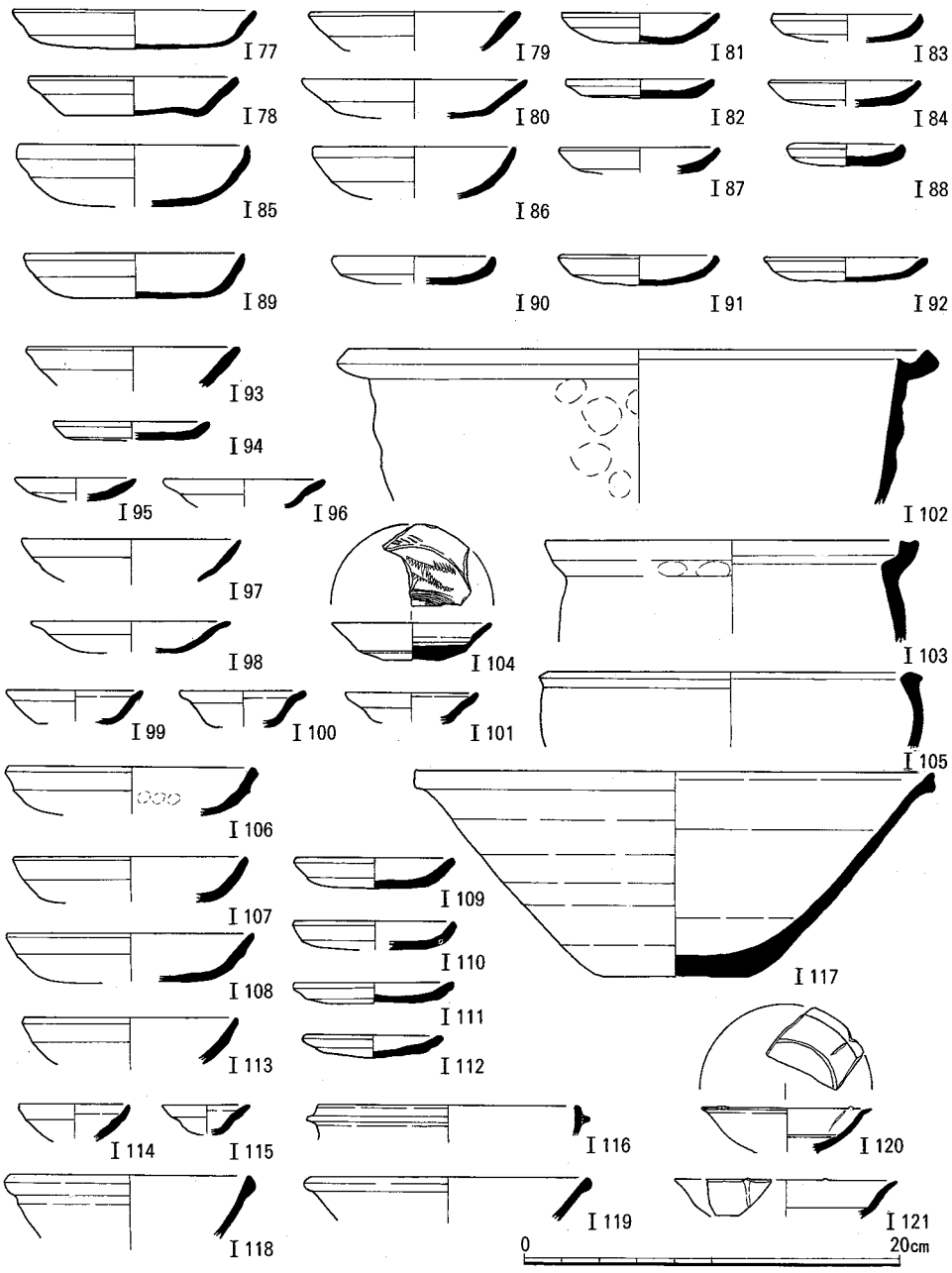


図12　SX1 出土遺物（Ⅰ77～Ⅰ88土師器），SX9 出土遺物（Ⅰ89～Ⅰ92土師器），SX2 出土遺物（Ⅰ93～Ⅰ101土師器，Ⅰ102・Ⅰ103瓦器，Ⅰ104青磁，Ⅰ105黄釉陶器），SX6 出土遺物（Ⅰ106～Ⅰ116土師器，Ⅰ117須恵器，Ⅰ118・Ⅰ119白磁），SX7 出土遺物（Ⅰ120白磁），SX8 出土遺物（Ⅰ121白磁）

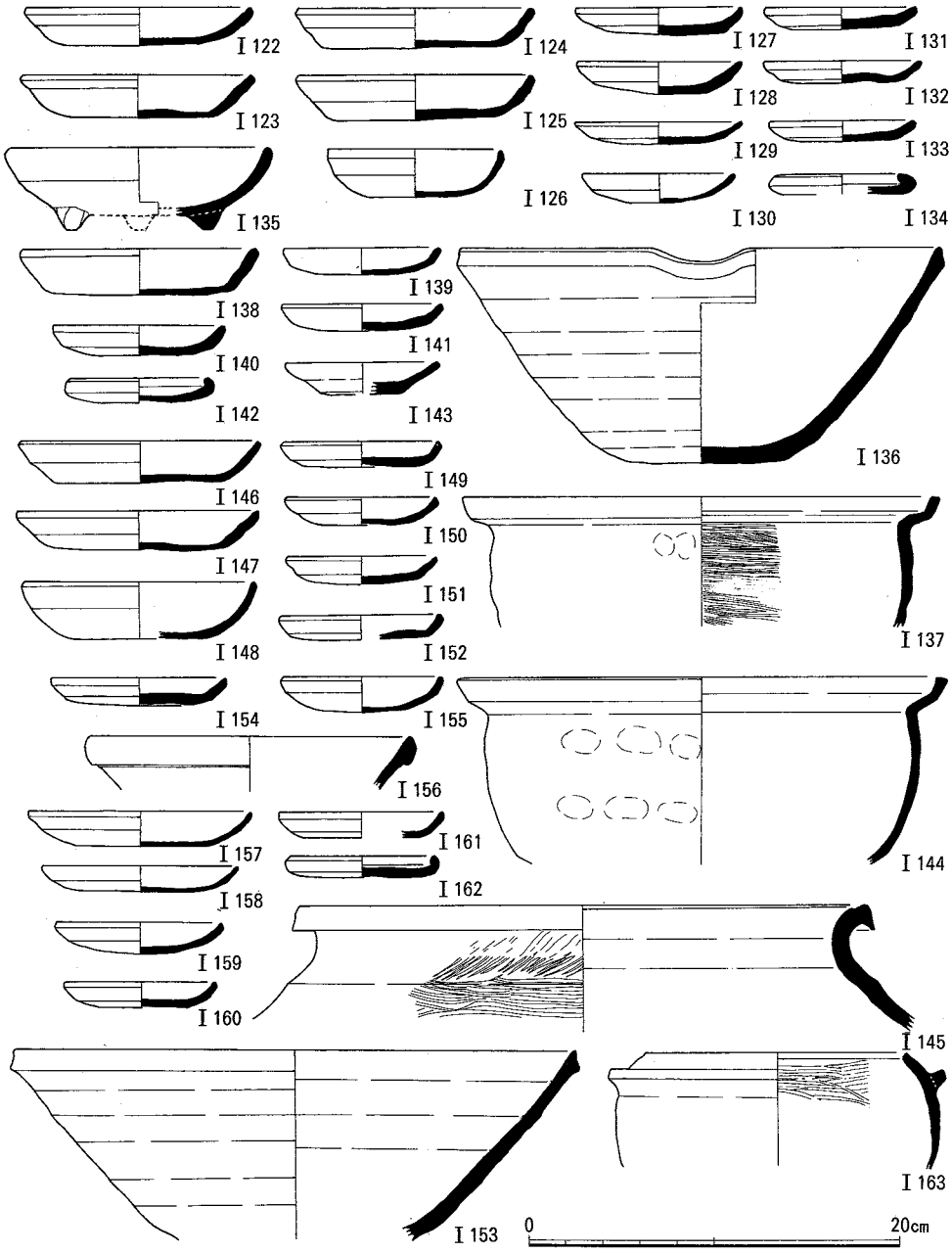


図13　SX13 出土遺物（Ⅰ122～Ⅰ134土師器，Ⅰ135・Ⅰ137瓦器，Ⅰ136須恵器），SX14 出土遺物（Ⅰ138～Ⅰ143 土師器，Ⅰ144瓦器），SX15 出土遺物（Ⅰ145須恵器），SX16 出土遺物（Ⅰ146～Ⅰ152土師器，Ⅰ153須恵器），SX17 出土遺物（Ⅰ154・Ⅰ155土師器，Ⅰ156白磁），SX19 出土遺物（Ⅰ157～Ⅰ162土師器，Ⅰ163瓦器）

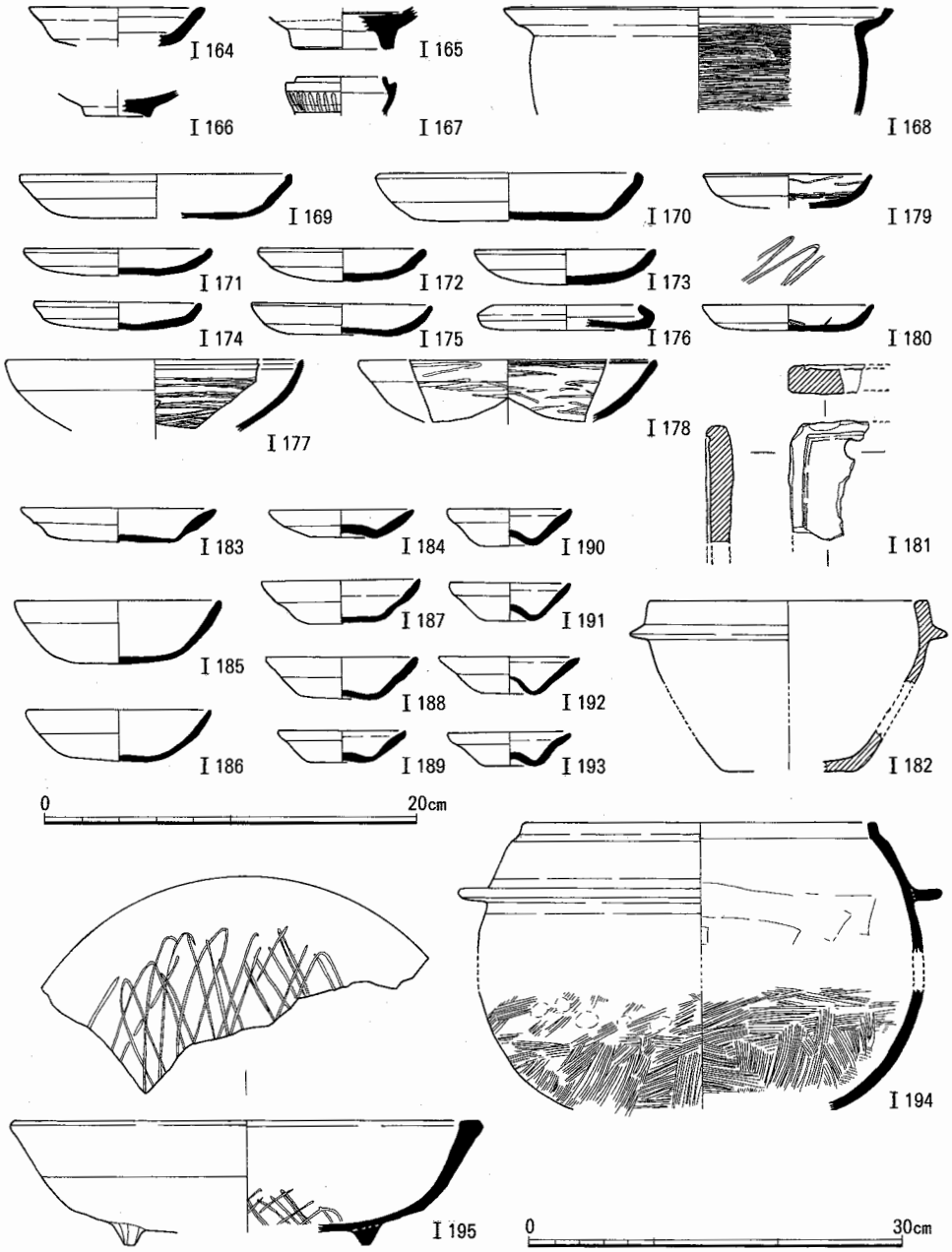


図14 SX11 出土遺物（Ⅰ164・Ⅰ165白磁，Ⅰ166・Ⅰ167青白磁），SK29 出土遺物（Ⅰ168瓦器），SK39 出土遺物（Ⅰ169～Ⅰ176土師器，Ⅰ177～Ⅰ180瓦器，Ⅰ181石硯，Ⅰ182石鍋），SK48 出土遺物（Ⅰ183～Ⅰ193土師器），SK19 出土遺物（Ⅰ194土師器），SK32 出土遺物（Ⅰ195瓦器）　Ⅰ194・Ⅰ195 縮尺 1/6

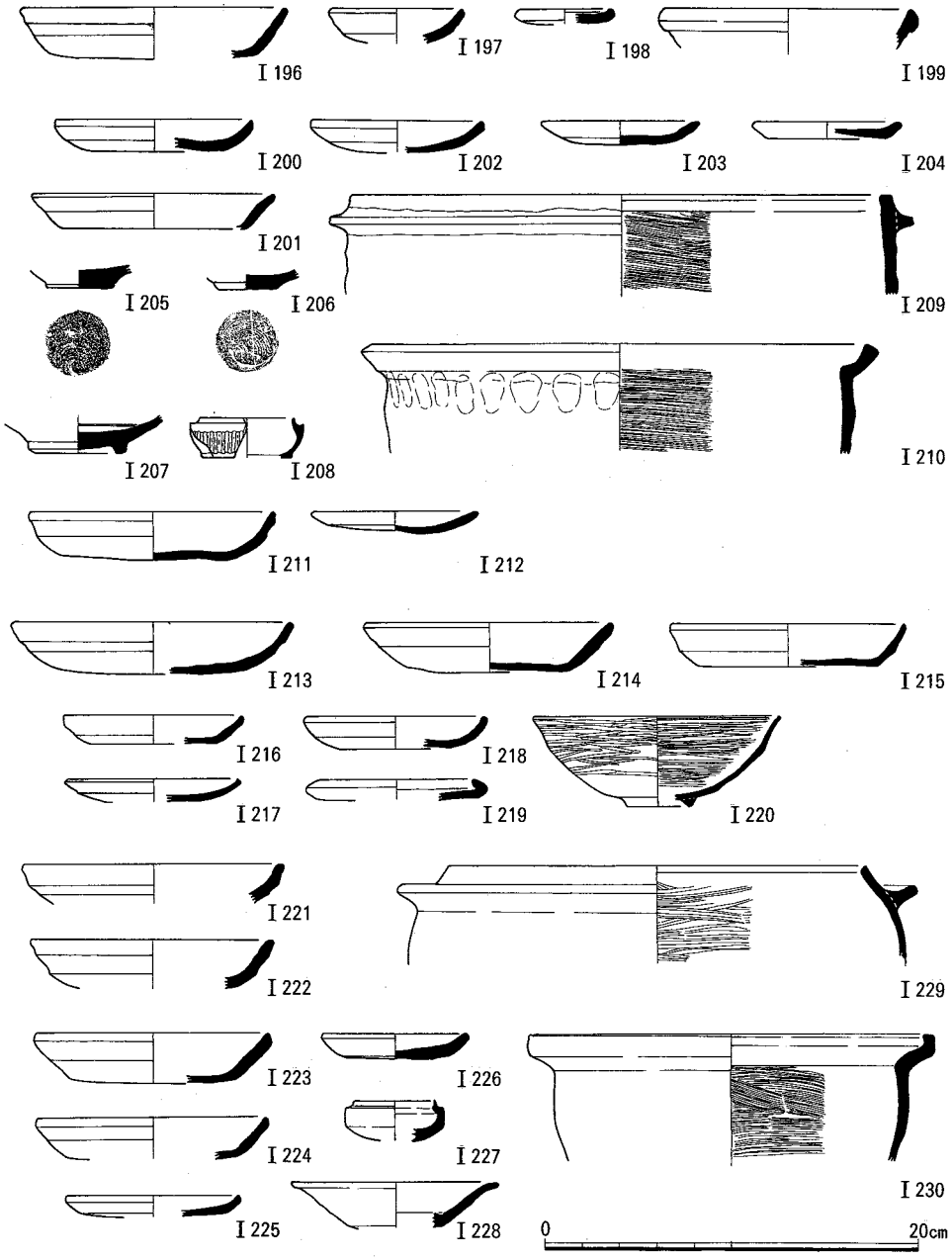


図15 SD3出土遺物（Ⅰ196・Ⅰ197土師器，Ⅰ198瓦器，Ⅰ199白磁），SD5出土遺物（Ⅰ200～Ⅰ206土師器，Ⅰ207・Ⅰ208白磁，Ⅰ209・Ⅰ210瓦器），SD14出土遺物（Ⅰ211・Ⅰ212土師器），SD19出土遺物（Ⅰ213～Ⅰ219土師器，Ⅰ220瓦器），茶褐色土出土遺物（Ⅰ221～Ⅰ225土師器，Ⅰ226灰釉系陶器，Ⅰ227青磁，Ⅰ228白磁，Ⅰ229・Ⅰ230瓦器）

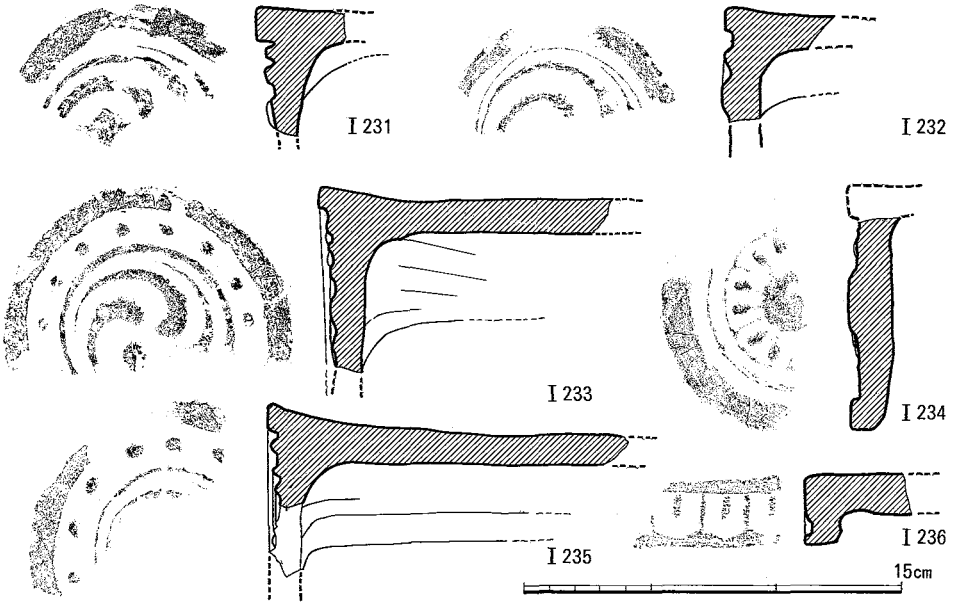


図16　軒丸瓦・軒平瓦（Ⅰ231SD5，Ⅰ232 SK28，Ⅰ233 SK48，Ⅰ234 SX11，Ⅰ235 SX19，Ⅰ236 茶褐色土）　縮尺 1/3

菅原正明が近江型としているもの〔菅原89〕に近い。また森隆は，滋賀県野洲町北桜地区を生産地の候補に挙げて，内外面を粗く刷毛調整する土釜の変遷を指摘しており〔森隆86〕，本例は近江地域からの搬入品の可能性が高いとみられる。13世紀代に瓦器製の煮沸具を基本とする山城地域では，大和産の土釜以外の搬入は知られていないが，鴨東地域の特異性を示す事例かもしれない。今後類例の出土に注意する必要があろう。Ⅰ195は SK32 出土の瓦器盤。1/4 程度しか残存しておらず，三足か四足かは判別できない。口縁端部はしっかりと面をなし，内側へわずかに肥厚する。この端面と内面に細かな暗文が密に施されており，見込の暗文は斜格子状のモチーフを成す。Ⅰ232は SK28 出土の軒丸瓦。左回りに細長く尾を引く巴文で，瓦当上半のみが残る。内面は撫で調整，筒部外面は縦位に削っている。

SD3 出土遺物（Ⅰ196～Ⅰ199）　中世Ⅰ期～中世Ⅱ期の時期幅をもつ遺物が微量出土しており，まとまりがない。赤褐色の土師器皿では，Ⅰ196は C_3 類，Ⅰ197は D_5 類である。Ⅰ198は小型の瓦器受皿。Ⅰ199は大きな玉縁状をなす白磁椀の口縁である。

SD5 出土遺物（Ⅰ200～Ⅰ210・Ⅰ231・Ⅰ241）　Ⅰ200～Ⅰ204は土師器皿。Ⅰ201が灰白色を呈するほかは，赤褐色。Ⅰ200は D_4 類，Ⅰ201・Ⅰ202は D_5 類，Ⅰ203・Ⅰ204は D_3 類。Ⅰ205・Ⅰ206は，灰白色の土師器で，回転糸切り痕を残す底部。Ⅰ207は白磁椀底部。

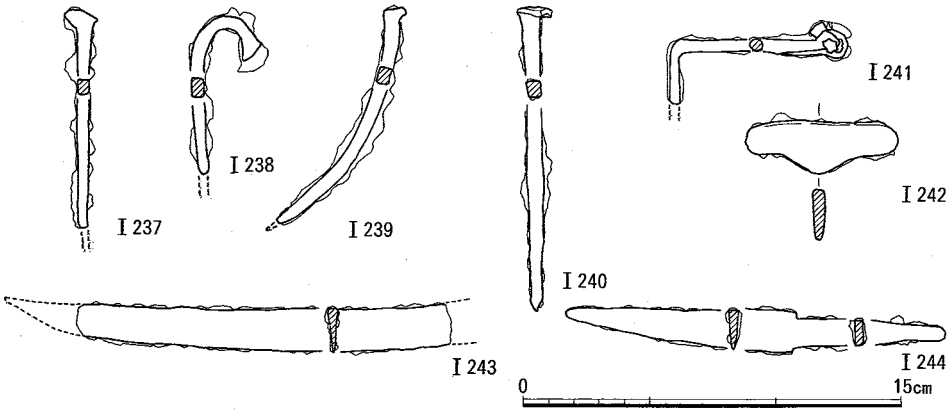


図17　鉄製品（Ⅰ237・Ⅰ238・Ⅰ242 SX6，Ⅰ241 SD5，Ⅰ243 SX16，Ⅰ244 SK39，Ⅰ240茶褐色土）　縮尺 1/3

見込みに圏線をもち，高台内側は露胎。Ⅰ208は小型の白磁合子。口縁端部と底部外面は露胎。Ⅰ209・Ⅰ210は瓦器羽釜と鍋。Ⅰ231は左回りに尾を引く巴文軒丸瓦で，外区に珠文帯をもたない。Ⅰ241は掛け金の部分。以上は細片が多いが，中世Ⅱ期の資料であろう。

SD14 出土遺物（Ⅰ211・Ⅰ212）　赤褐色の土師器皿大小1点ずつが，ほぼ完形で出土している。Ⅰ211は D_5 類，Ⅰ212は D_3 類。

SD19 出土遺物（Ⅰ213～Ⅰ220）　整理箱1箱分の遺物が出土している。土師器はすべて赤褐色で，灰白色のものは無い。Ⅰ213・Ⅰ216は C_3 類，Ⅰ214・Ⅰ215・Ⅰ217・Ⅰ218は D_5 類，Ⅰ219は受皿。口径は，Ⅰ213が15 cm を越えるほか，13～14 cm と 9～10 cm でまとまる。これらは，2段撫で手法が存在し，法量もやや大きめであるなど，土器溜出土資料に較べて古い特徴をもち，本調査区での中世Ⅰ期のまとまった資料といえる。Ⅰ220の瓦器椀は，外面上半と内面全面に密な暗文を施している。口唇部の内側に沈線をもち，高台は断面三角形のしっかりしたものである。器壁は薄いが，焼成は堅緻で，漆黒色を呈する。Ⅰ177・Ⅰ178に較べて明らかに丁寧な作りで，古式の特徴を示しており，土師器の様相の違いと対応する。橋本久和のいうⅡ-3に比定できる〔橋本80〕。

茶褐色土出土遺物（Ⅰ221～Ⅰ230・Ⅰ236・Ⅰ240）　Ⅰ221～Ⅰ225は赤褐色の土師器皿で，Ⅰ221・Ⅰ222が C_3 類，Ⅰ223～Ⅰ225が D_5 類。Ⅰ226は灰釉系陶器の小皿。底部には篦切り痕がそのまま残る。Ⅰ227は小型の青磁合子。Ⅰ228は白磁口禿の皿。Ⅰ229・Ⅰ230は瓦器の羽釜と鍋。いずれも外面には煤が厚く付着している。Ⅰ236は剣頭文軒平瓦。瓦当面に布目痕が残る。Ⅰ240は釘で，完存しているものとみられ，長さ 12.0 cm を測る。

6　近世の遺跡

検出された近世の遺構には，井戸，野壷，溝などがあり，遺物は，土師器，陶磁器などが整理箱10箱出土した。これらの遺構と遺物は，江戸後期（18世紀後葉～19世紀前葉）と幕末（19世紀中葉）の２時期に大別できる。

(1)　江戸後期の遺構と遺物（図版５・14，図１・18～20）

溝 SD2　北調査区中央付近で，溝 SD2 を見出した。幅 0.5 m 前後で，一部を検出したにとどまる。方位を真北から約 18° 東へ振る。

Ⅰ245～Ⅰ262は SD2 出土遺物である。Ⅰ245は土師器皿。見込みに圏線がめぐる。Ⅰ246は轆轤成形の土師器デンボ。Ⅰ247～Ⅰ255は染付椀，Ⅰ256は染付筒形椀，Ⅰ257は染付半筒形椀である。Ⅰ247はコンニャク判で桐文を描く。Ⅰ248・Ⅰ249はくらわんか椀である。Ⅰ255は線描きで龍文をあらわす。Ⅰ258・Ⅰ259は染付皿。Ⅰ260は外面青磁釉の染付蓋である。見込みの五弁花をコンニャク判で描く。Ⅰ261は陶器灯明受皿。Ⅰ262は陶器蓋。

野　壷　北調査区で９基発見した。このうち，SE1・SE2・SE7 は漆喰製で，残りの野壷は木製と考えられる。SE2・SE4・SE5 は溝 SD1 にきられている。

Ⅰ263～Ⅰ271は SE2 出土遺物。Ⅰ263は土師器鉢。轆轤で成形しており，外面は磨いて仕上げ，褐色の粘土を主体に白色の粘土を練り合わせて生地としている（図の黒塗り部分が白色粘土）。Ⅰ264～Ⅰ268は染付椀。Ⅰ264はくらわんか椀，Ⅰ267は焼継の痕跡が残る。Ⅰ269は半筒形椀。Ⅰ270は染付蓋。Ⅰ271は陶器蓋。

Ⅰ272は SE8 出土の染付皿。見込みに五弁花をコンニャク判であらわす。底裏に崩れた「大明年製」の銘をもつ。Ⅰ275～Ⅰ277は SE7 出土遺物。Ⅰ275は見込みに圏線がめぐる土師器皿。Ⅰ276は外面に青磁釉のかかる青磁染付蓋。Ⅰ277は半筒形椀。底面は蛇の目釉剝ぎである。

土　坑　北調査区中央付近で発見した土坑 SX5 は浅いすり鉢状で，底面 50 cm 四方ほどの範囲に小礫が敷き詰めてあった。Ⅰ273・Ⅰ274は SX5 出土遺物で，Ⅰ273は焙烙，Ⅰ274は染付椀である。

SX12 は南調査区東辺中央で発見した土坑で，埋土に礫が混じる。Ⅰ325～Ⅰ328は SX12 出土遺物。Ⅰ325・Ⅰ326は土師器皿。Ⅰ325は口縁部に煤が付着する。Ⅰ326は見込みに圏線がめぐる。Ⅰ327は土師器デンボ。Ⅰ328は陶器鉢。高台は無釉で，見込みは蛇の目釉剝ぎするが，不完全なため熔着痕が残る。内面，刷毛塗りで波状文様を描く。

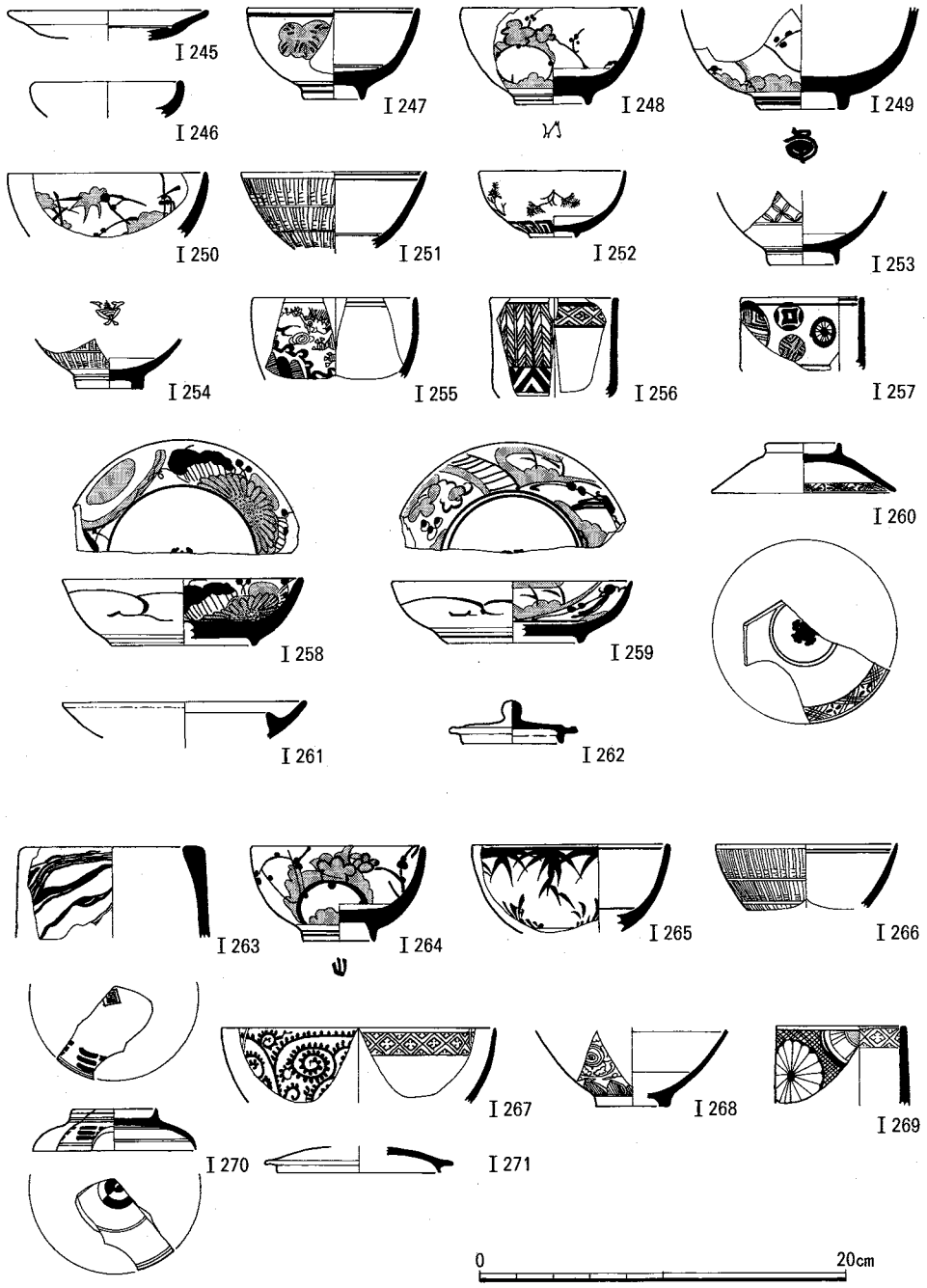


図18　SD2 出土遺物（Ⅰ245・Ⅰ246土師器，Ⅰ247～Ⅰ260染付，Ⅰ261・Ⅰ262陶器），SE2出土遺物（Ⅰ263土師器，Ⅰ264～Ⅰ270染付，Ⅰ271陶器）

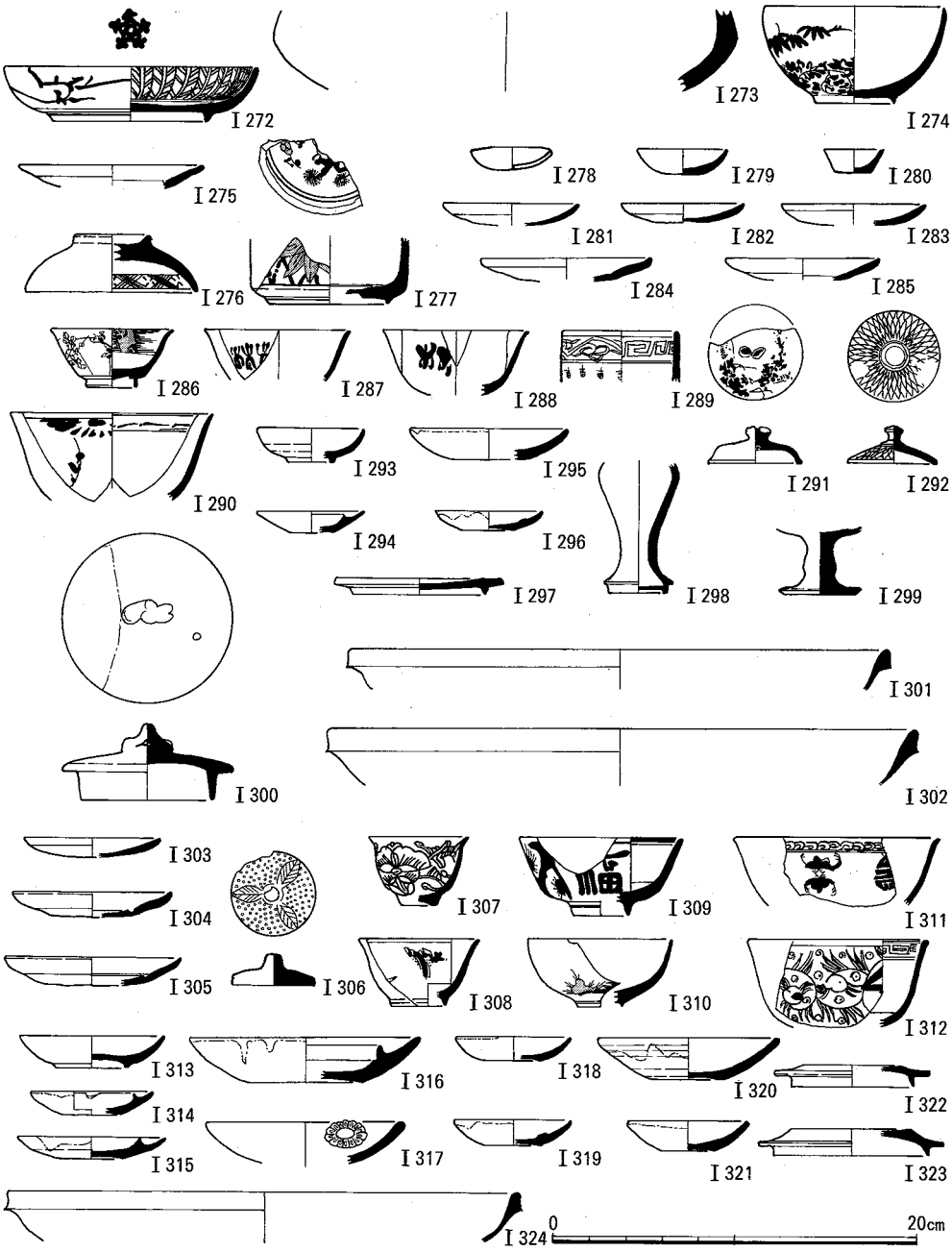


図19　SE8 出土遺物（Ⅰ272染付），SX5出土遺物（Ⅰ273土師器，Ⅰ274染付），SE7出土遺物（Ⅰ275土師器，Ⅰ276・Ⅰ277染付），SD1 出土遺物（Ⅰ278～Ⅰ285・Ⅰ301・Ⅰ302土師器，Ⅰ286～Ⅰ292染付，Ⅰ293～Ⅰ300陶器），灰褐色土出土遺物（Ⅰ303～Ⅰ306・Ⅰ324土師器，Ⅰ307～Ⅰ312染付，Ⅰ313～Ⅰ323陶器）

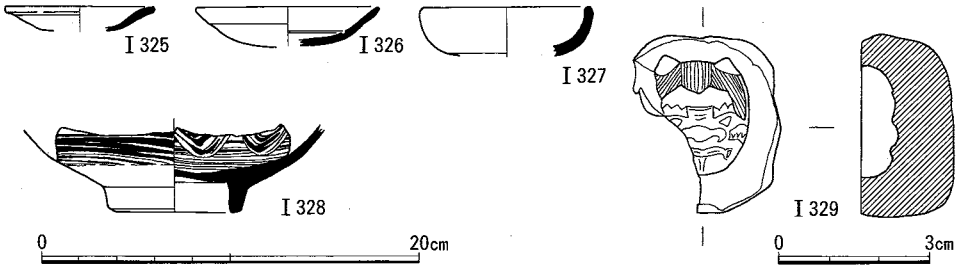


図20　SX12 出土遺物（Ⅰ325～Ⅰ327土師器，Ⅰ328陶器），SD1 出土遺物（Ⅰ329）Ⅰ329　縮尺 1/1

(2)　幕末の遺構と遺物（図版14，図1・19・20）

溝 SD1　　北調査区北半で検出した。南北方向に延び，幅約 6 m，検出面からの深さ 0.2～0.4 m を測る。北側は調査区外へと続いており，南側は次第に浅くなり X＝1665 付近で消えているが，これは近代に削平を受けたためであろう。方位を真北から東へ約 10° 振っている。

Ⅰ278～Ⅰ302・Ⅰ329は SD1 出土遺物である。Ⅰ278・Ⅰ279は型作りの土師器小皿で，内面に離型材の雲母が付着する。Ⅰ280は秉燭（ひょうそく）であろう。内面中央に，芯立ての剝離痕がある。Ⅰ281～Ⅰ285は土師器皿。Ⅰ284・Ⅰ285は見込みに浅い圏線がめぐる。Ⅰ284は口縁端部に煤が付着し，灯明皿として用いられたことがわかる。Ⅰ286～Ⅰ290は染付椀で，Ⅰ286～Ⅰ288・Ⅰ290は口縁部が端反りとなる。Ⅰ286・Ⅰ289は体部外面に鎬状の面取りを施している。Ⅰ291・Ⅰ292は染付蓋。Ⅰ293は陶器皿。Ⅰ294は陶器灯明受皿。Ⅰ295・Ⅰ296は陶器灯明皿。Ⅰ297は陶器向付の蓋。Ⅰ298は陶器仏花瓶。Ⅰ299は陶器仏飯。Ⅰ300は陶器土瓶の蓋。Ⅰ301・Ⅰ302は焙烙。体部外面に，離型材の砂が付着する。Ⅰ329は土製の抜き型である。鬼の顔を表現している。裏面に墨書文字が2文字見えるが，判読できない。

以上説明した遺構以外から出土している近世の遺物について，説明を加えておく。Ⅰ303～Ⅰ324は北調査区の灰褐色土出土遺物。Ⅰ303～Ⅰ305は土師器皿。いずれも口縁部に煤が付着し，灯明皿として使用される。Ⅰ306は土師器壷の蓋。Ⅰ307・Ⅰ308は染付小杯。Ⅰ309～Ⅰ312は染付椀。Ⅰ311・Ⅰ312は口縁端反りである。Ⅰ313は陶器皿で，畳付けを除いて全面に灰緑色の釉がかかる。Ⅰ314～Ⅰ316は陶器灯明受皿。Ⅰ317～Ⅰ321は陶器灯明皿。Ⅰ317は口縁部内面に，型作りで菊花をかたどった瘤を貼り付ける。瘤に対応する位置の口縁部外面には煤が付着し，瘤が灯心を立てる装置であったことがわかる。Ⅰ322・Ⅰ323は陶器向付の蓋。Ⅰ324は焙烙。これらの包含層出土遺物の年代は，江戸後期から幕末までにおさまるものと思われる。

7 小　　結

(1) 弥生時代前期の遺跡と遺物について

遺　跡　これまで縄文～弥生時代の遺構や遺物に関する情報が希薄であった本部構内で，はじめてまとまった資料が出土したことになり，多くの貴重な知見を得ることになった。1979年度の試掘調査の結果で予想されていた通り，包含層のひろがりは調査区東半の一部分に限られていたが，それが流路内の底面に沿ってU字状に堆積するものであったことを新たに確認できたのは大きな成果といえる。また従来，弥生前期末～中期初頭の一時期の土石流堆積層とされる無遺物の黄色砂層は，北部構内から総合人間学部構内にかけてひろく堆積するものとみなされてきたけれども〔清水91〕，今回の調査では，流路内のみに堆積してそれを埋没させる状況であった。以上から，弥生前期以前の地形がかなりの起伏をもっていたことが知られるとともに，遺物包含層や黄色砂層もその影響をうけて，流路内や凹地などかなり局地的に堆積していることが具体的に明らかとなった。

流路よりも西側では，縄文時代以前に堆積した黄色シルト層の上面に直接古代以降の遺構が形成されており，黄色砂層や黒褐色土層の堆積をみていない。しかしながら，こうした旧地形のレベルの高い地点については，本来的には黄色砂層やその下の先史時代遺物包含層も存在しており，後世に削平されて消失してしまっていたり，黄色砂層が介在しないで歴史時代遺物包含層と先史時代遺物包含層とが直接重なって堆積している可能性も，考慮しておく必要があろう。本部構内中央付近ではそうした状況が確認されており（第4章参照），またこれまで本部構内において，散発的ではあるが縄文～弥生時代遺物が確認されてきているのも，同様な理由によるものと思われる。一方で，調査地以東・以南については，吉田山側より複数の流路が流入している状況がみられ，かなりの地形の起伏と局地的な遺物包含層の存在が推測される。いずれも，今後の調査にあたり注意する必要があるとともに，地形環境の復原にあたっては既存の成果も再検討する必要があろう。

突帯文土器と遠賀川式土器　流路から出土した遺物の内容については第3節で詳述したが，ここでは突帯文土器と遠賀川式土器の編年と系譜を中心に簡単に検討を加えておく。

出土土器は，口縁部や底部及び有文部分で図示可能なものはほぼすべて呈示している。種類を決めがたい無文の土器片については除外しているため，厳密なものではないが，同一個体の同定を経た上での内訳は，遠賀川式土器は40点で，うち壷10・鉢3・蓋2・甕17・底部8点（底部の内訳は壷4・甕2・不明2点），それ以外の土器は突帯文土器を中心

に14点（深鉢２・無頸壷１・底部７・器種不明胴部４）で総計54点となる。取り上げ点数446点に対してかなり少なくなっているのは，互いに接合関係にあったり，同一個体と認定できるものがかなりの多数にのぼることによる。この状況の一端は（図３）に表示しているが，土器の磨滅が全くみられないこととともあわせて，近い場所から短期間にまとめて廃棄された可能性を強く示すものと判断している。その場合，縄文土器型式の最末に位置づけられている突帯文土器と弥生前期遠賀川式土器との共存関係が，問題となろう。

遠賀川式土器については，器形の全体をうかがえる例に乏しいものの，壷・甕ともに篦描沈線による装飾は，確認できる範囲で３条を越えるものは無い。壷には，Ⅰ５のように頸部の削り出し突帯に沈線を付加した例や，Ⅰ７のように貼付突帯と胴部の沈線文帯上側を段により低める装飾を併用している例がある。甕は，頸部に０条～３条までの沈線が確認できるもので，それ以外の装飾は認められない。以上は，これまでの編年観〔佐原67〕に照らすと前期中段階の土器の特徴を中心としながら，その中に貼付突帯の使用など新段階の指標とされた特徴を一部に含むものと言える。また，把手付の大形鉢Ⅰ14や蓋形土器Ⅰ10・Ⅰ11の存在も，遠賀川式土器の中では比較的新しい段階の特徴である。ただし，貼付突帯の使用は，複数条が文様帯を形成する新段階に特徴的な装飾手法とは異なっていること，さらに，多条化した沈線文帯が全く認められないという状況も考慮すると，今回の資料は前期中段階のもので，なかでもより新相に位置する一群と位置づけるのが最も妥当であろう。周辺の資料群との比較では，多数の突帯文土器に混じって出土した高倉宮下層遺跡の遠賀川式土器は，段を成形するものが目立ち，明らかに先行する様相をもつ〔南88〕。下鳥羽遺跡平成５年度SD1〔京都市文観局94〕，内膳町遺跡SK601は〔石井89〕，類似の様相を示す資料であるが，突帯文土器は含んでいない。

突帯文土器については，突帯のあり方と外面調整の特異さが注意される。Ⅰ32・Ⅰ33は，ともに口縁～胴部半ばまでは残存しており，1条突帯の深鉢と判断できる。今回の出土資料中には，胴部破片も含めてほかに突帯の存在を確認できるものは存在しない。器形や突帯の特徴は最末型式の長原式の範疇に含まれるものでありながら〔家根82〕，一般に２条刻目突帯文深鉢が主体となっている長原式のあり方とは傾向を違えている。また，外面の上半部をなで，下半部を削り調整することを基本とする長原式の調整手法をとるものは少なく，条痕状あるいは篦磨き状の調整によるものが非常に目立つ。Ⅰ36～Ⅰ38の底部は，原体に板状工具を用いていると想定されるものの，突帯文土器の調整には類例を見ない粗いものであり，縦位方向を基調とする粗い篦磨き状の調整で一気に仕上げるⅠ32も珍

しい。鴨川・宇治川以東の後半期の突帯文土器には，外面調整の手法が多様化するという地域的特徴が指摘されており〔中村健90〕，今回はその特徴を追認することになったけれども，これほど変容した事例は認められない。いずれにせよこれらは，共存関係にある遠賀川式土器からみて明らかに従来知られている長原式よりも時期の下るものと判断される。山城地域における最末期の突帯文土器が，従来からの傾向であった外面仕上げにみられる地域色をより顕在化させ，長原式の中では少数派であった1条突帯文深鉢を残存させる方向性で消滅に向かったことを示唆する内容ともみられるが，周辺の出土事例も含めてさらに検討を加え，機会を改めて結論づけることにしたい。

(2) 古代～中世における吉田山西麓の土地利用の変遷（図21）

古代以降の状況については，本部構内東半を中心とする従来の成果とあわせてまとめ，吉田山西麓における変遷を時代別にたどることにしたい。

奈良時代以前　6～7世紀代の甕の埋納土坑が168・214地点で，8世紀中葉ごろの竪穴住居2棟が75地点でみつかっている。

甕の埋納土坑は，168地点のSK2が土師器長胴甕2個体を円形土坑に，214地点のSX4は，不整楕円形の土坑に土師器球胴甕を逆位に納めたものである。7世紀前半に営まれた山科区旭山古墳群では，E－3号墳小石室や方形土坑SK1に土師器長胴甕が埋置され，棺としての利用が推定されている〔京都市埋文研81〕。このように7世紀ごろには土師器甕を棺や骨蔵器として利用する習慣が存在していたとみられ，本部構内の例も，埋葬にかかわる遺構の可能性が高い。168地点の北方200 mには，横穴式石室を内部主体にもつ古墳後期の円墳2基が追分町古墳群として記録されているほか〔京都市文観局86〕，総合人間学部構内における5～6世紀代の方形墳の群在も考慮すると〔五十川・飛野84〕，吉田山の西～北麓一帯は，7世紀代以前には古墳を含む形での葬地であったと想定される。

一方，8世紀代の遺構は75地点の竪穴住居2棟より北側では確認されておらず，今回は遺物の出土もみていない。南方の総合人間学部構内から医学部および病院構内一帯にかけてはこの時期の遺構がしばしば確認されることから，本部構内南端が当時の活動域の北縁にあたるのだろう。古代豪族粟田氏の領域に属していた可能性が高いが，小規模な遺構が散発的にみつかる現状であり，性格の解明には至らない。

平安時代　奈良時代までと同様に，資料は極めて乏しい。第2節でも述べたように，この時代の包含層は凹地や遺構の埋土としてのみ存在していたことから，中世以降の開発によって削平されている可能性はあるものの，北部構内や総合人間学部構内にくらべて圧

小　　結

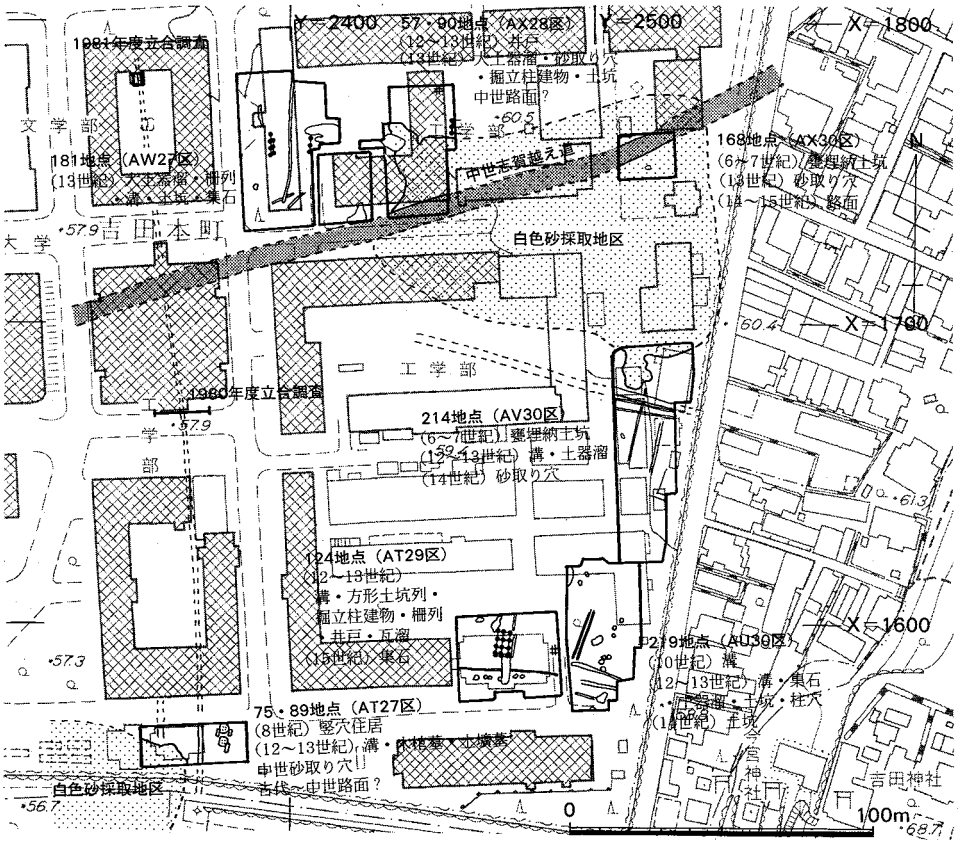


図21　本部構内東半の主要な古代～中世遺構　縮尺 1/2500

倒的に遺構・遺物とも希薄である。平安京遷都後には，後の志賀越え道に相当する道路が通されたと考えられるが，存在を確認できていない。本部構内の位置する吉田山西麓は，神楽岡葬地や付随する吉田寺との関連が推測される北麓一帯，および梵鐘鋳造関連の活動が行われていた西南麓という，南北２つの活動地の中間にあたり，平安時代においては未だ十分には開発が及ばない場であったかと推測される。今回みつかった10世紀ごろの遺構である南北溝 SD20・SD21 や東西溝 SD18・SD22 は，本部構内でも東南隅には幾ばくかの活動が成されたことを知る貴重な成果である。これら溝群はいずれも小規模で，方位を大きく東へ振る。建物関連というよりは，土地の区割りを示すものとみられる。この方位の振れは，弥生時代の流路 SR1 の方向におおむね一致するとともに，中世以降現代にいたるまで吉田山西麓の地割りに名残りをとどめており，地形に規定された土地区画が平安中期以降施行されてきたことを示す興味深い事例といえる。また，東方 100 m の山上に現在

の社殿を構える吉田社は，9 世紀後葉に創建の伝承をもつことから，山麓にあったとされる旧社地との関連も注意される。

鎌倉・室町時代　吉田山西麓全域が活動の対象となってくるのは，おおむね12世紀後葉以降であり，以後13～14世紀代を中心に，各地点で大量の遺構・遺物が確認されている。これらは，その性格から，居住関連（掘立柱建物・井戸など），廃棄と祭祀関連（土坑・集石・土器溜など），埋葬関連（土壙墓・木棺墓など），生産関連（砂取り穴），に大別され，これに土地区画を示すとみられる溝や中世の志賀越え道の推定ルートを加えると，おおむね性格ごとにまとまった空間的配置を想定することができる。

生産関連遺構の中心である白色砂を大規模に採取した穴は，本部構内北東部分と南辺部分にその広がりをみる。前者は推定される中世の志賀越え道のルート周辺を中心とし，採取した砂の運搬の便宜を図る上で極めて合理的な立地である。後者についても，75地点で，黒色土の堅く締まった面が南北方向に認められ，鎌倉期以前に比定されていることから，道路に近接した立地であった可能性が高い。いずれも細かな時期比定は困難であるが，13世紀中葉の遺構に切られている例があり，一方168地点で砂取り穴埋没後に15世紀代の志賀越え道の路面が形成されていることから，13～14世紀を通じて継続的に行われたものとみられる。これらは，214地点の東西溝 SD5 を越えて南へは広がらず，75地点の南北溝 SD3 を越えて東へは広がらない。両溝とも13世紀中葉には埋没しているものの，白色砂の採取がその範囲を守って続けられていることから，溝の示すラインが，中世における土地利用の重要な境界線であったことがわかる。

砂取り穴で破壊された部分もあるが，これ以外の遺構は，上記の 2 つの溝で囲まれた範囲と，中世の志賀越え道の北側一帯にまとまる。124地点・219地点での所見からは，建物や井戸など居住関連の施設の東側に接して土器溜や集石などの廃棄・祭祀関連の遺構が集中していた状況がみられ，さらに75地点での中世墓群が時期的に対応することから，西側に接して墓域を設けていたと推測される。溝と吉田山に囲まれたおおむね 1 町四方の範囲の内部に，居住・廃棄・埋葬のそれぞれが接しながらも場を分けて配置されていた状況ともいえよう。一方，中世の志賀越え道の北側一帯では，90地点・181地点で，大規模な土器溜や埋葬関連とみられる土坑と，その東側に接して建物跡や井戸が確認されている。ここでは砂取り穴も絡んで諸遺構がモザイク状を呈しており，現状では秩序だった配置が復原できない。構内南半とは性格の異なる空間であった可能性があり，遺構群の時間的変遷の把握ともあわせて，今後の比較検討を課題としておきたい。

小　　結

吉田周辺に関しては，平安時代末期から鎌倉時代に，西園寺家の別邸である吉田泉殿をはじめとして，貴族の邸宅や関係する寺院がたびたび営まれたことが文献記事に散見され，また藤原北家勧修寺流の人々の所領でもあったとされる。目下のところこれらと直接結びつく成果はなく，この地の活動者は不明であるけれども，大規模な白砂の採取跡はこうした階層の嗜好がもたらした産物であり，中世前半における各種の遺構の急増とも密接に関係していたであろう。そして，15世紀後半以降の社会の混乱に対応して活動の痕跡がほぼ消滅し，吉田山西麓は急激に耕地化して近世に至っている。

(3)　近世吉田村復原図との対応（図22）

近世の吉田村の状況については，18世紀前半の絵図をもとにした景観の復原が試みられており〔浜崎83b〕，ここでは今回の調査成果との対応をみておくことにしたい。

絵図による復原からは，この時期吉田山西麓の中腹に存在した東照宮へと至る道路が通じていたと想定されており，そのルートは，北調査区の中央付近にあたることが予想された。しかしながら，確実に路面と認定できる遺構は全く検出できなかった。北調査区の北半にまとまってみつかった野壷群が，おおむね東西方向に列を成す状況であったことや，その南側が遺構の空白地帯となっていることから，本来的には道路が存在していた可能性

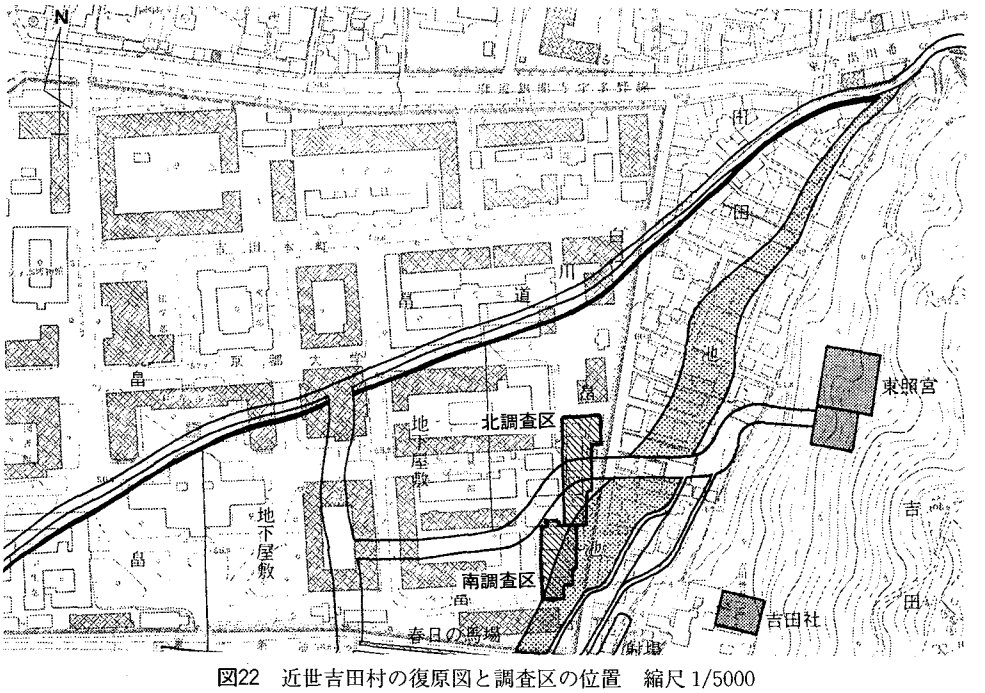


図22　近世吉田村の復原図と調査区の位置　縮尺 1/5000

もあり，今後の周辺の調査成果を待ちたい。

また，吉田山に沿う池の東縁が，南調査区に及ぶと予想されたが，特別な落ち込みや池に相当する状況は，確認できなかった。調査区の基本的な地勢は，弥生時代の流路SR1の埋積以後も西高東低の凹地状態で近世に至っていることから，絵図に描かれた池状のものも，こうした地勢を反映した，湿地や荒れ地程度のものを想定しておくのが妥当であろう。構内遺跡の近世遺構では無数に見いだされることが多い耕作関連の柱穴群が，ほとんどみられなかったという状況も，以上の想定を支持する。畑が広がっていたのは，より西方や北調査区の野壷群以北であっただろう。これら野壷群は，漆喰製と木桶製の双方が混在しており，近世後半以降ある程度継続的に営まれていたものとみられる。

このほか，南北溝 SD1・SD2 からは，それぞれまとまった遺物が出土したが，絵図にみる道路や池との対応関係を想定できる状況にはない。SD1 は，前述の野壷群を破壊して幅広く掘削されているもので，南方への続き具合ははっきりしないが，こうした切り合い関係と出土遺物から，少なくとも幕末期以降の時期が与えられる。文久 2（1862）年における尾張藩邸の設置は，その東側にあたる調査地周辺の土地利用にも少なからず影響を与えたとみられ，こうした事情を反映する遺構であるかもしれない。一方 SD2 は，18世紀代にさかのぼる陶磁器類も多く含み，絵図に描かれた時期により近いことから，当時の状況に関連する遺構の可能性もあるが，断片的な検出にとどまり性格を判断できなかったのが惜しまれる。

なお，本報文の作成にあたっては，高倉宮下層遺跡の資料について南博史氏（京都文化博物館）に，緑釉陶器について高橋照彦氏（国立歴史民俗博物館）に，それぞれご教示いただいた。末尾ながら厚く御礼申し上げたい。

第3章　京都大学北部構内BB28区の発掘調査

清水芳裕　古賀秀策

1　調査の経過

本調査区は，京都大学北部構内の西南隅に位置する（図版1-217)。周辺の先史時代の遺構は，東側の6地点で弥生前期の遺物包含層が確認されているほか，約100 m北方の109地点で弥生前期末の土石流，54地点で弥生中期の方形周溝墓が明らかにされている。また歴史時代の遺構としては，54地点で鎌倉時代の火葬塚，109地点で平安時代の柱穴群と溝および幕末期の瓦溜などがある。また，南に隣接する208地点では，平安時代の埋納遺構や建物跡のほか，幕末期の土佐藩邸の南を限る堀が発見されている。

ここに，理学部動・植物学校舎の第2期新営が計画されたため，以上の周辺地区での調査成果と，1991年度の試掘調査の成果を勘案し，予定地全域1323 m^2 の発掘調査を実施した。調査は1993年6月15日に開始し，9月30日に終了した。

調査の結果，旧建物の基礎によって調査区の東南部を大きく破壊されていたが，平安時代の溝や建物跡の可能性のある方形の土坑，中世の粘土敷き土坑・土取り穴・溝や近世の野壷や溝を発見したほか，調査区のほぼ全域に広がる先史時代の土石流の跡を確認した。また，理学部地質・鉱物学教室の協力を得て，黄色砂以下の土層の分析をおこない，地震による堆積層の乱れと噴砂の跡を検出した。

2　層　　位

調査区の地表面の標高は，62.3～62.6 mを示し，北から南，東から西へわずかに傾斜する地形である。基本的な堆積は，上から表土（第1層)，灰褐色土（第2層，第6層)，茶褐色土（第8層)，黒褐色土（第9層)，黄色砂（第11層)，土石流（第12層）であり(図23)，さらにその下に黒褐色粘質土と砂礫を確認している。

灰褐色土Ⅰ（第2層）と灰褐色土Ⅱ（第6層）は近世の耕作土で，2層の間には，調査区西半のY＝2423付近以西では床土層と思われる灰赤褐色土（第3層）を，また東半では灰赤褐色土に砂や砂礫の混入した層（第4層，第5層）をともなう。南に隣接する208地点の調査で検出された棚田状の造成の跡〔浜崎ほか95〕は，本調査区では認められなかった。茶褐色土（第8層）は古代から中世の遺物包含層である。Y＝2425 m付近に低い

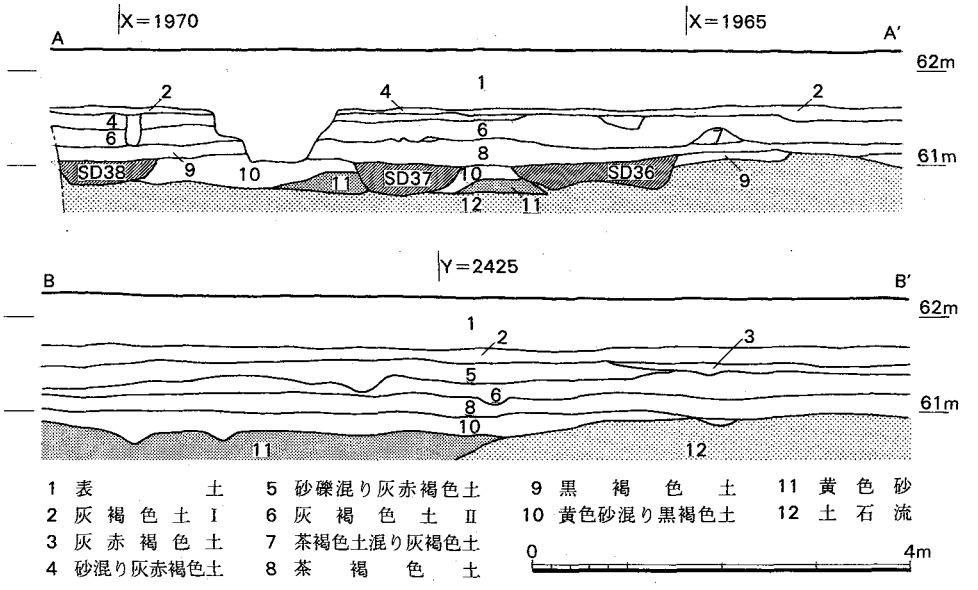


図23　調査区の層位　縮尺1/80

段差が認められ，東側がやや高い。下層は10世紀代の，上層は12～13世紀代を中心とする遺物が多数出土する。また黒褐色土（第９層）は古代の遺物包含層で，９世紀代の遺物が少量ながら出土する。

第12層は人頭大の花崗岩礫が混じる砂礫であり，調査区のほぼ全域に認められた。土石流の跡と思われる。黄色砂は，弥生前期末～中期初頭ごろの洪水による堆積層であることが従来の調査から判明している。下面から，縄文時代後期と晩期の土器片（Ⅱ1，Ⅱ2）が出土しており，洪水の時期と矛盾しない。黄色砂は，下層の砂礫を巻き込みながら堆積していたが，土石流による砂礫の上面が高い場所にはみられず，堆積がなかったか，もしくは中世に削平されたものと思われる。

調査区の北東隅部の標高 59.0 m と調査区南辺やや東よりの標高 59.4～59.7 m の位置では，黄色砂の下部に黄色砂混りの黒褐色粘質土が，わずかながら認められた（図25粗い梨地部分）。黒褐色粘質土上面で東西にはしる亀裂を検出した。垂直断面で観察すると，黒褐色粘質土下層の砂が，黒褐色粘質土中を分岐しつつ水平に広がって堆積しており，この一部が亀裂をともなって，黒褐色粘質土を貫き上部に噴出していた。また，黄色砂層の断面で，同層を構成する薄微な堆積層が波状に褶曲する乱れを検出した（図版16-3）。これらの現象は，地震にともなう堆積物の圧密液状化の跡である。

層　　位

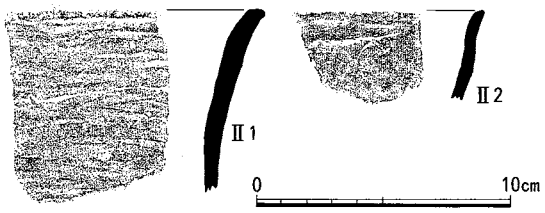


図24　黄色砂下面出土縄文土器　縮尺 1/3

3　遺　　構

(1)　古代の遺構（図版15，図25）

検出した遺構には，土坑 SK22，溝 SD36～SD40 がある。

土坑 SK22　調査区の西端に位置する。黄色砂を掘り込んだ，平面隅丸方形の土坑である。平面は一辺 3.5 m，検出面からの深さは 60 cm を測る。埋土は茶褐色土を中心としたもので，一部に黒褐色土が混入するほか，遺構の北辺と南辺の底部に，黄褐色の粘土塊が貼りついていた。このうち北辺の粘土塊の中心部は，熱を受けたと思われ変色していた。土坑底面の中央部やや北寄りの位置に，深さ約 30 cm の柱穴と思われる掘り込みを検出したが，ほかには明確に柱穴と考えられるものはない。この遺構の用途は不明だが，埋土から土師器の甕片（Ⅱ11）が出土していることや，隅丸方形を呈す平面形状からみて，建物跡の可能性がある。出土遺物からみて，9 世紀ごろの遺構である。

溝 SD36～SD38　黒褐色土上面で検出した 3 本の溝で，茶褐色土を埋土とする。攪乱により，SD36 は 2 つに，SD38 は 3 つに寸断されているが，これらの溝は発掘区の中央北寄りを東西に横切り，ほぼ真直ぐに並行してはしり，両端は発掘区の外へと続いている。このうち SD37 は，埋積後の SK22 を掘り込んでいる。方位は真北から 7° 東に振る方向を示す。断面の形状は，いずれも検出面からの深さが約 30 cm の扁平なU字形を呈し，底部は黒褐色土層の下に達している。出土遺物からみて，11世紀後葉ごろの遺構と思われる。

溝 SD39・SD40　発掘区の東寄りを南北方向にはしる小規模の溝で，埋土は黒褐色土である。SD39 は，南に隣接する208地点の調査で検出した10世紀前葉の溝 SD32 と連続する遺構で，その北の延長部にあたる。北端は攪乱に切られており，全長は不明である。SD40 は，南端を SD37 に接して止まる。これらの溝からは時期を示す遺物は出土しなかったが，埋土や規模からみて近い時期の遺構と思われる。

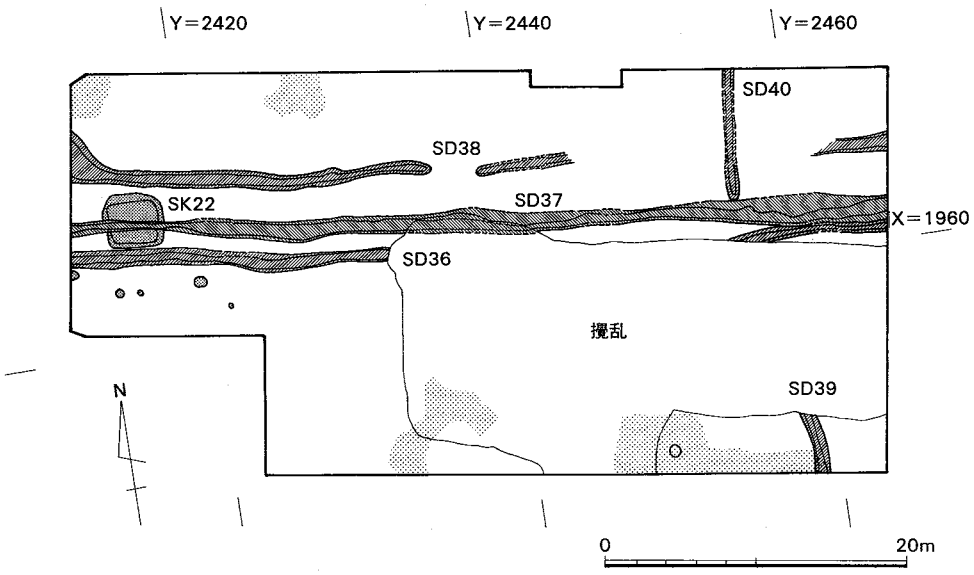


図25　古代の遺構　縮尺 1/500

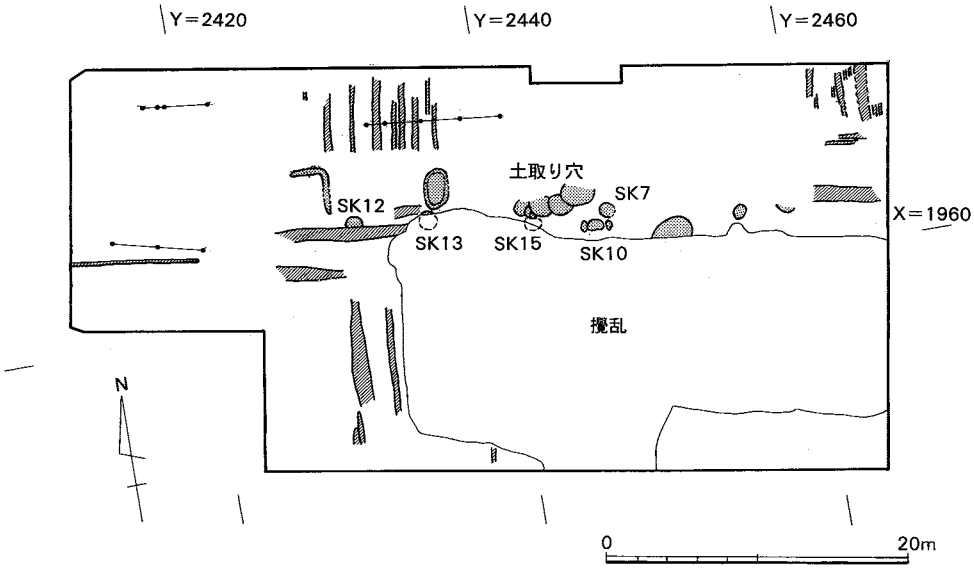


図26　中世の遺構　縮尺1/500

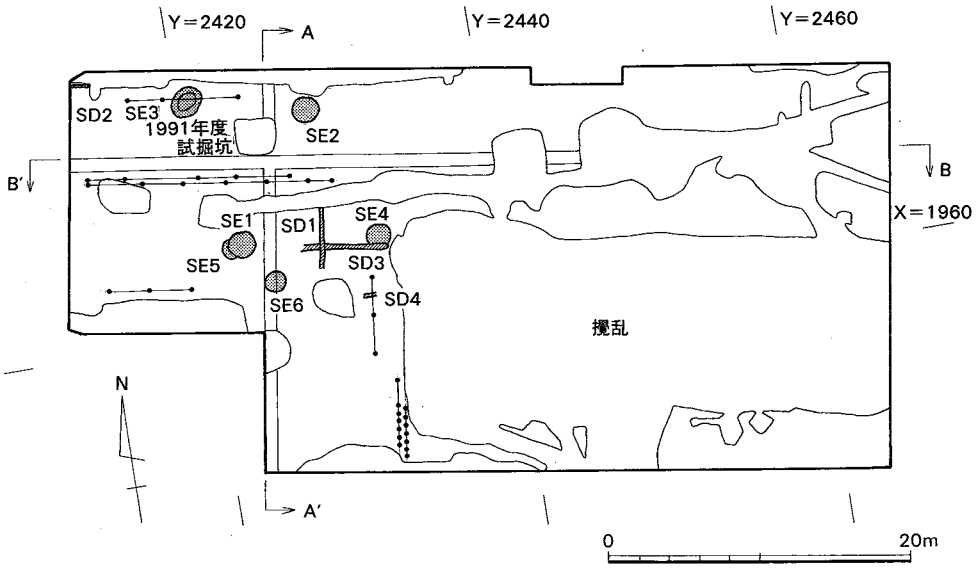


図27　近世の遺構　縮尺 1/500

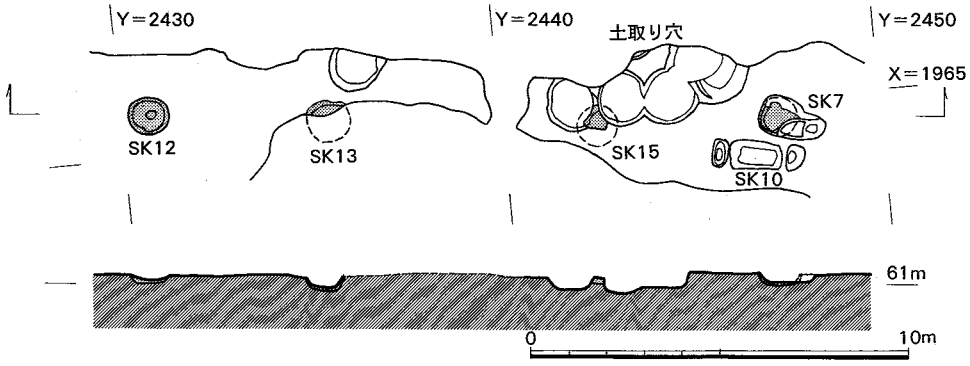


図28　粘土敷き土坑　縮尺 1/200

(2) 中世の遺構（図版16，図26・28）

検出した遺構には，粘土敷き土坑，集石土坑，土取り穴，溝，柵列がある。

粘土敷き土坑　発掘区中央部付近の，茶褐色土層中位で検出した。粘土で壁面および底部を整形した4つの一連の土坑である。西から順に SK12，SK13，SK15 および SK7 がこれにあたり，ここでは粘土敷き土坑と呼称する。SK12 以外は他の遺構や攪乱によって一部を欠失している。SK12 は直径約 1 m の円形の平面形を呈し，他の3つも円形平面に復原できる。いずれも，茶褐色土を深さ 20～30 cm ほど断面逆台形状に掘りくぼめ，内面に塗り込めた黄褐色粘土の上面を，なめらかな凹状の曲面に整形する。これらの土坑は，真北から 5° 東に振る東西方向の直線上に並ぶ。土坑間の距離は真々で，順に 4.7 m，7.3 m，4.7 m を測り，遺構間の両脇の距離はほぼ等しい。SK7 底部の黄褐色粘土下面には，扁平な形状の大小の石複数個が敷きつめてあった。遺物は，SK7 の敷石の間から東播系須恵器片や瓦片が出土しており，13～14世紀ごろのものである。

集石土坑 SK10　茶褐色土層の中位，粘土敷き土坑とほぼ同じレベルで検出した。粘土敷き土坑 SK7 に近接した南側に位置する。3 基の土坑で構成され，中央の土坑は長径 1.4 m 短径 0.7m の平面隅丸方形を呈し，両短辺に近接して小土坑 2 基が東西に付属する。中軸線の方向は，粘土敷き土坑とほぼ一致する。深さはいずれも 40～50 cm を測り，東の小土坑の底部は，中央の土坑と連続していた。土坑内には，拳大から小児頭大の礫が密に充填されており，これに混じって東播系須恵器片や瓦片が出土した。これらの出土遺物から，13世紀ごろの遺構と考える。

土取り穴　発掘区中央部付近の茶褐色土層上層で検出した，互いに切り合う土坑群である。西端より掘り始めて，東方向に少なくとも順次 4 回にわたって掘り進めている。深さは 40～60 cm と浅い。掘削は底部が黄色砂土層に達した部分で止まっており，茶褐色土と黒褐色土の採取を目的としたものと思われる。

溝群・柵列　溝群は南北または東西方向，柵列は東西方向に並行してはしり，両者ともに真北から約 6° 東に振る方位を示す。いずれも畑作にともなうものと考える。

(3) 近世の遺構（図27）

調査区西半で，野壷 SE1～SE6 や溝および柵列を発見した。野壷は SE3 のみ素掘で，他は漆喰を用いる。溝と柵列は，東西方向またはそれと直交方向にはしり，いずれも真北から 6～8° 東に振る方位を示し，中世の耕作関連遺構の方向とほぼ一致する。これらの遺構は，江戸時代後半の耕作にともなうものと考えられる。

4　遺　　物

(1)　古代・中世の遺物（図版17・18，図29・30）

古代の遺物は全体に少量で，遺構からの出土品も限られている。溝 SD36～SD38，土坑 SK22 および黒褐色土と茶褐色土下層から出土した遺物について記述する。また，中世の遺構にともなう遺物は，集石土坑 SK10 から整理箱 2 箱分の遺物が出土したほかは，まとまったものはない。SK10 と茶褐色土上層から出土した遺物について述べる。

Ⅱ3～Ⅱ6 は SD36 出土遺物。Ⅱ3・Ⅱ4 は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ3 は「て」字状口縁手法 B_4 類に相当し，口縁部が弱く外反し器壁が厚い。Ⅱ4 は 2 段撫で手法 C_1 類にあたり，口縁部形態は強く外反し器壁が薄い。Ⅱ5 は灰釉陶器で，体部内外面とも上半に釉を施す。Ⅱ6 は緑釉陶器で，土師質に焼成され，蛇の目高台をもつ。釉は濃緑色を示す。

Ⅱ7・Ⅱ8 は SD38 出土の土師器皿で，赤褐色を呈す。Ⅱ7 は「て」字状口縁手法 B_4 類にあたる。Ⅱ8 は 2 段撫で手法 C_2 類にあたり，口縁部は弱く外反し器壁が厚い。

Ⅱ9・Ⅱ10は SD37 出土遺物。Ⅱ9 は緑釉陶器。須恵質に焼成されており，外側に小さく踏んばる高台をもつ。釉調は淡緑色。Ⅱ10は須恵器壷の口縁部である。

Ⅱ11は SK22 出土の土師器甕である。内面は叩きの当て具痕を残し，外面は刷毛目調整を施す。器面には煤が付着している。

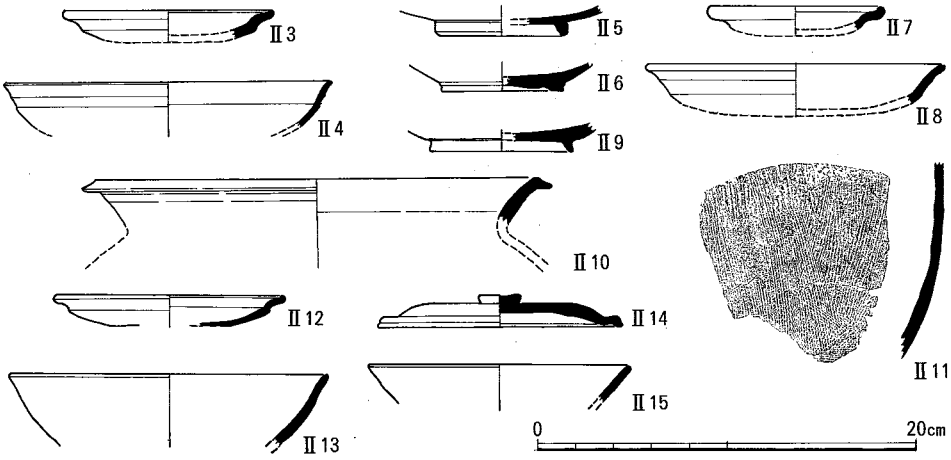


図29　SD36 出土遺物（Ⅱ3・Ⅱ4 土師器，Ⅱ5 灰釉陶器，Ⅱ6 緑釉陶器），SD38 出土遺物（Ⅱ7・Ⅱ8 土師器），SD37 出土遺物（Ⅱ9 緑釉陶器，Ⅱ10須恵器），SK22 出土遺物（Ⅱ11土師器），黒褐色土出土遺物（Ⅱ12土師器，Ⅱ13灰釉陶器，Ⅱ14・Ⅱ15須恵器）

Ⅱ12～Ⅱ15は黒褐色土からの出土遺物。Ⅱ12は土師器皿で，口縁部が強く外反し器壁が薄く，「て」字状口縁手法 B_2 類にあたる。Ⅱ13は灰釉陶器の椀で，体部と内面上半に釉を施す。Ⅱ14は須恵器杯蓋。天井部に凹形のつまみがつく。Ⅱ15は杯。器壁が薄い。

Ⅱ16～Ⅱ29は茶褐色土下層の出土遺物。Ⅱ16～Ⅱ22は土師器である。Ⅱ16は A_2 類の皿。外面を箆削りで調整し，さらに横撫でを施す。Ⅱ17～Ⅱ20は「て」字状口縁手法の皿。Ⅱ17とⅡ18は B_1 類，Ⅱ19は B_2 類，Ⅱ20は B_4 類にあたる。いずれも赤褐色を呈す。Ⅱ21は黒色土器A類の椀。内面と外面口縁部のみ煤が吸着する。暗文と箆削り痕は見えない。Ⅱ22は土師器甕。口縁端部を内に突起させ，頸部の屈曲はつよい。内外面とも横撫で調整を施す。Ⅱ23とⅡ24は灰釉陶器である。Ⅱ23は断面逆三角形の高台をもつ椀。内面のみ黄緑色の釉を施す。Ⅱ24は輪花椀。わずかに外反する口縁部から，体部を内にむかって縦に刻みをいれ，内面に稜を作り出す。Ⅱ25とⅡ26は緑釉陶器である。Ⅱ25は口縁部がわずかに外反する椀。須恵質に焼成され，釉調は濃緑色である。Ⅱ26は糸切りの高台をもつ皿。胎土は軟質で黄白色を呈し，釉は剝離している。Ⅱ27～Ⅱ29は須恵器である。Ⅱ27は杯A。Ⅱ28は杯B。外面に斜めの箆記号を残す。Ⅱ29は甕。口縁部が短く直立する。

Ⅱ30～Ⅱ36は SK10 出土遺物。Ⅱ30は須恵器すり鉢。Ⅱ31は須恵器の壺。Ⅱ32は瓦器鍋。口縁部が肥厚し，屈曲はあまい。Ⅱ33とⅡ35は灰釉系陶器。Ⅱ35は椀の底部で，須恵質に焼成されており，断面が丸く低い高台をもつ。残存部分には釉は施されていない。Ⅱ34は青磁椀。釉調は淡緑色で，高台内面のみ露胎である。Ⅱ36は三巴文の軒丸瓦。珠文はない。文様面は扁平で彫りがあさく，周縁部が文様面より突出している。

Ⅱ37～Ⅱ49は茶褐色土上層の出土遺物。Ⅱ37～Ⅱ43は土師器である。Ⅱ43は2段撫で手法 C_5 類の皿。口縁端部に面取りを施す。Ⅱ37とⅡ42は1段撫で素縁手法 D_2 類の皿。口縁部形状は直線的である。Ⅱ38は1段撫で素縁手法 D_3 類の皿。弱く内彎する口縁部形状をもつ。Ⅱ39は淡黄白色を呈する椀。口縁部形状は1段撫で面取り手法 D_5 類に相当する。Ⅱ40とⅡ41はそれぞれ1段撫で手法の E_1 類と E_3 類にあたる。Ⅱ41の口縁部形状は弱く外反する。Ⅱ44～Ⅱ46は灰釉系陶器である。Ⅱ44は口縁部が外側に屈曲し，受部を形作る。古瀬戸窯産の柄付片口である可能性がある。Ⅱ45は古瀬戸窯産のおろし皿。内外面とも口縁部のみ釉を施し，指押さえにより片口を形作る。Ⅱ46は小型の皿。体部は露胎である。Ⅱ47は糸切りの平高台をもつ白色土器皿。胎土の色調は黄白色を呈す。Ⅱ48は小型の白磁皿。口縁端部が外反する。Ⅱ49は須恵器すり鉢である。

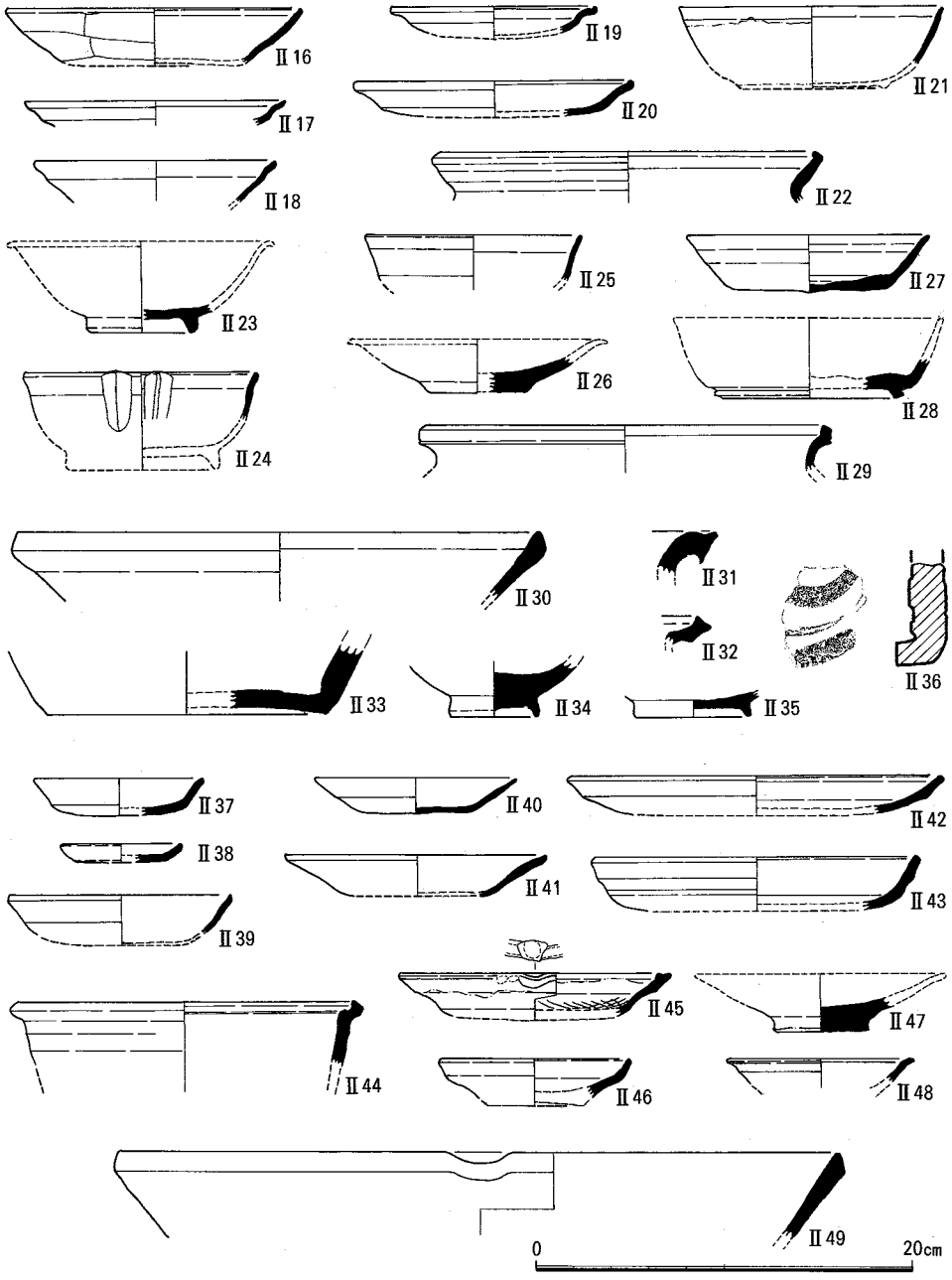


図30　茶褐色土下層出土遺物（Ⅱ16～Ⅱ22土師器，Ⅱ23・Ⅱ24灰釉陶器，Ⅱ25・Ⅱ26緑釉陶器，Ⅱ27～Ⅱ29須恵器），SK10出土遺物（Ⅱ30・Ⅱ31須恵器，Ⅱ32瓦器，Ⅱ33・Ⅱ35灰釉系陶器，Ⅱ34青磁，Ⅱ36軒丸瓦），茶褐色土上層出土遺物（Ⅱ37～Ⅱ43土師器，Ⅱ44～Ⅱ46灰釉系陶器，Ⅱ47白色土器，Ⅱ48白磁，Ⅱ49須恵器）

(2) 近世の遺物（図版17・18，図31）

近世の耕作関連遺構から出土する遺物は少ない。灰褐色土Ⅰ とⅡは，出土遺物に差は認められないので，以下で区別せずに記述する。

Ⅱ50～Ⅱ54は土師器である。Ⅱ50は型作りのミニチュアの皿で，内面全体に離型剤の雲母が付着する。Ⅱ51は小型の皿。器壁が厚く，胎土は赤褐色を呈する。口縁部に煤が付着しており，灯明皿として使用されていたことがわかる。Ⅱ52は灰白色を呈する皿。口縁部はやや外反し，見込みに圏線がめぐる。Ⅱ53は型作りによる炮烙（ほうらく）。胎土は乳白色を呈し，器壁は薄くよく焼き締められている。底部全面に同心円状の突起がめぐり，見込みと外面上半に煤が付着する。Ⅱ54は胴部に鍔がめぐる大和系の土釜の口縁部である可能性がたかい。茶褐色を呈し，頸部の屈曲は強く，口縁端部を内につまむ。

Ⅱ55は信楽窯産の陶器すり鉢。赤褐色を呈し，すり目は6条である。16世紀末ごろのものと思われる。Ⅱ56は陶器灯明受皿。受部の口縁に弧状の欠き込みをもつ。Ⅱ57～Ⅱ59は染付椀。Ⅱ57は外面に菊花散らし文を，見込みには鶴を描く広東椀である。Ⅱ58は見込みに「壽」の文字をあしらう。Ⅱ59は外面に樹花文を描いたくらわんか椀である。Ⅱ60は白磁小杯で，口縁端部がわずかに外反し，高台は露胎である。

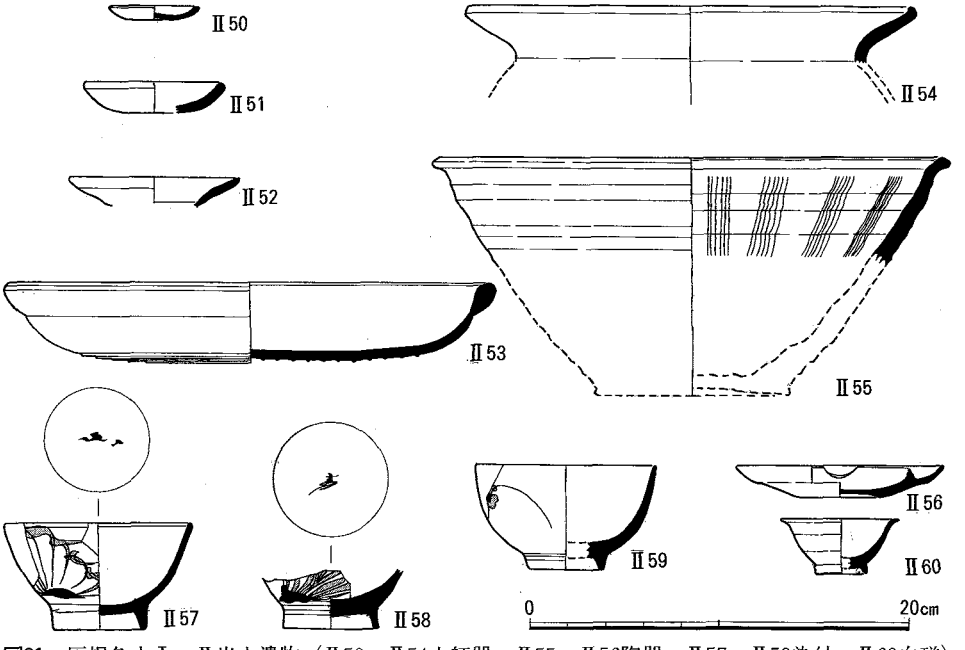


図31 灰褐色土Ⅰ・Ⅱ出土遺物（Ⅱ50～Ⅱ54土師器，Ⅱ55・Ⅱ56陶器，Ⅱ57～Ⅱ59染付，Ⅱ60白磁）

5　小　　結

京都大学北部構内は，北白川扇状地の末端に位置し，北白川追分町遺跡の西端にあたる。北部構内は現在，北西から南西に緩やかに傾斜する起伏の少ない地形であるが，これは弥生前期末～中期初頭の白川の洪水による黄色砂の堆積によって形成されたものである。黄色砂の下には，黒褐色を呈する安定した粘質土層が面的に広がっており，本調査区の南に接する208地点の調査により，弥生時代前期後半の地表面であることが明らかにされている〔浜崎ほか95〕。また，これまでの北部構内の調査の成果から，当時の地表面は起伏に富む複雑な地形であったことが判明しており，地形の復原も試みられている〔泉78〕。

本調査区でこの黒褐色粘質土を確認できたのは，南辺と北辺の一部のみであったが，208地点では，ほぼ全面で検出されている。この位置による違いの要因は，二つの可能性が考えられる。一つは黄色砂の流入時に黒褐色粘質土が削られた可能性で，本調査区で黒褐色粘質土の堆積がほとんどみられないのは，本調査区を南限とする谷状の地形が，黄色砂の流れをより強める作用を与えたものと想定できる。他の一つは，本調査区を通るさらに古い谷状地形がすでにあり，この内側の斜面では黒褐色土は堆積しなかった可能性で，この場合，土石流はこの谷状地形に誘引されたものと考えられる。

土石流は，人頭大の花崗岩礫を含む砂礫の層で，本調査区の東北方約 100 m の109地点

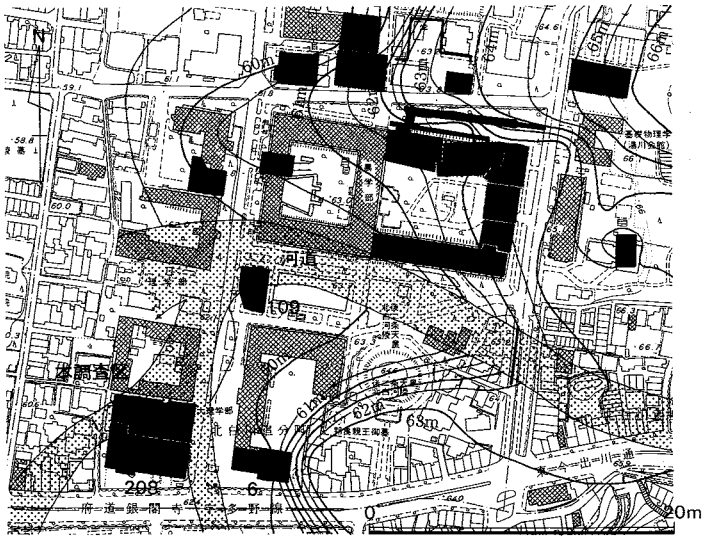


図32　調査区周辺の弥生時代前期の地形　縮尺 1/5000

では，東から西へ流れる土石流の南限を検出している〔浜崎83a〕。弥生時代前期の北部構内南部を横切っていたとされる河道は，109地点の東で傾斜をゆるめており，これより以西は流路が分岐し広がっていたとも想定され，本調査区を通る谷状地形はこの一分路であった可能性も指摘できよう（図32)。土石流と黄色砂層をもたらした白川の洪水は，この谷状の地形をたどって西流し，109地点付近で流路を広げながらも，本流は南下し，本調査区付近を通っていったのであろう。

本調査では，調査区をほぼ真っ直ぐに横切る平安後期の溝 SD36～SD38 を検出した。また南北の溝 SD39 は，208 地点の調査で検出した平安中期の溝 SD32 と連続する。攪乱により不明な点も多いが，平安時代の土坑は溝 SD36～SD38 の南側で検出しており，北側での検出はない。また208地点では，溝 SD32 より東側で確認された遺構はなく，西側では，銭貨や金箔を伴う埋納遺構3基をはじめとする祭祀遺構や，建物の柱穴などの平安期の遺構を検出している。これらの溝群は，当時の土地利用の境界を示していた可能性がつよく，溝で囲まれた区画の東北隅が，祭祀に供する場所として利用されたことを考えさせるものである。また，中世前半の粘土敷き土坑や集石土坑は，SD37 の直上で検出しており，遺構の性格は不明であるものの，平安時代の土地区画が中世まで踏襲されていた可能性も指摘できる。

以上のように，本調査により弥生時代前期の地形について新しい知見を得られたほか，北部構内西南部の古代から中世にかけての土地利用状況の一端を明らかにできた。

現地調査は，清水芳裕と古賀秀策が担当し，下坂澄子，矢野由記子，松本篤志，君島英子，大岡由記子，田中葉子が協力した。資料整理は，清水，古賀，下坂，矢野がおこなった。また，現地調査および資料整理にあたっては，梅川光隆氏の協力と援助をいただいた。

第4章　京都大学本部構内AW25区の発掘調査

千葉　豊　吉井秀夫　小﨑　隆*　矢内純太*　藁科哲男**

1　調査の経過

本調査区は，京都大学本部構内のほぼ中央に位置し，吉田山西麓にひろがる北白川扇状地の扇端付近に立地する（図版1-221）。ここに文学部等校舎の新営が計画されたため，周辺の調査結果を勘案し，予定地全域の発掘調査をおこなった。調査面積は929 m^2，調査期間は1993年9月6日～12月17日である。

本部構内では，これまでの調査で，奈良時代の竪穴住居跡（75地点），中世の土壙墓（75地点）や土器溜（90・110地点），中世の志賀越道（168地点），近世の白川道（57・90・181地点）などがみつかっている。また本調査区一帯は，幕末に築かれた尾張藩邸の範囲内に含まれることが絵図などから判明しており，古代から幕末にいたる遺跡の広がりと土地利用の変遷が問題となるところであった。

調査の結果，調査区西辺は法学部旧建物の基礎によって大きく破壊されていたが，中世の井戸・集石土坑・溝などを検出し，また縄文後期の遺物包含層を確認した。縄文時代から近世にいたる出土遺物は，整理箱82箱に及び，先史時代から近世にいたる，この地一帯の土地利用の変遷を明らかにするうえで貴重な資料を得ることができた。とくに中世の遺構については，生活空間であった場所が埋葬場所に変遷していることが判明し，この地周辺の当時の土地利用を復原するうえでの重要な手がかりとなった。縄文後期の土器は時期がほぼ限定される一括資料で，土器変遷を明らかにする重要な資料となろう。また，集石土坑の土壌成分および石器原材について，それぞれ専門的な立場から理化学的な分析調査を実施した。

本文の執筆は，第6節を小﨑隆・矢内純太，第7節を藁科哲男，古代・中世の遺物に関して吉井秀夫が担当し，残りを千葉豊が担当した。なお，現地調査は千葉と吉井が担当し，磯谷敦子，矢野由記子，柴垣理恵子，荒仁，山本直彦，山本麻子，鈴木雅美が測量・実測などの作業にあたった。また，千葉，吉井，磯谷，柴垣，鈴木が出土遺物の整理作業をおこなった。

---

* 農学部地域環境科学教室　** 原子炉実験所

2 層　　位

本調査区の現地表は，北東端で標高約59.3 m，南西端で約57.8 mを測り，北東から南西にむけて緩やかに傾斜する（図33）。

調査区北半での基本層序は，上から表土（第1層），灰褐色土（第2層），茶褐色土（第3層），黄色砂（第5層），暗褐色土Ⅰ（第6層），黄色シルト（第14層），暗褐色砂質土（第15層），灰褐色粗砂（第16層）となっている。これに対して調査区南半では，X＝1765付近を境にその南側には黄色砂はみられなくなり，また，茶褐色土と暗褐色土Ⅰの間に暗茶褐色土（第4層）が堆積している。灰褐色土は近世の耕作土，茶褐色土・暗茶褐色土は中世の遺物を包含する。北半では黄色砂，南半では暗褐色土Ⅰの上面で，中世の井戸・土坑・溝を検出した。黄色砂は，上半が極粗砂，下半が微砂で構成される。弥生前期末～中期初頭の洪水層で，京都大学吉田キャンパス一帯にかけて広く堆積したことが今までの調査で判明している。暗褐色土Ⅰは，縄文後期の遺物包含層である。黄色シルトと暗褐色砂質土からは遺物は出土しなかった。

さらに，調査区北西隅で，暗褐色土Ⅰ以下の地形が急激に西に向けて下がっているのを確認した。この斜面部で，上から灰白色粗砂（第7層），灰褐色砂質土（第8層），暗褐色土Ⅱ（第9層），黄褐色シルト（第10層），暗褐色土Ⅲ（第11層），灰黄色砂（第12層），褐色砂質土（第13層）をみとめた。このうち，暗褐色土Ⅱと暗褐色土Ⅲは土壌化した淘汰の悪い堆積物で，暗褐色土Ⅱからは，多量の縄文後期中葉の遺物が出土した。灰黄色砂には，層厚1～2 cm，幅10～40 cm前後でレンズ状に広がる暗褐色砂が挟在していた。地震による液状化と関連する土層ではないかと想定している。以上は，黄色シルト（第14層）をきっているが，暗灰色砂質土（第17層），黄褐色粗砂（第18層）は，灰褐色粗砂（第16層）の下位にある。第17・18層は，第6～13層と異なり，東へ向かって傾斜しており，第14～16層とともに北白川扇状地を形成する地山と考えられる。

こうした斜面の形成と埋積の時期および性格については，以下のように理解している。斜面の形成時期についての証拠は得られていないが，埋積の過程において縄文後期中葉の遺物包含層が形成されているので，それ以前であることは確実である。縄文後期ごろを中心に埋積が進み，弥生前期末～中期初頭には，黄色砂によってほぼ完全に平坦化した。このような斜面は，西側を流れる河川が扇状地の末端を浸食した結果，生じたと理解するのが妥当であろう。

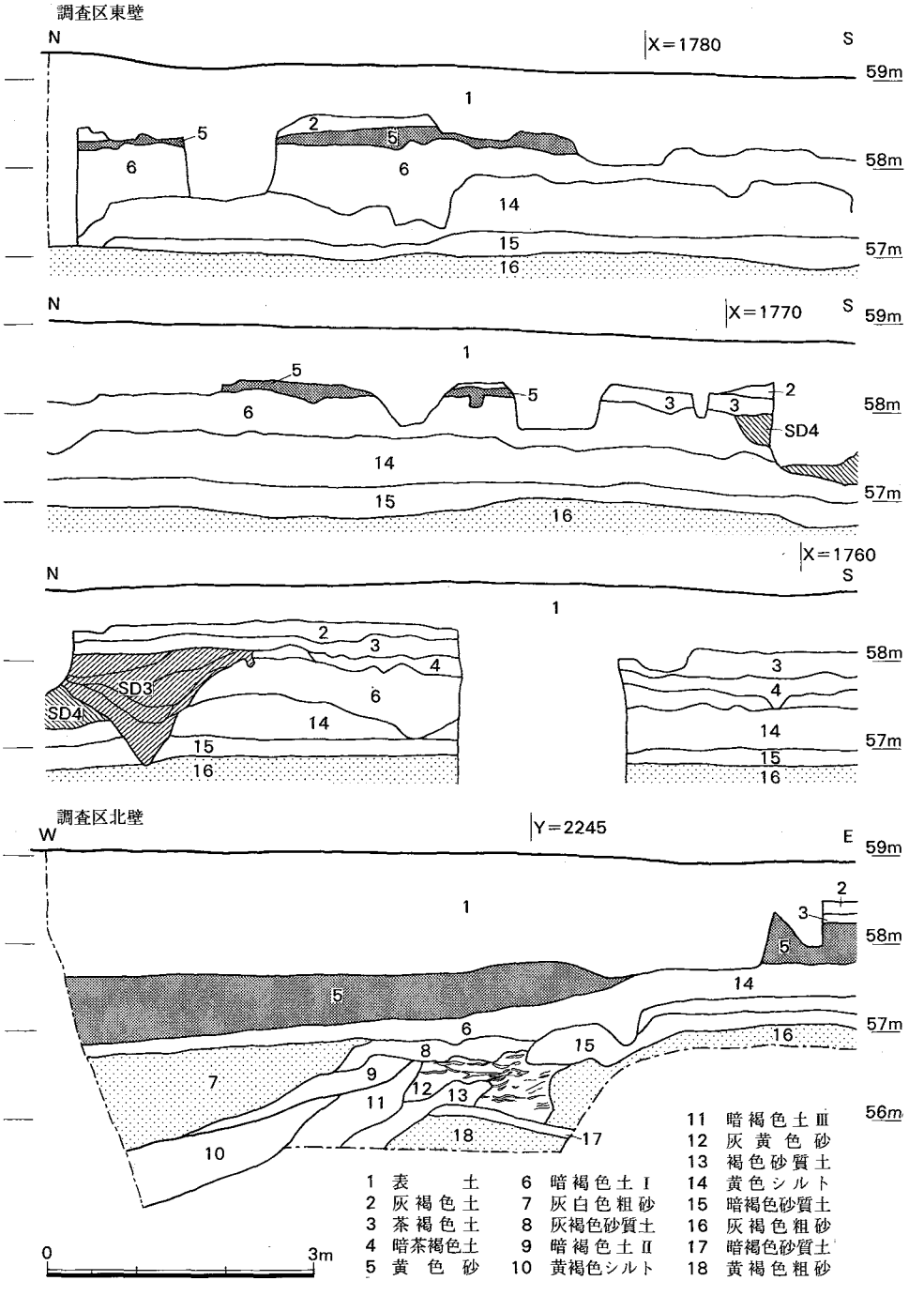


図33　調査区東壁・北壁の層位　縮尺 1/80

3　縄文時代の遺跡

(1)　遺物の出土状況（図版21，図34）

縄文時代の遺物は，土器1185点，石器５点，石器製作過程で生じた剝片・砕片29点を数える。出土層位は，暗褐色土Ⅱ（土器569点，石器１点，剝片29点），暗褐色土Ⅰ（土器423点，石器３点）およびそれ以外（土器193点，石器1点）に分けられる。暗褐色土Ⅱ・Ⅰは縄文後期の遺物包含層である。それ以外としたのは，上層の歴史時代の土層から出土したもので，出土層位不明の土器5点をここに含めてある。

図34は，これらの土層から出土した縄文土器の出土頻度を10ｍ単位の地区別に表示したものである。もっとも出土点数が多いのは，北西隅の小地区であるが，これは暗褐色土Ⅱで2m×2m前後の狭い範囲（黒丸の地点）から土器片569点が集中してみつかったためである。全体的にみて，調査区北半の分布密度が高く，縄文時代の遺跡は調査区の北側ないしは北東側への広がりが考えられる。

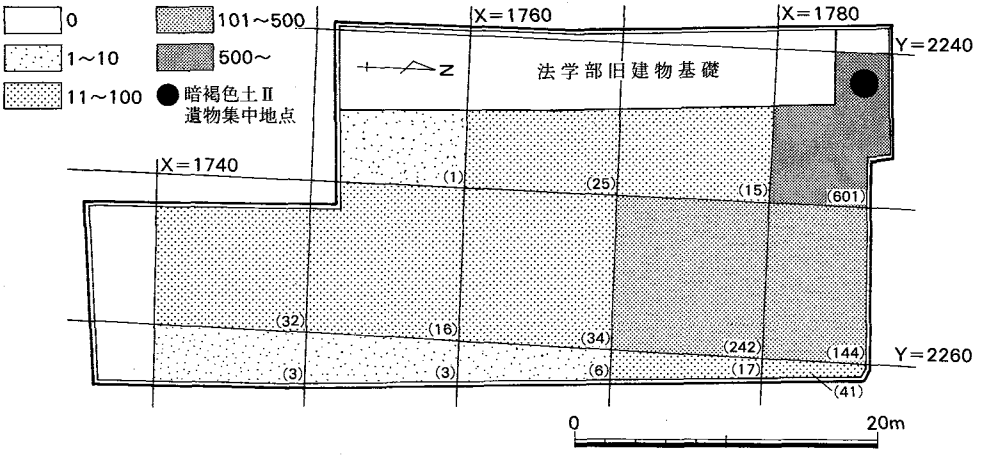


図34　縄文土器地区別出土状況（括弧付数字は出土点数）　縮尺 1/500

(2)　出土遺物（図版22～24，図35～40）

土器・石器の順に記載する。縄文土器は，前期末（Ⅲ114），中期末（Ⅲ44）の土器各１点を含むが，他はすべて後期中葉に属する。出土層位別に説明しよう。

暗褐色土Ⅱ出土土器（Ⅲ1～Ⅲ43）　Ⅲ1～Ⅲ15・Ⅲ33は有文深鉢。Ⅲ1は弱く内湾する波状口縁波頂部で，長方形区画文内に２段左撚縄文を充填する。沈線内には刺突を連ねている。Ⅲ2～Ⅲ6は同一個体と考えられる資料である。頸部がくびれ口縁部が弱く内湾

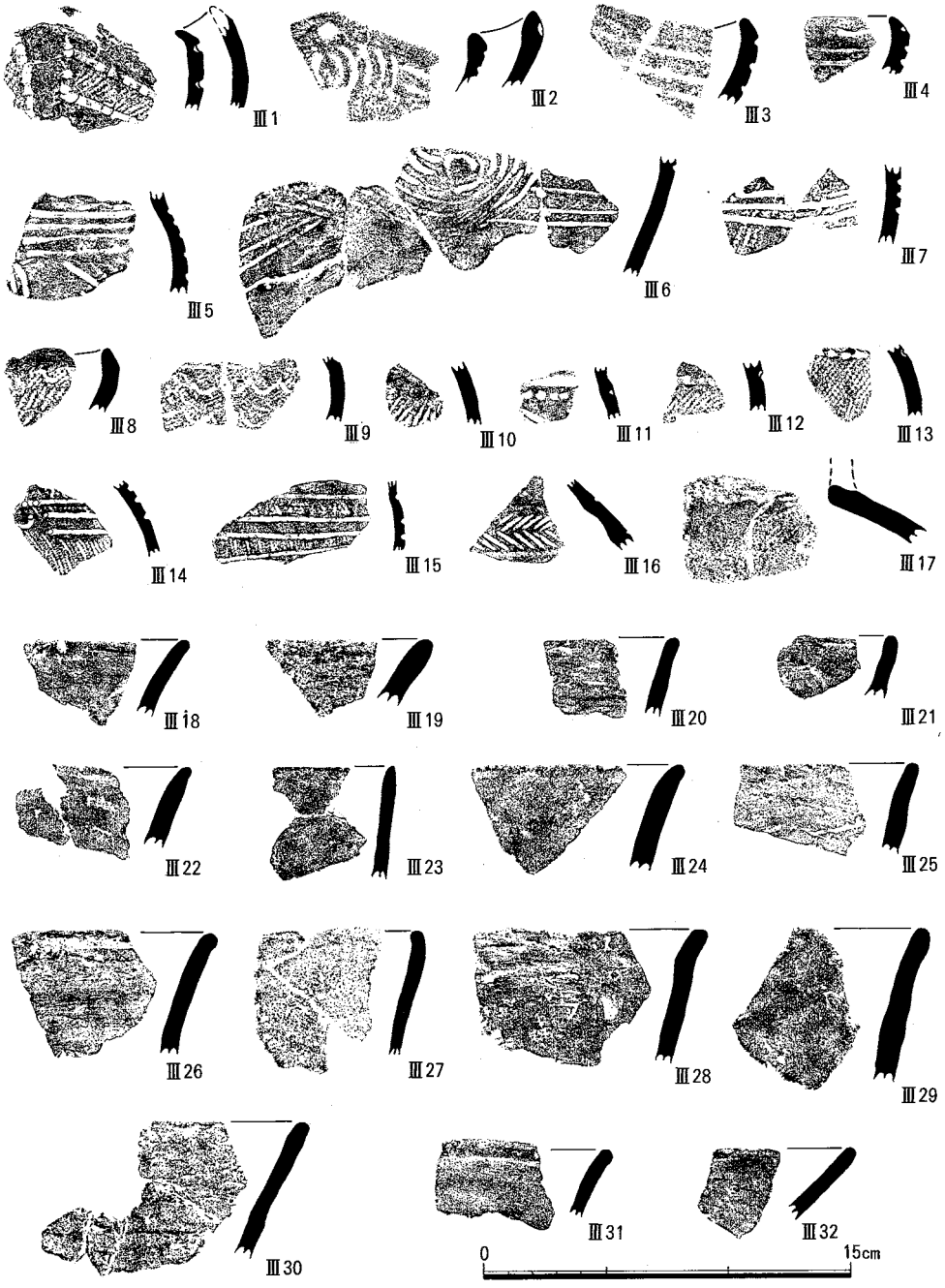


図35　暗褐色土Ⅱ出土縄文土器(1)（Ⅲ1～Ⅲ32）　縮尺 1/3

し，胴部が張る形態を呈する。Ⅲ2 は波頂部で，対向弧線文を描き頂部に円形の押捺を加えている。Ⅲ3・Ⅲ4 は波底部で，3 本以上の沈線を横走させ，2 段左撚縄文を沈線間に施している。Ⅲ4 の口縁端部には一部に沈線文が横走しており，断続的な沈線が口縁端部をめぐるようである。Ⅲ5 は胴上部，Ⅲ6 は胴下部にあたる。単位文様として，4条前後の沈線束で対向弧線文を描き，横走および斜行する沈線束でそれらをつないでいると推測する。沈線間には2段左撚縄文を充填している。Ⅲ7は胴部で縄文地に沈線文を加えている。Ⅲ8～Ⅲ10・Ⅲ12・Ⅲ13は縄文地の土器。Ⅲ8 は波頂部で 2 段左撚の結節縄文を用いる。口縁外側端部を幅狭く面取りしており，この特徴はⅢ1～Ⅲ4 と共通する。Ⅲ9 は胴上部で，2 段左撚の結節縄文を用いている。Ⅲ10の縄文は1段左撚である。Ⅲ12・Ⅲ13は胴部に 2 段左撚縄文を施し，頸胴部の境に沈線を横走させ沈線内に刺突を加えている。Ⅲ11は肩部に沈線を横走させその下側に刺突列を配する。胴部を斜行する沈線がみえる。Ⅲ14・Ⅲ15は同一個体と考えられ，器壁の厚さ 4 mm 前後と薄く仕上げられている。胴部に，単位文様としてＣ字形沈線文を配し数条の沈線を横走させ，沈線間に縄文を充填している。沈線の末端には刺突が加えられる。縄文は 2 段右撚の3本撚で，部分的に末端を絡げている。Ⅲ33は胴部資料で，横走する沈線で上下を画し，下に開く弧線文を連続させている。沈線末端には刺突を加えている。劣化が著しくはっきりしないが，弧線文の間および下位の横走沈線の下側に，2 段左撚の縄文が加えられている。

Ⅲ16は綾杉文を横位にめぐらし，上下を沈線で画している。内面は成形時の凹凸が顕著に残るが，外面は丁寧に磨いて仕上げている。傾きから判断して深鉢以外と思われるが，全体の器形は不明である。Ⅲ17は体部が著しく張る器形を呈し，注口土器と考える。2 段右撚の帯縄文を曲線的に配している。Ⅲ34は，く字形に屈曲する浅鉢。横走する沈線内には連続刺突が加えられている。口頸部がく字形に屈曲するⅢ35は体部が張る形態を呈する。口頸部の境には隆帯を貼り付け刻みを加えている。同様の刻みは口縁端部にも施されている。口縁外側端部から口頸部にかけて，幅 1.5 cm の突起が取り付けられていた痕跡が残る。体部には右下がりの斜沈線がめぐる。注口土器であろう。

Ⅲ18～Ⅲ31は無文深鉢の口縁部。外反気味ないしは直線的に立ち上がるものが多いが，やや内湾するものもある（Ⅲ27）。口縁端部は丸く仕上げている。Ⅲ32は無文浅鉢。

Ⅲ36～Ⅲ43は底部。大部分が深鉢の底部で，平底である。底面直上でくびれるもの（Ⅲ36・Ⅲ40・Ⅲ41）とそのまま立ち上がるもの（Ⅲ37～Ⅲ39・Ⅲ43）がある。Ⅲ40は木の葉底である。Ⅲ42は底部外面が剝落している。Ⅲ43は暗褐色土Ⅰ出土破片と接合した。

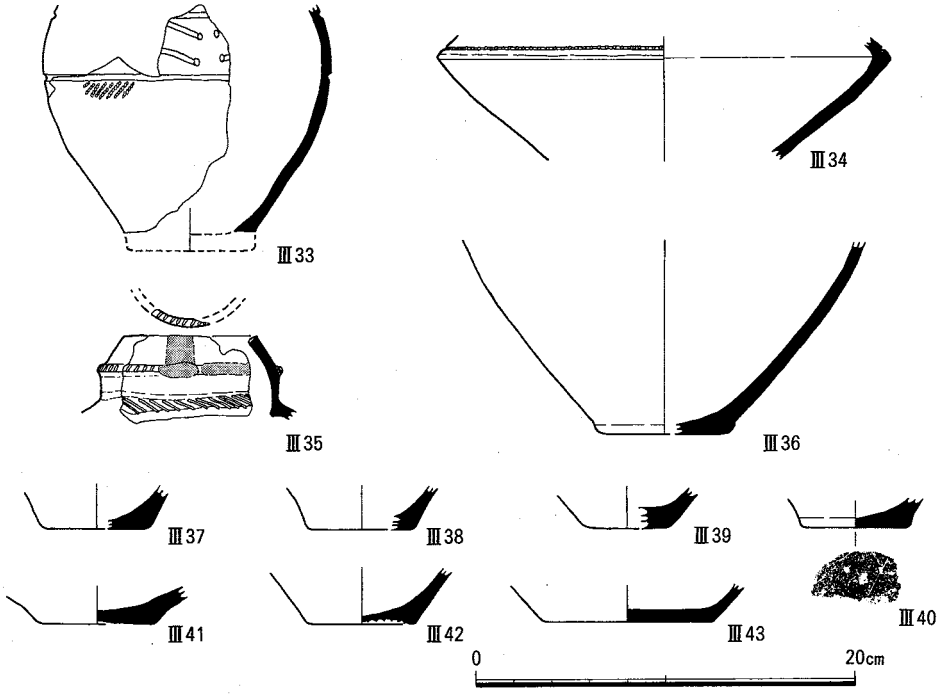


図36　暗褐色土Ⅱ出土縄文土器(2)（Ⅲ33～Ⅲ43）　縮尺 1/4

暗褐色土Ⅰ出土土器（Ⅲ44～Ⅲ91）　Ⅲ44～Ⅲ58は，大部分が深鉢になると思われる有文土器。Ⅲ44は，中期末北白川Ｃ式の深鉢Ｂ類。隆帯部および胴部に，２段左撚縄文を施す。Ⅲ45～Ⅲ48は内湾ないし屈曲する口縁形態を呈する。Ⅲ45・Ⅲ46は，２段左撚の結節縄文を用いている。Ⅲ47は，外面を丁寧に磨いて仕上げており，浅鉢の可能性が高い。沈線内に押し引き状の刺突を連ね，口縁直下に円形押捺を施している。Ⅲ48は地文に２段左撚縄文を施し，沈線内には連続刺突を加えている。Ⅲ49は斜沈線で文様を構成する。沈線内に部分的に刺突を加える。Ⅲ50～Ⅲ53は多条沈線に縄文を充填する。縄文はすべて２段左撚である。Ⅲ54は条線文で文様を描く。Ⅲ55は弧状沈線を施し2段左撚縄文を充填する。弧状沈線の交叉部には円形押捺を施す。Ⅲ56～Ⅲ58は胴部に縄文を施す深鉢。縄文はいずれも２段左撚であるが，Ⅲ56・Ⅲ57は結節縄文である。Ⅲ59は内湾する口縁部で，口縁直下を凹線がめぐる。

Ⅲ60～Ⅲ82は無文深鉢の口縁部。暗褐色土Ⅱ出土無文土器と同様，口頸部が外反気味ないし直線的に立ち上がり，端部を丸くあるいは尖り気味におさめるものが主体を占める。Ⅲ83は無文浅鉢。Ⅲ84・Ⅲ85は注口土器。Ⅲ84はく字形に屈曲する口頸部。磨いて仕上げ

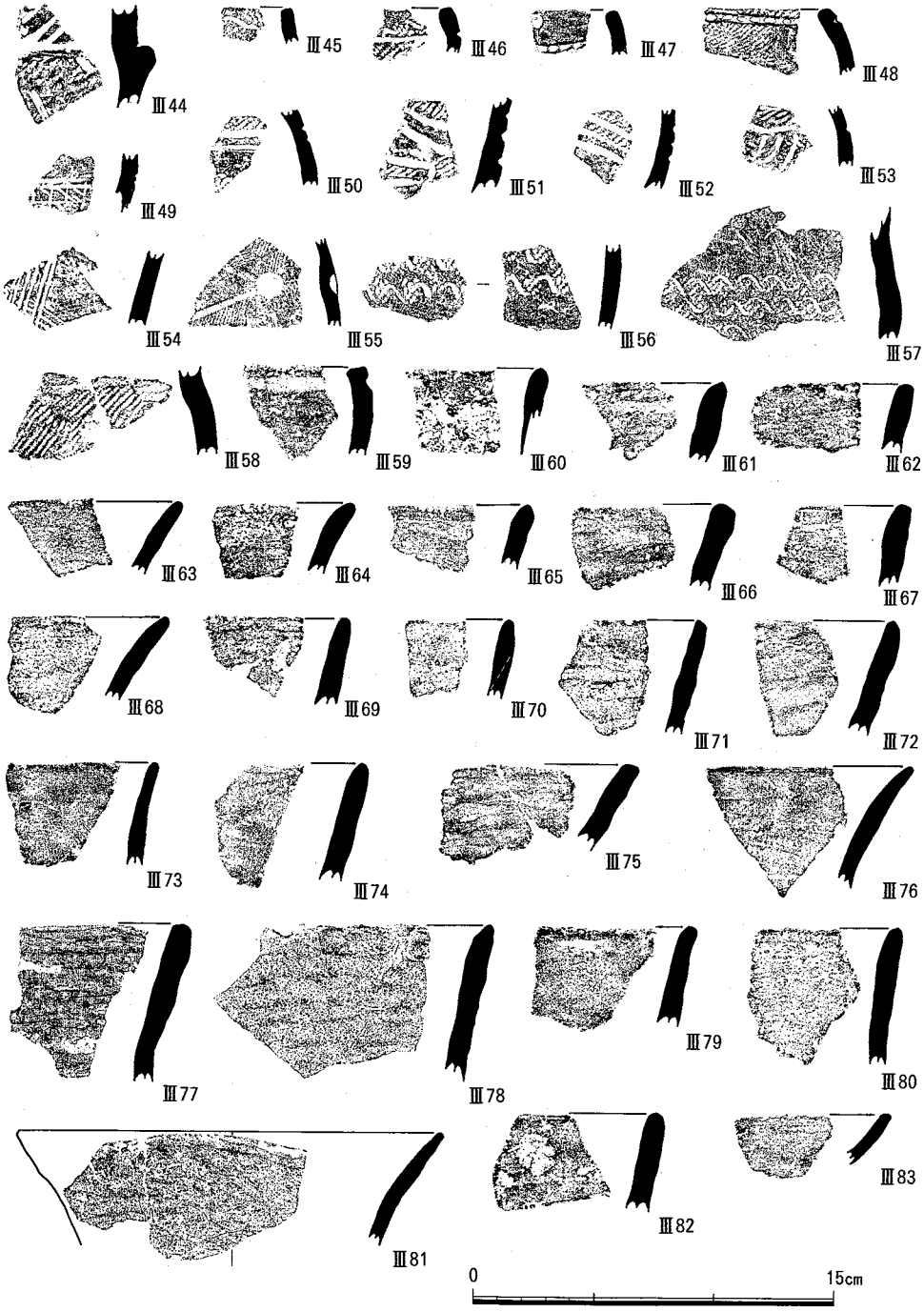


図37　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器(1)（Ⅲ44～Ⅲ83）　縮尺 1/3

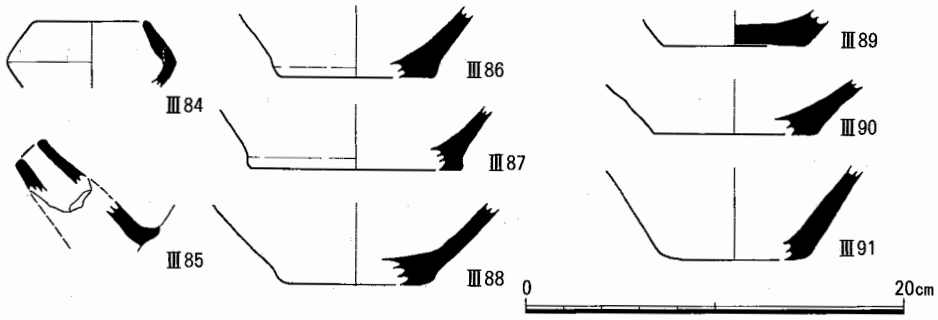


図38　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器(2)（Ⅲ84～Ⅲ91）　縮尺 1/4

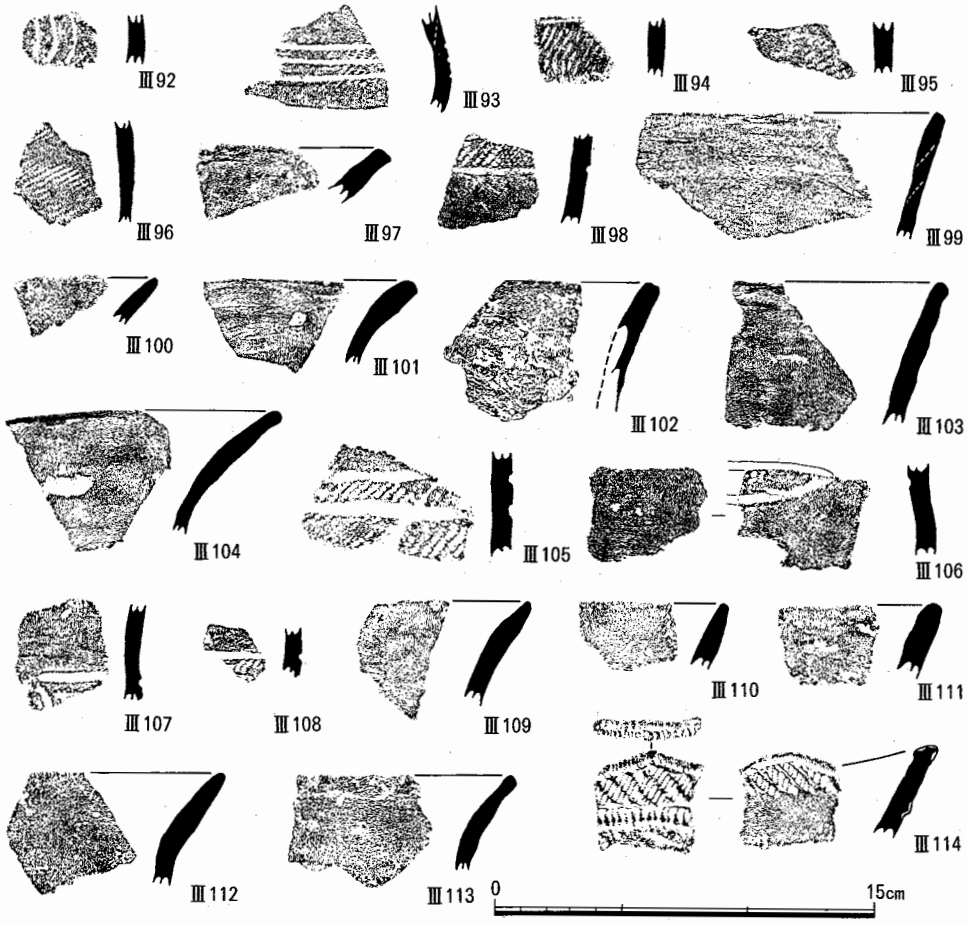


図39　黄色砂出土縄文土器（Ⅲ92～Ⅲ97），茶褐色土出土縄文土器（Ⅲ98～Ⅲ104），SK4 出土縄文土器（Ⅲ105・Ⅲ106），SX1 出土縄文土器（Ⅲ107～Ⅲ113），SE1 出土縄文土器（Ⅲ114）縮尺 1/3

ている。Ⅲ85は注口部。Ⅲ86～Ⅲ91は底部。深鉢の底部で平底である。Ⅲ89は，暗褐色を呈し胎土に角閃石を多量に含み，「河内産」の胎土の特徴を示す。図示した中にこの種の胎土のものはほかになく，全体で15点（全出土点数の1.3%）を数えたにすぎない。

上層出土土器（Ⅲ92～Ⅲ114）　上層に混在していた縄文土器について説明を加えておきたい。Ⅲ92～Ⅲ97は黄色砂出土。Ⅲ92・Ⅲ93は多条沈線で文様を描く。Ⅲ93は2段左撚縄文を沈線間に充填している。Ⅲ92の縄文の有無は劣化のため，不明。Ⅲ94～Ⅲ96は縄文地の土器。Ⅲ94は1段左撚，Ⅲ95・Ⅲ96は2段左撚縄文を用いている。Ⅲ97は無文深鉢。端部に面取りを施す。Ⅲ98～Ⅲ104は茶褐色土出土。Ⅲ98は沈線間に2段左撚縄文を施す。Ⅲ99～Ⅲ104は無文深鉢の口縁部。いずれも口縁が外反する。Ⅲ105・Ⅲ106はSK4出土。Ⅲ105は2条以上の沈線を横走させ，2段左撚縄文を施す。Ⅲ106は内面に弧状に沈線を施し，縄文を充填する。口縁直下の部分と想定する。外面は磨いて仕上げている。Ⅲ107～Ⅲ113はSX1出土。Ⅲ107・Ⅲ108は有文胴部。沈線で文様を描き，Ⅲ108は2段左撚縄文，Ⅲ107は縄文（撚は不明）を施す。Ⅲ114はSE1枠内出土。2段右撚の縄文地に凸帯を貼り付け，Σ状に加工した半截竹管文で刻みを施す。前期末、大歳山式である。

石　器（Ⅲ115～Ⅲ119）　出土した石器の内訳は，石鏃2点（Ⅲ115・Ⅲ116），磨製石斧1点（Ⅲ117），削器1点（Ⅲ118），磨石1点（Ⅲ119）の計5点である。

石鏃は2点とも凹基無茎である。Ⅲ115は長さ13.1 mmを測る小型の石鏃である。サヌカイト製で重量0.2 g。Ⅲ116はチャート製で，重量1.3 gである。Ⅲ117は小型の定角式磨製石斧で，表面は極めて平滑に仕上げられている。長さ36.2 mm，刃部幅25.3 mm，厚さ10.3 mmをはかり，重量は14.5 gである。蛇紋岩製。Ⅲ118はサヌカイト製の削器である。平面三角形の横形剝辺を素材に用いて，刃部作り出しの細部調整を両面からおこなっている。重量は27.8 g。Ⅲ119は磨石。一部欠損する。片面に磨面が認められる（矢印で示した範囲）。花崗岩製で，重量は409.2 gである。

これらの石器の出土層位は，Ⅲ115が暗褐色土Ⅱ，Ⅲ117～Ⅲ119は暗褐色土Ⅰ，Ⅲ116は茶褐色土である。

剝片・砕片については図示していないが，29点すべて，遺物集中地点の暗褐色土Ⅱからふるいにかけて採集したものである。石材はすべてサヌカイトであり，このうち19点について，本学原子炉実験所藁科哲男氏に産地同定をお願いした。その結果，19点すべてについて二上山産であるという分析結果を得た。この詳細については，第7節を参照されたい。

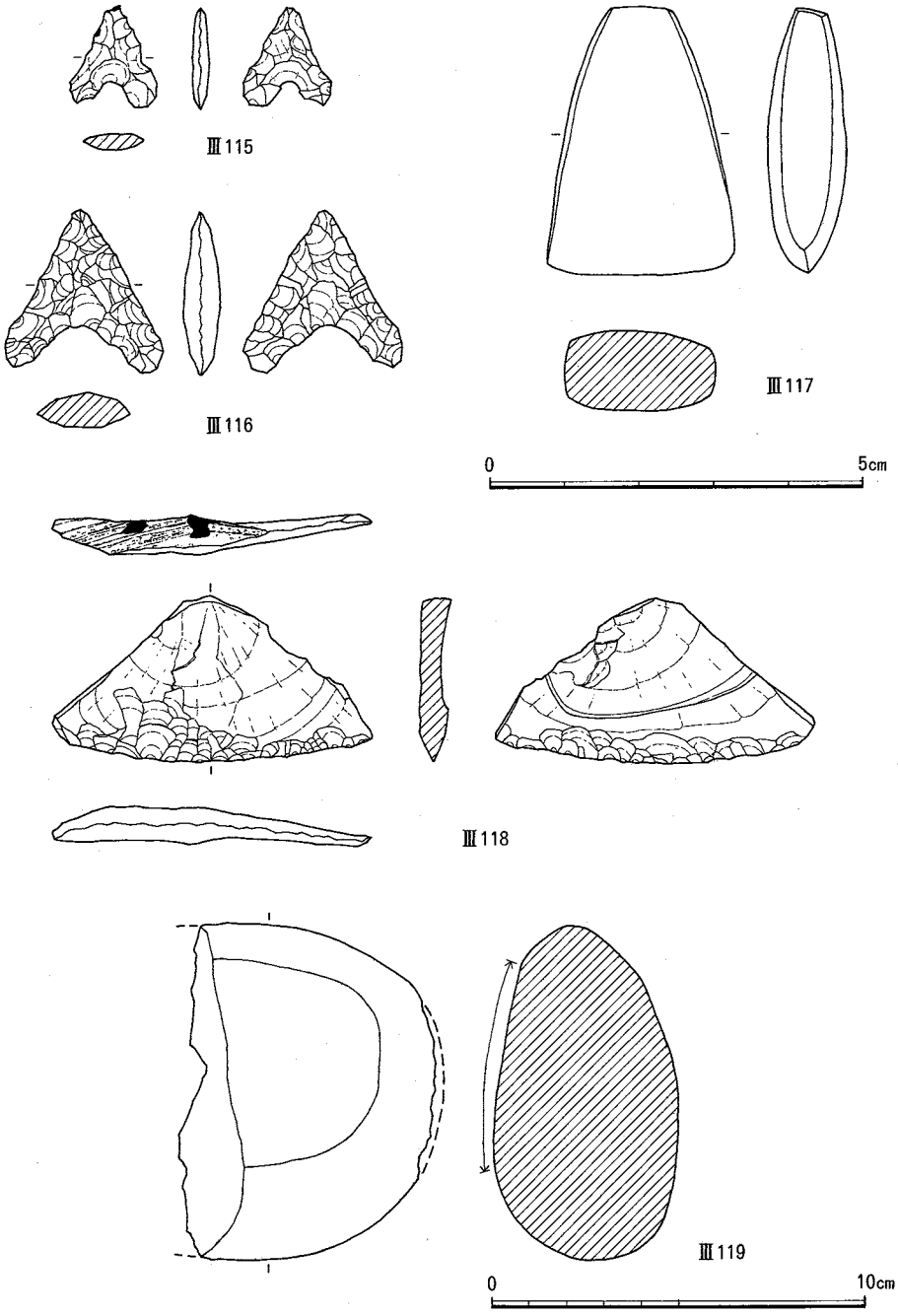


図40　石器（Ⅲ115・Ⅲ116石鏃，Ⅲ117磨製石斧，Ⅲ118削器，Ⅲ119磨石）
Ⅲ115～Ⅲ117 縮尺 1/1，Ⅲ118・Ⅲ119　縮尺 1/2

4　古代・中世の遺跡

(1)　古代・中世の遺構（図版19～21，図41～43）

古代・中世の遺構には，濠状遺構，溝，井戸，土坑，集石などがある。濠状遺構が7世紀に遡る可能性をもつほかは，いずれも13世紀中葉ごろのものである。調査区南辺に，井戸，土坑，集石が分布し，溝および濠状遺構は調査区中央から北寄りに分布する。

濠状遺構　濠状遺構SX1は，西側にひらく弧状を呈する。断面逆梯形を呈し，幅5～8m，検出面からの深さ1m前後を測る。7～10世紀の遺物が少量出土したほかは，13世紀の遺物が主体を占めており，この時期までに埋積したものと考えられる。遺構の両端はいずれも後世に破壊されているため，全体の形状や規模については不明とせざるを得ない。仮に弧状に続いていたと推定すると，外径15m前後の円形の周濠に復原できる。この復原が正しいとすれば，埋土から出土している7世紀の須恵器を積極的に評価して，古墳終末期の円墳の周濠の一部にあたる可能性も考えられる。本部構内では古墳時代の遺構は発見されていないが，総合人間学部構内の111地点では5～6世紀の方墳が5基見つかっている〔五十川・飛野84〕。また古墳時代の遺物については本部構内でも出土しているので，今後，隣接地におけるこの時期の遺構の発見を期待したい。

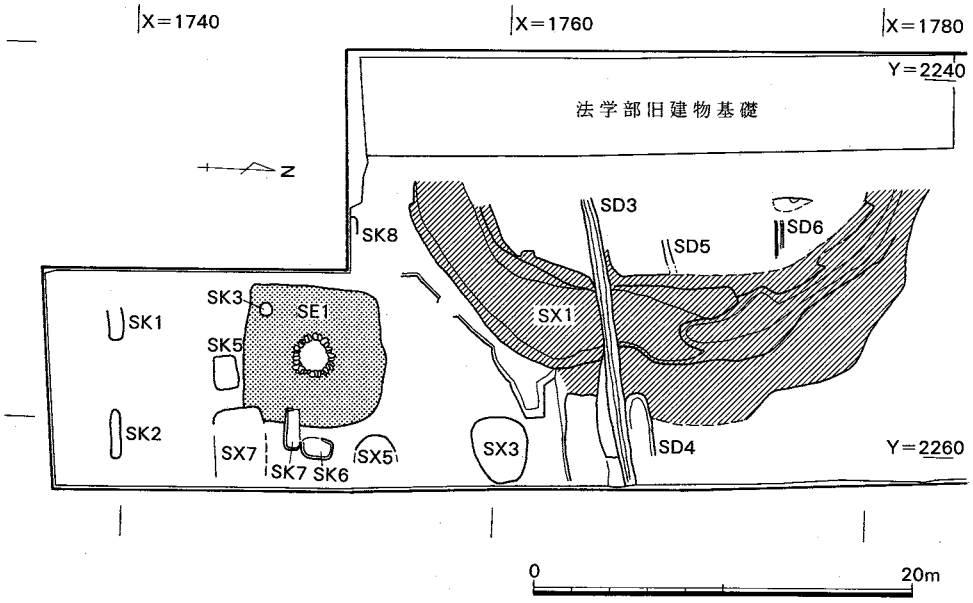


図41　古代・中世の遺構　縮尺1/400

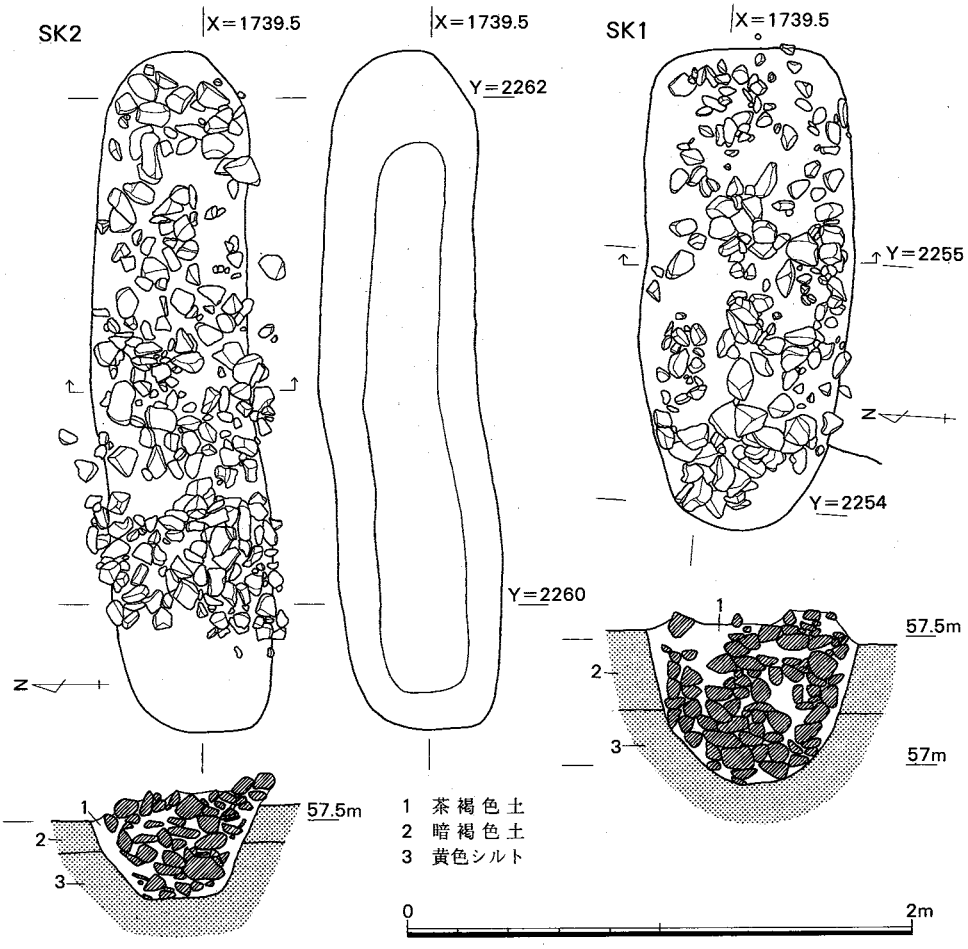


図42　土坑 SK1・SK2　縮尺 1/30

溝　溝 SD3～SD6 の東西方向にはしる 4 本の溝を確認した。SD3 はもっとも残りがよく，東端は調査区外へと続いている。幅 0.7 m 前後，深さ 1.2 m をはかる，断面 V 字形の溝である。これらの溝は，SD6 が方位を真北から 4° 西へ振るほかは真北から 12° 前後，西へ振っている。

井　戸　井戸 SE1 は，1 辺約 7.5 m という規模の大きな平面隅丸方形の掘形をもち，石組で井戸側を形成する。水溜部分で木製品の痕跡が確認されたが，遺存状況が悪く，構造については不明である。検出面からの深さ 6.3 m をはかる。井戸枠内の埋土からは，整理箱33箱に及ぶ，土師器を中心とした多量の遺物が出土した。

土　坑　土坑 SK1・SK2・SK5 は，いずれも多量の礫で充填している土坑である。

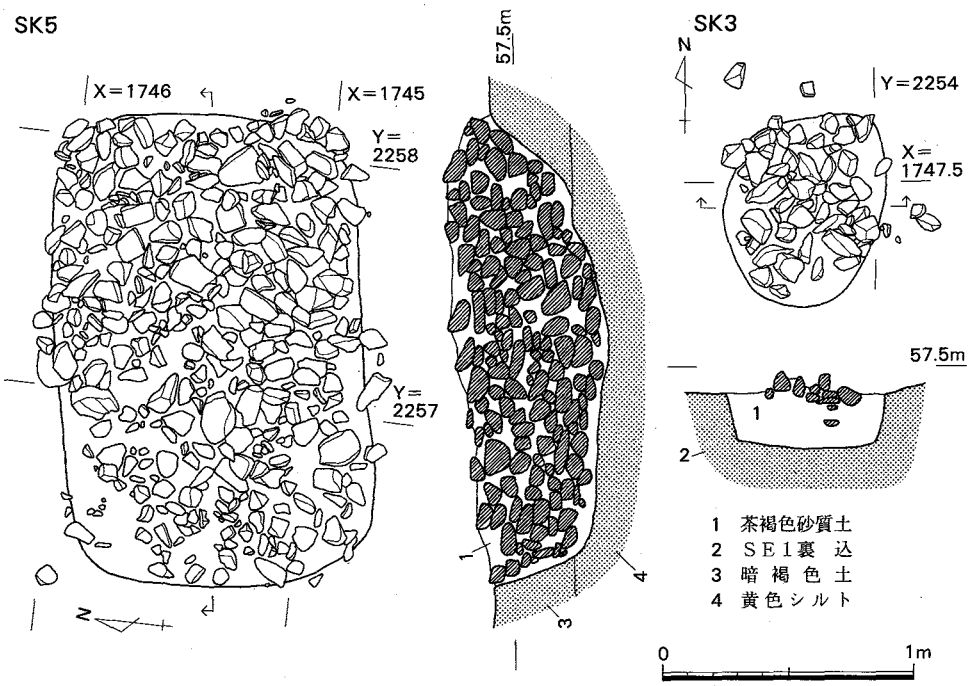


図43　土坑 SK3・SK5　縮尺 1/30

SK1 は長さ 1.85 m，幅 0.8 m，深さ 0.7 m，SK2 は長さ 2.7 m，幅 0.65 m，深さ 0.5 m，SK5 は長さ 1.9 m，幅 1.2 m，深さ 0.6 mを測る。SK1 より鉄釘が 1 本出土したほかは，いずれも土師器小片が出土したのみである。SK1・SK2 については，土壌の成分分析をおこなった。この結果については，第 6 節を参照されたい。

SK3 は上面に集石をもつ土坑。径 0.7 m 前後の不正円形で，深さ 0.2 m を測る。SK6・SK7 は平面隅丸長方形の土坑。SK6 は長さ 1.7 m，幅 1 m，深さ 0.2 m，SK7 は長さ 2.2 m，幅 0.9 m，深さ 0.2 mを測る。SK6 は埋土に炭化物を多量に含んでいた。SK8 は後世の破壊を受け，また調査区南壁で一部を検出したにとどまるため，規模や構造は不明であるが，副葬品と思われる完形の青磁皿 2 枚が出土した。以上の土坑のうち，SK1，SK2，SK5，SK7 は長軸を東西方向にもち，SK6 は南北方向に長軸をもつ。これらの土坑は，規模，形態からみて墓の可能性が高いと考えている。一方，SX3，SX5 は不正円形の浅い土坑状の落ち込みで，性格は不明である。

集　石　SX7 は，幅 2.7 m，長さ 4.4 m の平面隅丸長方形で，深さ 0.1 m 前後の浅い掘り込みをもつ。この範囲に人頭大から拳大の礫が集中していた。

(2) 古代・中世の遺物（図版25～27，図44～図49，表１）

中世の包含層と遺構からは，整理箱約60箱の遺物が出土し，その中には古代の遺物も含まれていた。以下，SX1，SK8，SE1 出土遺物について説明する。また，特定の遺構に伴うものではないが，包含層などから瓦がかなり出土したので，第３項で説明する。

SX1 出土遺物（Ⅲ120～Ⅲ144，Ⅲ149～Ⅲ151）　Ⅲ120～Ⅲ133は中世の土師器。Ⅲ120～Ⅲ126は赤褐色，Ⅲ127・Ⅲ128・Ⅲ130・Ⅲ132・Ⅲ133は灰白色を呈する．Ⅲ120～Ⅲ123・Ⅲ125・Ⅲ126は１段撫で面取り手法 D_5 類，Ⅲ124は D_3 類のⅢ，Ⅲ127は D_5 類，Ⅲ128は D_3 類，Ⅲ130は E_2 類の椀である。Ⅲ132・Ⅲ133は受Ⅲ。Ⅲ129は吉備系土師器椀，Ⅲ131は吉備系土師器Ⅲ。岡山市鹿田遺跡のⅢ-2期にあたる〔山本93〕。Ⅲ134～Ⅲ136は須恵器杯蓋。Ⅲ134・Ⅲ135は，かえりがあり，Ⅲ134には退化した宝珠状つまみがつ

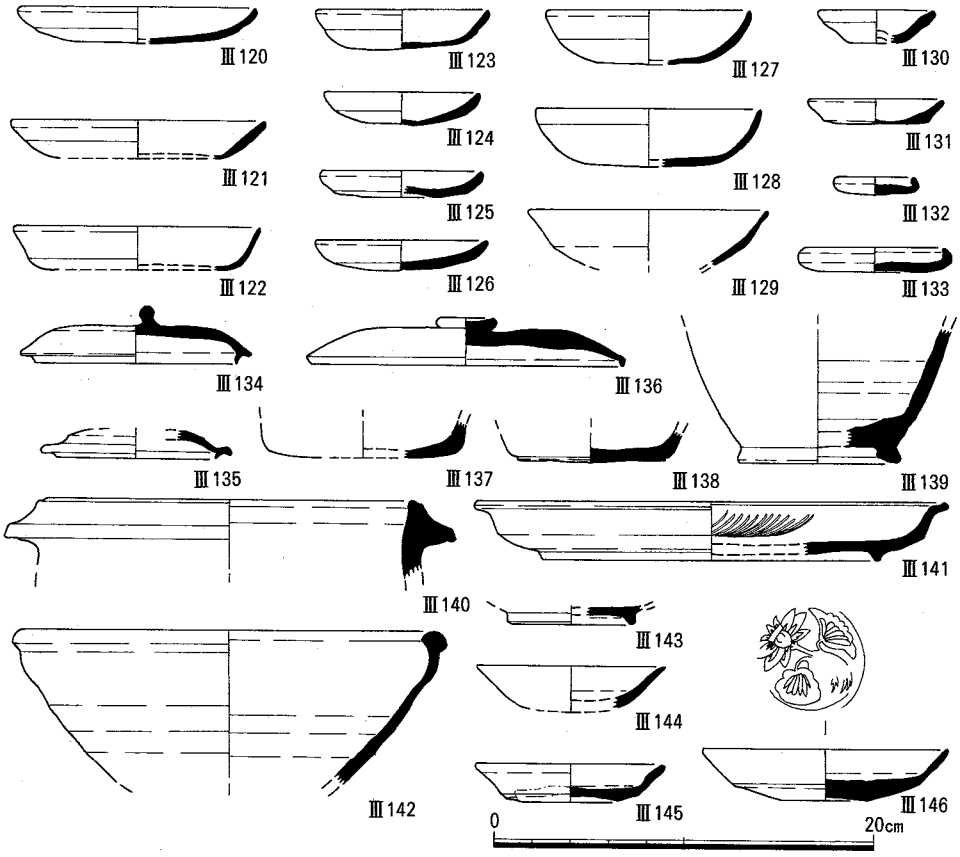


図44　SX1 出土遺物（Ⅲ120～Ⅲ133・Ⅲ140・Ⅲ141土師器，Ⅲ134～Ⅲ138・Ⅲ142須恵器，Ⅲ139灰釉陶器，Ⅲ143・Ⅲ144青磁），SK8 出土遺物（Ⅲ145・Ⅲ146青磁）

く。Ⅲ136は偏平なつまみがつき，上面には自然釉がかかる。Ⅲ137・Ⅲ138は須恵器杯Ａの底部。Ⅲ138は底部を篦切りしたあと，粗く撫でている。Ⅲ139は猿投窯産の灰釉長頸壷。外面に灰釉の流れがみられる。Ⅲ140は土師器羽釜。Ⅲ141は土師器皿Ｂ。底部に螺旋文，口縁部内面に１段の斜放射状暗文が施され，口縁部外面下半と底部外面には磨きが施される。Ⅲ142は須恵器すり鉢。Ⅲ143は青磁椀の底部。Ⅲ144は青磁皿。Ⅲ149・Ⅲ150は鉄釘。Ⅲ151は用途不明の鉄製品。平面Ｕ字形をなすが，左右の幅が異なる。断面をみると，内側より外側が薄い。このほか鉄滓が約20個出土した。

SX1 は，Ⅲ134～Ⅲ142のように７～10世紀の遺物も含むが，全体からみれば少量であり，2次的な堆積であると考えられる。Ⅲ120～Ⅲ133・Ⅲ143・Ⅲ144は，SX1 埋没時の遺物と思われ，おおむね中世京都Ⅰ期新段階にあたる。

SK8 出土遺物（Ⅲ145・Ⅲ146）　Ⅲ145・Ⅲ146は青磁皿。Ⅲ145は体部下半から底部にかけては釉がかからず，内外面とも無文。Ⅲ146は内面に蓮華を薄肉彫りで表す。釉は底部外面にのみかからず，目付痕が残る。

SE1 出土遺物（Ⅲ147・Ⅲ148・Ⅲ152～Ⅲ231）　SE1 から出土した土器は，口縁部計測法で完形品に換算して，約840個体分である。

Ⅲ152～Ⅲ171は山城産の手づくね土師器。Ⅲ152～Ⅲ162は赤褐色を呈する。Ⅲ152～Ⅲ155は皿ＡⅠ。口径は 13 cm にピークがあり，12 cm のものも多い。１段撫で面取り手法 D_3 類（Ⅲ152）が31.0％，D_5 類（Ⅲ153～Ⅲ155）が69.0％を占める。Ⅲ157～Ⅲ161は皿ＡⅡ。口径は８cm にピークがあり，９cm のものも多い。D_3 類（Ⅲ158～Ⅲ160）が58.0％，D_5

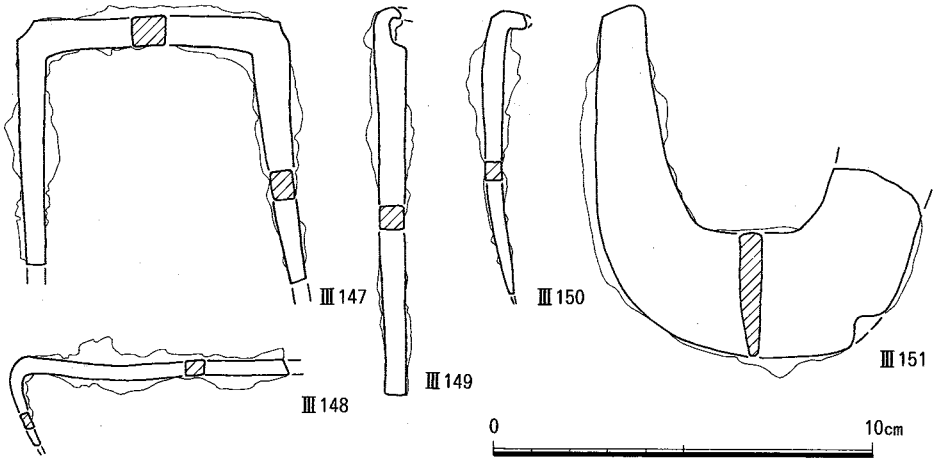


図45　SE1 出土鉄器（Ⅲ147・Ⅲ148鎹），SX1 出土鉄器（Ⅲ149・Ⅲ150釘，Ⅲ151用途不明製品）

類（Ⅲ157・Ⅲ161）が42.0％を占める。Ⅲ156・Ⅲ162は受皿。外径は8cm前後。Ⅲ163～Ⅲ171は灰白色を呈する。Ⅲ163～Ⅲ166は椀AⅠ。口径は11cmにピークがあるが，12・13cmのものもかなりある。Ⅲ163はD_3類，Ⅲ164～Ⅲ166はD_5類。Ⅲ167～Ⅲ170は椀AⅡ。口径は9cmにピークがあり，器高に深浅がある。Ⅲ171は受皿。外径は8cm前後。これらの土師器皿・椀は，口縁部計測法で総計718.8個体で，皿が90.6％，椀が9.4％である。口径や口縁部形態，皿と椀の比率などからみて，これらの土師器は，中世京都Ⅰ期中段階にあたると考えられる。

Ⅲ176～Ⅲ181は吉備系土師器。Ⅲ176～Ⅲ179は椀。色は褐色～灰白色で，径3mm前後の石英粒を含む。体部中程に稜をもち，そこからやや外反ぎみに口縁部にいたるものが多いが，内湾ぎみに立ち上がるものもある。口縁部外面には横撫でが残り，見込み部に重ね焼き痕が残るものがある。口径は12～13cmの間である。Ⅲ180・Ⅲ181は皿。灰白色を呈し，径2～3mmの石英粒を含む。体部内外面は回転撫で，底部内面は定方向撫で。底部は回転篦切りで，篦切り痕を残すものと，その上を撫でるものがある。これらの土器は岡山市鹿田遺跡のⅢ-2期にあたる〔山本93〕。

Ⅲ183・Ⅲ185・Ⅲ187は，栗栖野瓦窯や南庄田瓦窯付近での生産が想定される「白色土

表1　SE1出土土器計測結果

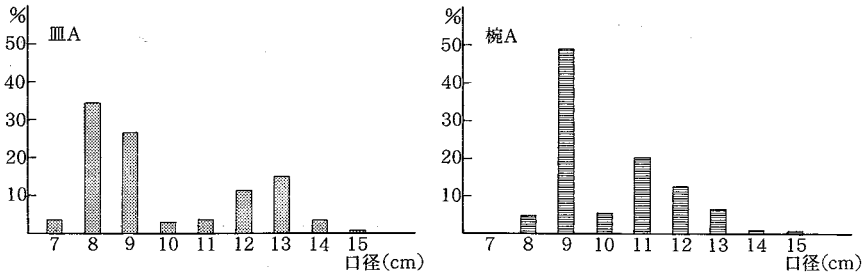
土師器口縁部形態の比率

	皿AⅡ 436.2個体	皿AⅠ 215.1個体	椀AⅡ 34.2個体	椀AⅠ 33.4個体
D_3類	58.0％	31.0％	64.6％	47.1％
D_5類	42.0％	69.0％	35.4％	52.9％
合　計	100.0％	100.0％	100.0％	100.0％

種類別の比率

山城産土師器（皿・椀）	95.54％
搬入土師器（皿・椀）	2.59％
瓦　器（皿・椀）	0.98％
瓦　器（鍋・盤）	0.60％
そ の 他	0.29％
合　計	100.00％

土師器口径の度数分布



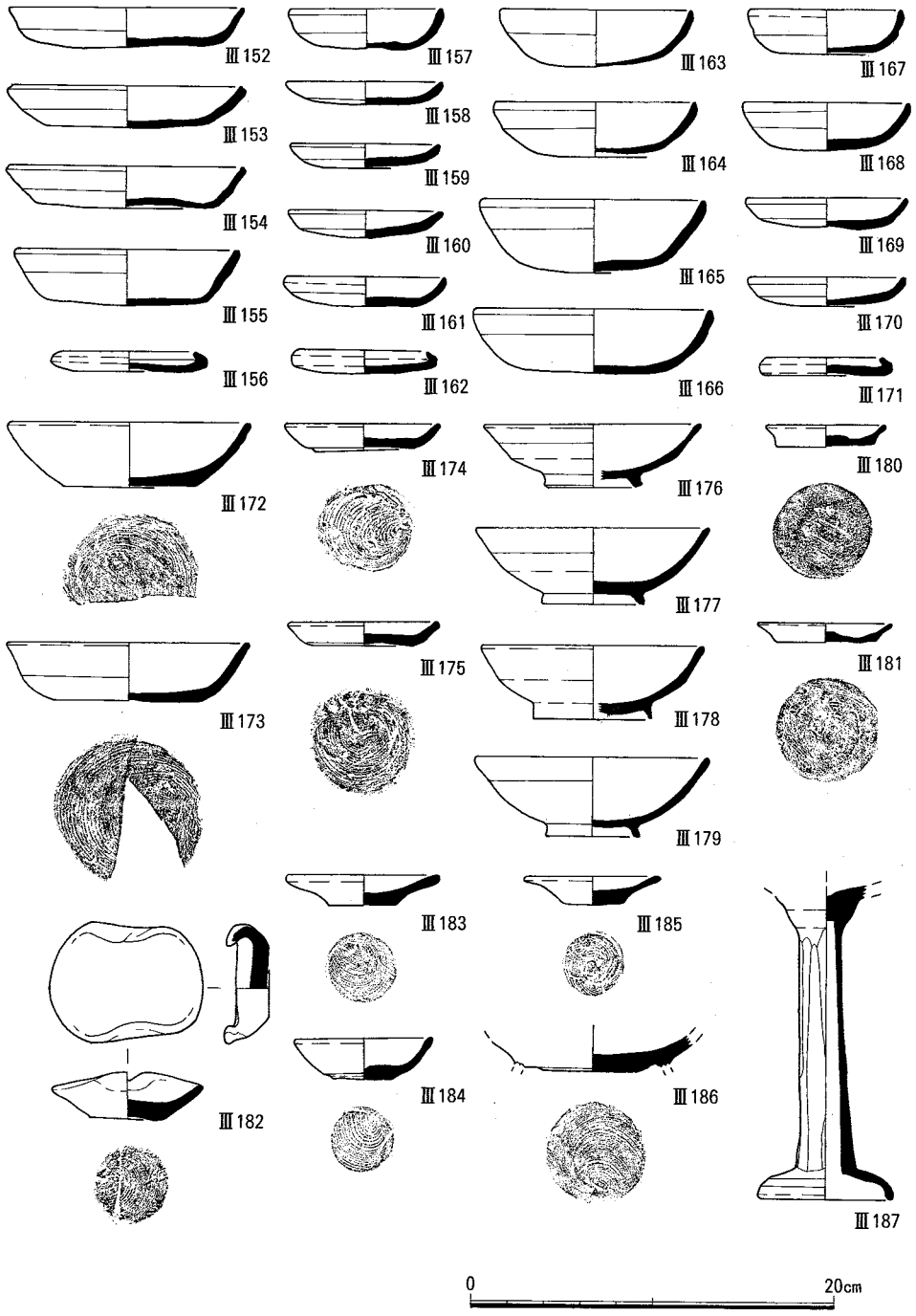


図46　SE1 出土遺物(1)（Ⅲ152～Ⅲ187土師器）

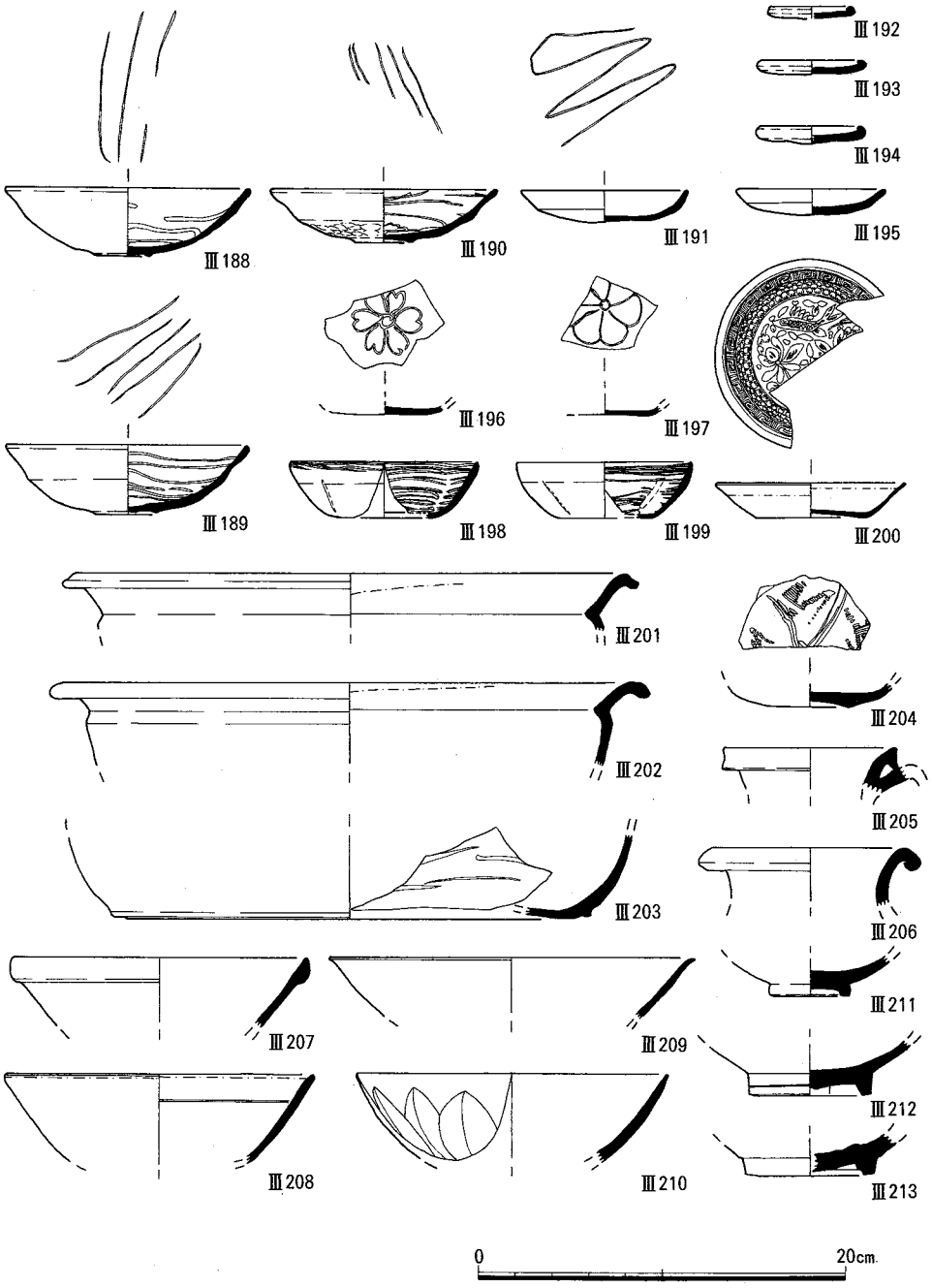


図47　SE1 出土遺物(2)（Ⅲ188～Ⅲ199瓦器，Ⅲ200青白磁，Ⅲ201～Ⅲ203黄釉陶器，Ⅲ204・Ⅲ210・Ⅲ211青磁，Ⅲ205～Ⅲ209・Ⅲ212・Ⅲ213白磁）

器」。にあたる〔京都市文観局93・95〕。Ⅲ183・Ⅲ185は高杯の杯部と似た形状をもつ口径が8 cm 前後の皿。Ⅲ187は高杯の脚部。

Ⅲ172～Ⅲ175・Ⅲ182・Ⅲ184・Ⅲ186は，体部を回転撫でで調整し底部を回転糸切りする特徴をもつ，灰白色～褐色の土師器。Ⅲ172・Ⅲ173は，口径 13.5 cm 前後の杯。回転撫では体部内面から底部内面までおよぶが，外面は体部上半までのものが多い。Ⅲ174・Ⅲ175は，口径 8.5 cm 前後の皿。Ⅲ182は耳皿。Ⅲ184は体部が内湾ぎみに立ち上がる皿。Ⅲ186は高台付きの皿。

Ⅲ188～Ⅲ199は瓦器の椀・皿類。Ⅲ188～Ⅲ190は大型の椀。外面には暗文がなく，体部内面には粗い螺旋状暗文，見込みにはジグザグ状の暗文が施され，高台は形骸化している。和泉型瓦器椀と思われる。Ⅲ196～Ⅲ199は，体部を輪花状にする小型の椀。体部内面には螺旋状の暗文，見込みには花文状の暗文を施す。口縁部外面は，わずかに暗文を施すものと暗文のないものがある。Ⅲ191・Ⅲ195は皿。Ⅲ191は見込みにジグザグ状の暗文があり，外面では粘土紐巻き上げ痕が，一部分観察される。Ⅲ192～Ⅲ194は小型の受皿。

Ⅲ200～Ⅲ213は輸入陶磁器類。Ⅲ200は口禿の青白磁印花皿。見込みに魚藻文の浮文をもつ。Ⅲ201～Ⅲ203は黄釉陶器盤。Ⅲ201・Ⅲ202は平縁の口縁部。内面と口縁部外面に灰白色釉がかかり，その上から内面の口縁部直下まで黄釉をかける。Ⅲ203は体部から底部にかけての破片。内面に鉄絵で草葉状の文様が描かれる。Ⅲ204・Ⅲ210・Ⅲ211は青磁。Ⅲ204は内面に櫛歯によるジグザグ文様が施される皿。Ⅲ210・Ⅲ211は外面に蓮弁文を施す椀。Ⅲ211は高台内面のみ露胎にし，畳付には目付痕が残る。Ⅲ205～Ⅲ209・Ⅲ212・Ⅲ213は白磁。Ⅲ205・Ⅲ206は壷の口縁部。Ⅲ205には把手がつく。Ⅲ207は玉縁をもつ椀で，内面および体部外面上半に灰白色の釉がかけられる。Ⅲ208は口禿の椀で，青色を帯びた灰白色の釉が内外面にかかり，体部内面の上半に1条の沈線がめぐる。Ⅲ209は口縁端部が小さく外反する椀。釉は内外面にかかる。Ⅲ212・Ⅲ213は椀の底部で，見込みの釉を輪状にかき取っている。

Ⅲ214・Ⅲ215は須恵器すり鉢。Ⅲ214は底部に糸切り痕を残し，Ⅲ215は口縁上端をつまみあげる。Ⅲ216は瓦器蓋。Ⅲ217・Ⅲ218は灰釉陶器。Ⅲ217は鉢の底部で，底部は回転糸切り。Ⅲ218は猿投窯産の灰釉椀。内面にのみ施釉し，高台は断面が台形から三日月形へと移行する形を示す。Ⅲ220～Ⅲ223は灰釉系陶器。Ⅲ220は猿投窯産の小皿。底部は回転糸切りで，内面には灰釉が一部かかる。Ⅲ221・Ⅲ222は，しっかりした三角高台をもつ渥美窯産と思われるもの。Ⅲ223は胎土に砂粒を多く含み，回転糸切りした底部に低い高台

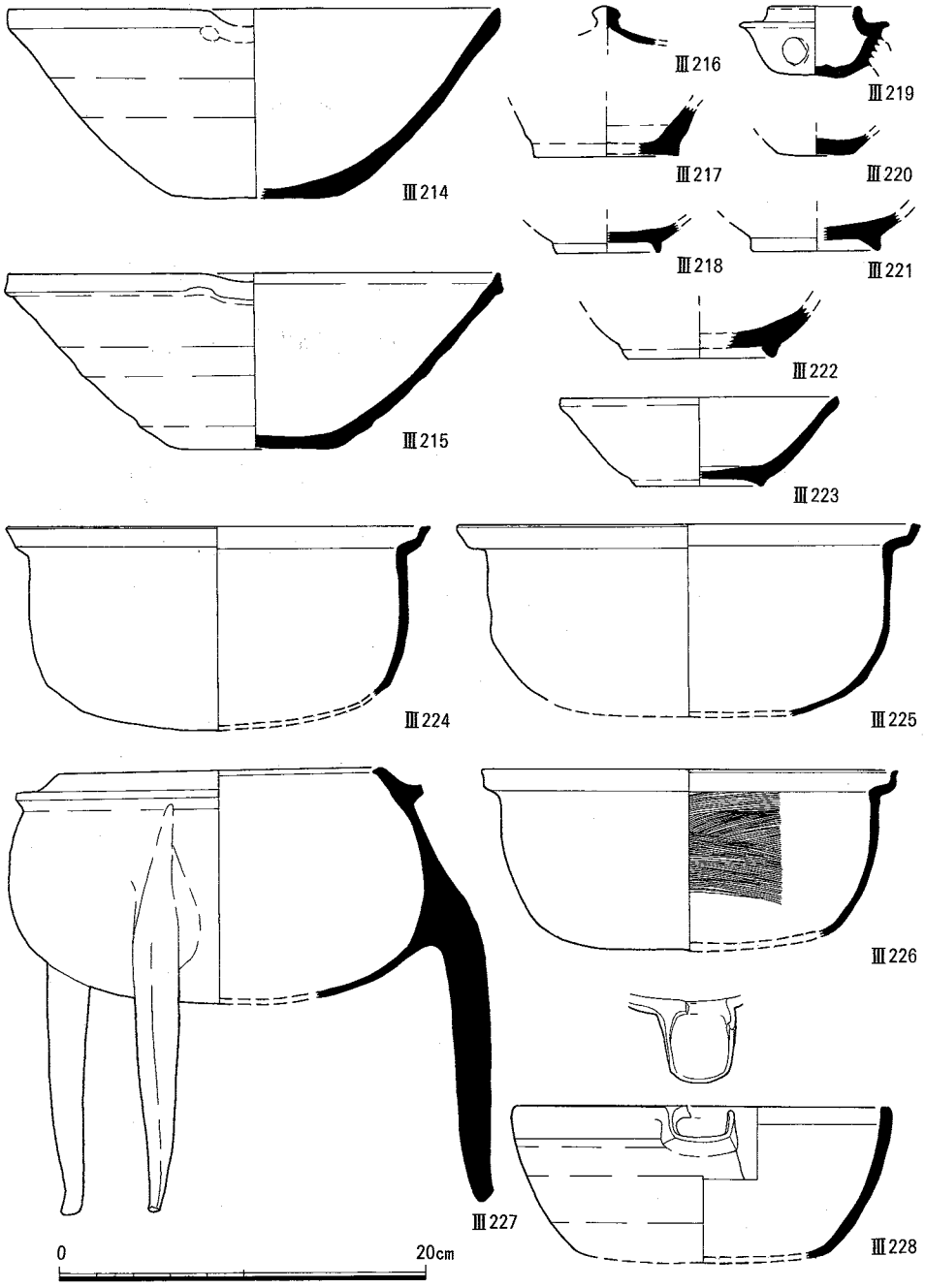


図48　SE1 出土遺物(3)（Ⅲ214・Ⅲ215須恵器，Ⅲ216・Ⅲ219・Ⅲ224～Ⅲ228瓦器，Ⅲ217・Ⅲ218・Ⅲ220～Ⅲ223灰釉系陶器）

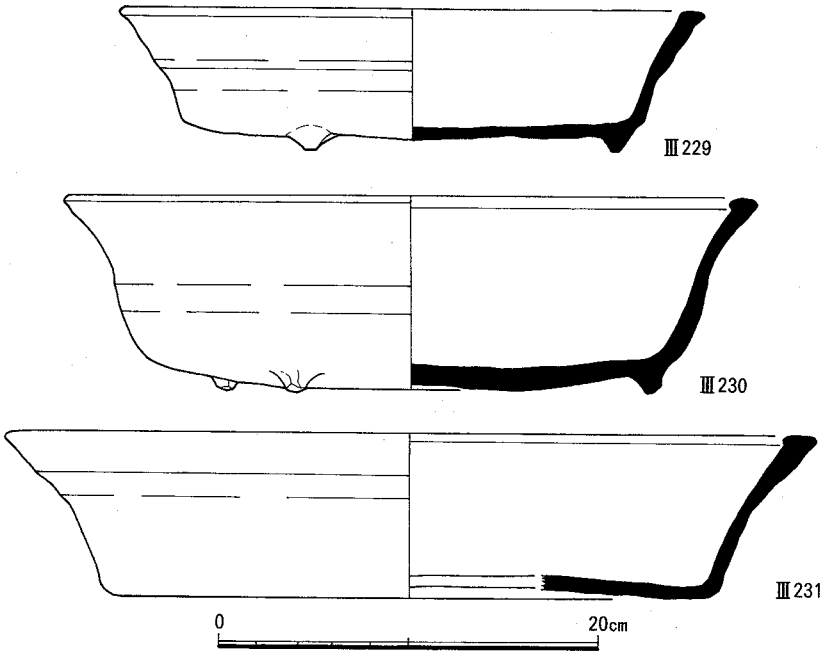


図49　SE1 出土遺物(4)（Ⅲ229～Ⅲ231瓦器）

を貼り付ける。Ⅲ219は瓦器小型の羽釜。口縁部を除き外面には煤が付着している。Ⅲ224～Ⅲ226は瓦器鍋。Ⅲ226は内面に横方向の刷毛目が残る。Ⅲ227は瓦器三足羽釜。Ⅲ228は瓦器片口付き鍋。Ⅲ229～Ⅲ231は瓦器盤。Ⅲ229・Ⅲ230は底部に突起状の脚が3ヶ所つく。Ⅲ147・Ⅲ148は鉄鏃。このほか，馬骨，貝，銅銭などが出土した。

(3)　瓦　　類（図版28～31，図50～55，表2）

今回の調査では，軒丸瓦37点，軒平瓦36点をはじめとして，整理箱で約8箱分の瓦が出土した。瓦は，その大部分が茶褐色土から出土しており，とくに調査区中央付近に比較的集中している。また，SE1やSX1など中世の遺構からも出土している。各遺物の出土地点については，表2を参照されたい。

軒丸瓦（Ⅲ232～Ⅲ247）　Ⅲ232・Ⅲ233は同文の宝相華文軒丸瓦だが，笵は異なるようである。宝相華文が便化したものを内区におき，外区に24個の珠文をめぐらす。丸瓦外面には，縦方向の縄目叩きが施される。Ⅲ232の瓦当裏面には掌圧痕が残る。

Ⅲ234・Ⅲ235・Ⅲ237・Ⅲ239は蓮華文軒丸瓦。Ⅲ239は単弁八葉の蓮華文で，中房に1＋4の蓮子をもつ。瓦当側縁は細かい斜格子叩きが施される。胎土には砂粒が多く含まれる。Ⅲ234はⅢ239と同一意匠と思われるが，瓦当の径が大きい。側縁は指押さえで調整

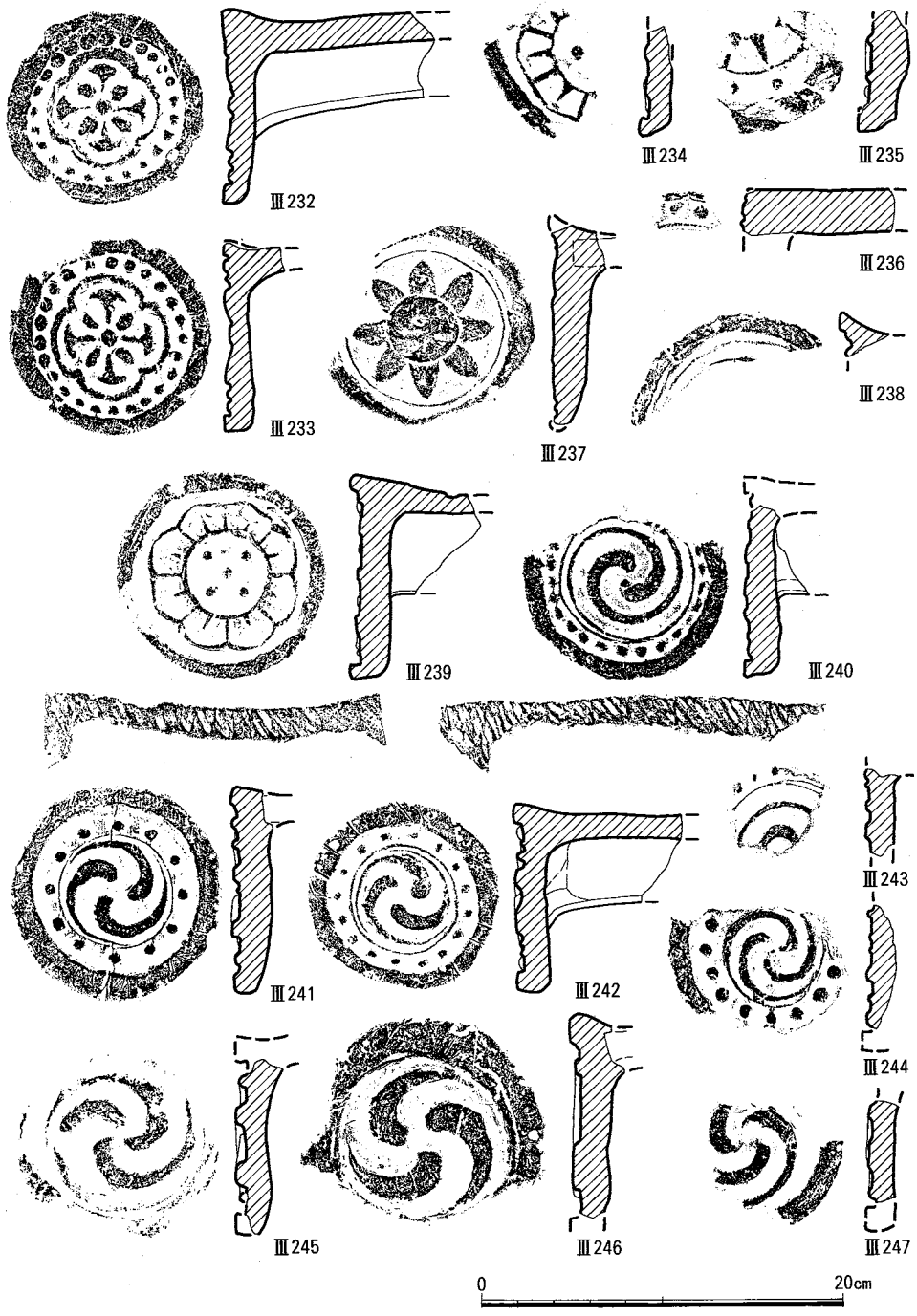


図50　軒丸瓦（Ⅲ232～Ⅲ247）

される。Ⅲ235は内区が八葉で外区に珠文をめぐらす。Ⅲ237は素弁八葉で，蓮華文の外に一条の圏線をめぐらす。同一意匠の例は多いが，その中でも便化が進んでいる。

Ⅲ238・Ⅲ240～Ⅲ247は巴文軒丸瓦。Ⅲ240は外区に珠文をめぐらす右巻二巴で，側縁はⅢ239と同様の細かい斜格子叩きが施され，胎土・色調も類似する。Ⅲ241～Ⅲ244は外区に珠文をめぐらす右巻三巴のもの。Ⅲ238・Ⅲ245～Ⅲ247は外区がないもので，Ⅲ238は右巻，Ⅲ245は右巻三巴，Ⅲ246・Ⅲ247は左巻三巴のもの。

Ⅲ236は周縁に珠文をめぐらすものであるが，瓦当は欠落しており主文様は不明である。

軒平瓦（Ⅲ248～Ⅲ265）　Ⅲ248～Ⅲ251は半折り曲げ技法によるもの。瓦当の文様は，Ⅲ248が花弁状の剣頭文，Ⅲ249は斜格子文，Ⅲ250は左巻三巴の巴文とX字文を組み合わせたもの，Ⅲ251は唐草文。平瓦凹面には布目痕が残り，凸面は縦方向に撫でられる。Ⅲ249の瓦当裏側には，3本の短い斜線からなる篦記号が施される。

Ⅲ252～Ⅲ265は完全な折り曲げ技法によるもの。Ⅲ252・Ⅲ254～Ⅲ259は唐草文。Ⅲ252とⅢ254は，瓦当文様は異なるが，砂粒の多い胎土で，色調は赤褐色ないし灰黒色を呈し，平瓦凸面は細かい斜格子叩きで，篦記号も共通する。Ⅲ252は凸面に細かな斜格子叩きと正格子叩きが重複する。Ⅲ255は瓦当裏面に一部布目痕が残るが，ほとんど撫で消される。瓦当上端を5本以上縦に刻んだ篦記号がある。Ⅲ256は瓦当裏面のしわ部分を横方向に強く撫でている。Ⅲ257～Ⅲ259は同文と思われるが，Ⅲ257・Ⅲ258とⅢ259では，平瓦自体の厚さが違い，瓦当部の断面形も異なる。瓦当裏面に，布目圧痕・折りじわ共によく残るが，一部は指押さえで消される。

Ⅲ260～Ⅲ265は剣頭文。Ⅲ261は平瓦凹面に篦記号「×」が2個刻まれる。Ⅲ261・Ⅲ264は，瓦当裏面の折りじわを横撫で調整する。Ⅲ260は剣頭文と花文を組み合わせたもの。Ⅲ253は波文をほどこす。

道具瓦（Ⅲ275・Ⅲ276）　Ⅲ275は垂木先瓦。周囲に複線鋸歯文をめぐらせた中に，いわゆる「結紐文」を配するもので，京都市山科区法琳寺〔小野山68，京博78，廣田89 p. 78〕，小栗栖瓦窯跡〔平安博物館85，廣田89 p. 33〕，宇治市岡本廃寺〔宇治市教委87〕に類例がある。

Ⅲ276は平瓦のように湾曲した磚状の形態で，端面に宝相華文を表すものだが，具体的な用途は不明である。凹凸面は篦削りが施される。

丸　瓦（Ⅲ266～Ⅲ270）　丸瓦は小破片が多く，全体の形状を知ることのできる資料はほとんどないが，凸面の叩き・玉縁の形状・胴部の厚さ・胎土・色調から，以下のよう

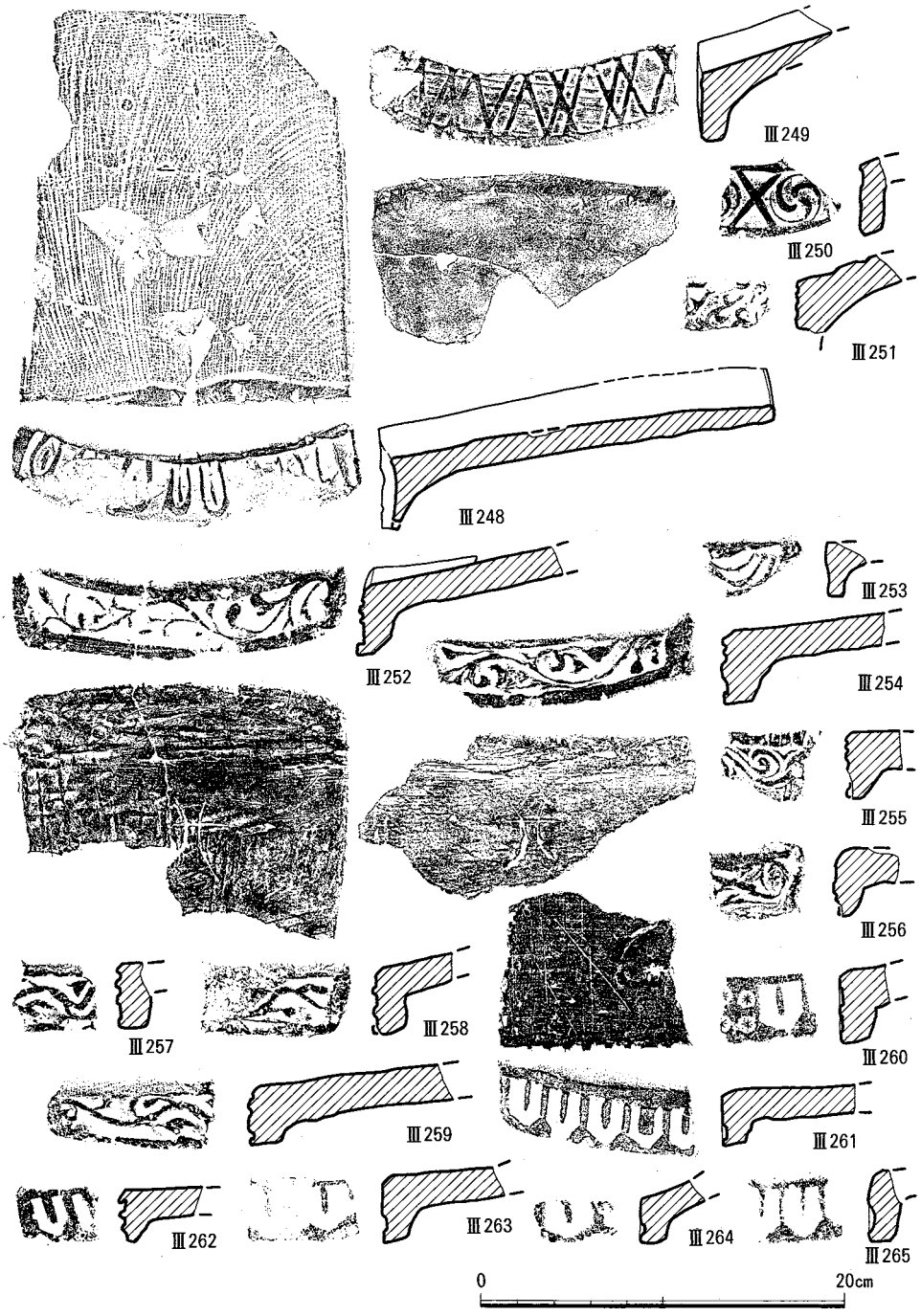


図51　軒平瓦（Ⅲ248～Ⅲ265）

に大別できる。

A（Ⅲ266） 凸面に粗い斜格子叩きが施されるもので，胎土に砂粒を多く含み，黄褐色ないし黒褐色を呈する。厚さは1.1 cm前後で，玉縁端面凹面側は面取りされない。玉縁端面に縦線を数本刻んだ篦記号が施される例がある。

B（Ⅲ267） Aと同様の胎土・色調・厚さで，凸面に縄目叩きが施される。玉縁端面に篦記号をもつ例がある点も同じである。

C（Ⅲ268） 凸面は縄目叩きで，玉縁と胴部の境界の段，および玉縁端面凹面側を面取りする。凹面には糸切り痕をはっきり残すものが多い。灰白色ないし灰黒色を呈し，厚さは1.1～1.3 cm前後。砂粒は多く含まない。

D（Ⅲ269） 凸面は縄目叩きで，青灰色ないし灰色を呈し，厚さ1.3～1.4 cm前後で，Cよりも大振りのもの。砂粒を多少含む。玉縁端面凹面側の面取りの有無や，縄目叩きの原体の違いから，さらに細分されうる。凸面に篦記号をもつ例がある。

E（Ⅲ270） 凸面は縄目叩きを横撫ででスリ消し，厚さ1.5～2.8 cmで，Dよりもさらに大形のもの。灰色～灰白色を呈する。

具体的な数量を示し得ないが，丸瓦A～Dは，数量的に大きな差はなく，Eは非常に少ない。

平　瓦（Ⅲ271～Ⅲ274・Ⅲ277・Ⅲ278）　平瓦も，凸面の叩き・厚さ・胎土・色調をもとに，以下のように大別される。

A（Ⅲ271） 凸面に斜格子叩きが施されるもので，厚さは1.5 cm前後，胎土に砂粒を多く含み，灰褐色ないし赤褐色を呈する。凹凸面とも，横方向の削りが観察される例が多い。凹面には，削り痕を残すもの，布目痕を残すもの，縦方向に粗く磨くものがある。広端面に縦線数本を刻む篦記号をもつ例が多い。

B（Ⅲ278） 凸面に縄目叩きが施されるが，胎土・色調・厚さ・凹面調整などはAと同じもの。広端面に篦記号をもつ例が多い点も共通する。

C（Ⅲ272） 凸面が縄目叩きで，厚さ1.8～2.0 cmとBよりも厚く，胎土に砂粒は多く含まれず，灰白色を呈する。凸面に篦記号をもつ例がある。

D（Ⅲ273） 凸面が細かい斜格子叩きで，厚さ1.5 cm前後，砂粒を多少含み，赤褐色ないし灰白色を呈するもの。

E（Ⅲ277） 凸面に叩き痕が残らず凹面凸面に糸切り痕がよく残るもので，厚さが1.0 cm前後と薄いもの。灰白色を呈し，多少砂粒を含む。広端面に「/\」状の篦記号が施さ

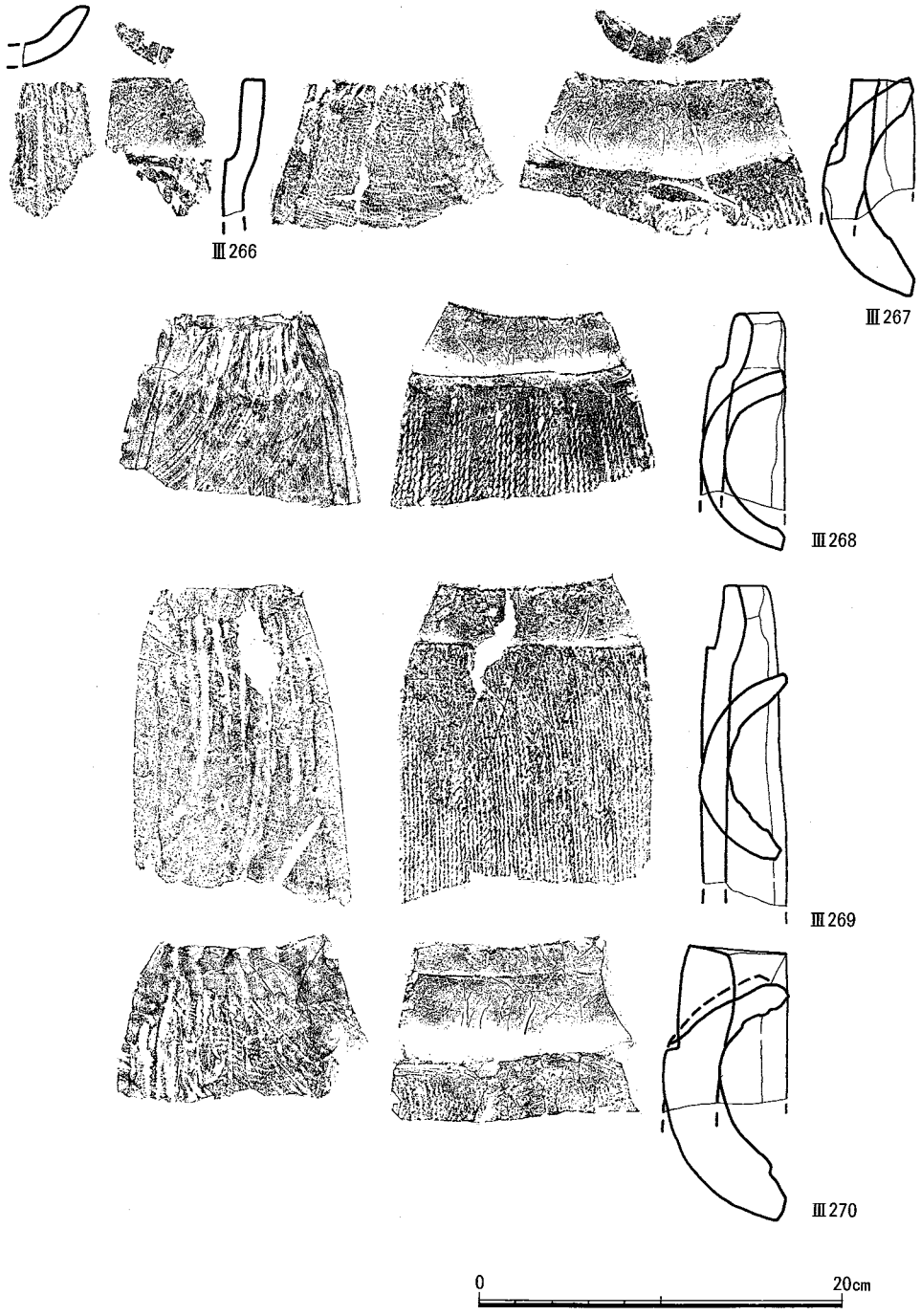


図52　丸　瓦（Ⅲ266～Ⅲ270）

れる例がある。

F（Ⅲ274） 凸面が指押さえで調整されるもので，厚さ 1.7 cm 前後，灰白色ないし灰黒色を呈し，粗い砂粒を含む。凹面に篦記号が施された例がある。

平瓦の数量については，A・B がもっとも多く，D 類がそれに続くが，残りのものはいずれも少ない。

篦記号（図55） 出土瓦の中で篦記号が確認されたものは，破片数にして132点である。

平瓦では，広端面に施文されるものが90点と圧倒的に多い。そのうち83点は縦線を刻むもので，恐らくⅢ278のように，3 カ所刻んだものが大部分と思われ，いずれも平瓦 A・B

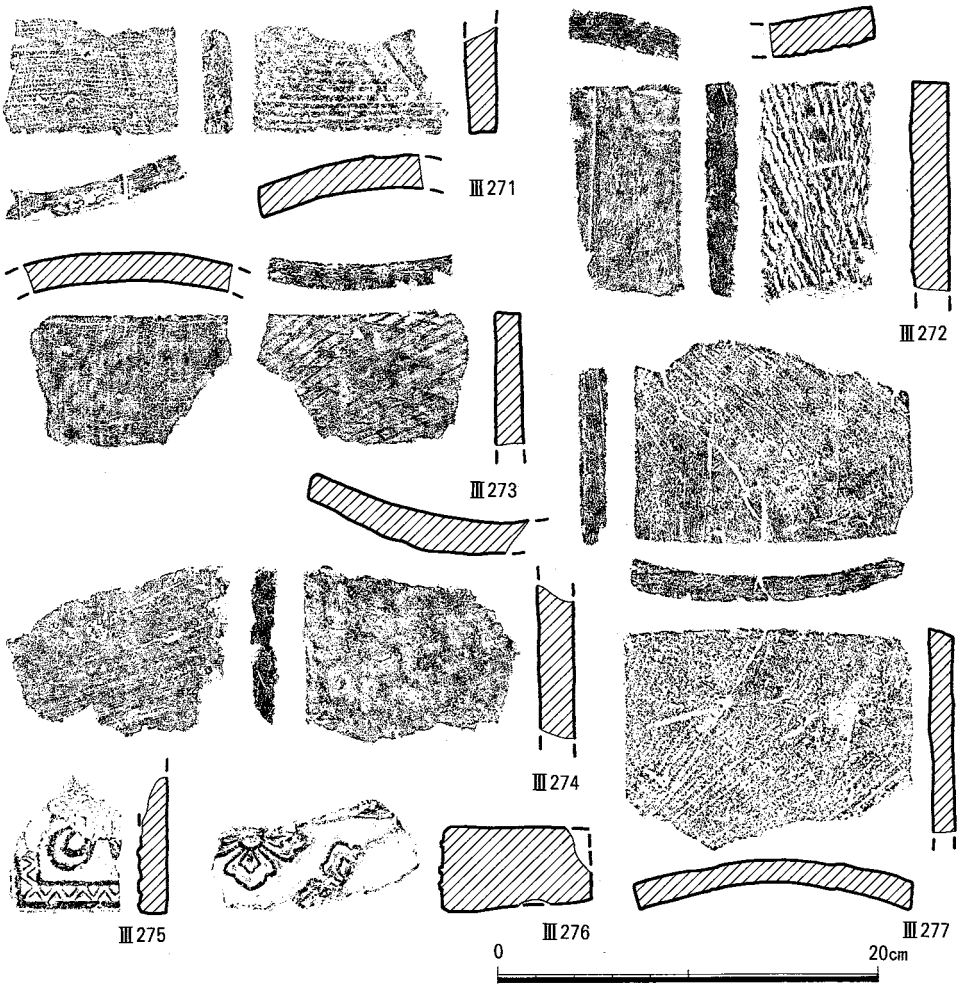


図53 平 瓦（Ⅲ271～Ⅲ274・Ⅲ277），道具瓦（Ⅲ275～Ⅲ276）

類である。それ以外の記号としては，「×」・「| |」・「/\」があり，前２者はＡ類またはＢ類，後者はＥ類である。

平瓦の凹面凸面に篦記号が施されるものは11点ある。このうち，平瓦Ｄ類凸面に刻まれる「⋔」は，軒平瓦Ⅲ252ないしⅢ254に伴なうものと思われる。この記号には，横棒を先に描くもの（３点）と，後に描くもの（５点）がある。このほか，凸面に刻まれたものとして，「=」・「≡」がある。後者は軒平瓦Ⅲ249の瓦当裏面に施されたものと類似しており，軒平瓦に伴なうものかもしれない。凹面では，平瓦Ｆ類に「⌐」が施されたものがある。また先述のように，軒平瓦Ⅲ261は，平瓦凹面に「×」が２単位刻まれる。

丸瓦では，玉縁端面に施されるものと，胴部凸面に施されるものに大別される。前者は，丸瓦Ａ・Ｂ類にみられるもので，Ⅲ267のように，縦線を２カ所に刻むものが大部分と思われる。丸瓦胴部凸面に施された記号には，「※」・「—」・「=」・「＼」・「×」などがある。いずれも丸瓦Ｄ類と思われる。

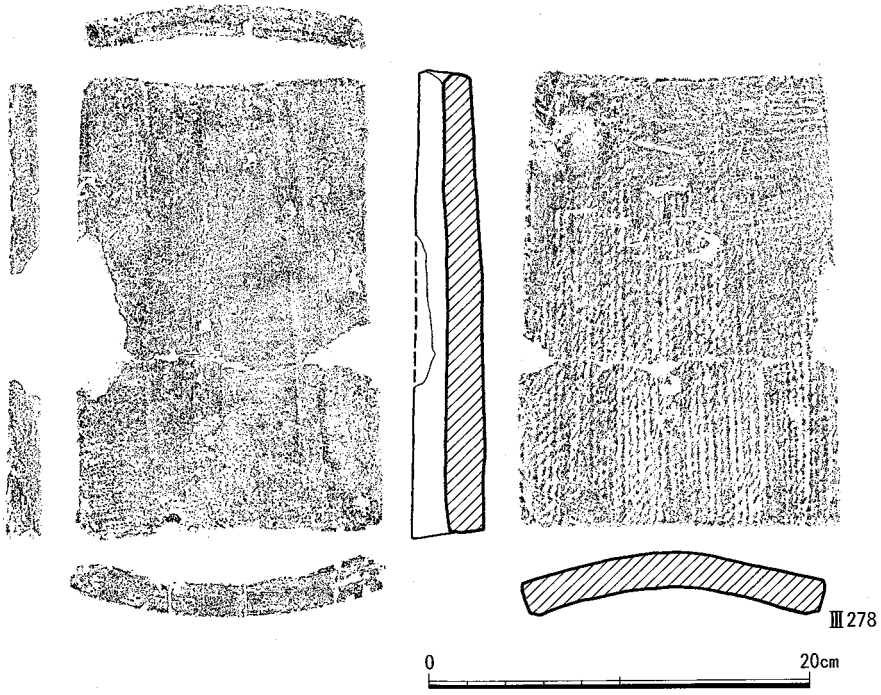


図54　平　瓦（Ⅲ278）

表 2　瓦類の出土地点

番号	出土地点	備　考	番号	出土地点	備　考	番号	出土地点	備　考
Ⅲ232	SE1		Ⅲ248	SE1		Ⅲ264	SE1	
Ⅲ233	SE1		Ⅲ249	SE1	別に同笵 1 点	Ⅲ265	AW25e1	
Ⅲ234	SE1		Ⅲ250	SX3		Ⅲ266	AX25b2	
Ⅲ235	AW25e1		Ⅲ251	AX25b2		Ⅲ267	AX25b2	
Ⅲ236	SX1		Ⅲ252	AX25b2	別に同笵 9 点	Ⅲ268	SE1	
Ⅲ237	AX25a2		Ⅲ253	AX25b1		Ⅲ269	SX1	
Ⅲ238	SE1		Ⅲ254	AX25a2		Ⅲ270	SE1	
Ⅲ239	AX25b2	別に同笵 2 点	Ⅲ255	AW25e1		Ⅲ271	AX25b2	
Ⅲ240		別に同笵 4 点	Ⅲ256	AW25e1		Ⅲ272	AX25a2	
Ⅲ241	SE1	別に同笵 3 点	Ⅲ257	AW25e1		Ⅲ273	SE1	
Ⅲ242	SE1		Ⅲ258	SK1		Ⅲ274	AX25a1	
Ⅲ243	AX25b1		Ⅲ259	SE1		Ⅲ275	AX25b1	
Ⅲ244	SX3		Ⅲ260	AX25b2		Ⅲ276	AX25a1	
Ⅲ245	AX24a5	別に同文 1 点	Ⅲ261	SE1		Ⅲ277	SX4	
Ⅲ246	SX4		Ⅲ262	AW25e1		Ⅲ278	AX25b2	
Ⅲ247	SX1		Ⅲ263	SX1				

備考：包含層出土地点は，一辺 50 m 四方の調査区（AW25 区，AX25 区）を各々，10 m 四方の小地区に分割し，南北方向にアルファベット小文字（南から a→e），東西方向に数字（西から 1→5）を付して表示している（〔京大埋文研78a，pp. 2-3〕を参照）。

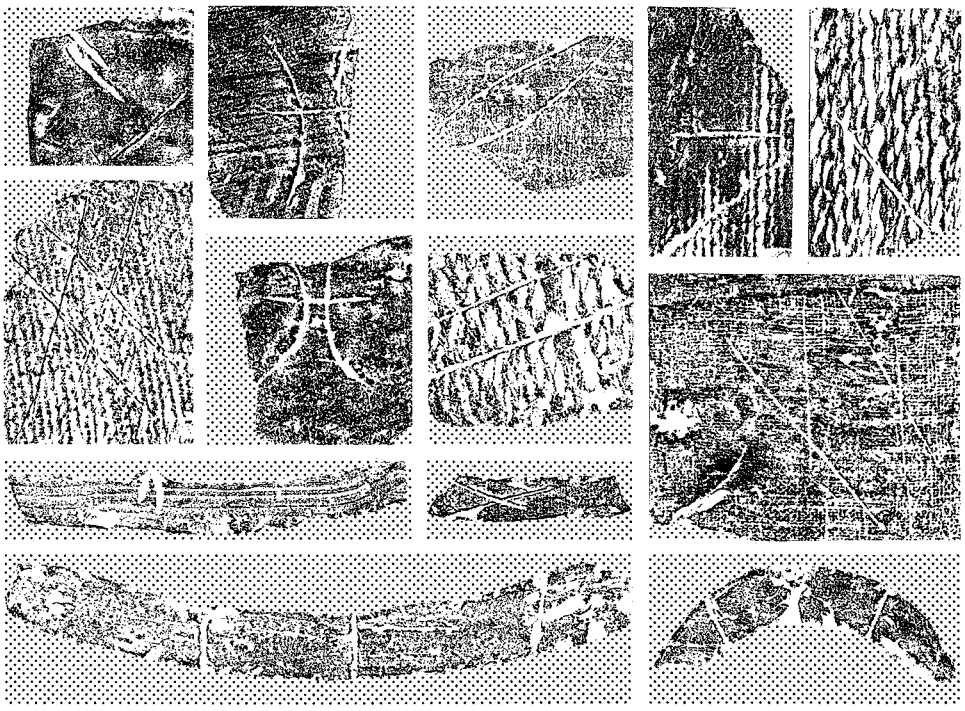


図55　篦記号　縮尺 1/2

5　近世・近代の遺跡

(1)　近世の遺跡（図56）

X＝1759付近で東西方向にのびる段差を確認した。北から南へ傾斜する地形を利用して，棚畑を形成したのであろう。茶褐色土上面で多数の柱穴を検出したが，これらはこの段差の南側の部分に集中していた。1辺20 cm前後の方形掘形で，東西方向に2.5 m前後の間隔で一直線上に並ぶものがある。方位を真北から約3°西へ振る。耕作にともなう柵列であろう。なお，幕末にこの地に設置された尾張藩邸については，関連遺構・遺物を確認できなかった。本調査区付近は，吉田御屋敷総図（名古屋市蓬左文庫蔵）に描かれた馬場付近にあたると推定している。今後，周辺地点の調査が進めば，検証することも可能となろう。

近世の遺物は，整理箱5箱を数える。土師器，陶器，磁器，土製品（伏見人形・泥面子），銭貨がある。Ⅲ279は土師器皿。見込みに浅い圏線がめぐる。Ⅲ280・Ⅲ281は無釉陶器。Ⅲ280は急須蓋。色調赤褐色。Ⅲ281は口径3.4 cmを測る秉燭（ひょうそく）である。灯心受けの剝離痕跡が内面中央にある。色調は淡褐色。Ⅲ282～Ⅲ284は陶器灯明皿。Ⅲ285～Ⅲ287は陶器灯明受皿。いずれも受け部と口縁部の高さがほぼ同じである。Ⅲ288は行平鍋の蓋。これらの遺物は，幕末を中心とする時期のものであろう。

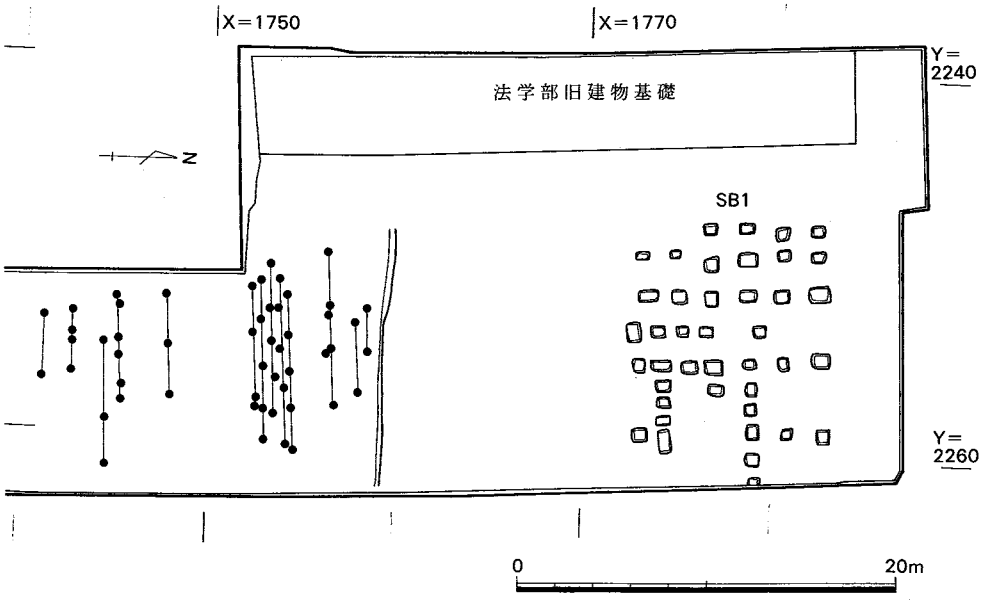


図56　近世・近代の遺構　縮尺1/400

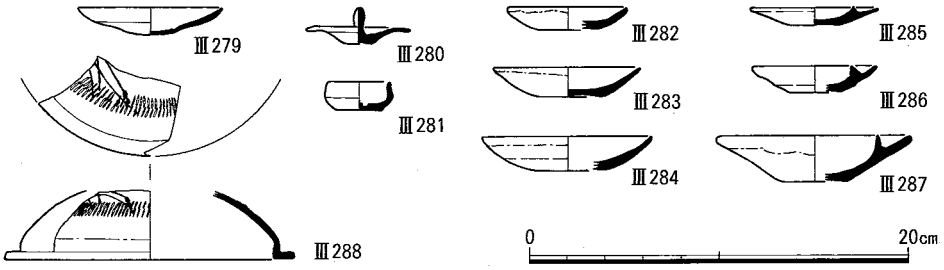


図57　灰褐色土出土遺物（Ⅲ279土師器，Ⅲ280～Ⅲ288陶器）

(2)　近代の遺跡（図56）

表土を除去した段階で，調査区西辺において法学部旧建物基礎（大正13年完成，昭和46年取り壊し），調査区北寄りで建物跡 SB1 を発見した。SB1 は東西南北に並ぶ柱穴列からなる。柱穴列は，東側については調査区外へと続いており，西側は法学部の旧建物のために，存在の有無は不明である。南北方向についても，後世の攪乱のため，並びの範囲を確定することは困難であるが，10 m 前後の並びは確認できた。柱穴は 1 辺 50～100 cm の方形掘形で，割栗石が詰まっていた。

この調査区付近は，京都大学の前身である第三高等中学校の吉田学舎が明治20年に建設された際，寄宿舎が設置された範囲にあたる。この寄宿舎は，陸地測量部によって明治25年に発行された仮製 2 万分 1 地形図に，東西方向に長い建物として描かれている（図58）。また，本学工学部建築学教室建築史研究室編『京都大学建築80年のあゆみ』（1977年）では，本調査区北辺が寄宿舎の中央付近にあたると推定している。柱穴列は，方位を北から約 3～4° 西へ振っており，これが現在の本部構内の建物群の方位に等しいことも勘案すれば，この柱穴列をもつ建物は，第三高等中学校の寄宿舎と考えることができよう。

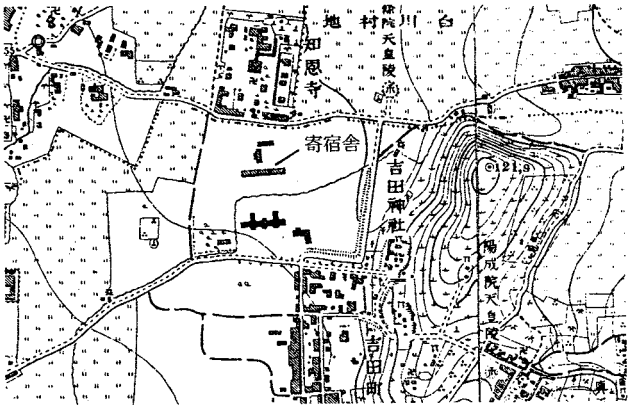


図58　地図にみえる寄宿舎
（明治25年仮製 2 万分 1）

6　土坑 SK1・SK2 の土壌分析

土坑 SK1・SK2 は，形態や規模からみて，墓壙の可能性がもっとも高いと考えられたが，骨などの直接的な証拠は得られなかった。そこで，理化学的な土壌分析から，土坑の性格を追究する手がかりが得られるかを検討するために，全炭素・全窒素および全リンの含有量の分析をおこなった。分析試料は，SK1 が11点（試料番号 SK1-1～11），SK2 が10点（試料番号 SK2-1～10）の21点である。試料の採取位置は，図59に示した。

方　法　全炭素，全窒素については，乾式燃焼法により灰化後，ガスクロマトグラフィで定量した。全リンについては，3N 過塩素酸で分解後，バナドモリブデン酸比色法で定量した。

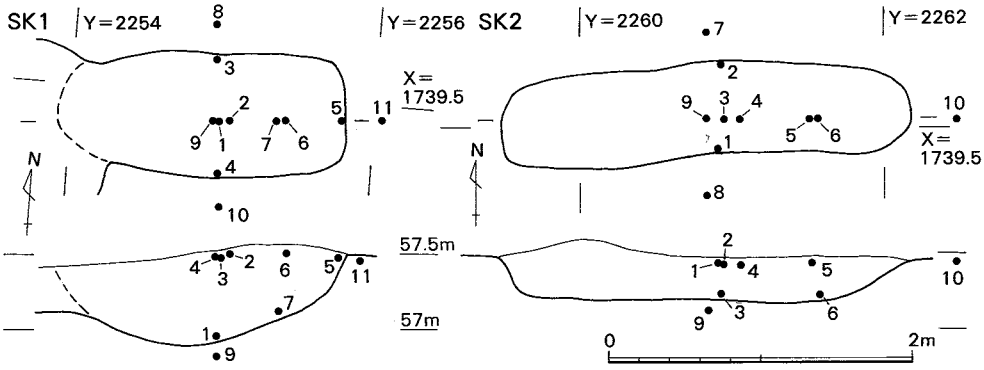


図59　試料の採取位置　縮尺 1/50

結　果　得られた結果を表3に示した。

表3　全炭素・全窒素・全リン分析結果（SK1-8～11，SK2-7～10 は土坑外の比較試料）

試料番号	全炭素 %	全窒素 %	C/N	全リン mgP/100 g
SK1- 1	0.71	0.04	17.3	118
SK1- 2	0.74	0.05	16.5	140
SK1- 3	1.03	0.07	15.2	194
SK1- 4	1.06	0.07	15.5	189
SK1- 5	1.04	0.07	14.9	189
SK1- 6	0.74	0.05	14.9	135
SK1- 7	0.68	0.05	15.0	100
SK1- 8	1.48	0.11	14.0	185
SK1- 9	1.32	0.10	13.5	198
SK1-10	0.99	0.06	16.6	158
SK1-11	0.37	0.03	13.8	90

試料番号	全炭素 %	全窒素 %	C/N	全リン mgP/100 g
SK2- 1	1.31	0.10	12.7	256
SK2- 2	0.83	0.07	11.8	198
SK2- 3	0.67	0.06	11.9	118
SK2- 4	0.97	0.07	14.9	207
SK2- 5	1.02	0.06	16.5	113
SK2- 6	0.68	0.05	13.9	113
SK2- 7	1.33	0.10	13.3	136
SK2- 8	1.06	0.08	13.7	167
SK2- 9	0.90	0.06	14.4	122
SK2-10	0.23	0.02	10.8	78

考　察　SK1・SK2のいずれの土坑においても，全炭素，全窒素量は，それらの比をとったC/N比とともに通常の土壌にみられるレベルであり，炭素・窒素からはこの部分が墓地であったことは指摘できない。一方全リンは全般的に通常みられる土壌よりかなり高く，多量に施肥を行われた畑地並みであった。この場所がおかれている状況を考えると極めて高濃度であり，何らかの形でリンが賦与されたと考えられる。とはいえ，明らかに低い値を示しているのは土坑下の試料（SK1-11，SK2-10）だけであり，土坑周囲（SK1-8～10，SK2-7～9）も土坑内部と同様に高い値を示している。つまり，高いリン濃度を土坑内に埋葬された人体のためであると推論するのは困難である。

従ってこれらの成果を総合すると，「土壌分析からは，土坑内部に人体が埋葬されていたことを積極的には言えない」というのが結論である。

7　石器石材の産地分析

暗褐色土Ⅱからは，多量の縄文土器とともに石鏃1点と石器製作過程で生じた剥片・砕片29点が出土した。石鏃および剥片・砕片はすべて，サヌカイト製であり，石器原材の産地を明らかにするため，剥片・砕片の19点について，蛍光X線分析をおこなった。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができ，試料調整が単純で測定の操作も簡単である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め，あらかじめ，各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値，分散などと遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて，各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。その分析方法については，別に詳しく論じているので，それを参照していただきたい〔藁科・東村75・83・88，東村76，藁科ほか77・78〕。

遺跡から出土した石器や石片は，風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し，新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に，圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。分析元素は，Al，Si，K，Ca，Ti，Mn，Fe，Rb，Sr，Y，Zr，Nbの12元素である。塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り，それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは，K/Ca，Ti/Ca，Mn/Sr，Fe/Sr，Rb/Sr，Y/Sr，Zr/Sr，Nb/Srの8つの比率を用いる。分析結果を表4に示した。

石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて，原石群との比較をおこない，各群に帰属する確率を求めて産地を同定する。産地推定の結果について

表 4　サヌカイト製遺物の元素比分析結果（JG-1 は，標準試料〔Ando *et al.* 74〕）

分析番号	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca	原石産地（確率）
	元素比										
1	0.316	0.203	0.058	4.202	0.220	0.062	0.603	0.027	0.013	0.115	二上山(0.1%)
2	0.288	0.231	0.075	4.996	0.195	0.058	0.630	0.020	0.012	0.104	二上山（ 4%）
3	0.289	0.233	0.071	4.890	0.207	0.063	0.642	0.000	0.010	0.111	二上山 (0.5%)
4	0.277	0.214	0.080	4.842	0.199	0.057	0.619	0.015	0.011	0.103	二上山（ 91%）
5	0.285	0.225	0.070	4.691	0.201	0.051	0.623	0.000	0.013	0.108	二上山（ 12%）
6	0.285	0.220	0.072	4.924	0.207	0.050	0.606	0.016	0.012	0.106	二上山（ 59%）
7	0.275	0.228	0.080	4.798	0.201	0.062	0.594	0.000	0.012	0.106	二上山 (0.3%)
8	0.283	0.231	0.071	4.771	0.210	0.054	0.618	0.000	0.011	0.108	二上山（ 1%）
9	0.285	0.223	0.063	4.560	0.201	0.076	0.637	0.011	0.012	0.108	二上山（ 8%）
10	0.286	0.227	0.075	5.086	0.195	0.059	0.593	0.014	0.012	0.107	二上山（ 4%）
11	0.270	0.217	0.081	4.952	0.193	0.081	0.597	0.014	0.011	0.105	二上山（ 3%）
12	0.273	0.226	0.071	4.448	0.195	0.082	0.615	0.019	0.012	0.103	二上山（ 1%）
13	0.279	0.226	0.072	4.444	0.182	0.083	0.636	0.000	0.010	0.100	二上山 (0.3%)
14	0.285	0.234	0.074	4.914	0.203	0.061	0.577	0.020	0.011	0.105	二上山 (0.1%)
15	0.282	0.227	0.070	4.808	0.211	0.080	0.634	0.024	0.012	0.109	二上山（ 1%）
16	0.280	0.227	0.074	4.526	0.195	0.072	0.630	0.016	0.013	0.107	二上山（ 5%）
17	0.252	0.205	0.081	4.845	0.196	0.056	0.576	0.034	0.011	0.096	二上山（ 4%）
18	0.281	0.227	0.074	4.741	0.208	0.050	0.554	0.008	0.013	0.110	二上山（ 1%）
19	0.275	0.224	0.063	4.434	0.209	0.058	0.620	0.000	0.011	0.100	二上山（ 2%）
JG-1	1.298	0.297	0.062	2.814	0.783	0.174	0.719	0.026	0.023	0.314	

は，低い確率で帰属された原産地は記入を省略し，高い確率で同定された産地のみの結果を記入している。原石群を作った原石試料は直径 3 cm 以上であるが，小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには，測定時間を長時間掛けなければならない。しかし，多数の試料を処理するために，1 個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり，短時間で測定を打ち切る。このため，遺物の測定値には，大きな誤差範囲が含まれ，ときには原石群の元素組成のバラツキの範囲を越て大きくなる。小さな遺物の産地推定を行なったときの判定の信頼限界は0.1%としている。

以上から，AW25 区出土の縄文後期中葉のサヌカイト製遺物の原石産地は，19点すべて二上山産地の可能性を示す判定結果を得た。ただし二上山産原石と同じ組成の原石は，和泉・岸和田産地で 6 %の確率で採取される。二上山群に同定された 1 個の遺物に注目すると和泉・岸和田産地から採取された可能性は6%での確率で伝播したと推測できる。しかし，19個全ての遺物が和泉・岸和田産地から採取された可能性は 0.06^{19} で約 10^{-21}%の非常に低い確率になることから，本遺跡出土の19個のサヌカイト製遺物には奈良県二上山産地の原石が使用されていると推測した。

8 小　　結

(1) 縄文時代の遺跡

今回の発掘調査では，縄文土器1185点，石器5点，石器製作過程で生じた剥片・砕片29点が出土した。本部構内における従来の調査では縄文時代の遺構・遺物は希薄であったので，後期中葉という時期の限定される遺物包含層を確認できたことは，隣接地点における縄文時代の遺跡の広がりを追究するうえで重要な意味をもつと思われる。

報告したように，縄文土器を純粋に包含する堆積層として暗褐色土Ⅰと暗褐色土Ⅱの2層を確認した。このうち，暗褐色土Ⅱは斜面に堆積した土層であり，Ⅲ43のように両堆積層間で接合関係が認められること，ほぼ共通する特徴をもつ土器が両層から出土していることから，この2枚の土層はそれほど時間をおかずに堆積したものと理解する。個々の土器の特徴についてはすでに記載したので，ここでは全体的な特徴をまとめて，既存の型式と対比させ編年の問題について触れてみたい。

出土土器の器種としては，有文深鉢，有文浅鉢，無文深鉢，無文浅鉢，注口土器が確認できた。表5は，両層から出土した各々の点数を示したものである。暗褐色土Ⅰも暗褐色土Ⅱもほぼ似たような構成を示しているので，両者をまとめて口縁部資料をもとに構成比率をみてみよう（同一個体は，1点として数えている）。

まず，有文土器と無文土器の比率は，有文約22%，無文約78%であり，深鉢，浅鉢，注口土器の比率では，深鉢約90%，浅鉢約7%，注口土器約3%という数値となる。時期の近似する京都府桑飼下遺跡出土の器種比率の検討では，有文と無文の比率では無文が7割を越え，深鉢，浅鉢，注口土器の比率では深鉢約86%，浅鉢約13%，注口土器1%という数値が提示されている〔渡辺編75〕[1]。今回提示した資料では，母数が多くないことと，小片で器種の識別をおこなっているため，この数値を普遍化することには慎重にならざるをえないけれども，後期中葉の器種構成を検討する一材料として提示しておく。

次に有文土器についてみてみる。全体的構成を伺える資料は少ない。器形に関しては，口縁部が内湾し頸部がくびれ胴部がやや張る形態の深鉢と口縁部がく字形に屈曲する形態

表5　縄文土器の種類別点数

	有文口縁			有文胴部	無文口縁		無文胴部	底部	注口	計
	深鉢	浅鉢	注口		深鉢	浅鉢				
暗褐色土Ⅱ	6	1	1?	34	29	2	399	13	0	485
暗褐色土Ⅰ	8	1	1	18	32	2	326	9	1	398
計	14	2	2	52	61	4	725	22	1	883

の浅鉢および壷形の注口土器が認められる。

文様に関しては，①多条沈線による曲線的文様（Ⅲ5・Ⅲ6・Ⅲ33・Ⅲ52・Ⅲ53），②沈線内の連続刺突（Ⅲ1・Ⅲ12・Ⅲ13・Ⅲ34・Ⅲ47・Ⅲ48），③結節縄文（Ⅲ8・Ⅲ9・Ⅲ45・Ⅲ46・Ⅲ56・Ⅲ57），④横走沈線による帯縄文（Ⅲ14・Ⅲ15）⑤末端を絡げた3本撚縄文（Ⅲ14・Ⅲ15），⑥沈線末端の刺突（Ⅲ14），⑦C字文（Ⅲ14），⑧注口土器などの特殊な器形の連続斜線文（Ⅲ16・Ⅲ35）などが特徴的である。全体的に縄文そのものが繊細であるのも特徴に加えられよう。これらのうち，①の特徴をもつ土器は北白川上層式3期，④～⑦の特徴をもつⅢ14（Ⅲ15は同一個体か）は一乗寺K式，他の特徴は北白川上層式3期から一乗寺K式に比定できよう。Ⅲ14・Ⅲ15を包含した暗褐色土Ⅱの出土状況は2m×2m前後の小範囲であり，他の資料との一括性は高い。このような出土状況と型式学的理解から，今回提示した資料は北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期に編年されると理解したい。ただし，一乗寺K式に比定できるⅢ14（Ⅲ15）のみ，2段右撚の縄文を用い，他の縄文をもつ資料はすべて2段左撚であること，色調が他の土器と異なり，またとくに薄く成形されていて，他の土器との差異が大きい点も指摘できる。これが移行期の様相を示すのか，混在として分離すべきなのかは資料の蓄積を待って再考したい。

暗褐色土Ⅱの遺物集中地点からは，多数の土器以外に，石鏃1点と石器剥片・砕片29点が出土している。暗褐色土Ⅱは斜面堆積層であり，土器に小片が多いことや磨滅が進んだものがあることから，遺物の集中は廃棄活動の直接的な反映というより，周辺（東方ないし北方）からの流入という自然の営力による堆積と推定するが，そのまとまりから判断して遠距離の移動は考えにくい。こうした中に，一定量の石器剥片・砕片が含まれていることは，石器製作を伴うような居住活動が本調査区周辺でおこなわれていたことを意味する。

比叡山西南麓に発達した複合扇状地上には，時期ごとに地点を違えながら縄文人が活動の跡を残してきた。この中でも，後期は遺跡数が最も多い時期であり，遺跡の消長から，1～数型式単位で居住地を移動させていた様相が明らかになりつつある。今回の資料に前後する時期についていえば，北白川上層式3期は総合人間学部構内の資料がまとまっており，この付近にこの時期の拠点の一つが推定される〔藤岡73〕。一方，後続する一乗寺K式は北白川扇状地には認められず，北方約2kmにある一乗寺向畑町遺跡に集落が移動している〔泉85〕。今回発見した資料が北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期にあたること，付近に集落の存在を想定できることは，北白川上層式から一乗寺K式にかけての縄文集落の動態を細かく追究するうえで，重要な手がかりとなろう。

(2) 中世の遺跡

中世の土地利用　調査区のある吉田山西麓の地には，荒神橋を起点に北白川，山中を経て近江坂本に至る道が古文献にみえ，これにあたるとみられる中近世の道路遺構がたび重なる発掘調査で確認されてきている〔岡田・吉野80，五十川83，清水89，五十川ほか92〕。こうした成果から，本調査区の南辺付近がこの中世の志賀越道の北 70 m ほどの地点にあたると推定できる。

さて今回の調査で見つかった中世の遺構は，13世紀中葉ごろに集中している。本調査区の東約 150 m，やはり中世の志賀越道の北側にあたる AW27 区においても，中世の遺構・遺物が同じ時期に集中する〔五十川ほか92〕。志賀越道の北辺にあたるこの地一帯の開発が中世前葉に画期をもつ事実が明らかになったことは，重要な成果の一つであろう。

溝のうち，SD3 は残りがよく，断面 V 字形の溝で東西に延びる。AX28 区や AX30 区で見つかっている中世の道路遺構の方位からみて，白川道にほぼ平行するものとみてよい。中世の遺構はこの溝より北側ではほとんど検出されず，南側に集中していることから，この溝が土地利用の境界としての役割をもっていたと考えられる。

この溝の南側で，井戸，土坑，集石を検出した。遺構の切り合いから判断して，まず井戸が造られ，その廃絶とともに土坑や集石遺構が設けられている。出土遺物からみて，それは13世紀中葉という比較的短期間の出来事であったと考えられる。

7 基検出した土坑は，内部に礫が詰まる集石土坑と土で充填しているものがある。前者は，当時の地表面に礫が一部露出し一種の積石状になっていたと想定している。規模や形態からみて，いずれも墓の可能性が高いけれども，埋葬遺体や副葬品は SK8 を除いてみつかっておらず，また SK1・SK2 について実施した土壌分析でも，墓であることを示す積極的な証拠は得られなかった。一方，SK8 は大部分が調査区外へと続くため，規模・構造は明確ではないが，副葬品とみられる完形の青磁 2 点が出土しており，墓であることを強く示している。

ここで目を転じて周辺地域で集石土坑の類例を検索すると，平安京左京三条三坊十一町の発掘調査が注目される〔寺島編84〕。この調査では，集石墓，土壙墓，火葬墓など多様な葬法をもつ室町時代の墓地の実態が明らかになっている。集石墓とされたものは下部に土坑があり礫が詰まるものと下部に土坑のない二者が含まれており，ともに人骨が出土している例から墓とされている。前者は集石土坑としたものに類似し，後者は集石 SX7 とした下部に掘り込みをほとんどもたない遺構に類似する。今回の調査では墓であることを示

す積極的な証拠はほとんど得られていないので，さらに類例の検討を待つ必要があるが，こうした比較例から，集石土坑，土坑，集石は，墓にかかわる遺構であると理解したい。

以上から，この地点における中世前半の遺構の変遷をまとめると，まず井戸が造られ，その廃絶とともに，井戸穴は廃棄物の捨て場となった。その後，集石墓，土壙墓が設けられ墓地となった。このように北側を溝で区切られたこの地点は，生活空間から埋葬空間へと土地利用が変遷していることが判明した。

さらに建物跡は存在しなかったが，比較的多くの屋瓦を発見したことは，周辺地に瓦葺きの建物があったことを示唆する。今後，隣接地区の調査成果も総合して，土地利用の実態を解明することを課題としたい。

古代・中世の遺物　今回の発掘調査で中世の包含層と遺構から出土した遺物の多くは，中世京都Ⅰ期中段階にあたるものであった。しかし，瓦類は12世紀のものが中心であり，また古代の遺物も若干出土している。それらのうち特色のあるいくつかの遺物について，問題を整理しておきたい。

まず，取り上げたいのは，結紐文垂木先瓦（Ⅲ275）である。この垂木先瓦は，先述のように山科盆地周辺に類例が集中しており，その他の地域では最初の例となる。しかし京都大学構内ではこの時期の寺院の存在は知られておらず，また本調査区でもこれ以外に古代の瓦は発見されていない。ただ，少量ではあるが７～８世紀代の須恵器，土師器が出土している点が注目される。今後，周辺の調査区で関連遺跡が発見されることを期待したい。

次は中世の瓦の問題である。先述の垂木先瓦などを除き，大部分は中央官衙系瓦第Ⅳ・Ⅴ期に属すると思われる〔上原78〕。これらのうち，技法や胎土・焼成上の特徴からみて，共通性をもつ瓦群を抽出することができる。まず軒丸瓦では，単弁八葉蓮華文軒丸瓦（Ⅲ239）と外区に珠文を巡らす右巻二巴文軒丸瓦（Ⅲ240）が，顎部外面を細かな斜格子叩きで調整しており，胎土には砂粒をかなり含み，橙褐色系統の色調を呈する点で共通している。軒平瓦では，完全な折り曲げ技法による２種類の左扁唐草文軒平瓦（Ⅲ252・Ⅲ254）が胎土・色調において軒丸瓦と共通し，「卐」のヘラ記号をもつ平瓦凸面の叩きは細かな斜格子が基本で，粗い正格子叩きが共存する例（Ⅲ252）がある。平瓦凸面の細かな斜格子叩きは，平瓦Ｄ類のものと共通し，また軒丸瓦の顎部外面の叩きも同じ原体である可能性がある。また，単弁八葉蓮華文軒丸瓦の丸瓦部凸面にみられる粗い斜格子叩きは，丸瓦Ａ類と同じものである。さらに，技術的な共通性は見いだせないが，丸瓦Ｂ類は，胎土・色調が丸瓦Ａ類と類似しており，同じ群に含まれる可能性がある。丸瓦Ａ・Ｂ類は玉縁の

端面に縦線を2ヵ所刻む点も共通する。

以上の瓦のうち，平瓦D類と丸瓦A類は，凸面の叩き痕からみて，軒平瓦と軒丸瓦に使われたものである可能性が高く，基本的にこの瓦群は軒瓦製作時の何らかのまとまりを表わすものと思われる。仮にそれを1つの工房ないし製作集団と考えるとすると，そこには，軒丸瓦と軒平瓦の笵型が2つずつと，細かな斜格子叩き・粗い斜格子叩き・粗い正格子叩きの原体があり，縄目叩き原体も存在した可能性がある。さらに，前述したような「𠆢」の篦記号の書き順に少なくとも2種類存在することを，それらが異なる人物によりかかれたと解釈できるならば，この群には少なくとも2人以上の人物が関わっていたこととなる。こうした状況からみると，これらの軒瓦の製作にあたっては，特定の工人が特定の笵型や叩き原体を持っていたのではなく，複数の工人が複数の笵型や叩き原体を用いうるような状況にあったことが想定される。今回と同様の例としては，平安京右京六条一坊の調査でみつかった軒瓦の瓦当面や瓦当側縁に叩きを残す一群〔京都市埋文研92〕をあげることができる。本例は，全体の数量不足から具体的な生産体制の復元まで進むことが難しいが，同様の例が増加することが期待されよう。

最後に中世の土器の中では，吉備系土師器と回転台土師器が比較的まとまって出土したことが指摘できる。吉備系土師器は，本学構内では病院構内AF15区のSE2とSK117出土資料に次ぐ発見となる〔浜崎84〕。AF15区出土例は，内面にのみ磨きを残している点がやや特異なのに対し，今回の出土例は典型的な形態をもつ。吉備系土師器は，淀川河床遺跡で発見されているほか，京都市内でも左京六条三坊のSK31からの出土例などが知られ〔京都市埋文研83〕，その出土状況から，商品ではなく別の商品や貢物に伴うものとする説〔橋本92 pp. 176-202〕がある。回転台土師器は底部に回転糸切りを残し，杯・皿・耳皿などの器種があるが，正確な産地は不明である。吉備系土師器と同様，商品としてではなく他の理由により持ち込まれた可能性が高いと考えるが，その意味付けについては今後の出土例の増加を待ちたい。

なお，中世の遺物に関して，植山茂氏，三枝健二氏，柴垣勇夫氏，鈴木康之氏，山本悦世氏より，石器石材に関して，大賀克彦氏より有益な御教示を得た。末尾ながら，感謝申し上げます。

〔注〕

(1) 分類基準がやや異なるため，若干の誤差が含まれているが，全体の傾向をみる点では問題ないと思われる。

参 考 文 献

網　伸也　1994年　「北白川廃寺２」『平成２年度京都市埋蔵文化財調査概要』

石井清司　1989年　「11．京都市内内膳町遺跡」『京都府弥生土器集成』

石田志朗・中村徹也・中村友博　1972年　『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』

泉　拓良　1977年　「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』115号

1978年　「京都大学北部構内の地形復原　―縄文時代から弥生時代―」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1985年　「縄文集落の地域的特質　―近畿地方の事例研究―」『講座考古地理学』第４巻

泉　拓良・宇野隆夫　1979年　「京都大学農学部遺跡 BG32 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

泉　拓良・飛野博文　1986年　「京都大学本部構内 AT29 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

泉　拓良・花谷　浩　1984年　「和歌山県瀬戸遺跡の第４・５次発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

泉　拓良・吉野治雄　1979年　「京都大学医学部構内 AN18 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

泉　拓良・三宅由美　1986年　「京都大学北部構内 BE33 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

泉　拓良ほか　1980年　「和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

五十川伸矢　1981年　「京都大学本部構内 BE27 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　「京都大学本部構内 AX28 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1991年　「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ　―京都大学病院構内遺跡の調査―』

五十川伸矢・飛野博文　1984年　「京都大学教養部構内 AP22 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

五十川伸矢・浜崎一志・伊東隆夫　1989年　「京都大学病院構内 AJ18・AP19 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』

五十川伸矢・千葉豊・伊東隆夫　1992年　「京都大学本部構内 AW27 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

上原真人　1978年　「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』13・14

宇治市教育委員会　1987年　『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集

梅原末治　1923年　「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告　第５冊』

1935年　「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第16冊』

1936年　「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第７輯』

参 考 文 献

小笠原好彦　1980年　「近畿地方の7・8世紀の土師器とその流通」『考古学研究』第27巻第2号

岡田保良・吉野治雄　1979年　「京大理学部遺跡 BE29 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　「京都大学本部構内 AW28 区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

小野山節　1968年　『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部日本歴史時代

小野山節・都出比呂志　1973年　『高槻市安満遺跡の条里遺構』

小野山節・中村徹也　1976年　『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』

川上　貢　1977年　「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

京大調査会（京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会）

1977年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

BF31区調査班（京都大学北部構内 BF31 区調査班）

1987年　「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

京大埋文研（京都大学埋蔵文化財研究センター）

1978年a　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

1978年b　『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊　―京大農学部遺跡 BG36 区―』

1979年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』

1980年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和54年度』

1981年a　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ　―白川北殿北辺の調査―』

1981年b　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

1983年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和56年度』

1984年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和57年度』

1985年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ　―北白川追分町縄文遺跡の調査―』

1986年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和58年度』

1987年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』

1988年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』

1989年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』

1990年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』

1991年　『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ　―京都大学病院構内遺跡の調査―』

1992年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1988年度』

1993年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』

1995年　『京都大学構内遺跡調査研究年報　1992年度』

京都国立博物館　1980年　『京都国立博物館古瓦図録』

京都市文観局（京都市文化観光局）

1986年　『京都市遺跡地図』

1991年　『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成2年度』

1993年　『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　平成4年度』

1994年　『京都市内遺跡立合調査概報　平成5年度』

京都市編　1985年　『史料　京都の歴史』第8巻　左京区

京都市埋文研（京都市埋蔵文化財研究所）

参 考 文 献

1981年　『旭山古墳群発掘調査報告』（京都市埋蔵文化財研究所調査報告第５冊）

1983年　『平安京跡発掘調査概報　昭和57年度』

1992年　『平安京右京六条一坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊

1995年　『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』

佐原　眞　1967年　「山城における弥生文化の成立　―畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置―」『史林』第50巻第５号

島田貞彦　1924年　「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第５号

島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦　1929年　「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報告」『人類学雑誌』第44巻第７号

清水芳裕　1989年　「京都大学本部構内AX30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』

1991年　「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ　―京都大学病院構内遺跡の調査―』

清水芳裕・吉野治雄　1981年　「京都大学医学部構内AP19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和55年度』

菅原正明　1983年　「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集）

1989年　「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集

杉山信三　1954年　「吉田寺について」『史跡と美術』242号

千葉　豊　1991年　「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ　―京都大学病院構内遺跡の調査―』

千葉　豊・森下章司　1993年　「京都大学病院構内AE12・AE13区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』

寺島孝一編　1984年　『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告第14輯

東京国立博物館　1985年　『日本の陶磁』（特別展図録）

長岡京市編　1991年　『長岡京市史』資料編１

中村健二　1990年　「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No. 144

中村徹也　1973年　『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』

1974年ａ　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』

1974年ｂ　『京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』

1975年　『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』

中村友博　1977年　「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和51年度』

西口寿生　1983年　「土師器の地域色　―６・７世紀の畿内とその周辺―」『文化財論叢』（奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集）

西口陽一　1991年　「近畿・有舌尖頭器の研究」『考古学研究』第38巻第１号

丹羽祐一　1978年　「和歌山県瀬戸遺跡の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和52年度』

橋本久和　1980年　「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』（高槻市文化財調査報告書第13冊）

浜崎一志　1983年ａ　「京都大学北部構内BD30区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和56年度』

参 考 文 献

1983年b 「浄蓮華院と吉田構 —応仁の乱後の吉田の復原的考察—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』

1984年 「京都大学病院西構内AF15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』

1991年 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ —京都大学病院構内遺跡の調査—』

浜崎一志・千葉豊・森下章司 1993年 「京都大学病院構内AH19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1989～1991年度』

浜崎一志・千葉豊・伊藤淳史・鎮西清高・伊東隆夫

1995年 「京都大学北部構内BA28区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度』

東村武信 1976年 「産地推定における統計的手法」『考古学と自然科学』9

廣田長三郎 1989年 『古瓦図考』

福山敏男 1977年 「室町時代の神社—特に吉田社と斎場所」『日本の美術』129号

藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」『人文』第19集（京都大学教養部）

1978年 「北白川扇状地と京都大学構内遺跡」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』

平安博物館 1985年 『小栗栖瓦窯跡発掘調査報告 昭和59年度』

南 博史 1988年 「第2部 高倉宮下層遺跡の調査」『平安京左京三条四坊四町』（京都文化博物館調査研究報告第2集）

森田 稔 1986年 「東播系中世須恵器生産の成立と展開 —神出古窯址群を中心に—」『神戸市立博物館研究紀要』第3号

森 隆 1986年 「滋賀県における古代末・中世土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ

家根祥多 1982年 「縄文土器」『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ（本文）

山本悦世 1993年 「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第6冊

横山浩一・佐原 眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代

渡辺 誠編 1975年 『桑飼下遺跡発掘調査報告書』

藁科哲男・東村武信 1975年 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅱ）」『考古学と自然科学』8

1983年 「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16

1988年 「石器原材の産地分析」『考古学と関連科学』鎌木義昌先生古稀記念論集

藁科哲男・東村武信・鎌木義昌

1977年 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅲ）」『考古学と自然科学』10

1978年 「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定（Ⅳ）」『考古学と自然科学』11

Ando. A., Kurosawa. H., Ohmori. T. & Takeda. E., 1974, "1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt", *Geochemical Journal* vol. 8

京都大学構内遺跡調査要項　1993年度

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

第１条　京都大学に埋蔵文化財研究センター（以下「センター」という。）を置く。
第２条　センターは，京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行なう。
第３条　センターにセンター長を置く。
　２　センター長は，京都大学の専任の教授をもって充てる。
　３　センター長の任期は，２年とし，再任を妨げない。
　４　センター長は，センターの所務を掌理する。
第４条　センターに，必要に応じて，助教授，助手その他の職員を置く。
第５条　センターに，調査研究及び保存に関する業務を処理するため，研究部を置く。
　２　研究部に主任を置き，前条の教官をもって充てる。
　３　主任は，研究部の業務をつかさどる。
第６条　センターにセンターの事業に関する基本的計画，人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため，運営協議会を置く。
　２　運営協議会は，次の各号に掲げる委員で組織する。
　(1)　センター長
　(2)　センターの研究部の主任
　(3)　前２号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者　若干名
　(4)　事務局長及び施設部長
　３　センター長は，運営協議会を招集し，議長となる。
　４　前各項に規定するもののほか，運営協議会の運営に関し必要な事項は，運営協議会が定める。
第７条　この要項に定めるもののほか，センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長
　小野山節（文学部教授）
運営協議会委員
　大山喬平（文学部教授）
　應地利明（文学部教授）
　川又良也（法学研究科教授）
　石田英實（理学部教授）
　鎮西清高（理学部教授）
　西村　進（理学部教授）
　西川幸治（工学部教授）
　久馬一剛（農学部教授）
　足利健亮（人間・環境学研究科教授）
　伊東隆夫（木質科学研究所教授）
　鎌田元一（文学部助教授）
　山中一郎（文学部助教授）
　高橋康夫（工学部助教授　1993.4.1～）
　清水芳裕（文学部助教授）
　田村　誠（事務局長）
　青板邦之（施設部長）

研究部主任
　清水芳裕（文学部助教授）
同 研 究 員
　五十川伸矢（文学部助手）
　千葉　豊（文学部助手）
　伊藤淳史（文学部助手）
　古賀秀策（工学部助手　1993.5.1～）
　吉井秀夫（文学部助手　1993.7.1～1994.3.31）
　宮原恵美子（施設部教務補佐員）
　磯谷敦子（施設部教務補佐員）
　中田敬子（施設部教務補佐員）
事　務　室
　松本一代（施設部事務補佐員）

表6　京都大学構内遺跡のおもな調査

（地点は図版1を参照，文献中「埋」は京大埋文研，「調」は京大調査会をさす。）

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田　耕作	表採・試掘			縄文土器，石器	梅原23，島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石　棒	横山・佐原60	
1929	大阪府安満		島田　貞彦 水野　清一 ほか	発　掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原　末治	発　掘			乾漆棺・玉飾枕	梅原36	
1935	北白川小倉町		梅原　末治				縄文土器，石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館　易	採　集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田　志朗	採　集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採　集			石　棒		
	大阪府安満		小野山　節 都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器，石棒	小野山・都出73	建物をずらし条里の溝を保存
	追分地蔵	6	石田　志朗 中村　徹也	事前発掘	600		弥生土器，石棒	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村　徹也	事前発掘	13	瓦　溜	縄文土器，瓦（平安）	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村　徹也	事前発掘	600		縄文土器，土師器	中村73	
	植物園	11	中村　徹也	事前発掘	400	縄文後期甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b，泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村　徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山　節 中村　徹也	事前発掘	750		土師器，瓦，陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部BE33区	16	泉　拓良	事前発掘	900	縄文晩期土墳墓	縄文土器，土師器，瓦	調77	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院 AE15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	古代・中世溝・池・土器溜	土師器,瓦,陶磁器	調77, 埋81a	
	植物園 BD35区	29	吉野 治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原
	病院 AH17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝・井戸・集石	土師器, 瓦	埋78a	
	教養部 AS23区	35	吉野 治雄	試掘	10	溝	縄文土器,須恵器	埋77	
	北部 BJ33区	36	宇野 隆夫	試掘	10		縄文土器	埋77	
	和歌山県 瀬戸		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代土墳墓	縄文土器,人骨	埋78a	
1977	病院 AF14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代護岸,溝, 井戸	土師器,瓦,陶磁器	埋78a, 埋81a	
	医学部 AO18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器,瓦,陶磁器	埋79	
	北部 電気管	43	吉野 治雄 宇野 隆夫	立合		溝, 土坑	須恵器, 土師器	埋78	
	教養部 AQ23区 AN23区	48	宇野 隆夫	試掘	80	溝	弥生土器,土師器, 瓦	埋79	
	白河北殿 比定地 AA18区	49	岡田 保良	試掘	40	溝	土師器,瓦,陶磁器	埋79	
1978	理学部 BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓,中世火葬塚	弥生土器,土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
	農学部 BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	縄文土坑,古代溝・土坑	縄文土器,土師器	埋79	
	北部 BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80, 埋85	
	本部 AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器,土,師器, 銭貨	埋80	
	本部 AY22区	60	泉 拓良	立合		高野川旧河道		埋79	
	病院 AN19区	64	吉野 治雄	立合		井戸, 溝	弥生土器	埋79, 埋80	
1979	北部 BH37区	66	吉野 治雄	試掘	46	土坑	土師器, 須恵器	埋80	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m^2)	遺構	遺物	文献	備考
1979	教養部 AM24区	69	岡田　保良 清水　芳裕	試掘	8		弥生土器，土師器	埋80	
	本部 AT29区	70	吉野　治雄	試掘	28	溝，土坑	縄文土器，弥生土器，土師器，瓦	埋80	
	本部 AZ30区	71	西川　幸治 浜崎　一志	試掘	30	中世溝	土師器，瓦，瓦器	埋80	
	医学部 AP19区	74	清水　芳裕 五十川伸矢 吉野　治雄	事前発掘	2776	中世溝，井戸，土器溜	土師器，瓦，陶磁器，旧石器	埋81b	
	本部 AT27区	75	五十川伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居，中世土壙墓，近世道路	土師器，須恵器，白磁	埋81b	竪穴住居跡を現地保存
	北部 BD32区	79	泉　拓良	立合			瓦（平安）	埋80	
1980	本部 AT27区	89	泉　拓良	事前発掘	115	近世道路，堀	土師器，近世陶磁器	埋81b	
	本部 AX28区	90	泉　拓良 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1120	近世白川道，中世土器溜・井戸・建物	土師器，瓦，陶磁器，銅鏃（弥生），磨製石鏃	埋83	
	京都府 美月		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志 吉野　治雄	事前発掘	1468	弥生中・後期水路，土坑，中世土器溜	弥生土器，打製石斧，瓦器，陶磁器	埋83	立ち合い調査中に遺跡を発見，工事を中断し発掘調査
	教養部 AO21区	91	吉野　治雄	事前発掘	112	中世井戸・土壙墓	土師器，瓦器，陶磁器	埋83	
	教養部 AM22区	93	吉野　治雄	立合		火葬墓，石列	瓦器，陶器	埋81	
	本部 実験排水	98	清水　芳裕	立合		流路，中世土器溜	土師器，丸瓦	埋83	遺構実測
1981	理学部 BD30区	109	泉　拓良 浜崎　一志	事前発掘	272	古代建物，近世瓦溜	土師器，瓦，陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬戸		泉　拓良 清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	事前発掘	1500	弥生土坑，弥生配石，古墳時代土坑	縄文土器，硬玉管玉，弥生土器，製塩土器	埋84	
	本部 AX28区	110	浜崎　一志	事前発掘	34	中世土器溜	土師器，瓦，陶磁器，硯	埋83	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	教養部 AP22区	111	五十川伸矢 飛野　博文	事前発掘	1716	古墳，古代梵鐘鋳造遺構，中世門，溝，墓	縄文土器，弥生土器，須恵器，土師器，鋳型，溶解炉	埋84	梵鐘鋳造遺構を現地保存
	京都市 本山			分布調査			縄文土器，緑釉陶器，灰釉陶器	埋83	
1982	京都府 中海道		泉　拓良	試掘	20	中世土器溜	縄文土器，土師器	埋84	
	病院 AF15区	122	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	1028	中世井戸，溝，土坑	土師器，瓦器，白磁	埋84	
	農学部 BF33区	123	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	787	縄文住居跡，中世土坑	縄文土器，土師器	埋84	縄文住居跡を現地保存
	和歌山県 瀬戸		泉　拓良	事前発掘	297	古代製塩炉	縄文土器，弥生土器，製塩土器	埋84	古代製塩炉を移築保存
	本部 AT29区	124	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	890	中世濠，建物	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	
	農学部 BE33区	125	泉　拓良 飛野　博文	事前発掘	803	中世・近世水田，溝	土師器，瓦器，陶磁器	埋86	
1983	医学部 AN20区	134	泉　拓良 五十川伸矢	事前発掘	863	中世井戸，土取り穴	須恵器，瓦器，土師器	埋86	
	北部 BF31区	135	清水　芳裕 五十川伸矢	事前発掘	737	縄文埋没林，古代・中世溝	縄文土器，土師器，緑釉陶器	埋87	
	医学部 AM19区	139	泉　拓良 浜崎　一志	立合		中世土取り穴	土師器，瓦器，石鍋	埋86	
1984	病院 AF19区	141	浜崎　一志 宮本　一夫	事前発掘	863	近世池，井戸，野壷	縄文土器，蓮月焼	埋87	
	病院 AJ19区	142	清水　芳裕 浜崎　一志	事前発掘	260	中世土坑，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋87	
	医学部 AN18区	143	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	1920	中世井戸，土取り穴，中世梵鐘鋳造遺構	土師器，瓦器，鋳型	埋88	
1985	北部 BJ31区	153	清水　芳裕 宮本　一夫	事前発掘	624	古代溝，建物跡，土坑近世溝	弥生土器，土師器，須恵器	埋88	
	病院 AJ18区	154	清水　芳裕 浜崎　一志 菱田　哲郎	事前発掘	4295	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器	埋89	

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1985	病院 AJ19区	155	五十川伸矢 宮本　一夫	事前発掘	3000	中世井戸，近世土取り穴	土師器，近世陶磁器，鋳型	埋89	
1986	教養部 AP25区	167	清水　芳裕 宮本　一夫 難波　洋三	事前発掘	599	中世・近世溝	土師器，近世陶磁器	埋89	
	本部 AX30区	168	清水　芳裕 難波　洋三	事前発掘	330	古代土坑，中世道	土師器，陶磁器	埋89	
	医学部 AL20区	169	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	331	近世土取り穴	土師器，陶磁器	埋90	
	教養部 AL23区	170	清水　芳裕 五十川伸矢 浜崎　一志	試掘	24	中世溝	土師器，瓦器，陶器	埋89	
1987	北部 BD33区	180	浜崎　一志 難波　洋三	事前発掘	618	土坑，河川	縄文土器，土師器，須恵器	埋90	
	本部 AW27区	181	五十川伸矢 千葉　豊	事前発掘	1604	中世土坑，近世道路	縄文土器，土師器，陶磁器	埋92	
	本部 AT25区	188	清水　芳裕	立合		近世尾張藩邸堀		埋90	
1988	牛ノ宮町 AR19区	190	清水　芳裕 森下　章司	事前発掘	216	中世土坑，近世道路	土師器，瓦，陶磁器	埋92	
	病院 AH19区	191	浜崎　一志 千葉　豊 森下　章司	事前発掘	2495	中世土坑・溝	土師器，瓦，陶磁器	埋93	
	病院 AE12区	192	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	598.5	近世道路，溝，野壷，井戸	土師器，瓦，陶磁器	埋93	
1989	病院 AE13区	198	千葉　豊 森下　章司 宮原恵美子	事前発掘	805	近世井戸，野壷，柵列	土師器，陶磁器，瓦	埋93	
1991	病院 AG14区	200	千葉　豊 森下　章司	事前発掘	393.5	近世井戸・道路	土師器，陶磁器	埋95	
	教養部 AR21区	202	五十川伸矢 浜崎　一志 森下　章司	立合		中世土坑	土師器	埋93	
1992	医学部 AM17区	207	五十川伸矢 森下　章司	事前発掘	1950	中世井戸，土器溜	土師器，陶磁器	埋95	
	北部 BA28区	208	浜崎　一志 千葉　豊	事前発掘	1242	噴砂，古代埋納遺構，近世堀	縄文土器，土師器，陶磁器，桟瓦	埋95	

京都大学構内遺跡のおもな調査

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の種類	面積(m²)	遺構	遺物	文献	備考
1992	和歌山県瀬戸	213	浜崎一志 伊藤淳史	立合		縄文包含層	縄文土器，石器	埋95	
	本部AV30区	214	千葉豊 伊藤淳史	事前発掘	1480	中世砂取り穴，近世野壷	土師器，陶磁器	第2章	
1993	北部BB28区	217	清水芳裕 古賀秀策	事前発掘	1323	古代溝，中世土坑	土師器，陶磁器	第3章	
	本部AW25区	218	千葉豊 吉井秀夫	事前発掘	929	中世井戸・濠・溝・土坑	縄文土器，石器，土師器，陶磁器	第4章	
	本部AU30区	219	伊藤淳史 古賀秀策	事前発掘	1074	弥生流路，古代溝，中世土器溜	弥生土器，土師器，陶磁器	第2章	
	総合人間学部AO22区	220	五十川伸矢 伊藤淳史	事前発掘	4080	弥生水田，古代梵鐘鋳造遺構，中世井戸・溝	縄文土器，弥生土器，土師器，陶磁器		発掘中
	北部BF34区	221	千葉豊 吉田広	事前発掘	1228	古代土器溜・土坑，中世・近世道路	土師器，陶磁器，瓦		発掘中
	病院AF12区	222	伊藤淳史	試掘	112.5	近世道路	土師器・陶磁器	第1章	
	本部AW30区	223	千葉豊 伊藤淳史	立合					遺跡なし
	医学部AN20区	224	五十川伸矢	立合		中世土取り穴			
	医学部AM18区	225	五十川伸矢	立合					遺跡なし
	病院AH14区	226	清水芳裕	立合		近世包含層			
	病院AG13区	227	古賀秀策	立合					遺跡なし
	病院AG10区	228	古賀秀策	立合					遺跡なし

報告書抄録

ふりがな	きょうとだいがくこうないいせきちょうさけんきゅうねんぽう1993ねんど
書名	京都大学構内遺跡調査研究年報1993年度
編著者名	山中一郎，清水芳裕，五十川伸矢，千葉　豊，伊藤淳史，古賀秀策，吉井秀夫，冨井　眞，小﨑　隆，矢内純太，藁科哲男
編集機関	京都大学埋蔵文化財研究センター
所在地	〒606 京都府京都市左京区吉田本町　Tel 075-753-7691
発行年月日	西暦　1997年3月31日

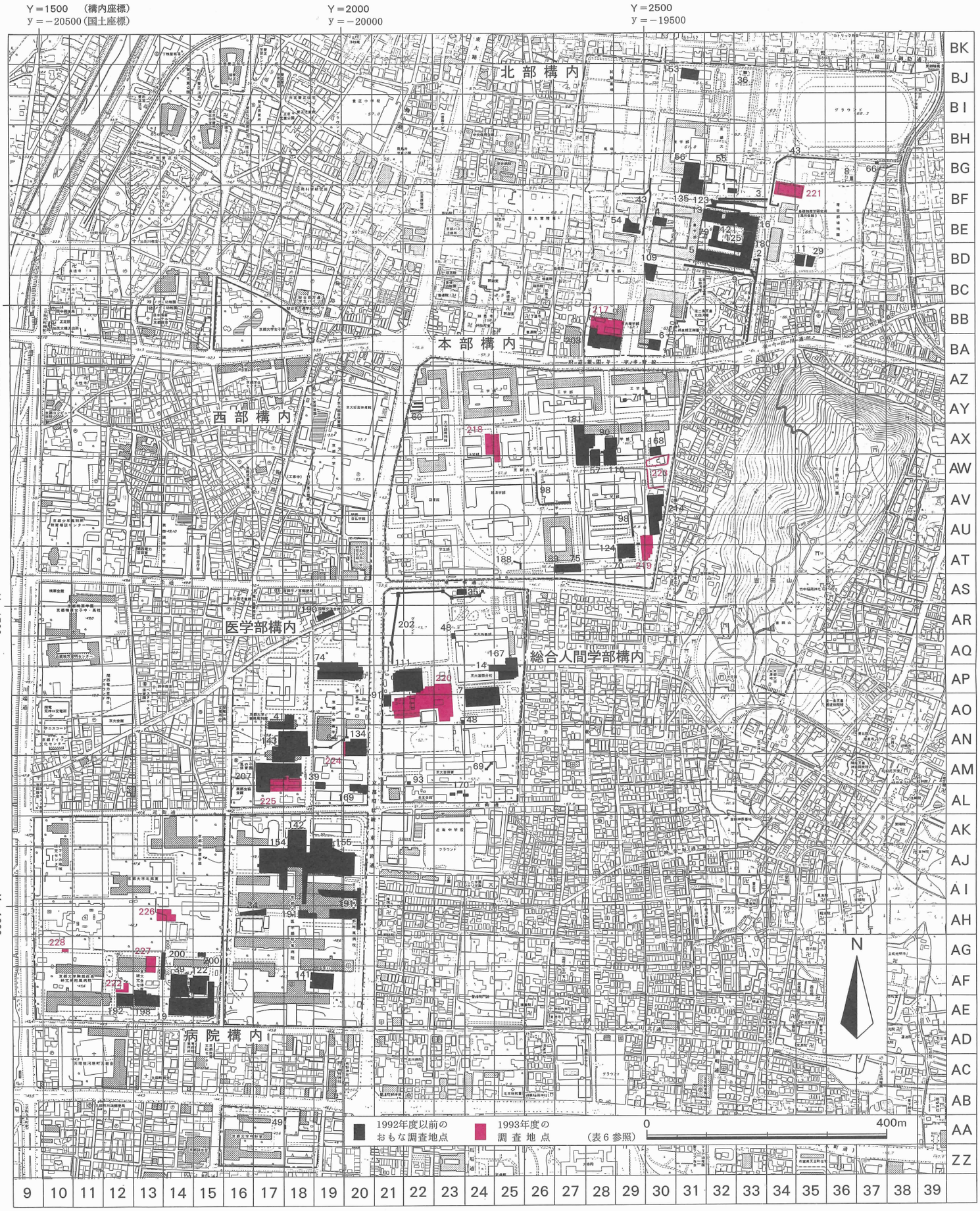
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
本部構内 AU30区 AV30区	京都府京都市左京区 吉田本町	26100	—	35° 1′ 20″	135° 47′ 10″	1993 0111 ～ 1994 0114	2,554	工学部RI施設棟・工学科等研究実験棟新営に伴う発掘調査
北部構内 BB28区	京都府京都市左京区 北白川追分町	26100	—	35° 1′ 35″	135° 47′ 10″	1993 0616 ～ 1993 0930	1,323	理学部動・植物学科等校舎新営に伴う発掘調査
本部構内 AW25区	京都府京都市左京区 吉田本町	26100	—	35° 1′ 25″	135° 47′ 0″	1993 0906 ～ 1993 1217	929	文学部等校舎新営に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本部構内 AU30区 AV30区	散布地 集落跡 集落跡 田畑	縄文・弥生 平安 中世 近世	流路 溝　4 土器溜，溝，柱穴　多数 溝　2 野壷　多数	縄文・弥生土器，石器 土師器，陶器 土師器，陶磁器 陶磁器	有茎尖頭器の出土 突帯文土器と遠賀川式土器の出土
北部構内 BB28区	集落跡 集落跡 田畑	平安 中世 近世	土坑　1 溝　5 土坑　多数 溝・柵列　多数	土師器，須恵器，陶器 土師器，陶磁器 土師器，陶磁器	弥生前期の土石流跡を確認 地震による圧密液状化の跡を検出
本部構内 AW25区	散布地 集落跡 田畑	縄文 鎌倉 近世	 井戸　1 濠　1 溝　4 土坑　7 杭列	縄文土器，石器 土師器，陶磁器，瓦 土師器，陶磁器	縄文土器は後期中葉の一括資料 土坑埋土の理化学的分析

京都大学構内遺跡調査研究年報　1993年度

図　　版

1　京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
2～14　京都大学本部構内AU30区・AV30区の発掘調査
15～18　京都大学北部構内BB28区の発掘調査
19～31　京都大学本部構内AW25区の発掘調査



図版Ⅰ 京都大学吉田キャンパスの地区別調査地点

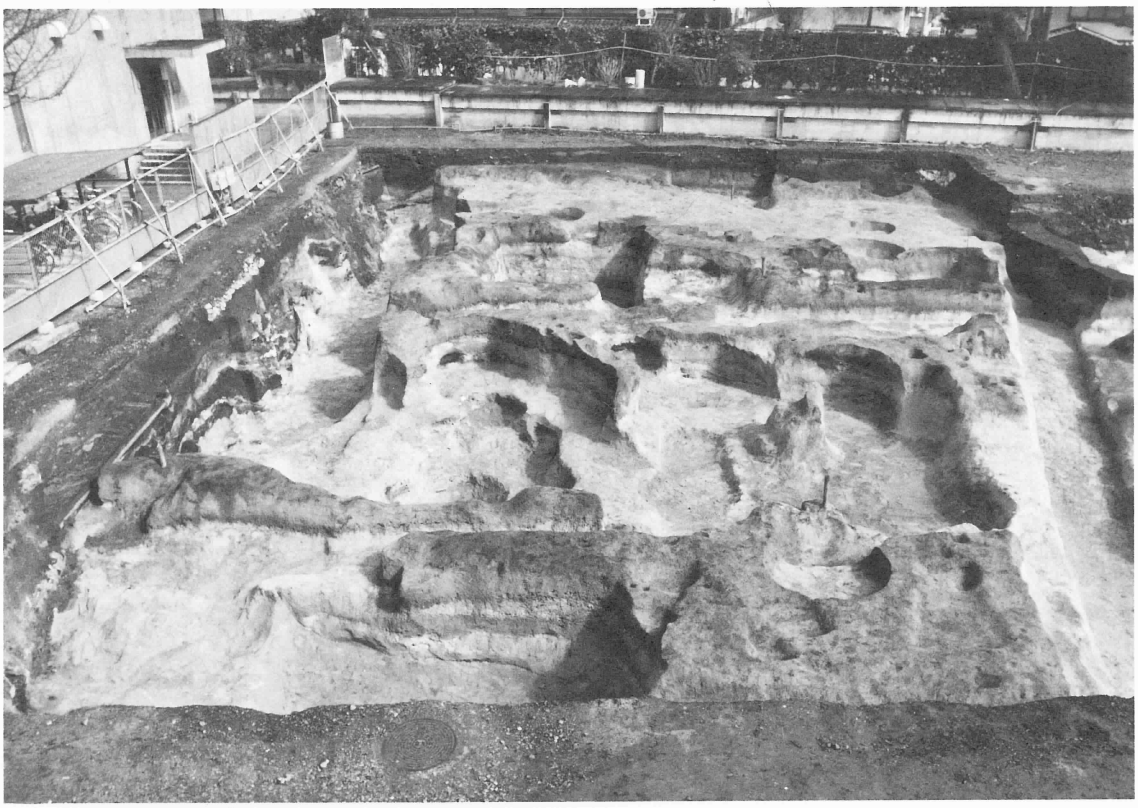
図版二　京都大学本部構内AU30・AV30区

1　北調査区完掘後全景（南から）

2　北調査区ＳＸ４（北から）

3　北調査区溝ＳＤ５（西から）

図版三　京都大学本部構内ＡＵ30・ＡＶ30区



1　北調査区不定形土坑完掘状況（西から）

2　北調査区不定形土坑ＳＸ2南北断面（東から）

1　南調査区古代・中世遺構検出全景（南から）

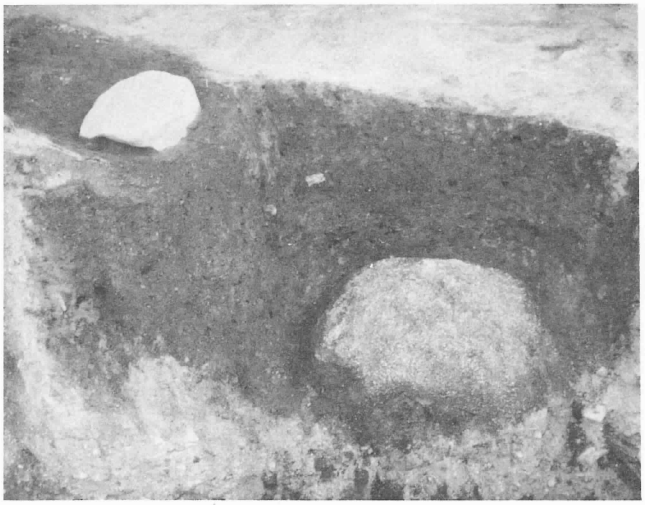
2　南調査区流路SR１・SR２内黄色砂除去後全景（南から）

1　南調査区流路SR１（北から）

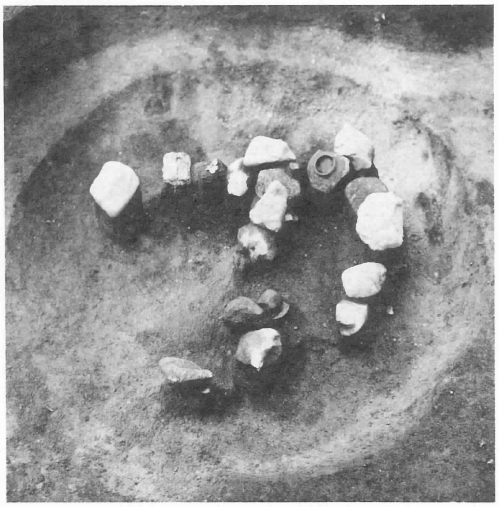
2　流路SR１黒褐色土層遺物出土状況（西から）

3　南調査区集石SX11（東から）

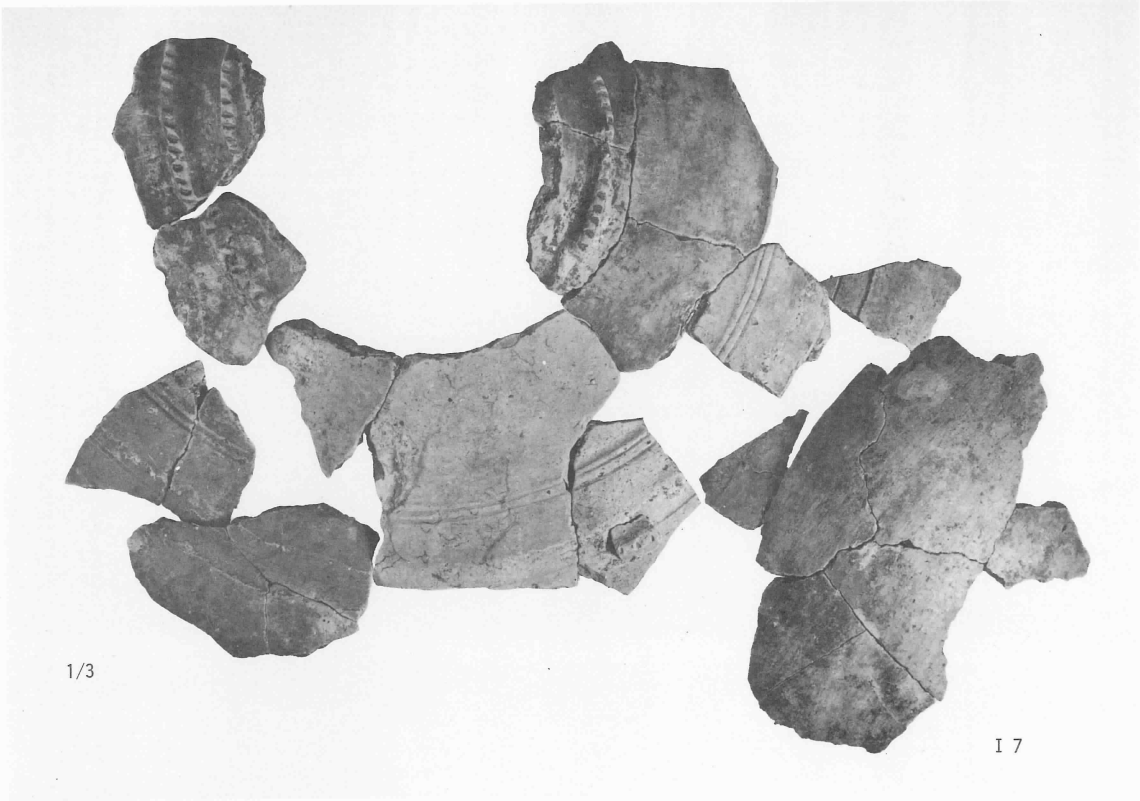
4　南調査区土器溜SX14（南から）



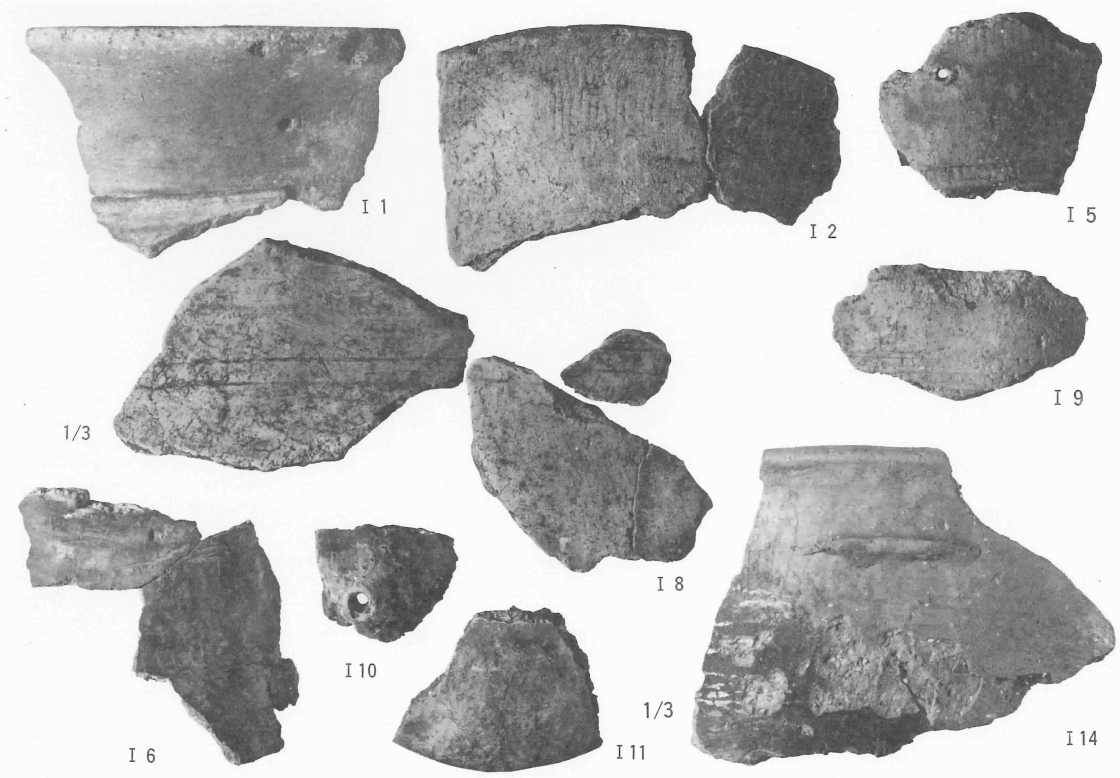
5　南調査区土坑SK28（西から）



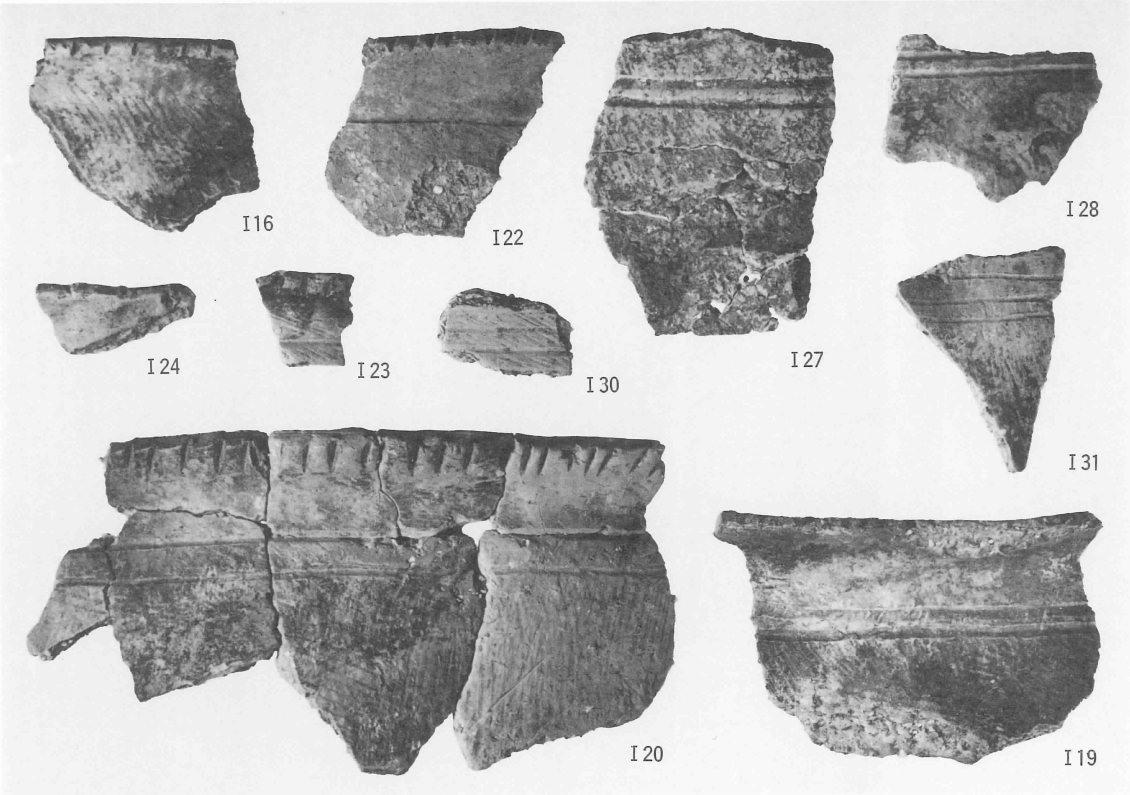
6　南調査区集石SX12（南から）



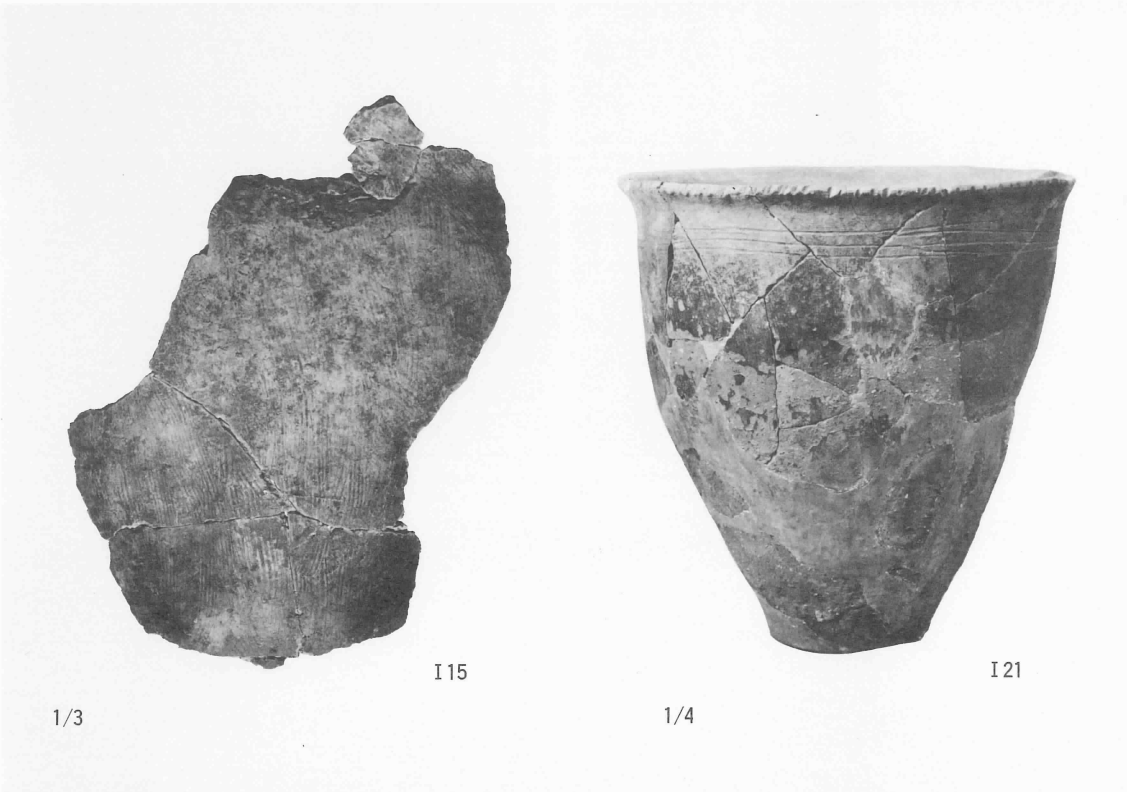
1　SR1黒褐色土層出土遺物(1)（I 7壷）



2　SR1黒褐色土層出土遺物(2)（I 1・I 2・I 5・I 6・I 8・I 9壷，I 10・I 11蓋，I 14鉢）

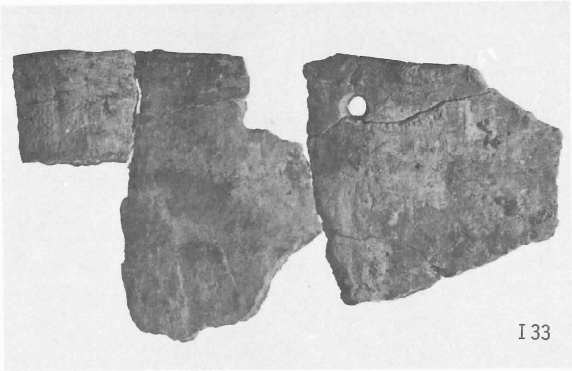


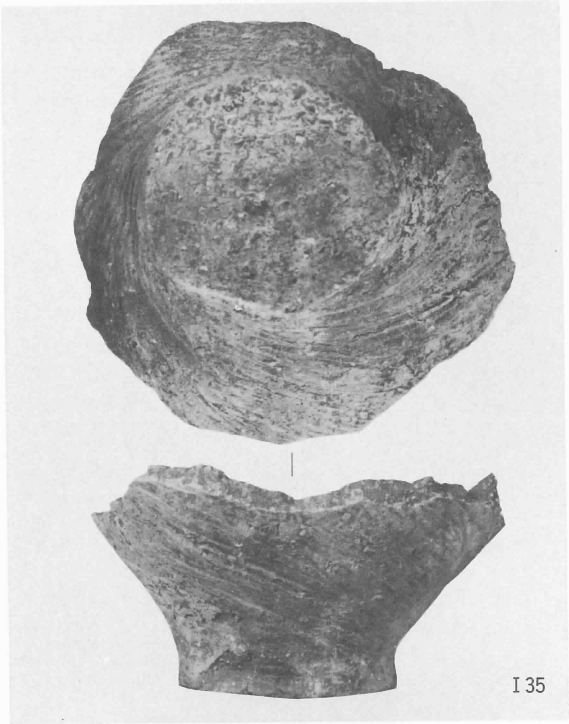
1　SR1黒褐色土層出土遺物(3)（I16・I19・I20・I22～I24・I27・I28・I30・I31甕）

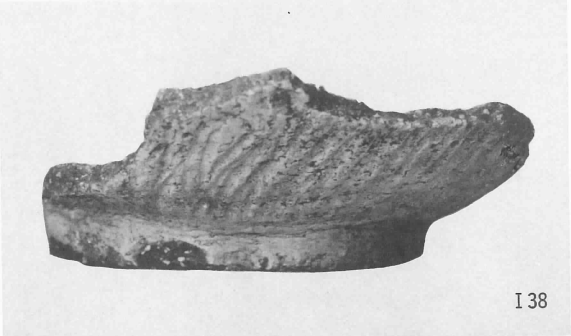


2　SR1黒褐色土層出土遺物(4)（I15・I21甕）

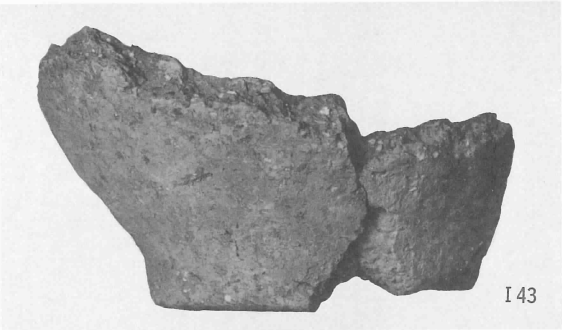
図版八　京都大学本部構内AU30・AV30区

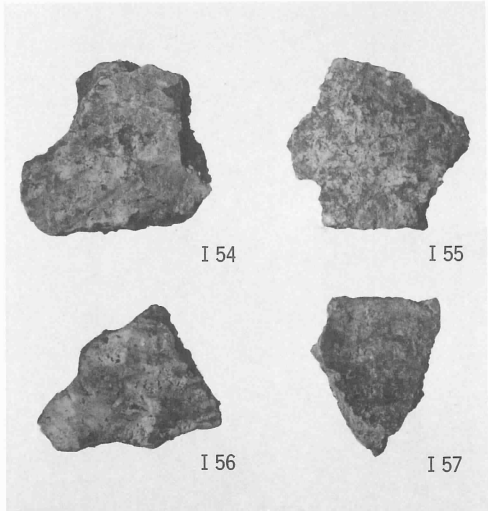


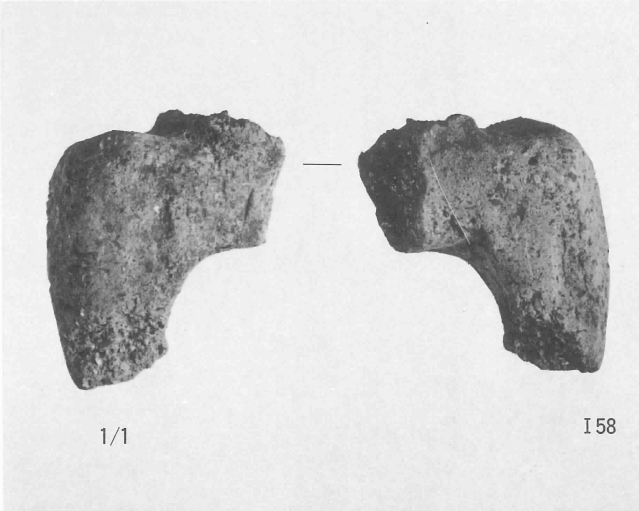




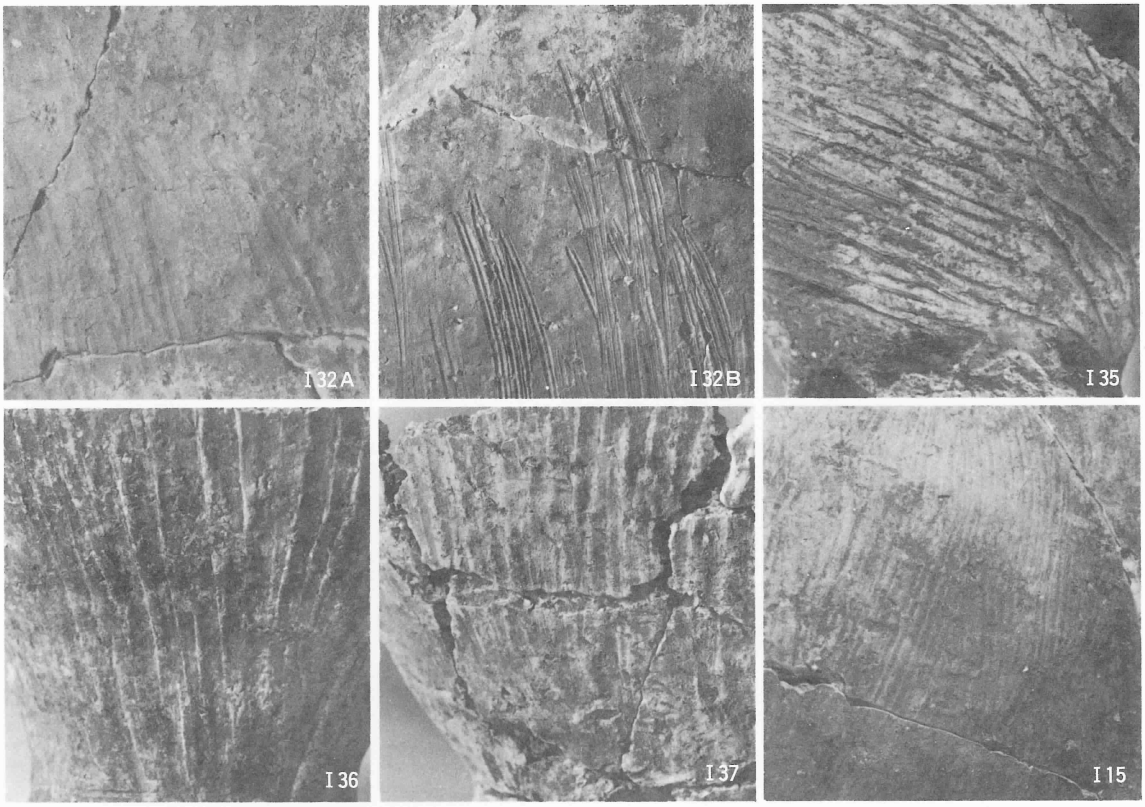
SR1 黒褐色土層出土遺物(5)（I 32・33深鉢，I 34壷，I 35～I 38底部）



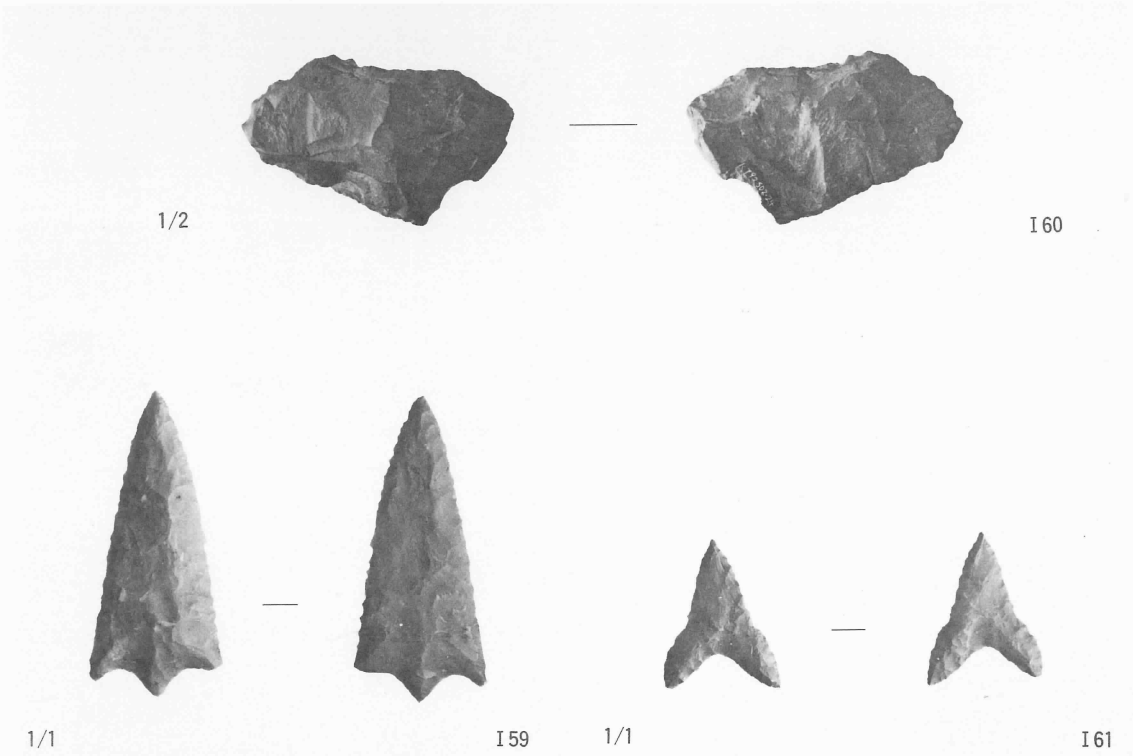




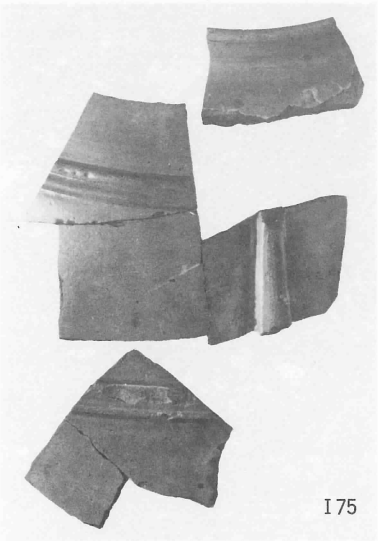
SR1 黒褐色土層出土遺物(6)（I 41・I 43～I 46・I 49底部，I 54～I 57胴部破片，I 58土偶）

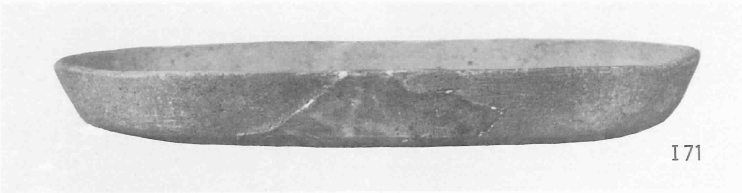


1　SR1黒褐色土層出土土器の調整痕細部



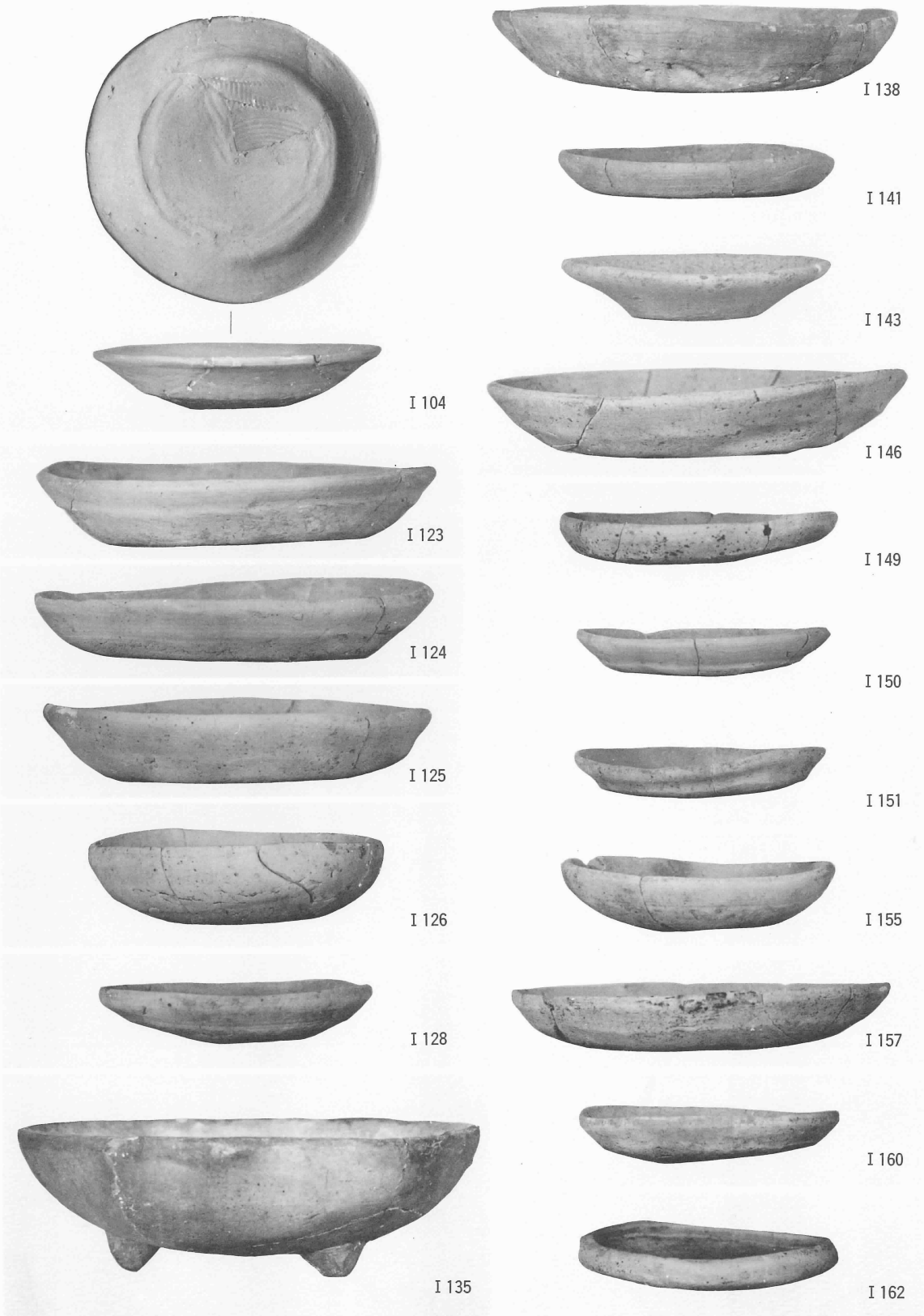
2　石器(I59有茎尖頭器, I60スクレイパー？, I61石鏃)



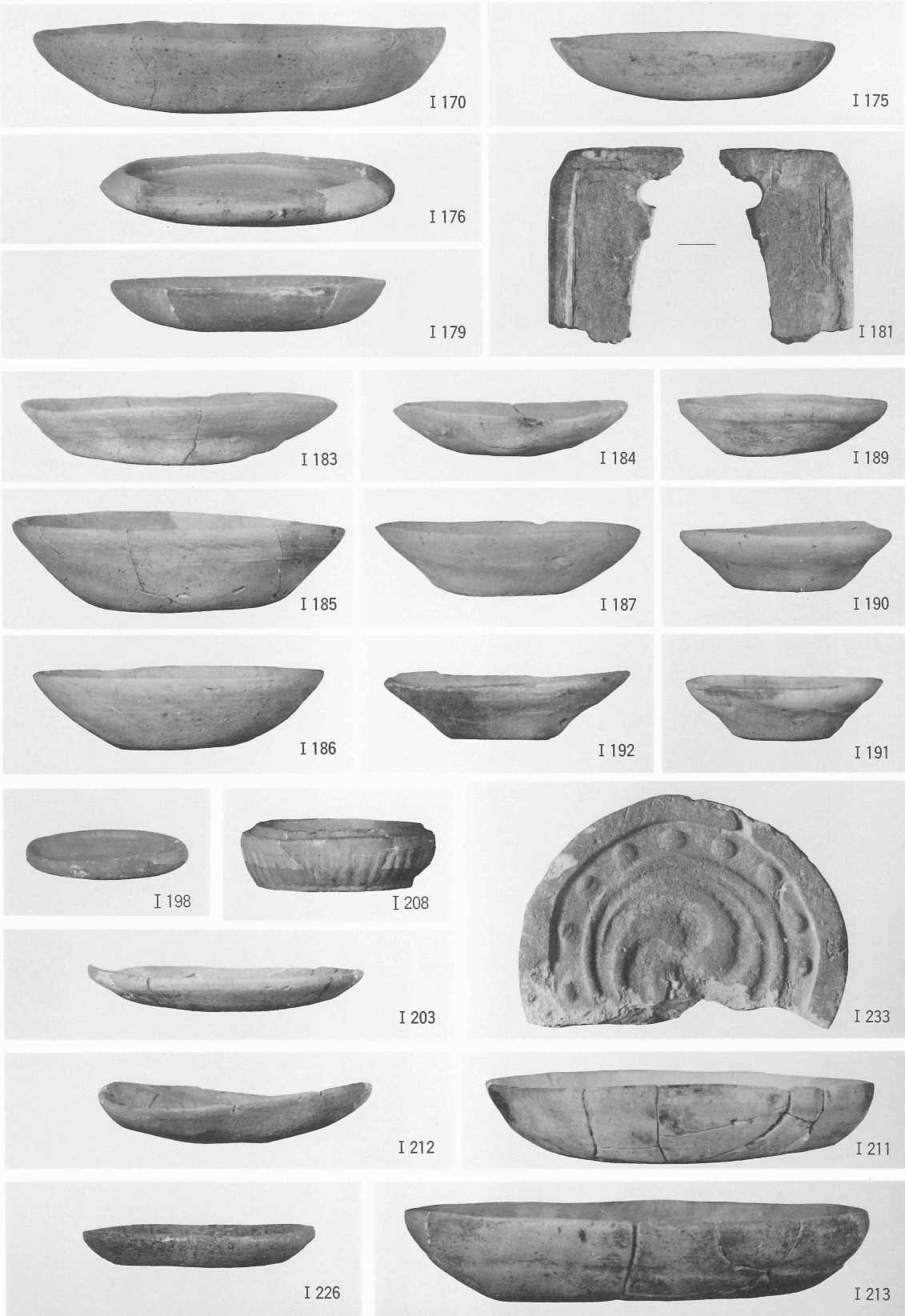


1　古代の遺物（I62土師器，I65・I66・I71・I76須恵器，I75緑釉陶器）

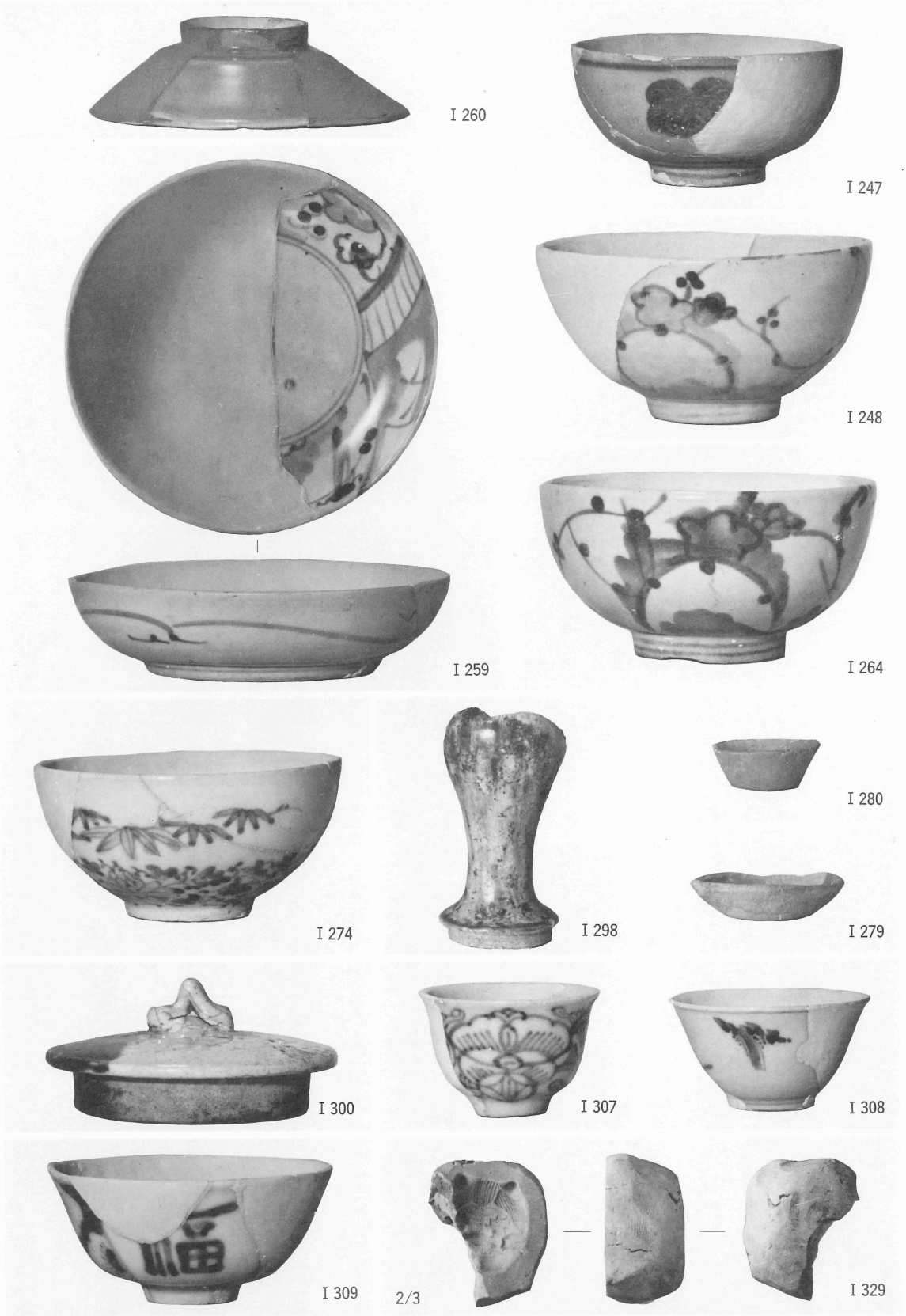
2　SX6出土遺物（I117須恵器）



ＳＸ２出土遺物（Ｉ104青磁），ＳＸ13出土遺物（Ｉ123～Ｉ126・Ｉ128土師器，Ｉ135瓦器），ＳＸ14出土遺物（Ｉ138・Ｉ141・Ｉ143土師器），ＳＸ16出土遺物（Ｉ146・Ｉ149～Ｉ151・Ｉ155土師器），ＳＸ19出土遺物（Ｉ157・Ｉ160・Ｉ163土師器）



ＳＫ39出土遺物（Ｉ170・Ｉ175・Ｉ176土師器，Ｉ179瓦器，Ｉ181石硯），ＳＫ48出土遺物（Ｉ138～Ｉ187・Ｉ189～Ｉ92土師器，Ｉ233軒丸瓦），ＳＤ３出土遺物（Ｉ198瓦器），ＳＤ５出土遺物（Ｉ203土師器，Ｉ208白磁），ＳＤ14出土遺物（Ｉ211・Ｉ212土師器），ＳＤ19出土遺物（Ｉ213土師器），茶褐色土出土遺物（Ｉ226灰釉系陶器）



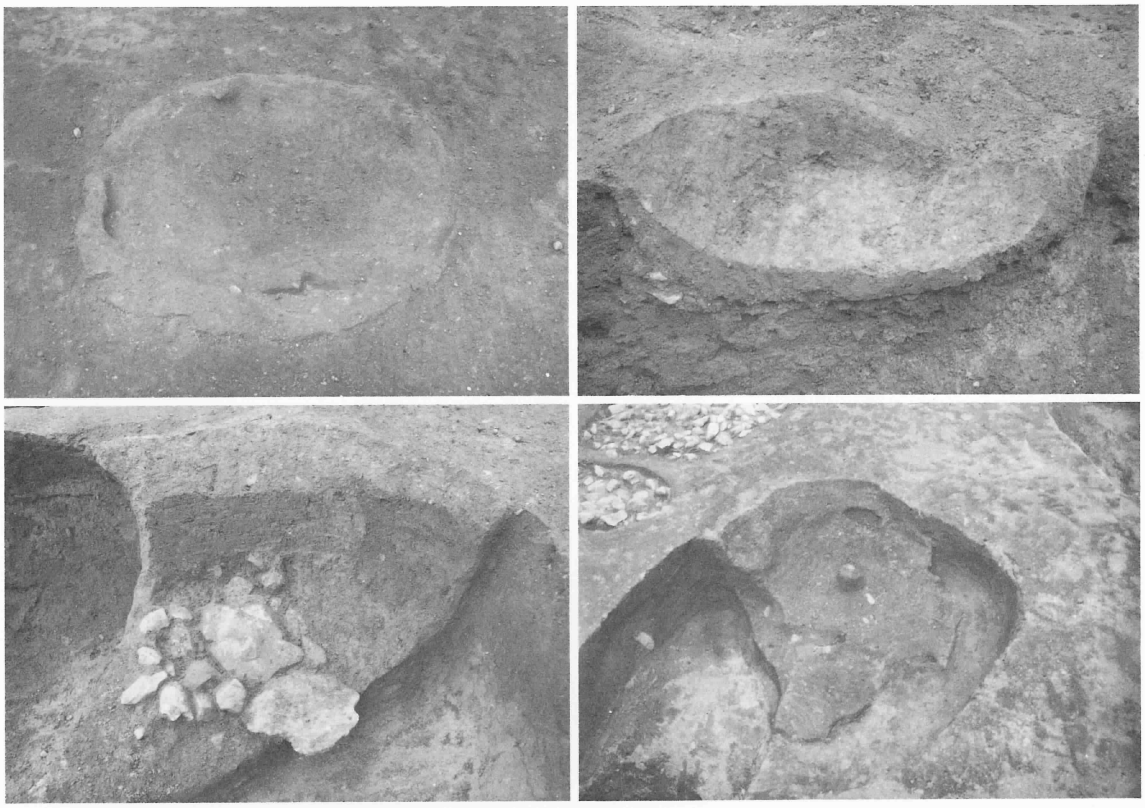
ＳＤ２出土遺物（Ⅰ247・Ⅰ248・Ⅰ259・Ⅰ260染付），ＳＥ２出土遺物（Ⅰ264染付），ＳＸ５出土遺物（Ⅰ274染付），ＳＤ１出土遺物（Ⅰ279・Ⅰ280土師器，Ⅰ298・Ⅰ300陶器，Ⅰ329土製品），灰褐色土出土遺物（Ⅰ307～Ⅰ309染付）

図版一五　京都大学北部構内BB28区

1　調査区西半　古代遺構完掘状況（北から）

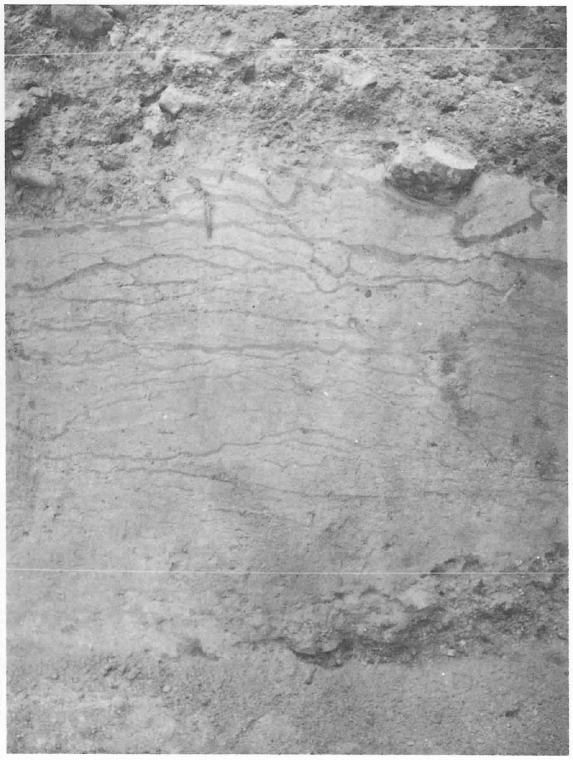
2　土坑SK22（南西から）

図版一六　京都大学北部構内BB28区

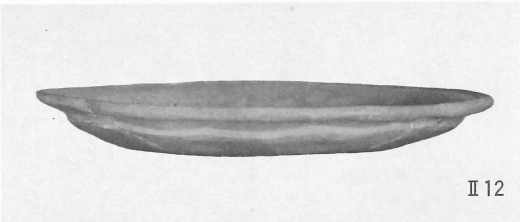


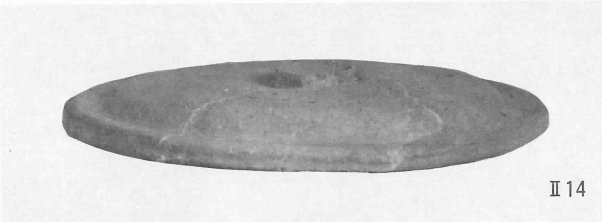
1　粘土敷き土坑　SK12（南から），　SK13（南から）
SK15（北から），　SK7（北東から）

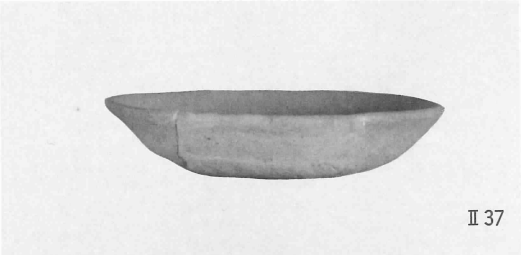
2　集石土坑SK10（東から）

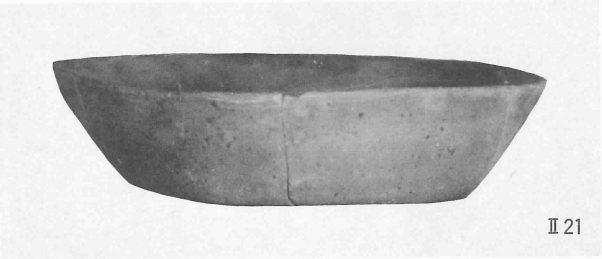


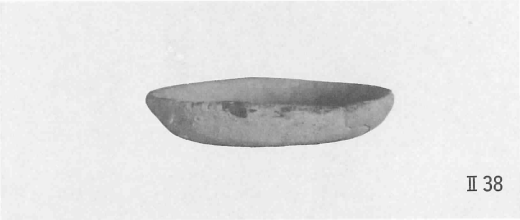
3　地震による堆積層の乱れ

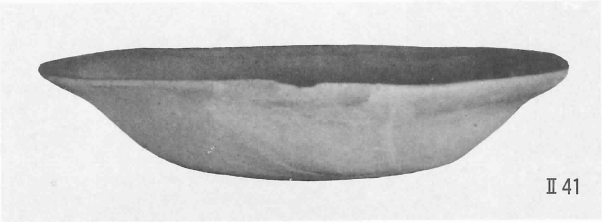


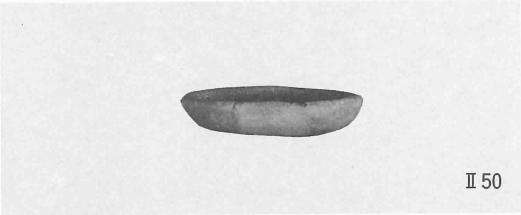


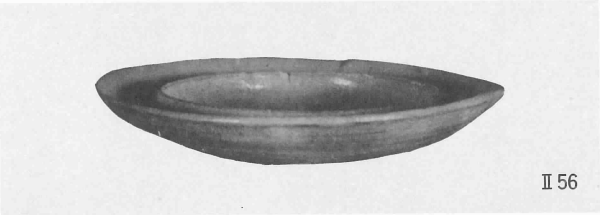


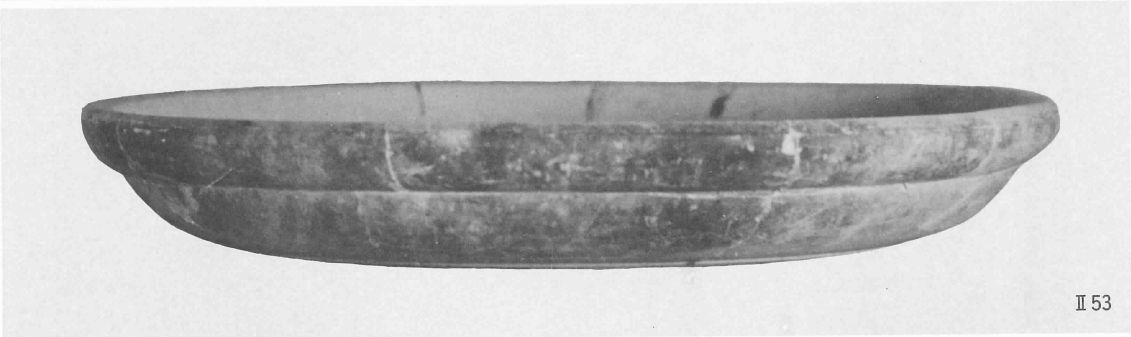


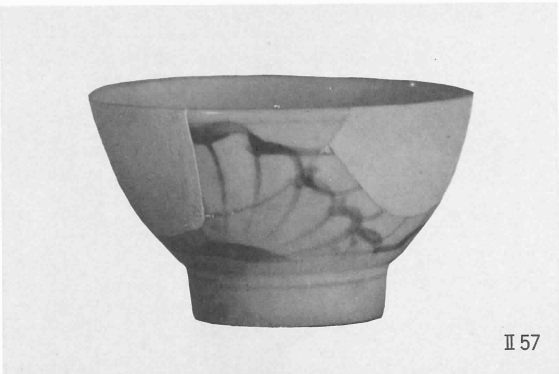




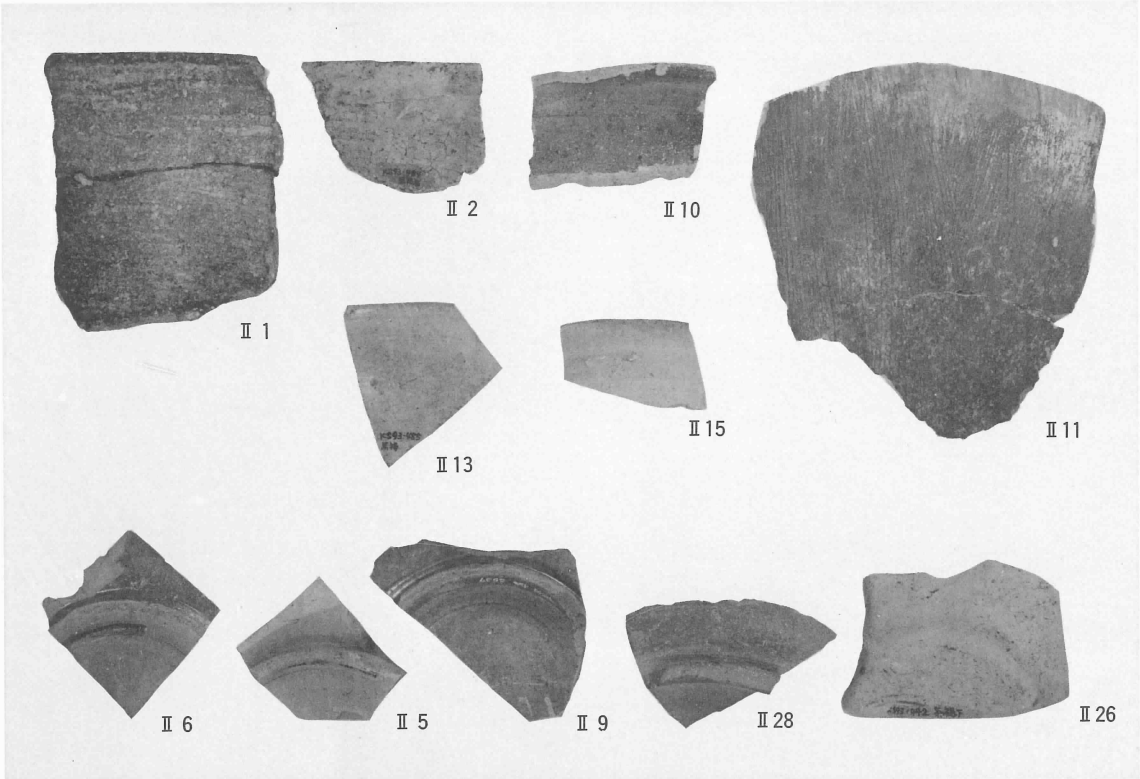




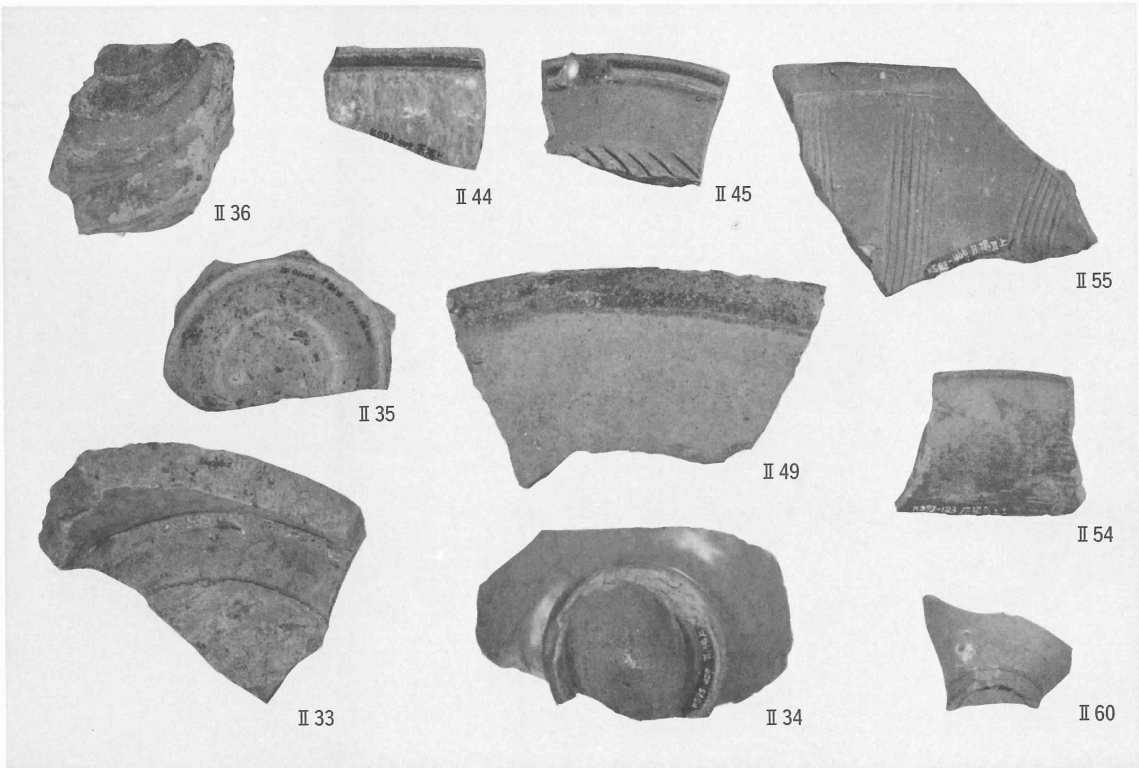




黒褐色土出土遺物（Ⅱ12土師器，Ⅱ14須恵器），茶褐色土下層出土遺物（Ⅱ21須恵器），茶褐色土上層出土遺物（Ⅱ37・Ⅱ38・Ⅱ41土師器），灰褐色土Ⅰ・Ⅱ出土遺物（Ⅱ50・Ⅱ53土師器，Ⅱ56陶器，Ⅱ57・Ⅱ59染付）



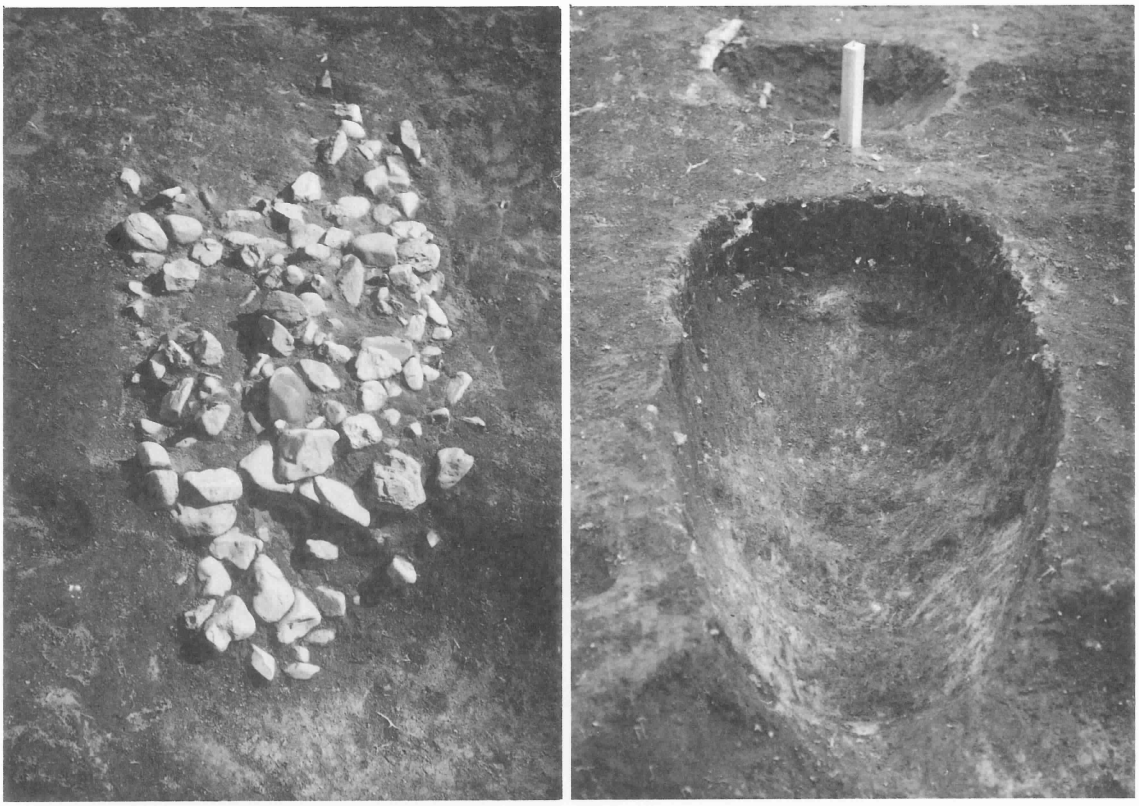
1　黄色砂下面出土縄文土器（Ⅱ１・Ⅱ２），ＳＤ36出土遺物（Ⅱ５・Ⅱ６），ＳＤ37出土遺物（Ⅱ９緑釉陶器，Ⅱ10須恵器），ＳＫ22出土遺物（Ⅱ11土師器），黒褐色土出土遺物（Ⅱ13灰釉陶器，Ⅱ15須恵器），茶褐色土下層出土遺物（Ⅱ26緑釉陶器，Ⅱ28須恵器）



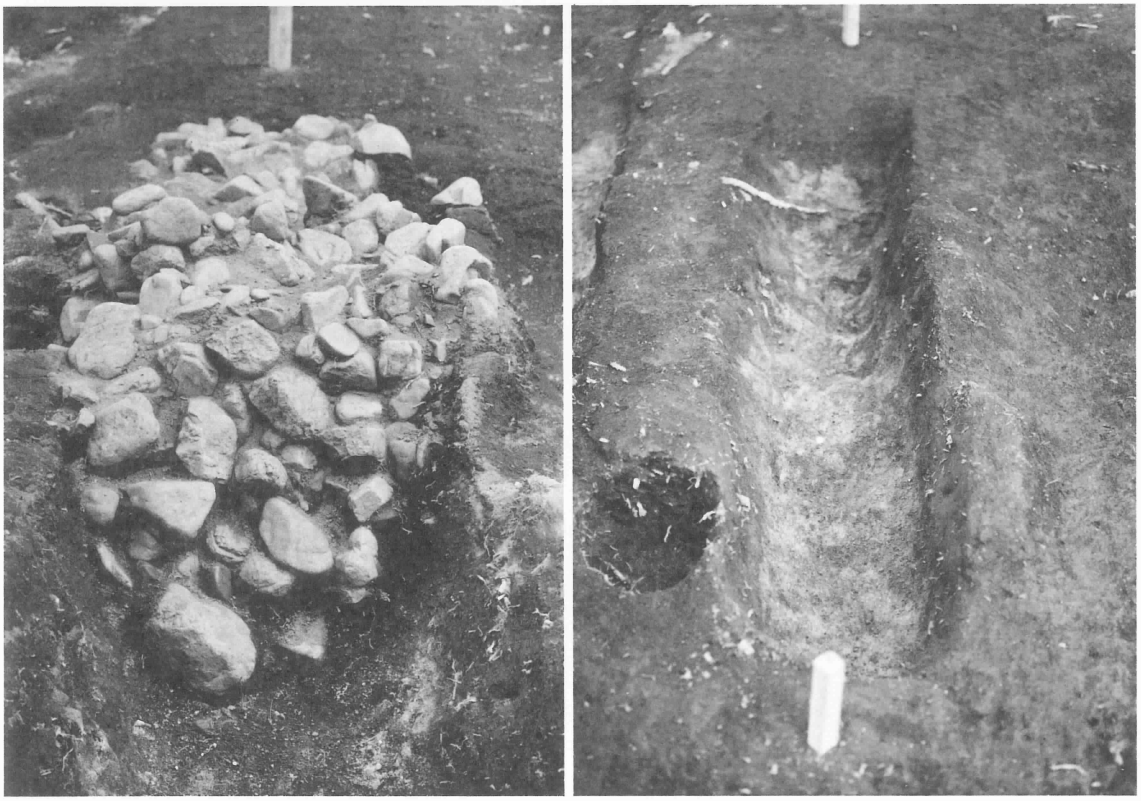
2　ＳＫ10出土遺物（Ⅱ33・Ⅱ35灰釉系陶器，Ⅱ34青磁，Ⅱ36軒丸瓦），茶褐色土上層出土遺物（Ⅱ44・Ⅱ45灰釉系陶器，Ⅱ49須恵器），灰褐色土Ⅰ・Ⅱ出土遺物（Ⅱ54土師器，Ⅱ55陶器，Ⅱ60白磁）

1　調査区全景（南から）

2　中世の遺構（東から）

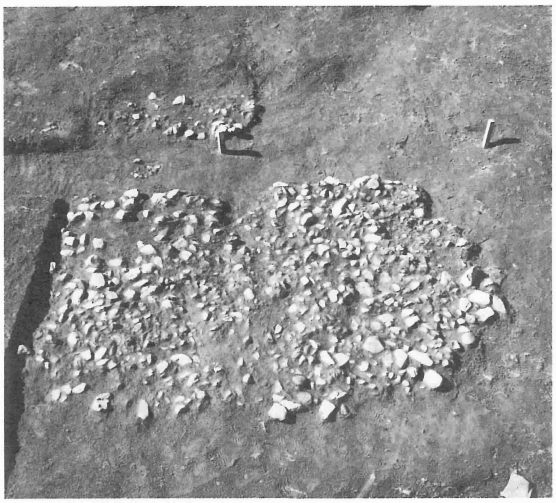


1　土坑SK１（左：上面，右：完掘，ともに西から）

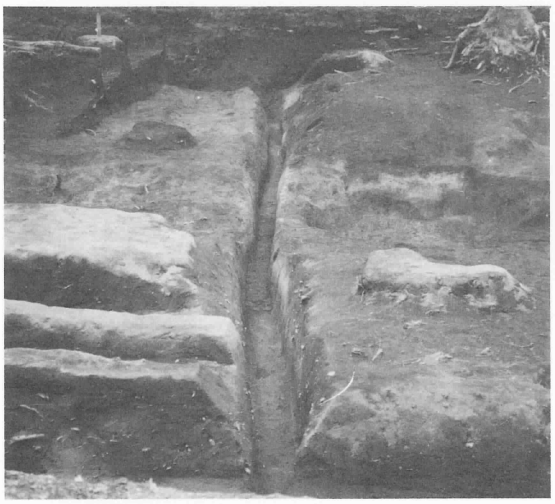


2　土坑SK２（左：断ち割り，右：完掘，ともに西から）

1　土坑SK５（南から）



2　集石SX7（東から）

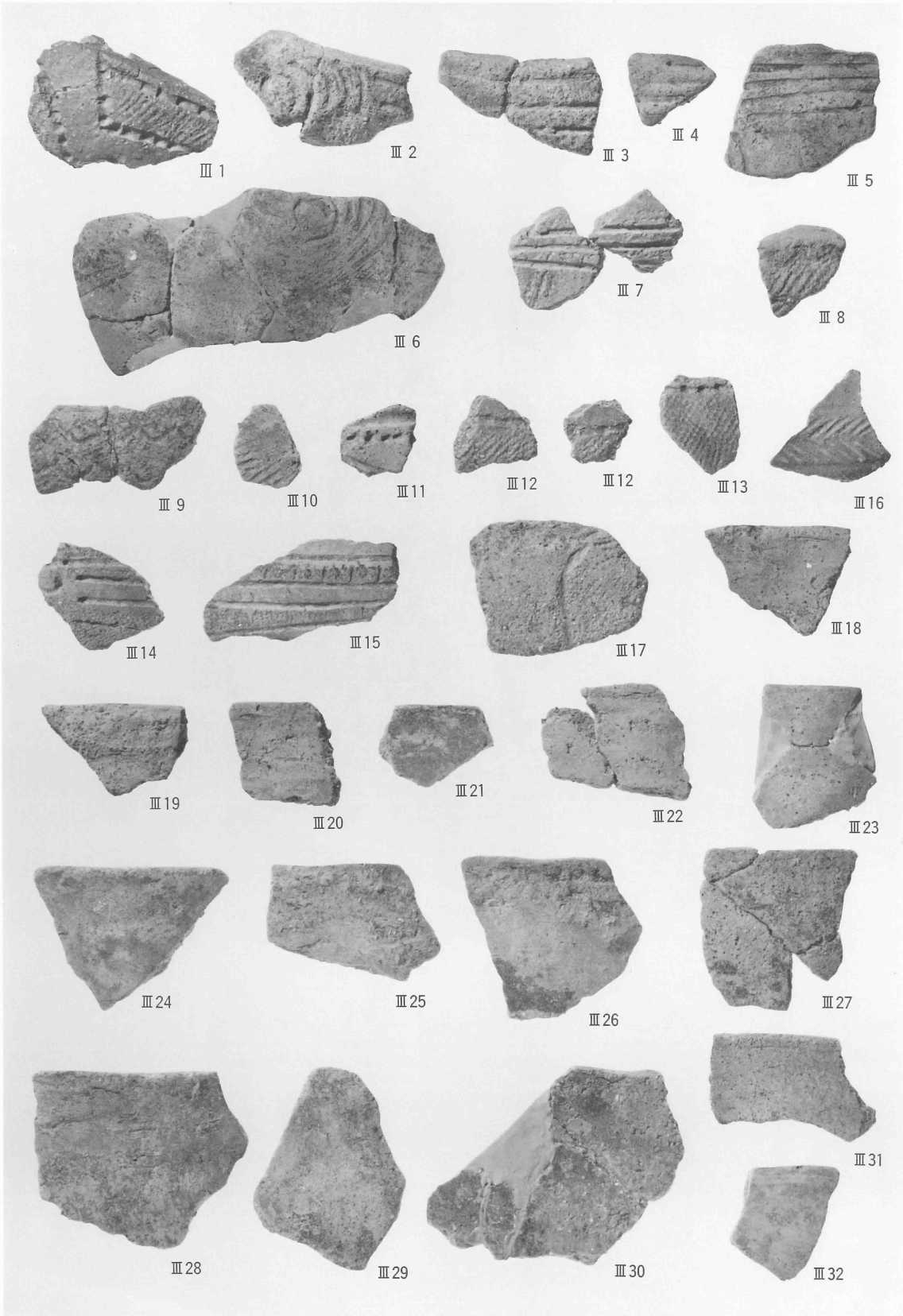


3　溝SD３（西から）

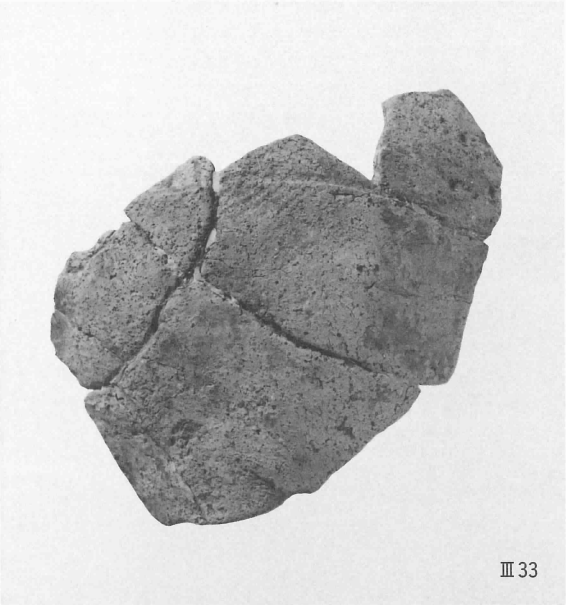
4　井戸SE１（北から）

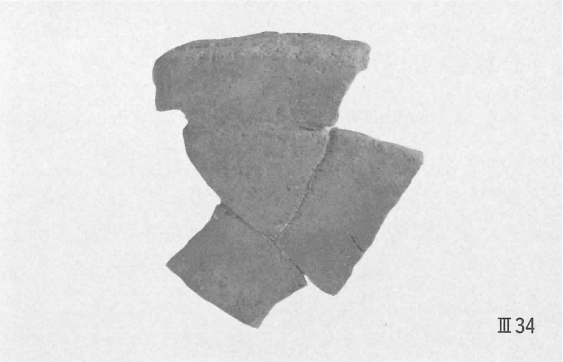
5　濠状遺構SX１（北西から）

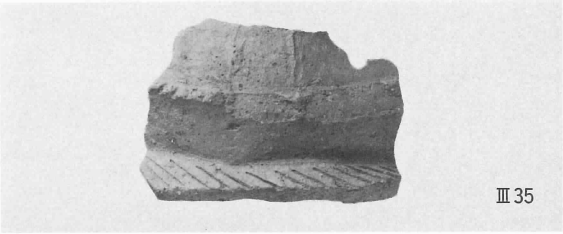
6　暗褐色土Ⅱ遺物出土状況（南から）



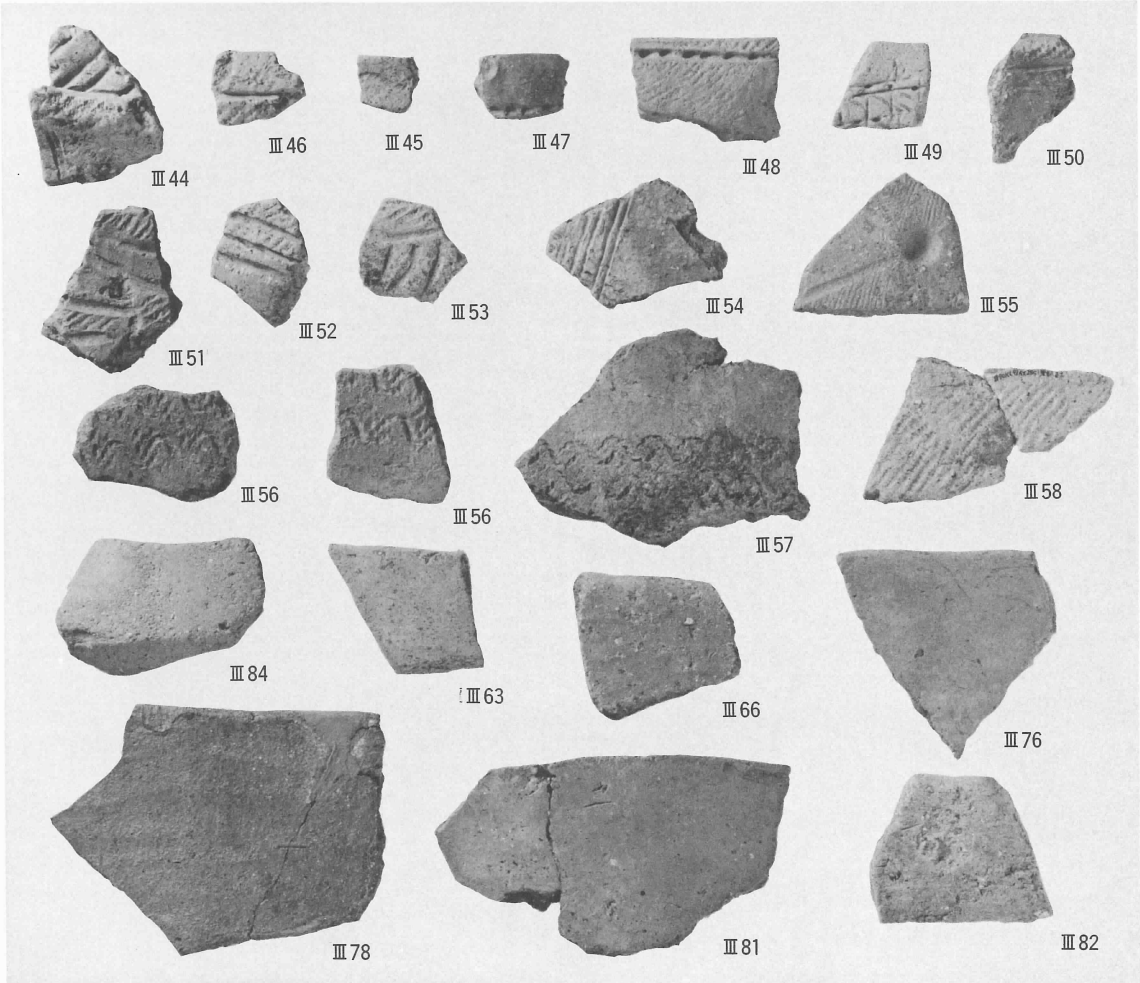
暗褐色土Ⅱ出土縄文土器（Ⅲ１～Ⅲ32）



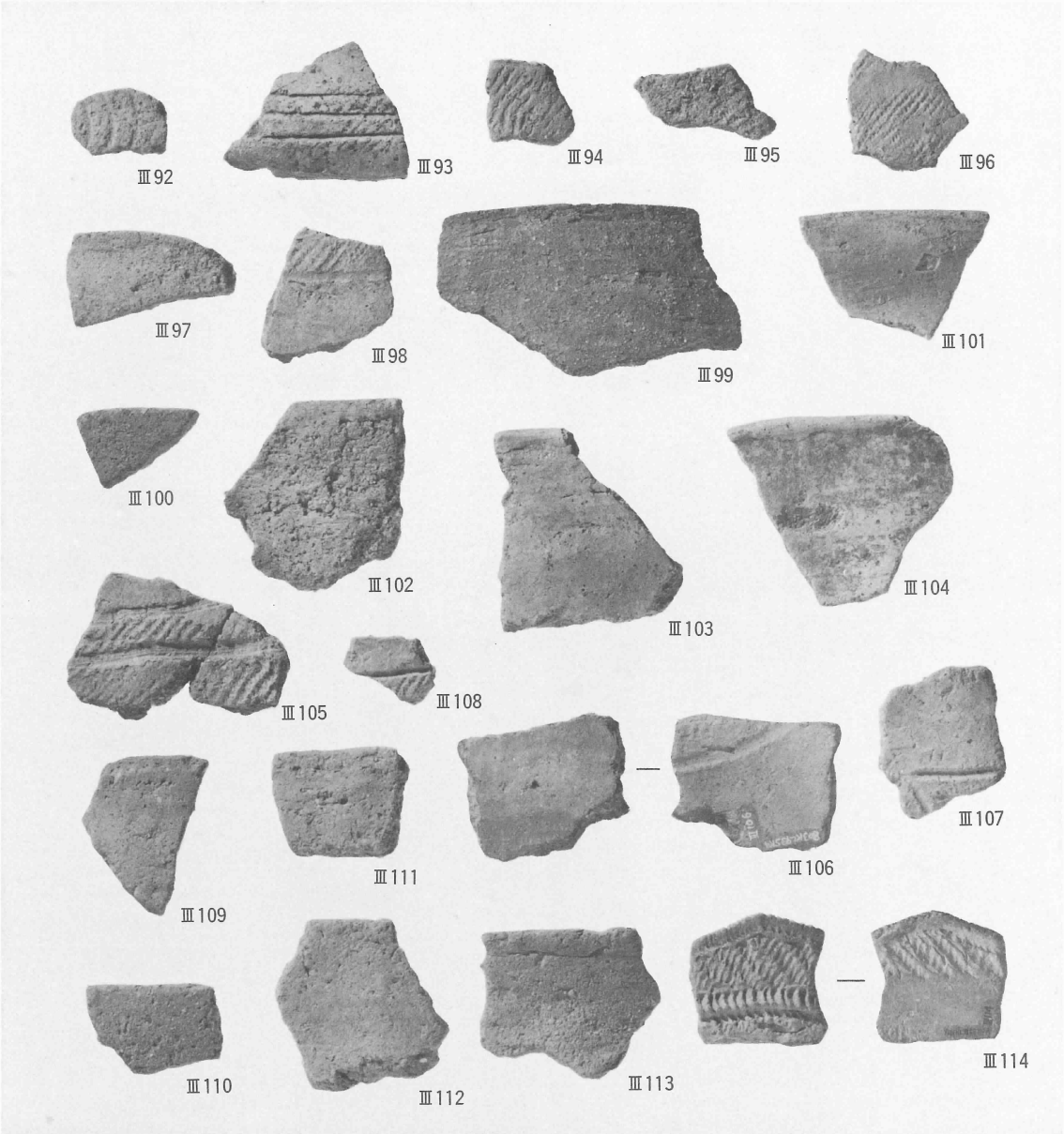




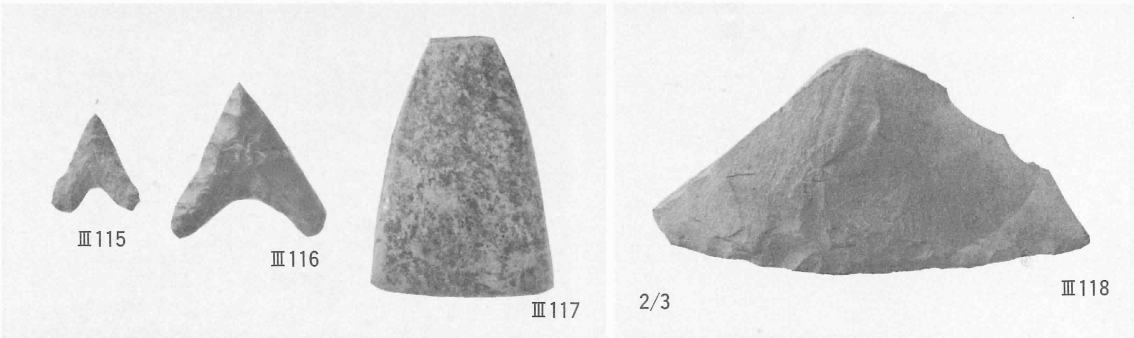
1　晴褐色土Ⅱ出土縄文土器（Ⅲ33～Ⅲ35）



2　暗褐色土Ⅰ出土縄文土器（Ⅲ44～Ⅲ58・Ⅲ63・Ⅲ66・Ⅲ76・Ⅲ78・Ⅲ81・Ⅲ82・Ⅲ84）

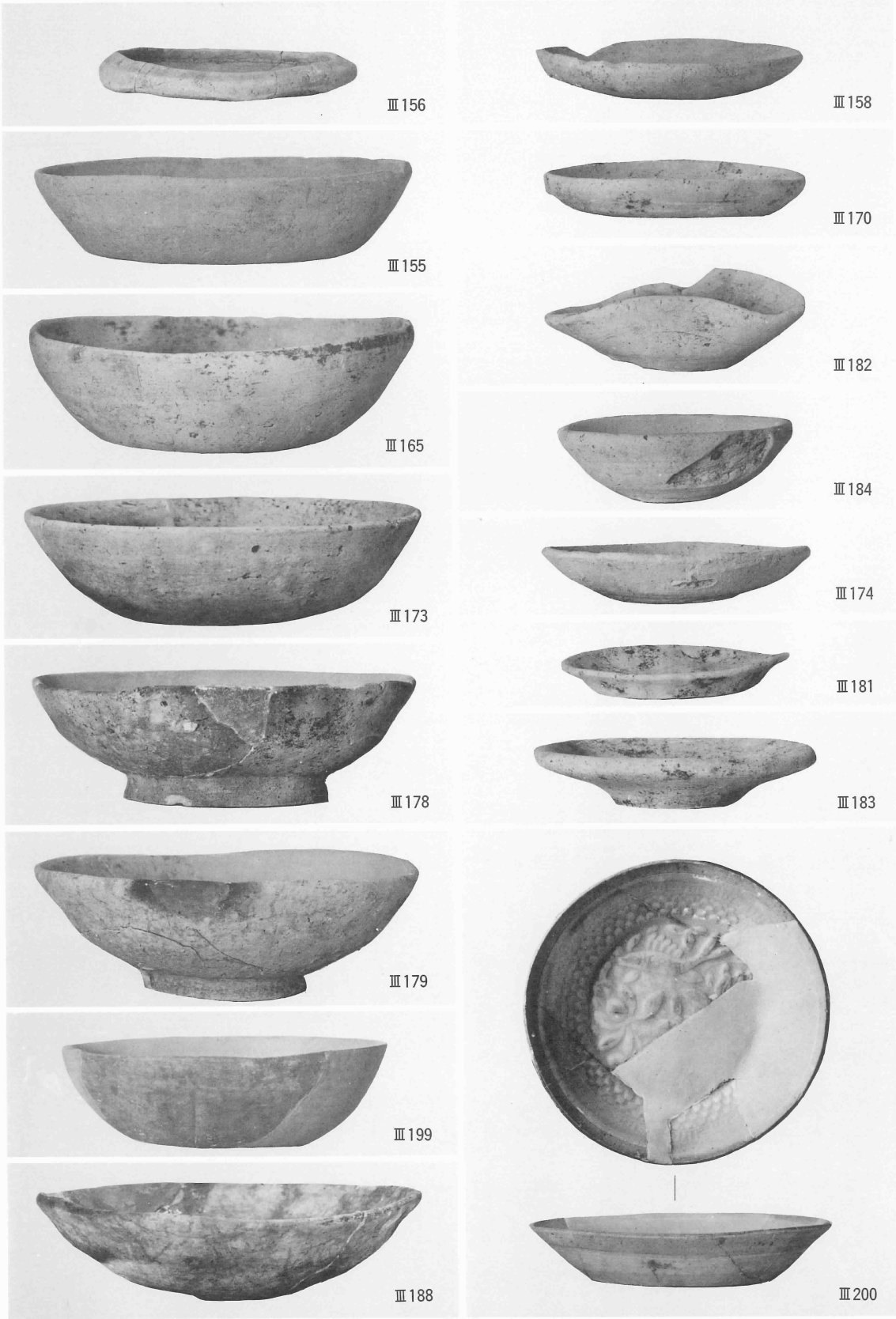


1　黄色砂出土縄文土器（Ⅲ92～Ⅲ97），茶褐色出土縄文土器（Ⅲ98～Ⅲ104），ＳＫ４出土縄文土器器（Ⅲ105・Ⅲ106），ＳＸ１出土縄文土器（Ⅲ107～Ⅲ113），ＳＥ１出土縄文土器（Ⅲ114）

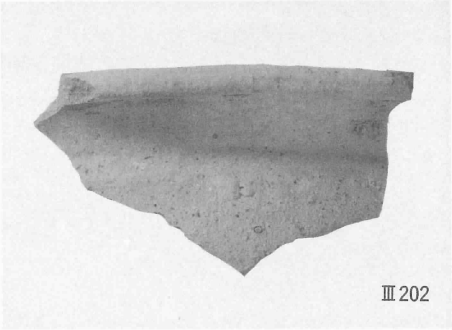


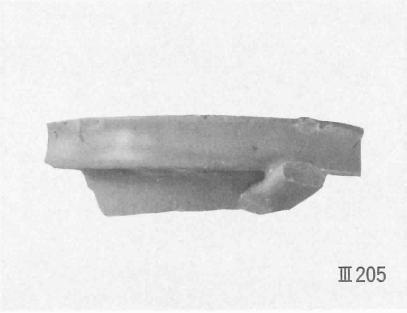
2　石器（Ⅲ115・Ⅲ116石鏃，Ⅲ117磨製石斧，Ⅲ118削器）

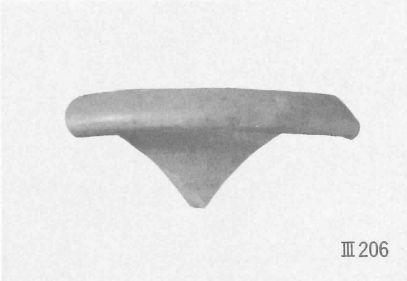
ＳＸ１出土遺物（Ⅲ121・Ⅲ123・Ⅲ124・Ⅲ126・Ⅲ127・Ⅲ132・Ⅲ133土師器，Ⅲ134・Ⅲ136須恵器），
ＳＫ８出土遺物（Ⅲ145・Ⅲ146青磁）



ＳＥ１出土遺物（Ⅲ155・Ⅲ156・Ⅲ158・Ⅲ165・Ⅲ170・Ⅲ173・Ⅲ174・Ⅲ178・Ⅲ179・Ⅲ181～Ⅲ184土師器，Ⅲ188・Ⅲ199瓦器，Ⅲ200青白磁）







ＳＥ１出土遺物（Ⅲ202黄釉陶器，Ⅲ205～Ⅲ207白磁，Ⅲ215須恵器，Ⅲ226・Ⅲ227・Ⅲ230瓦器）

Ⅲ232

Ⅲ233

Ⅲ237

Ⅲ234

Ⅲ235

Ⅲ239

Ⅲ240

軒丸瓦（Ⅲ232～235，Ⅲ237・Ⅲ239・Ⅲ240）

Ⅲ244

Ⅲ247

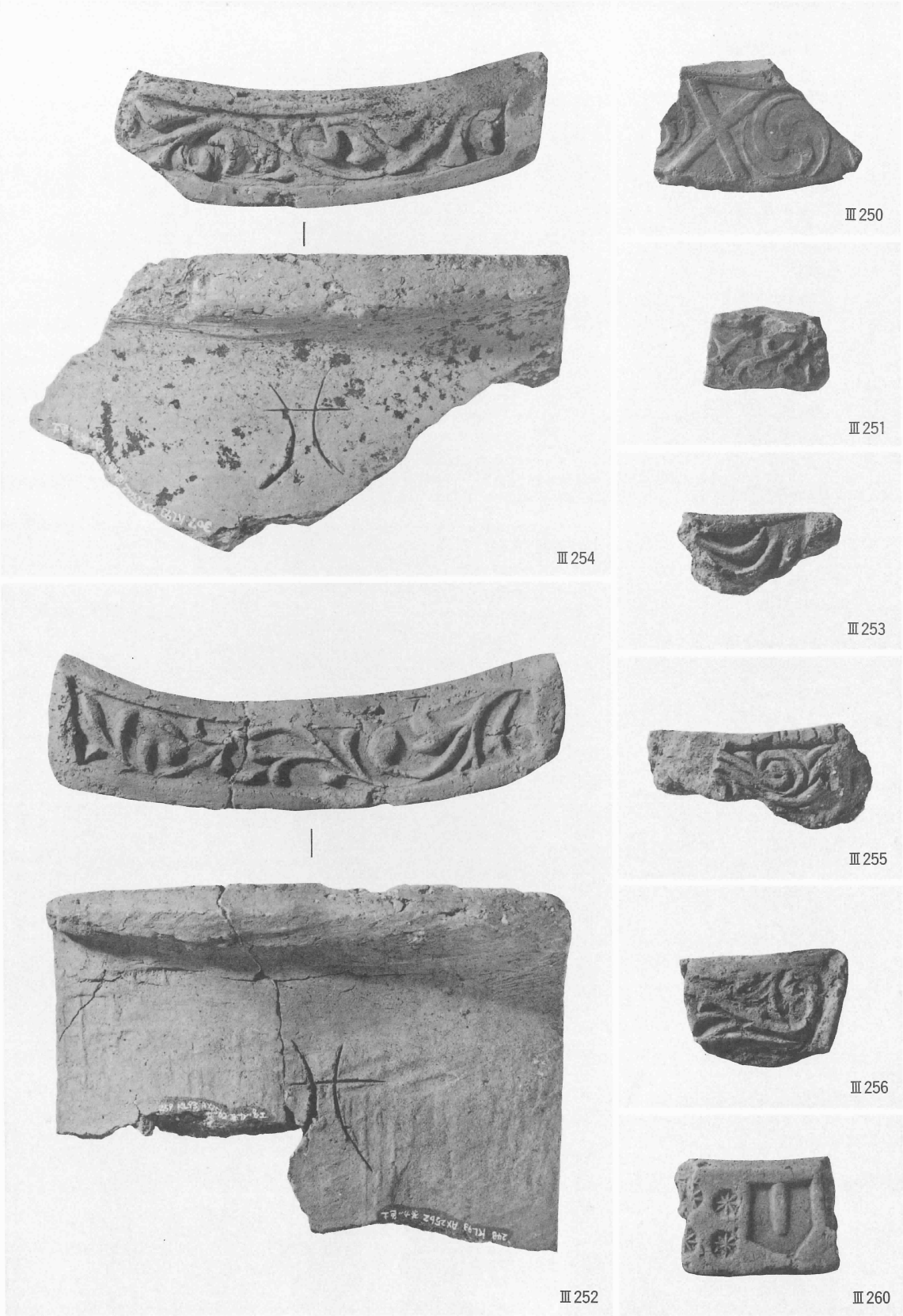
Ⅲ241

Ⅲ242

Ⅲ246

Ⅲ245

軒丸瓦（Ⅲ241・Ⅲ242・Ⅲ244～Ⅲ247）



軒平瓦（Ⅲ250～Ⅲ256・Ⅲ260）

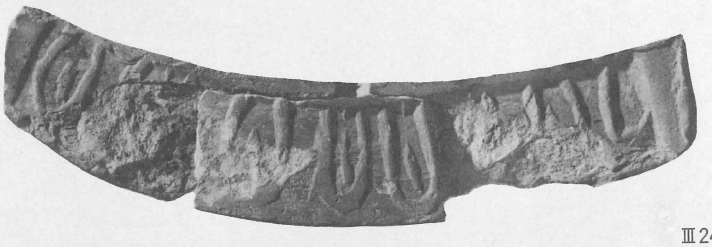
Ⅲ259

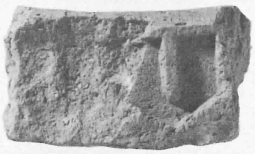
Ⅲ257

Ⅲ258

Ⅲ249

Ⅲ262


Ⅲ248


Ⅲ263

Ⅱ261

Ⅱ265

Ⅲ264

Ⅲ275

Ⅲ276

軒平瓦（Ⅲ248・Ⅲ249・Ⅲ257～Ⅲ259・Ⅲ261～Ⅲ265），
道具瓦（Ⅲ275・Ⅲ276）

1997年３月31日 発行

京都大学構内遺跡調査研究年報
1993年度

編集
発行　京都大学埋蔵文化財研究センター
京都市左京区吉田本町

印刷
製本　山代印刷株式会社
京都市上京区寺之内小川西入

正　誤　表

頁	行	誤	正
v	29	茶褐色土下層出土遺物,黒褐色土出土遺物	SD36出土遺物，SD37出土遺物，SK22出土遺物，黒褐色土出土遺物，茶褐色土下層出土遺物
vi	6	集石SK7	集石SX7
29	図17 ネーム	Ⅰ241 SD5	Ⅰ239 SX9，Ⅰ241 SD5
図版25	ネーム	Ⅲ134・Ⅲ136須恵器	Ⅲ134・Ⅲ136須恵器，Ⅲ139灰釉陶器，Ⅲ140土師器